

息づまる記事！物凄い夜戦攻防手ほどき！

読切ロマンス

姦通実験室



貞節の仮面にかくされた人妻の淫蕩心理
制服の下に散つた處女

11月号

人妻の慾情心理
姦通実験室

十一月号

第四卷
第一四号

読切ロマンス

乞御期待！

臨時増刊予告！

B5判四色刷オフセット
新企画風俗ヌード増頁

私はあの時のことを思うと今でも恍惚とする
初めて知った絶頂感の刹那（妻）
初めて妻を絶頂感に誘い得て（夫）

女は絶頂感のときこんな表情をする
極致感を経験している三人の女学生



新婚三ヵ月目の夫婦の態位調べ

処女にもこんな堪えがたい性昂奮がある

読み出したらどんな淑女も絶対寝られない思い切ったこの内容！

粹でシツクな興味と実益の寢室雑誌！

人情講談 十一月号

初めて実現した美と官能の極致
別冊附録つき

ヌードと読物の雑誌

官能を刺激する好色読物

スクリーンの女王交感奇談◎木暮実千代と密通した男◎桂木洋子を強姦した男◎川路竜子の処女を奪った男◎角梨枝子と結婚した男◎山口淑子と同性愛した男◎映画界を震撼させたスター売春事件◎四十人の女を掠奪結婚した男◎珍具性具を製造する工場探訪記◎黙つて座ればビタリと当たる好色女の顔占◎閨艶二人女◎世界十代少年の恐るべき性犯罪◎九条武子夫人の恥毛◎勝太郎の恥毛◎小町病(穴ナシ)の妻が夫を悦ばせる技巧◎多毛症ストリップの恥毛処理法◎女と夢精◎淫乱変態女大挙東上す◎舟橋聖一の持続時間◎尿を浴びて喜ぶ作家◎エロ祭り五十三次◎昭和好色一代男◎キャバレーで賣った珍具秘画◎女工寄宿舎の恥毛競べ◎チラリズム銀座に行く

夫を閨戯巧者にする性愛日記のつけ方◎初夜に処女を装ふ戯巧◎奇抜な

新婚旅行のうちあけ話◎新婚夫婦一週間の性愛日記集◎花嫁の変態的愛

技全集◎世界のエログロ結婚物語り◎どんな風に初夜を仰えるべきか花

嫁と性交態位◎花嫁と異常性器◎花嫁の性交不

能症◎初夜の花嫁の性器◎

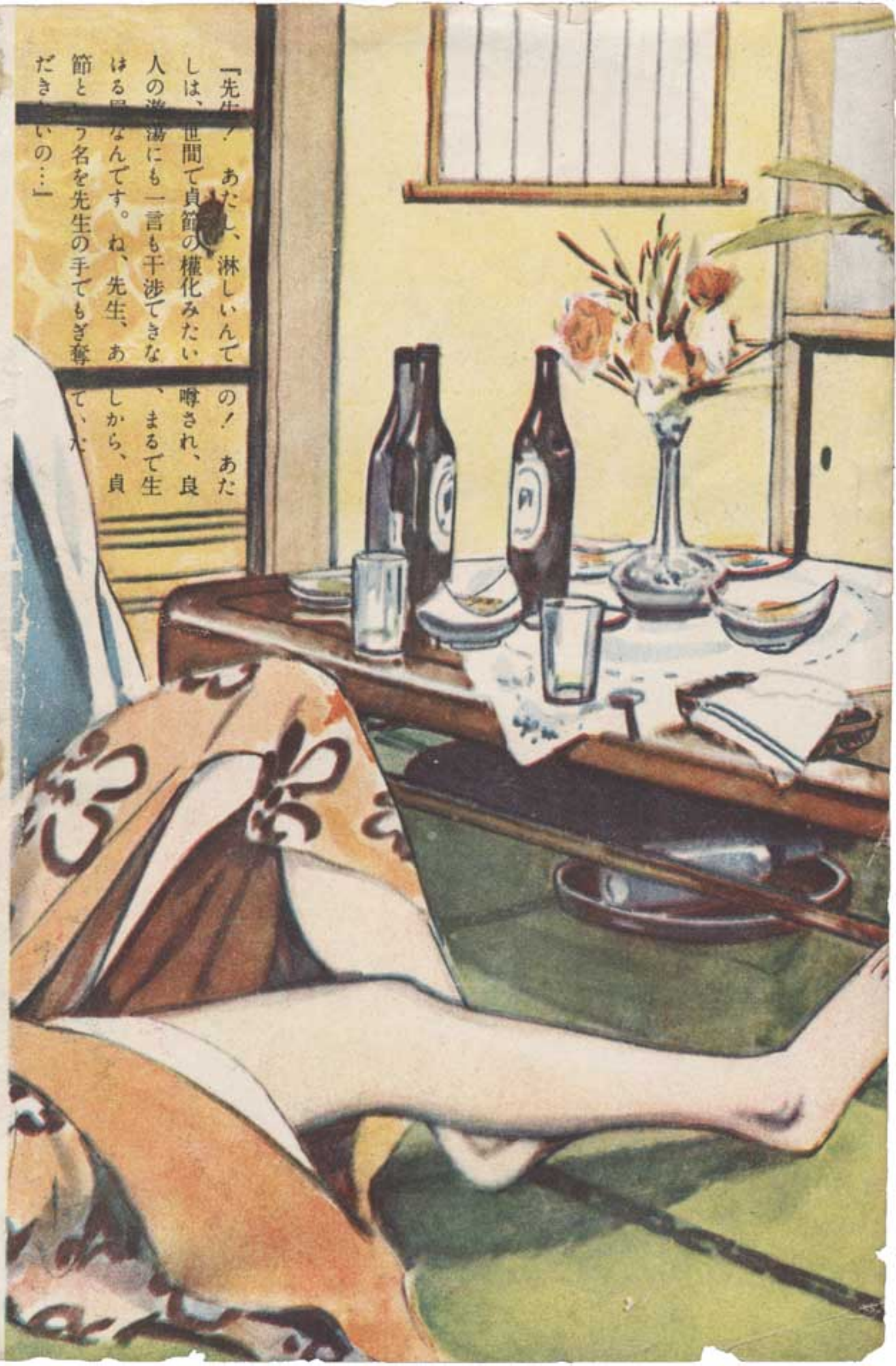
定価 九十五円
地方定価 百円

断然

グラビヤ大増頁 特字ヌード六十枚一挙収録す

全ページ縦横に躍動する美少女の身体

「先生、あたし、淋しいんで
しは、世間で貞節の権化みたい
人の遊蕩にも一言も干渉できな
はる同なんです。ね、先生、あ
節と、うなを先生の手でもぎ奪
だき、いの…」



二の身体が、抱き合つたまま
疊の上に倒れた。アルコー
ルにつて麻痺された
二つ 肉体は、
理性 失、

ひたひたなるな
濤にどろどろに溶け
ていたのであつた……



「ね、島津さん。あなたホントに童貞なの？」

ろれつの怪しくなつたしげ子の甘い聲が
ねづもりと耳朶に覆いかぶさつてきた。

「奥さんも、嘘だと思つてゐるんですか？」

「いまどきの若い方で童貞だなんて……ホッ

トに思えないわ」

膝が崩れて、むつちりした太腿が

ツト覗く。吸い寄せら

れるように島津

の瞳がチカ

リと火花を

散らした。





「あのウ……お頭を揉んで……ますわ」

といつて、白魚のような指先で私の頭を揉みはじめた。甘酸ッ

ぱい熟れた女の体臭に、私はくらくらッと目暈を感じ

じた。そのトタンに、私は情性を吹き飛ばし

て、いきなり奥さんの手を取ると、身

を起しざまに、くらくらッと彼女の身体

を抱えこんだ。

……三人の子供を産んでい

ながら、村瀬夫人は

はまるで生娘のよ

に濡れていた……。

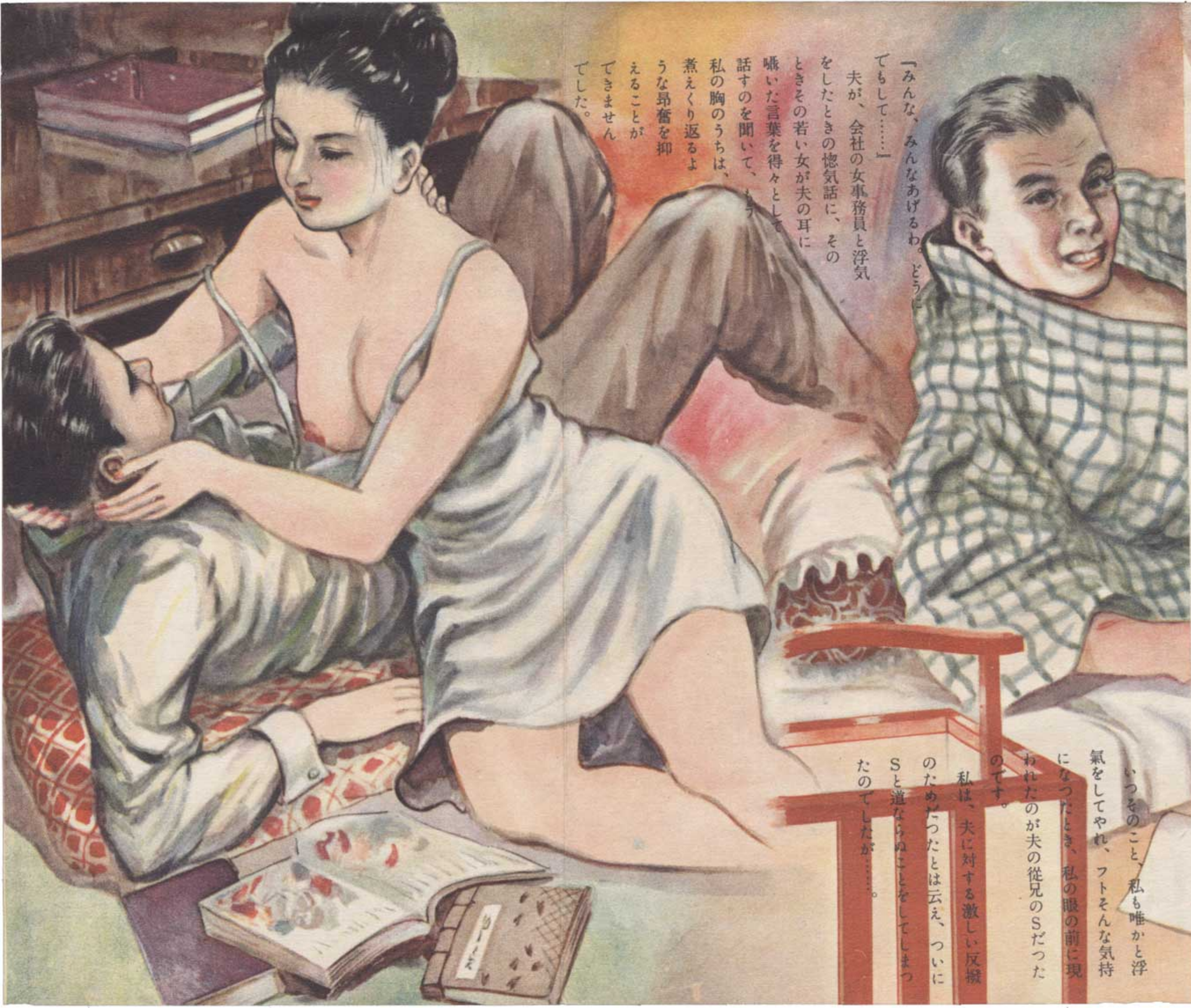
MITURU.S

「みんな、みんなあげるわ。どうに
でもして……」

夫が、会社の女事務員と浮気
をしたときの憶話に、その
ときその若い女が夫の耳に
囁いた言葉を得々として
話すのを聞いて、もう
私の胸のうちは、
煮えくり返るよ
うな昂奮を抑
えることが
できません
でした。

いつそのこと、私も唯かと浮
気をしてやれ、フトそんな気持
になったとき、私の眼の前に現
われたのが夫の従兄のSだった
のです。

私は、夫に対する激しい反撥
のためたつたとは云え、ついに
Sと道ならぬことをしてしまつ
たのでしたが……。





「おねがい。あなたの気のすむまで、あたしを殴って……蹴って……」

口紅が男の軀に桃色の斑点をのこして、二つの肉塊が折り重なるように薄汚い壁の上へ倒れた……。

「おれ、思いきり強い男を……」

嵐々と世原をわたつてくる秋の夜風が、品子夫人の聲を奪って消えて行つた……。

集眞写真ードヌ撰特

これはモンタージュ写真ではありません。
何？ 妊娠三ヶ月でしようツて？ トンデモハツ
ブシ、このモデルさんは、レッキとした処女
なんです。彼女は初めてカメラの前に立つ
たのでいささか固くなつてしまつて、思わず
おなかにちからがはいつたところをバチリと
やつたので、この珍ポーズが撮れたといふわ
けなんです。とにかく珍しいですね、上部を
手でかくしてごらんなさい、どう見たつてお
なかには見えませんか。

縛り二題

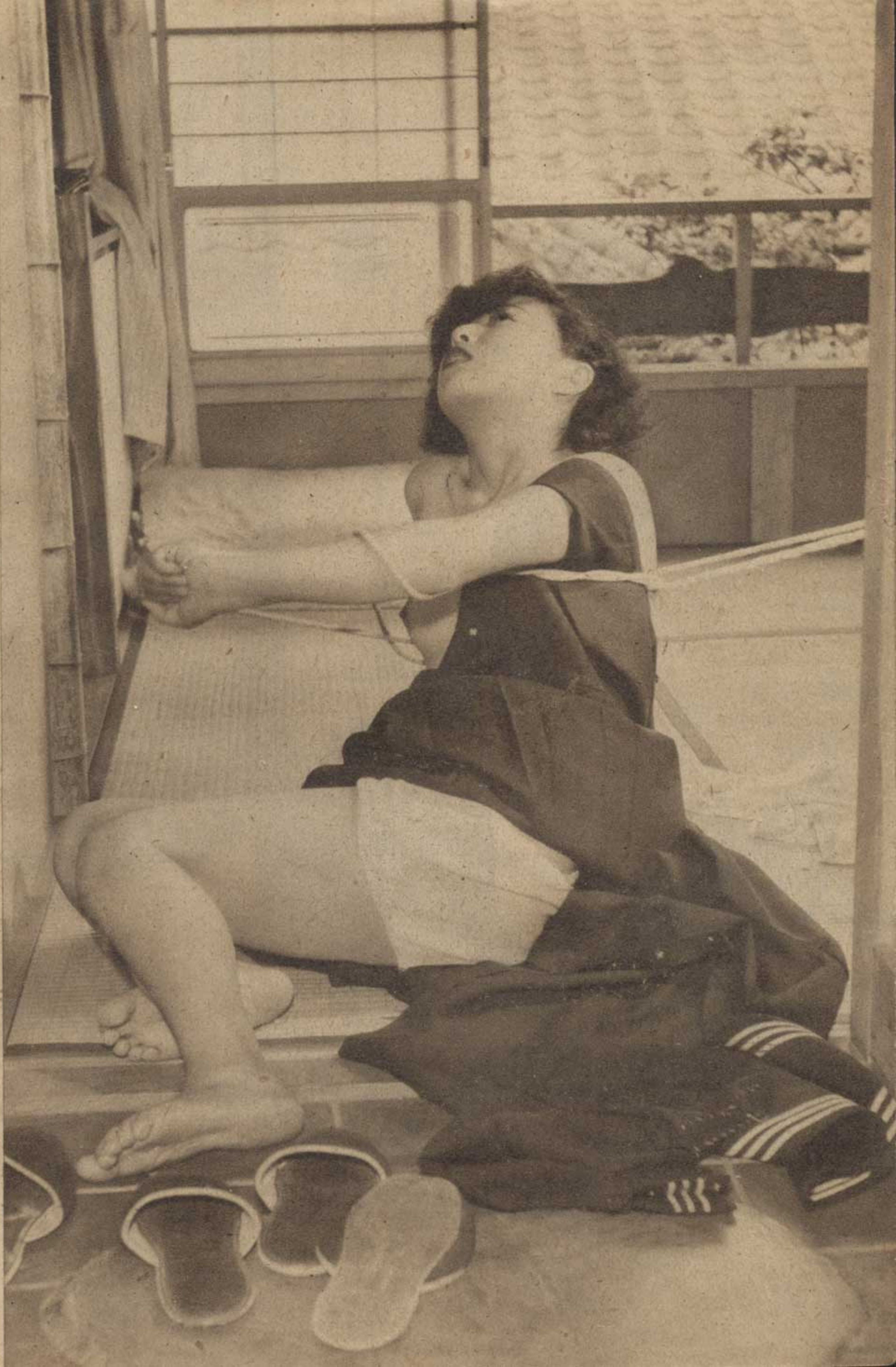




地獄の花園











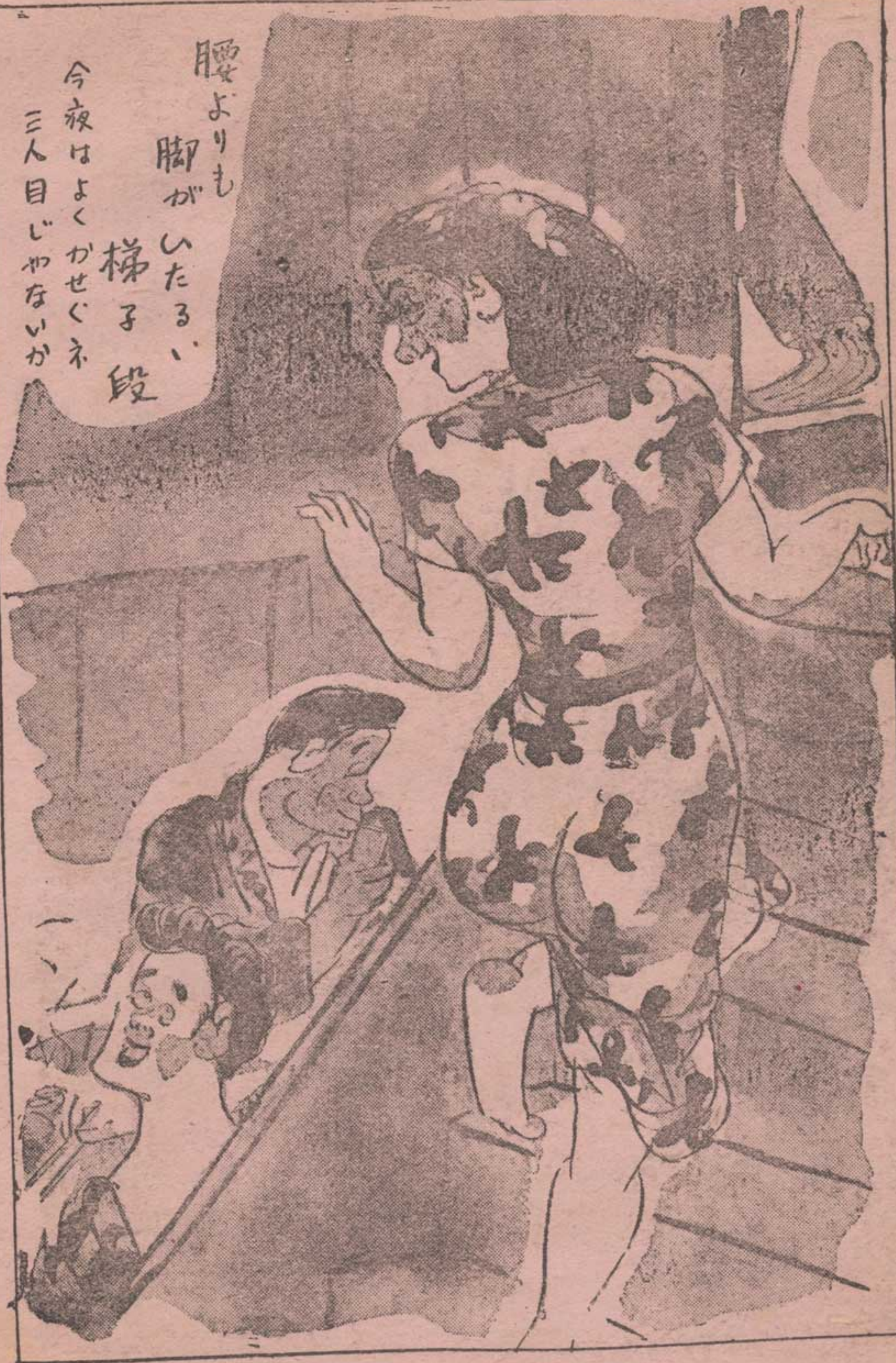
人生裏街道漫步

女房の客を見送る甲斐性なし

俺がつまらないばかりに坊や
のオツパイを、あんなオヤジに吸
わせなきや
ならぬ



腰よりも
脚がいたるい
梯子段
今夜はよくかせぐネ
三人目じゃないか





情人がとき
線にくする
ストリップ

支配人が言ったわヨ
ダメじゃないかカラダ
きたなくなったって
キョットひかえてネ









ポン打って
からの収入で
生きている

今夜の旦那は
もうつかま
えだネ

BEE



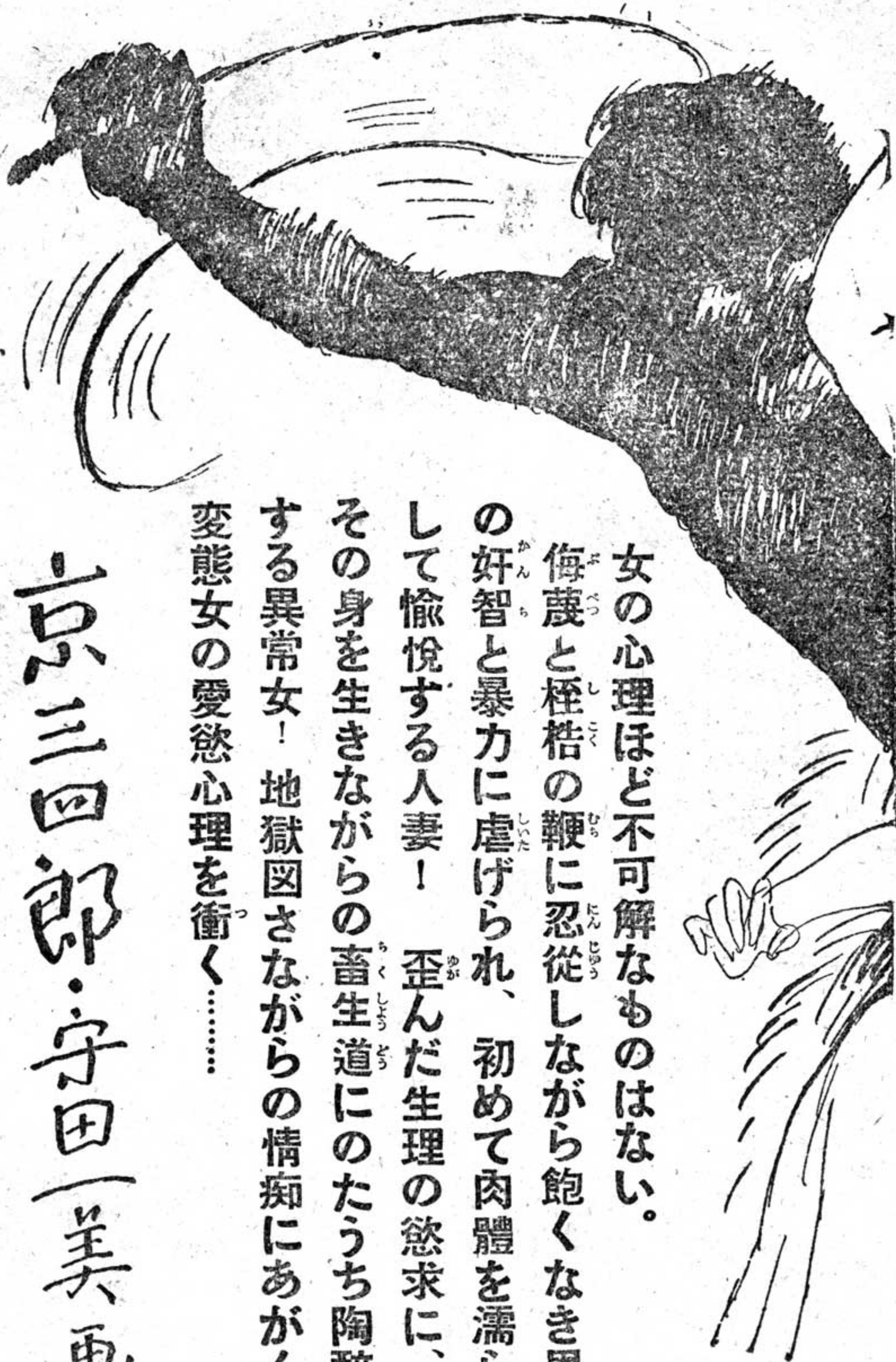
ス　ン　マ　ロ　切　読

号　月　11

特集・人妻の淫蕩心理探求
淫虐の責め苦に喜悅する女
姦通実験室







女の心理ほど不可解なものはない。

侮蔑と桎梏の鞭に忍従しながら飽くなき男
の奸智と暴力に虐げられ、初めて肉體を濡ら
して愉悅する人妻！ 歪んだ生理の慾求に、
その身を生きながらの畜生道にのたうち陶醉
する異常女！ 地獄図さながらの情痴にあがく
変態女の愛慾心理を衝く……

京三四郎・守田一美画



夫と情夫の凄惨な情痴
圖を見せられて、妖しく
炎え立つた慾情に歡
喜する出獄者の妻

男
獸
女
獸

女は枕から頭をのけぞらし、耳のあたりまで薄紅色に血をのぼせて、堪えない快樂の呻きを洩らしていた。

『ああ!……ああ!……』

汗ばんだひたいに、乱れ髪をひつつかせ、眉根をキツと寄せ

て、なかば開いた唇の間から、火のような息づかいで激しく喘いでいる表情は、まさに女の歡

KAZUMI

樂のきわみなのであろうか。

女の肌は、全身、汗にしつとり濡れた。さながら動物のよう

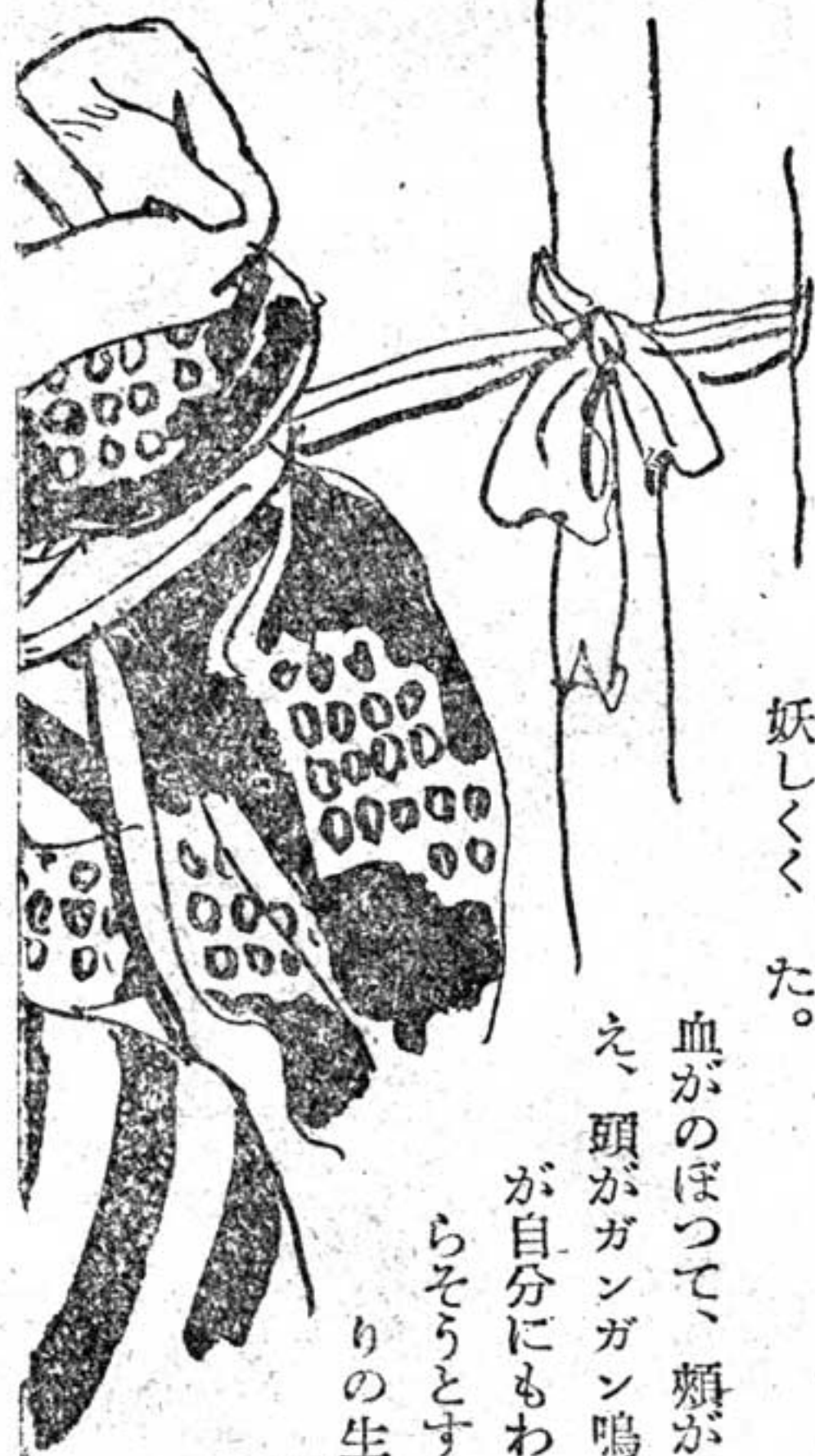
桃色電球

いた。動物のよう妖しく

ねる肢体は、ときどき小さな叫び声といつしよにはげしくけいれんした。そして反射的に、相手を押しのけるかのように、柔軟な軀を男から離そうとした。それは、まるで極致を味いつくすことを怖れてでもいるかのように……女は全身、一糸もまとつていなかった。

喜美子の眼には、女のあらゆる箇所が、男の部分が、そして女がそのために歡びにふるえている結合の部分があますことなく見えた。喜美子にとつては、あまりに生々しすぎる光景だった。

血がのぼつて、頬が、カッカツと燃え、頭がガンガン鳴った。眼の充血が自分にもわかつた。瞳を凝らそうとするのだが、あまりの生々しさに自然に外れてしまふのだつた。すると、



小倉の峻しい声
が飛びかゝつ
てきた。
「見るん
だ！」

もつ
とよく
るんだ！
嘲笑つているよ
うな、憤つているよ
うな、底光りのする不逞
ぶてしい顔を喜美子の方へ
振り向けたまま、二、三度、女
にことさら激しい運動を加えた。
「どうだ？……いいか？」



すると女は、
一きわ息を荒く
して他愛なく声
に出すのだつた。
「うゝ！……うゝ
！……」

小倉は、喜美子の方
へニヤツと笑つてみせ
た。

また、喜美子は顔をそ
むけそりになる。
すると、

「おい！」

と、喉にひつかかつたような
凄味のきいた声が威嚇した。
逃げ出したかつた。しかし、柱
に後手にゆわえつけられた身
にはその術もなかつた。

喜美子は、苦痛に耐えられなかつ
た。むろん、こんな場面を無理矢理
に凝視させられる屈辱感である。が
彼女は気づいている、軀の奥底からひ

たひたと濡らし、あふれてくる慾情の炎を……。

彼女はいま、眼の前で声をあげて快樂にむせん

KAZUMI

る女

を、そし

て女をそうさ

せている小倉を

憎んだ。

小倉は女を全裸にし

ておきながら、自分はガウ

ンのようなものを羽織つてい



た。女ののたうつ肢態

には何かあさましい

ような醜さがあ

った。しかし

小倉には、

そのま

とうガウンが、醜さが覆いをくしてい
た。喜美子は、そこに男の狡さを感じ
た。女の哀れさを見た。

女体の發火點

小倉は、傷害で二年くらいこんでい
て、この夏、刑務所を出てきたばか
りだった。

喜美子はもと、与太者仲間で

いう素人だった。家は金

沢で、洋裁を習うため

東京にでてきてい

た。小倉と一

緒になるよ

うにな

つたきつかけというのは、三年前のある日満員の国電のなかで小倉から、「指いたずら」をされたことからだといつたら、おそらく、世間の人は本気にするだろうか。

しかし喜美子は、実際に、この日の小倉の巧みな指戯に、じつと瞳を閉じて任せてから、ずるずると小倉の胸のなかに手繰り寄せられてしまったのだ。東京へ出てから、ホールで知りあったある大学生のため処女を散らしてしまつてはいたが、知つている男の肌といえはそれだけだった。

しかし、一度男を知つてしまえば、あとはとめどなく乱れてしまふ彼女だった。それが、乱れる前に小倉につかまつてしまつた。だから、小倉は、これから燃え上ろうとする喜美子の激しい軀の慾望を、あますことなく堪能できたわけだ。小倉は二十六、喜美子は二十だつた。

喜美子は、受け口気味の唇のぼつて

りとし
た、黒眼
の多い瞳の物
憂げにうるんだよ
うな、見るからに男好きのする容貌をしていた。

小倉の巧みな夜の技巧に、喜美子の軀は日毎ひらいていつた。その肌理のこまかな、吸いつくようにいつも濡れている小麦色がかつた肌には、さすがに女蕩しの小倉も狂喜し、半年ばかりのあいだは、ほかの女に手を出そうともしなかつた。そんなある日、つまらぬ喧嘩がもとで、小倉は刑務所行きとなつた。

ところが、女というやつはわからな
いものだ。小倉が刑務所に行つてい
る二年間、喜美子は、完全に女になつた



男の肌
恋しさにふ
るえるゆたか
な双の乳房の悶え
を、己がひとりの手
慰みで処理して、全く
男出入りのない生活を送
つてしまつたのである。む
ろん、刑務所からのきびしい小
倉の眼を怖れたためや、他人の女房を
取ることがヨタモン仲間の御法度だつ
たせいもあるが、喜美子みたいな、平
常は男の肌を恋しがる女に限つて、こ
んな場合、あんがい操を立てることの
できるのは、不思議といえは不思議な
のだが、実際には、あんがい多いも
のだ。

喜美子は、ひたすら小倉の出所の日
を待つた。堪えに堪えていた慾望の鬱
積を、小倉の厚い胸板の下に思うさま

嵐のように狂瀉させる日を待った。

その日はやつて来た。彼女は、二年の空閑の間に一きわ熟れをました湯上りの匂うような肌を、そのため特に新しくこしらえた緋縮緬の長襦袢に包んで、日夜、小倉の狂暴な、愛撫を受けた。

けれど、どうしたというのだろう、あれほど男の肌に渴えていたはずの喜美子の軀は、二年間女の肌知らずで、しかも女体の隅から隅まで知悉しているはずの小倉の技巧によつても、まるで嘘のように一向に燃え上つてこないのだつた。次の晩も、また、その次の晩も……。

小倉は、この喜美子の軀の変化にたいしては何もいわなかつた。喜美子は切なかつた。ふと、おれのいない間に男でもできたんだらう？ と、思いきり蹴られ、蹴られてみたい、そんな氣持がうごいた。それがいまの喜美子には、肉体感覚への唯一の点火であるよ

うな氣がした。

しかし、小倉は黙つて喜美子の軀を離れ、ほかの女へ移つていつた。

いま、彼女の前で小倉の下に白蛇の肢体をくねらしている女は、その一人で、バー「アマゾン」の女給だつた。

炎え狂う歓喜

一しきり激しく波うつて、横揺れ、縦揺れしたと思うと、やがて女は精魂をつかいはたしたように、グツタリ床の上に身を横たえていた。

「ああ！……」

喜美子の口から切なげな呻き声が洩れ、その軀はいま眼の前に繰り展げられた光景にグツシヨリ濡れていた。

小倉は女から離れて喜美子の前へやつてきて、その前に立ちただかると、髪を乱し、眼を怒らせた凄まじい形相でハタと喜美子を睨みつけた。そしていきなり、大きな掌がサツと眼の前に

迫つたと思うと、いきなり、パチンと物凄いい平手打ちがとんだ。

「ああ！……」

しかし、やがて、その熱く火照る頬の上に、喜美子は、はじめて楽しい幸福感というより、忘れていた軀の歡びの痕跡を掴んだような氣がした。

「あなた……」

美しい眼尻からハラハラと熱い涙を溢れさせながら、喜美子は、怨ずるが如く、訴えるが如く、媚びるが如く小倉を見た。

と、そのとき、小倉はクルリと背を向けて、死んだようになつてゐるさつきの女にいつた。

「おい、帰れ！」

一言そらいうと、布団の上に散らばつてゐるシュミーズやパンティをまるめて、女の顔へ投げつけた。

女は瞳をあけて、しばらく、うつろに、きよとんとしていたが、
「早く帰れ！」

おしつぶしたような再度の声に、もぞもぞ起き直ると、ひどく哀れに醜い恰好でパンティを穿き、シユミーズをつけ、服を着て、無言のまま、何か憎悪のこもつた脅えたような表情を終始小倉の方に向けたまま、立てつけの悪いガラス戸をあけて出ていった。

小倉は、柱にゆわえつけたままの喜美子の軀を長襦袢の前をはだけながら抱いてきた。小倉の掌はくびれた喜美子のお腹のあたりを静かに撫でながら這いおりていった。

「羞かしい……」

彼女は腰をくねらした。あまりに惨めな羞しい軀の変化だった。喜代子は思わず全身をけいれんさせた。

「いや……いや……そんなに虐めないで……」

ふと、われ識らず、彼女は忘れていた、むかしの感覚のよみがえりを感じた。

彼女は熱い呼気のなかでいった。

「あなたも、胸のところをもつとあけて……」

眼を閉じて唇をつき出すと、小倉は分厚い唇をグツとかぶせてきた。喜美子はその可愛いらしい舌を丸めて、小倉の口のなかへ押し込んだ。

やがて、ピッタリ肌をつけて喜美子

を抱いてきた小倉は、上ずつた声でやさしく囁いた。

「喜美子、今夜、おれがこんな変なことをしたわけ、わかるかい？」

喜美子はそれには答えず、五体を炎やして男の部厚い胸に武者振りついて行つた。



肉慾の排けくちに喘ぐ
人妻女給が、情夫から
暴力の責苦をうけて初
めて知つた恍惚境

亭主持ち女給

女というものは何かにすがつたり、打ちこんだり、信仰してゆけなければ生きてゆけない動物である。女給だとかダンサーだとかが、いわゆるヒモを

持つ心理も、つまりはこんなところからきていると見て間違いない。だから夫に、家庭生活に、抛りどころをもつて人妻は、惚れたり、金のためだとかで客と関係することはあつても、ヒモをもつなんていうことは滅多にない。

ところが、新橋西口の社交喫茶「ボン・ソール」の女給紀代子はレッキとした亭主がありながらヒモをもつていた。亭主を愛してなかつたわけではない。それどころか、同僚に手ばなしで、のろけたりするほどベタ惚れだつた。亭主が体が悪かつたためでもない。あの方だつて人並の強さはある男だつた。

「ボン・ソール」は、まあ、中程度のカフェーで、女給たちはべつに客引きに出る必要もなかつたし、紀代子はその哀愁をたゞよわせた梨花のように楚々とした美貌のお蔭で、指名の客も多く、収入の方も百人近い店の女給のうち五本の指以下におちることはなかつた。

だから、店では五分と体のあくことはなかつたが、ときどき、いつの間にか、ふいと姿を消してしまい、どこで何していたのか、二時間近くもどつてこないようなことがあつた。それが三

日に一度ぐらいの割で必ずあつた。

こういう店にしては几帳面な店だつたので、マネージャーはそれとなく、紀代子の挙動に気をつけていた。いつか、それとなく注意ぐらいはしておいた方がいと思つていた。紀代子についてには亭主のことをいろいろ耳にして、いるだけに、紀代子がつまらぬ客に、欺されたりしては、亭主も紀代子も可哀そうだと思つたのである。こんなところのマネージャーにしては人間味の深い男だつた。

(十日や半月の、女給生活じやないから、まさか……)

とも思えるし、また実際、客とのとやかくの噂など一度だつて聞いたことはなかつたが、それだけに紀代子を見ていると、崩れたら際限のないような脆さを感じた。

マネージャーの勘は、今度はたしかに誰かと出来たと睨んでいた。

ボクサー崩れ

ある夜、紀代子のあとをつけたマネージャーは、烏森口で紀代子が、広い肩巾を派手なグリーンダブルにつつんだ愚連隊風の男に、人眼をはばかりような合図をしたと思うと、そのまま紀代子はブラブラ田村町の方へ歩いていつた。男は紀代子の十メートルほど後をズボンに手をつつこみ、嗟え煙草をしながらいいつた。

(ああ、いけない。とんでもない男に引つ掛つたものだ)

と、マネージャーは他人事ながら唇を噛んだ。男は田代という、一時世間を騒がせた銀座警察の残党で、恐喝でこの界隈を荒らしているボクサーくずれだつた。かつてボクサーだつたにしては、色の白い顔にいつも髯の剃りあとの青々とした、眼差の意外に柔和なしかし、半分つぶれたような耳朵や、

角ばつたあご骨などにやはりそれらしい面影をほらふつさせる逞^{たくま}しさのある男だつた。たいへんな女蕩^{おんなた}らしで、一度これはという女を見つけたら

最後、まるで船底についた牡蠣^{かき}のように食いついて離れようとしな^い。ヒモ的技巧の限りをつくして、女から搾^{しぼ}りとれるだけ搾りつつてしまふまでは絶対に



離れない。

紀代子は田村町の交叉点へ来るまえに左へ折れて、

とある簡便な温泉

マーク旅館に

吸いこま

れて

た。

いつ

間もなく田代

もそのなかへ消え

た。

女の慰安

水商売の女は、概して平生は客に遊ばれている反動で、ときには無茶苦茶にわが儘をいつてみたい欲求に駆られる。だから惚れ合つた、氣儘のいえる亭主をもつた女給など、家に帰ると、夜の営みのとき、まるで駄々つ子のように亭主に甘つたれたり求めたりすることが多い。

こういうところにづとめている女たち独特の、不思議な本能である。彼女たちの心には、哀しい女の本能が最もむきつけに出しているのだ。だから、すぎる亭主のない女たち、ことに成熟した二十五・六から上の女給でヒモをもつてゐる女は意外に多い。

紀代子には亭主があつた。しかも、それは彼女がぞつこん惚れこんだ益田という男だつた。亭主は画家だつた。といつても、無論まだ芽の出ぬ貧乏画

家。益田が美校へ通つてゐるころ、二人は知りあつた。少しは絵のわかる紀代子は益田の画才に傾倒してゐた。だから、あるいは紀代子の益田に対する氣持は、はじめから愛情というよりも畏敬といつたほうが當つてゐたのかもしれない。

彼女は、夫の画才を伸ばすことに献身的な努力をすることに生き甲斐を感じ、そんな自分を幸福な女と信じこんでいた。その点、彼女はロマンチックな、女らしい女の、もつとも典型的な例といえよう。が、畏敬の感情は、彼女にあの水商売女の無茶苦茶に甘えてみたいという欲求を容れてくれなかつた。彼女は夫に対して、いつも奉仕のがわにまわらねばならなかつた。

そして夫は、芸術家のもつわが儘さで、彼女のひそかな希いを無視して、自分で彼女に甘えかかつてくることだけしか考えようとしなかつた。——紀代子がヒモをつくつたということ、

彼女の不貞を咎めては、少々酷だと思ふ。彼女が選んだ、ボクサー上りの男は、彼女にとつては単なる慰安にすぎない。いつてみれば、紀代子は何もその男の頑健な軀が欲しかつたわけではない。たゞ甘えることのできる、自分のいいなりになる、ヒモ的存在がどうしても必要だつたのだ。

暴虐と最高頂

田代と一緒に寝るときの紀代子は、知つてゐる者が聞いたら、信じられないような伝法口調になる。

『なにさ、あんた。あたしが満足してしまふまでも我慢してゐられないの？ フン、だらしない！……それで、あたしのヒモだなんていい氣になつてゐられるの？……女の軀に満足一つ与えられないで、よく、そんなことがいえるわね……』

さすがの田代も、紀代子のぬめ肌を

抱くときは、ほかの女のとときの何倍も早く絶頂感にいつてしまふのだ。秘密の場所の緊縮感の素晴らしさのためでもあつた。

田代は齒をギリギリ鳴らし、食いしばつて耐えようとする。

「いいかい、我慢するんだよ。あんたはあたしからお小遣いをもらつてる身なんだよ。それでいて、あたしより先に済ましてしまふなんて生意氣だよ」全裸の田代に、のしかかつた紀代子は、田代の筋肉のもりあがつた岩のよるな胸板に両手を支え、胸をそらし、眼をギョツと閉じて、ひとりで暴れ狂つてゐる。

が、やがて、紀代子のそんな言葉も間遠になり、偶にいらにしても、それはうわごとのように、頼りなくよろめいてくる。南天の実をチョココンと二つつけたような、白桃のような豊かな胸の膨らみを荒々しく波打たせ、絶頂感の時に、軀のあらゆる部分から発散す

る、えもいえない女の匂いをふりまきながら、声をあげて最後の凄まじいまでの運動にまさに移ろうとするとき、田代はそのままいきなりくると優位の姿勢に早変わりする。と、吃驚したように、充血した空ろな瞳を瞞る紀代子を見下して、打つてかわつた傲慢さを叩きつけた。

「チエツ、黙つていてやりやあ、いい気になつてつけ上りやアがる！畜生こうしてやる！」

紀代子の髪の毛のなかに骨太の大きな掌をグツと突き込むと、一握りひつ掴んで、脱けよ、とばかりグイグイ引つ張る。

紀代子は、ヒィヒィ声をあげて苦痛に身悶えする。

「あッ、恕して！恕して！……あたしがいけなかつたの……恕して！……もつと……もつと虐めて……いや、恕して……」

辻褄のあわぬ、分裂症的な悲鳴を、

燃えるような、緋友禪の襷を握みながら、たえるように叫喚く。

「可愛いよ……殺してしまいたいほど可愛いんだぜ！」

男はむつちりした紀代子の二の腕に千切れるかと思うほど強く齒をあて、右手で喉をグイグイ締めつける。

「ああ……」

顔を真ッ赤に染めて必死に抵抗する姿には、しかし苦痛というより、むしろ陶醉の限らない歓びが溢れている。そして、男の背に廻した腕にいつそ力をこめ、肌と肌とピッタリ密着させ、夢中で軀をくねらし、すすりなきながらいう。

「ネ、あんたも……」

軀と軀の衝突の数瞬……

この紀代子の例は、正常な女にとつては、所詮、嗜虐の陶醉は虚構にすぎないことの証左かもしれない。何故なら、金の力で、思うさま男に無理難題をいつて遊ぶつもりでヒモをもつた紀

代子は、結局はいつも男の本質である。逞しい暴力に組み伏せられることで最後の喜悅を得ているのである。

そして、いわゆるヒモとして永続き男なのである。



日傭い労働者の齒型を
雪の肌へのこして暴力
的交歡に嗚咽する美貌
の社長夫人

大輪の白花

晝休みの時間に、日傭い組の労働者が十人ばかりそろそろ事務室へはいつてきた。会計の金沢老人がひとり弁当を食っていた。

「社長、いないんですけえ？」

先頭の、殊にがつしりした骨組の男がぶつきら棒に云った。

「ああ、今日は朝から、東京へ出張でな。何か用かな？」

鼻のまんなかあたりまでずり落ちた眼鏡の上から、金沢老人はジロリと一同を眺めまわした。

「なにか用かもないだべ。わつしら、銭もらわにや、飢え死にするほかないだんべが」

一人が、土地の方言を丸出しにして忿懣をぶちまけた。

「茨城製作所」は、終戦後、もと海軍將校だった尾田武造が、戦時中、地下を縦横に走らせた電線の発掘に目をつけて創設した会社で、材料の要らないまるで泥棒みたいな仕事だったから、手荒いボロ儲けで、一時に正式の社員だけで三十人、そのほか、発掘のための日傭いを常時三十人から五十人ぐらいつかうほどの、武士の商法にしては珍しい隆昌ぶりだった。

ところが、そのうちにだんだんこれに目をつけてきた業者が多くなつた上に、埋蔵電線の量もだんだん心細くなつてきたり、また県の役人と結託するために撒いた金が贈賄でひつかかり、そのため、監視の眼が鋭くなつたりで、近頃では日傭いの賃金さえ満足に払えぬ状態だった。

「うん、みんなの苦しいことはようわかつとる。だから、社長は今日も金策のため東京へ行つたんじゃ。まあ、明日まで待つてくれ。明日はきつと何と

かなるじやろと思う』

『あんたの明日は当てにならんよ』

『ふんどだ』

『全くだ』

一同がガヤガヤさわぎだしたとき、事務室の奥の畳にチラと明るい翳^{かげ}が動いて、荒い棒縞のお召を着た社長夫人が姿を見せた。

別に、騒ぎを知つて出て来たわけではなく、事務室から借りていつたスズリ箱を返しに來たらしく、それを置く^{おとし}と、ちよつと不審^{ふしん}そうに事務室の光景に眼をやつたまま、奥へ立ち去ろうとした。社長の住居は事務室つづきにゆけるようになつていた。

夫人の姿が見えたところから、労働者たちの騒ぎが急にしずかになつた。金沢老人の前では何やかやいうが、人を喰つたような傲岸^{ごうがん}な尾田社長の前へ出ると不思議に溫和^{おとな}しくなり、その、頭から抑えつけるような態度に一言もなぐひき下つてしまふ彼等なのである。

払いは悪かつたが、数字の上ではこの会社の日当^{にちあ}が普通より五割高^{たか}くらいになつてゐることも、彼等が無下^{むげ}に強氣に出にくい理由の一つだつた。

その社長の夫人だから、自然、彼等も声を落したわけだが、いきなり眼の前にパツと大輪^{だいりん}の白い花が開いたような夫人のあてやかさに眼を奪^{うば}われたためでもあつた。

品子夫人は、夫と五つ違いの三十一才。すらりとのびた姿態^{しだて}は、襟元に、脂肪^{じやう}ののつた惱ましいまでのうなじを覗かせ、こぼれるような中年増の魅力^{みりょく}をふりまいていた。

まつ白な白足袋の裏を見せて、奥に消えようとした夫人に、いきなり声を掛けた者があつた。

『奥さん、ちよつと待つて下さい』

『え!』

振り返つて、夫人は睫毛^{まつげ}の長い、黒ダイヤのように美しく澄んだ眸^{まなこ}を一同の方へ抛^なげた。呼んだのは、さつきの

一ばん前にいる頑強^{がんきやう}そうな男だつた。アンダー・シャツから出た腕や顔が、赤銅色^{しやくどうしき}に見事に灼^やけている。

『奥さん、あつしらの家じや、ガキめらが食うものがなくて学校へも行けねえでゐるんだ。社長が帰つたら、奥さんからもよろしくこのことを話しておいて貰^{もら}えてえんだ』

『申し訳^{わけ}ありません。帰りましたら早速……』

長い睫毛^{まつげ}を伏せて、いかにも済まなそうに、からだを硬^{かた}ばらせてゐる風情^{ふうせい}には、尾田社長の見るからに不遜^{ふそん}な態度とは、およそ対遮^{たいしや}的な神妙さがあつた。みんな夫人には好感を抱いた。夫人を見るのが、はじめての男も多かつた。夫人を呼びもどした永井という男もその一人だつた。

『奥さんに、こんなこといつたところではじまんねえが、なんでも聞くところによると、社長は先月東京にどえらくでかい邸^{やしき}を買つたんだそうだが、本

当かね？」

永井は、金沢老人の机に両手を突いて、体をのり出しながら夫人に畳み込んだ。

思いなしか、夫人の顔にほんのり朱がさしたようだった。夫人は俯向いたまま、何ともこたえない。

金沢老人が、狼狽したように立ち上つて、

『ど、どこから、そ、そんなこと、聞いたんだね』

どもりどもり云つたが、

永井は構わず夫人に鋭い語調を浴びせかけた。

『苦しいと』

きはみんな

なで苦し

むんなら、

そりやあ仕様が

がねえ。だが

あつしらに払う

給金さえ払わずに邸を買うなんて、そんな無茶、いくら社長だつて許されねえ』

『そうだ、そうだ』

事務室のなかはまるで蜂の巣をつついたような騒ぎになった。

むせる男の體臭

向井町の停留場で電車を降りたころはもうすつかり日が暮れ、街には灯が点りはじめていた。

品子夫人は親戚の家へ行く道を左へ折れようとした。と、その小路を向うから千鳥足でやつてくる男がある。呂律の廻らない言葉を口誦みながら。

悲しい 悲しい わたしの心——

たつた一人の女のため

に——
(あら！)

と口のなかで、思

わず叫んだとき

酔払いの方で

も気がついて、

「これは



これは、社長令

夫人さまで……。ま

ことに結構な御身分で

……。日傭いの賃金、

今宵、社長夫人の満艦飾

に化ける、か。……ハハ、

ハ……。キリストはいった

……。物豊かなるものは幸い

なるかなとネ……」

声で笑いながら、しかし、酔眼

は憎悪に燃えて、吃つと夫人の双

眸を見据えていた。

「お怒りにならないで。宅がもどつたら、わたしからよく話しておきますから……」

「ハハハ……。その宅とやはらは、今ごろは東京で、あつしが半年ぐらい暮せる金をつかつて、ドンチャンさわぎでさあ、ハハハ、……」

と、ふいに、永井の笑い声がびたりとまつて、永井は意外にしつかりした語調で、一句一句切つて、こんなこと

を喋り

出した。

「あつしは

軍人がきらいだ

いわねえ。むかしの

軍人だつ

とは

て、軍人では飯が食えなくなつた現在では、何とか別の道で生きていかにや

ならん。しかし

生きるには努めて

謙虚に、生きよということ

だ。あつしは、奥さんの亭主の

尾田が戦時中、国民の膏血を搾つて、

いかに悪辣な手段で私腹を肥やしたか

知つてゐる。それもまあ、あの無明の

時代の過失として恕そう。しかし、戦

争が終つたとき、あんたの亭主は何を



したか？ 贖罪の氣持など、これつば

つちもないばかりか、同胞に返すべき物を、さらに己が一人の私腹のために泥棒以上のひでえことをした。その上

何ということだ、己が榮華、快樂を追うことにのみ汲々として、そのためには人を餓死させても、恬として恥じない。あつしは、そういう男を見ると、ズタズタに斬りさいてもまだ腹の虫のおさまらぬような憎しみでいつぱいになる……私腹……奥さん、これもそうだ！』

つと手をのばして、品子夫人のお召の袂を掴むと、いきなり、ペツと唾を吐きかけた。

品子夫人の顔からは血の氣が全く消え失せて、ただ呆然と立ちすくんでいた。惡寒のように、からだじゅうがブルブルとふるえてきた。憤りのせいでもない、驚愕のためでもない。いままでおぼろげに感じながら眼をそむけていた夫の非行、自分の不明を、いまこ

うしてむきつけに叩きつけられたことに対する、訳のわからない昂奮。そして、怖ろしい罪惡に対する罪の意識であつた。

人通りの少い道ではあつたが、通行人が二、三人、訝しげに、立ちどまつた。永井はくるりと踵をかえすと、茨城大学の方へゆく道へフラリフラリ曲つていつた。

ただ邪まなるものを憎むがゆえにただ邪まなるものを憎むがゆえに爾余のいかなるいわれもなくて……

『待つて、待つてちようだい！』しばらく呆然と永井の後姿を眺めていた夫人は、やがて息をきらして永井に追いつがつた。

『教えて……教えて……あたし、どうしたらいいの？』

永井は応えようとせず、ただ、フラリフラリと歩いている。

家並がきれて、月明りを浴びて蒲の白くそよぐ野原に出た。

『どうしたらいいの？……ね、あたし罪ほろぼしがしたいの……ね、あたし罪ほろぼしがしたいの……。あたし、おそろしくて、このままではとても生きていけそうもない……』

永井は、はじめて立ち停つて品子の方を振り向いた。その唇の端はゆがんで薄笑いを泛べていた。

喜悅の齒型

『奥さん、あつしには、信じられないよ。そんな発作みたいな良心つていうやつがね』

『嘘じゃない……ね、教えて……あたしは、このままでは呼吸をするのも苦しい……』

『贖罪かね……そりやア、わけはねえ。自分で思いきり苦しんでみるのだ……』

『何をすればいいんですの？』
『今までの罪をさ』

ぶるいするような快感が、身うちから湧き上つた。

品子は、惑乱の一瞬、気がついたときには、永井の胸のなかへとびこんでいつて、背に、腕をからみつかせていた。そして、永井の顔を見上げて、囁くようにいつた。

『抱いて……、あたしの軀、無茶苦茶にしてしまつて……。あたし、苦しみたい』

その永井の、意志的な眼のなかに、このとき少しでも欲望の翳が宿つていたなら、あるいは品子は、たちまちにしていつもの貞節、普通の尾田夫人にもどつていたかもしれない。そして、おそらく、品子にとつて、すべては、もとのままの軌道で動いたろう。

しかし、幸か不幸か、そのときの永井の眼には、嘲笑的な冷たい笑いがあつただけだつた。その嘲笑を見たとき、品子の、永井を征服したいという欲求は、抑え難い力となつて彼女のか

らだじゆうを包んだ。

品子は背のびして、永井の唇を求めた。しかし永井は無表情のまま横を向いてしまつた。品子の手からハンド・バッグがバサツと足もとの芒の茂みに落ちた。彼女は右手で永井の背を抱いたまま、左手で永井のバンドをゆるめた。ズボンがハラリと落ちた。むーんと、むせかえるような男の体臭が品子の鼻を激しく衝いてきた。

品子はしずかに体を下へずらしてゆき、両手で男の太腿をかかえて跪坐の恰好になつた。艶消しのルージュを塗りこめた彼女の、ぽつてりした唇が月光を吸つて、ひんやりするような感触を思わせて濡れていた。上から永井が、抑揚のない言葉をおとしてきた。『あつしはたちのよくない病氣をもっている』

『いいのよ、そんな……みんな贖いのつもりなの』

口紅が男の軀に桃色の斑点をのこし

た……。

『女つていうやつは、分らねえもんだからなア。今は贖罪だとか苦しみが欲しいだとかいつてるが、明日の朝になるとケロリと忘れてしまふんだ……。』

女なんて、みんなそうだ……。よしッ、体じゆうに、当分消えないような齒型を、ベタベタにつけておいてやる！ そりすれば否でも応でも亭主の眼にとまる。亭主の懊惱、お前さんの苦惱……いいな？』

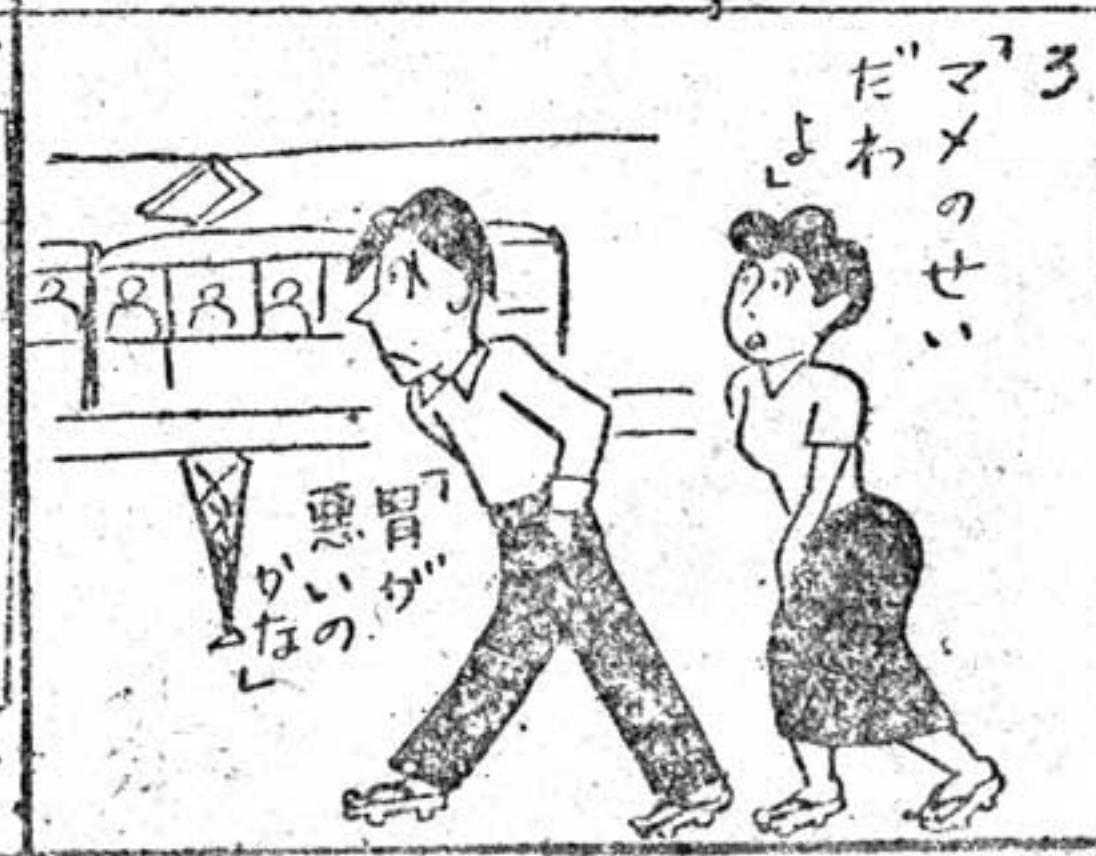
『ええ、思いきり強く噛んで……ああ……』

颯々と芒が原をわたる秋の夜風が品子の声を奪つて消えていつた。

最近、茨城県某地方新聞に「茨城製作所」の解散が報ぜられ、その前に社長夫妻の離婚問題をめぐつて、一見信じ難いような風評がとんだが、真相はおおよそ以上のようであつた。

マメ食ったむくい

多田 勇



女は二重人格の

集



人妻の慾情心理を打診する

貞節という重荷を背負った人妻は、夫の隷屬物としてたとえ榮耀榮華に明け暮れても眞の満足は味わえない。ひとりの人間として、思いきり生の歡喜にむせびたい願望が彼女の極點なのだ。だが貞節の仮面をかなぐり捨てられないのも人妻の悲しむべき宿命。だから女は二重人格の魔物になる。その微妙な人妻の慾情心理の打診——

貞節の枷に反撥して 姦通の泥沼に陥ちた人妻

羅 文 三 郎

夜の訪問者

須田俊一が、夏休中の家庭訪問で吉野邸の門をくぐつたのは、もうかれこれ夕刻ちかくであつた。

ちようどそのとき、正代夫人は、湯上りの上氣した肌を湯上りタオルでまとい、鏡合に向つて化粧しているところだつた。

女中から、次男友幸の受持教師の來訪を聞くと、正代夫人の額にチラツと不快の色が走つた。

(また、あの子の成績の悪いことを言われるのだわ。友幸も生憎不在だし、困つたわ)

女中に応接間へ通すようにといつてしまつてから、ふと正代夫人の胸に、思いがけない企(たく)みが浮んだ。

『応接間はやめて、あたしのお部屋へご案内して下さいな』

女中が立去ると、正代夫人は、もう一度、念入りに化粧を直した。

友幸は小学校二年生である。長男の信幸は二つ違いの四年生で、夏休中はずつと伊豆の別荘へ祖父と避暑にでかけていた。友幸は、親戚の大学生と鎌倉の海へ泳ぎに行つてゐる。おそらく夜にならなければ帰らぬであらう。

正代夫人は白地に、小さな水玉を散らした縞の着物を着て、須田の待つて

いる自分の部屋へ急いだ。

『お待せいたしました……』

正代夫人は、つゝましやかに敷居越しにお辞儀をした。若い教師の須田は床の間に背に堅くなつて坐つていたが、匂(にお)うばかりにあでやかな正代夫人の装いを見ると、すづかり上つて、慌(あわ)てゝ頭を下げた。

小学校のPTAで、女ながらも幹事をつとめている正代夫人である。たとえ、教師であつても、そつしたハンデキャップが、須田を必要以上に畏縮させてしまふのである。

『せつかくお出で下さいましたのに、生憎(あいにく)と友幸は不在でございました』

『はあ、そうでしたか』

『あの子、先生にはとくにお眼をかけていたゞきなから……ほんとうに申訳ございませんわ』

『いえ、けつして』

『今日も実は、親戚(しんせき)の大学へ行つてゐる者のところへ勉強にやつてゐるので』

「さあですが。……何しろ教育は、学校の先生だけの責任ではなく、家庭の者も先生と同じ気持でやらなければいけませんと思ひましね」

「はあ、まつたく。いつも、奥様の教育に対するご理解には敬服しております。奥様のようなご立派なお方をお母様に持った友幸君は、まつたくご倅せというもので」

須田は、ハンカチを出して、額の汗を拭いた。

「お暑いのに、ほんとうにご苦勞さまですわ。いかゞでございますか、ひとお風呂お浴びになつて、お汗をお流しになりましたは……」

「いえ、ご好意は有難いのですが、まだ廻る家もありますので……」

「まあ、いいじやございせんか。もう、日暮れですし……ちようどいい湯加減ですわ」

正代夫人は立上り、遠慮する須田のうしろへ廻り、馴れなれしく

腋の下へ両手をかけ、

「さあ、いらつしやいませな」

「しかし、まだ廻るところがありますから……」

「そんな、遠慮はなさるもんじやございせんわ。さあ、さあ、いらつしやませつたら」

風呂から上つて座敷へ戻ると、卓子の上には冷えたビールが用意してあつた。

「さあ、おひとつ如何が」

貞節のベール

コップをつきつけ、壺を手にした正代夫人の瞳が妖しく濡れていた。

「僕は、お酒は全然駄目なんです」

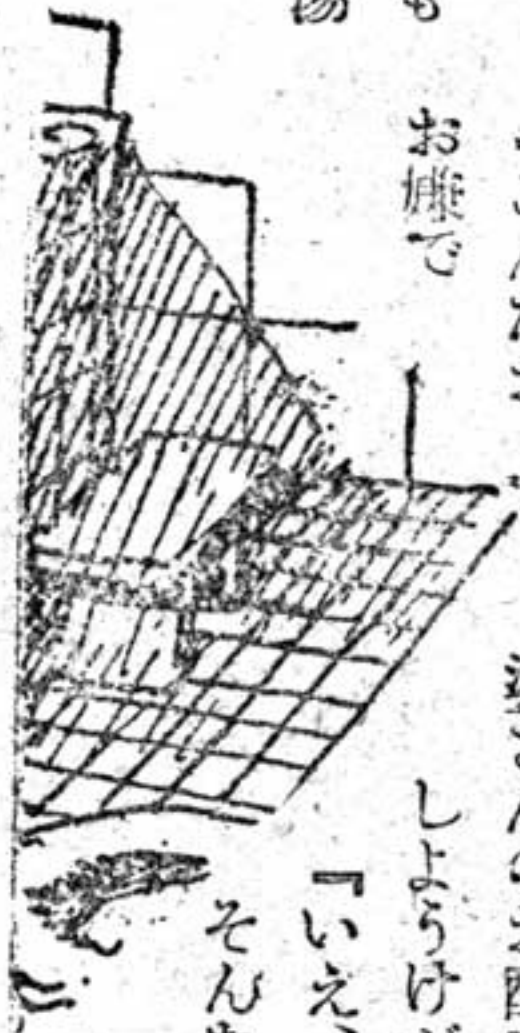
「こんなお嫌で

お嫌で

婆さんのお酌ではしやうけど」

「いえ、そ

そんな」



「でしたら、一杯だけでも。あたしもいたゞきますから」

カチンと、コップを打ちつける正代夫人の胸が妖しく波立つていた。

（良人の帰りは遅いんだわ。友達と一緒に緒だから、あたしが安心して思つて、どうせいま頃は、どこかのお茶屋さんで女と遊んでいるんだわ！ それなら、あたしだつて）

須田は、ほんとうにアルコールは駄目らしかつた。

だが正代夫人は容謝はしなかつた。

「奥様、もういけません。すつかり酔つてしまいました」

「なんですなえ、男のくせに。いやで

すわ、そんな、弱音を仰有るもんでは

ございせんわ。お願い、先生にお酌

していたゞきたいわ」

卓子を廻り、ついと須田のそばへ膝をすゝめ、コップを差出す正代夫人の

身体がフラフラと須田の胸へ崩れかゝつた。

「あッ！ 奥様」
戸惑いして、さつと
身を退くと、
「先生たら、
ひどいかた
不人情

ね」
畳に、
がばとうつ伏
して正代夫人は
動かない。

「奥様！」

「いや！ 起して下さら
なければ——ひどい先生」
と身悶える。アツプの髪に白



ながら、熱い正代夫人の手がその手を
しつかり握りしめていた。

「あッ！ 奥様」

と叫んだときには、ねつと
りとした正代夫人の唇が
須田の唇をふさいで

いた。

「先生！ あたし、

淋しいんですの！ あ

たし、世間では貞節の権化

みたいに噂され、良人の遊蕩に

も一言の干渉できない、まるで、

生ける屍なんです。ね、先生、あたし

から貞節という名を先生の手でもぎ奪

つていたぐきたいの……」

二人の身体が、抱き合つたまゝ畳の

上に倒れた。アルコールによつて麻痺

された二つの肉体は、理性を失い、ひ

たぶるな情熱の奔騰に、どろどろにと

けていくのであつた。

須田は、夏休が明け、新学期となる
と、週に一度ずつ、友幸の学業補足と

をかけ、抱き起した。

両手のみか、全身が、異様な昂
奮にブルブルふるえた。起き上り

田はうつ伏せにな

つた正代夫人の肩に手

をかけ、抱き起した。

両手のみか、全身が、異様な昂
奮にブルブルふるえた。起き上り

いう名目で、吉野邸を訪れた。

しかし、須田の相手は友幸でなく、貞節な人妻の仮面をかなぐり捨てた正代夫人であつた。

須田もこの爛熟した人妻の妖しい魅力にひきずられて、つい道ならぬ関係をつづけていたが、誰知るよしもないと思つていたこの不倫の恋もいつしか世間の噂にのぼるようになった。

しかし、貞婦というベールに包まれた正代夫人の日頃の印象が、こんな世間の噂にも何か信じがたいものがあるようにその良人に思わせたのである。それほど正代夫人の貞節は世間の通り相場になつていた。

これは、

正代夫人にも須田にとつてもさいわいなことであつたかも知れない。だから二人は、こつそり口を拭つて知らん顔をしておけばよかった。

三年間夫に秘めて賣春

行爲をつづけた人妻

山田 富美子



*** 賣春の動機 ***

『うちの家内はどうも野暮つたくてネとても浮気なンてできない女だよ』
夫は友人に、いつもそんなことを言つている。とんでもハツブンだわ。知

らぬは亭主ばかりなり、女は多淫だつて高村光太郎先生もいつてらつしやるが、女は先天的に売笑婦なンだわ。そもそも、あたしがそんなことに興味をもちだしたのは、まだ東京の盛り場から街娼なるものが、姿を消さな

つた三年前の某月某日。夜更けに、有楽町のガード下を歩いていたら、『ねえチャン、遊ばないか』アロハ襯衣に、ギヤバの洋袴の遊び人ふりの男。遊ぶという意味がわからなかつたが、面白そうだつたので、だ



まつてうなづくと、『ショート・タイム、これでどうだい？』

と、指を三本だした。序手にそれも承知してみせると、

『ドヤはどこだい？』

『……』

『青カンでゆくか。どこにする？』

『どこでもいいわ』

『じゃア、おれがいいところ教えてやろう』

日比谷公園の前をまがつて、東京の真ん中にこんな寂しい場所があるかと思われるような空地へつれこまれた。

『ホラそいつを脱ぐんだよ。こつちを向いて……あつちをむいて……しやがんで……』

といった塩梅で、気の短かそうな兄ちゃんに、すっかり指図されちゃったんだけど、青天井のもと、ひやつこい夜気に浸りながら、スリル満点。しかも兄ちゃんは、技巧派で、あたしの方

「イヤに横着なやつだな
あとの始末は女がするもんだ
ぜ。お前トウシロだな。まアい
いや、気にいた。いつも彼処ンとこ
にいるのかい？ また遊んでやるぜ」
男は悠々と立ち去った。あたしの方
はタイヘンだったわ。いままで夫から



も、こんな思いをさせ
られたことはなか
った。軀が妙に
だるい。：

…このと
きの真

ンだから安心。別に生活にこまづて、
ヨルバイトをやるンじゃないから、む
りをしないですむ。ガリ（かりこみ）
の危険のありそうなときは、はずすか
ら絶対に大丈夫。

『何だ、お前トウシロなのかい。フン
なかなか綺麗な肌をしているじゃねえ
か』

ジロジロ眺めながら、こんなことを
いう男もいた。あたしは、こうしてい
ろんなことを教えられた。ゴムを使
うことも教わった。

夏の夜
の冒険が病
みつきで、あた
しは、夫にかくれ
て夜バイトに出るよう
になった。

夫は勤務の関係上、出張が多
いから都合がよい。そこへもつてきて
絶対にあたしという女を信頼している

しても見つかる心配はない。

或るナイトクラブ

客におそわつて、あたしはいろいろな態位をおぼえた。女上位なんてのもおぼえこんで、夫との場面に応用したら、夫は眼を白黒さした。

「おい、どうしたんだい
お前、いつのまにこんな
ことをおぼえたんだ」

「齡のせいでしょ」

あたしは澄まして答えてやつたわ。夫はあたしの体を裸かにして、シミシミ観察することなんかないけれど、お客はそれこそ、鵜の目鷹の目で見つめては、

「うーむ、お前なかなか
優秀だぞ！」

と感歎の声を放つ。あたしは自信も出来たし、



そう見られるのは悪い気持ではない。何よりも普通のパン助とちがつて、あたし自身が、感きわまつて、無条件降伏するのが、男たちには嬉しいらしい。あたしは、あるナイト・クラブのメンバーに加わつた。ここへ出はいりする女は、元子爵の令嬢だの、軍人の

未亡人や、外国人に甘言でだまされ、毛色のちがつた赤ン坊を置き去りにされたダンサーなど、比較的高級な連中ばかり。

あたしは、ある高級船員の妻だといつわつて、都合のいいときに顔を出し相手が気に入らなければ断わることも

できた。それでさえ収入が物凄いの。のろまな夫は、実家の父や母に買つてもらつたというあたしの言葉を本気にして、新しい洋服や装飾品を身につけても、ちつともあやしまない。

ある夜、あたしがクラブに行つていると、マダムが、

『いいお客なんだけど、あんた出て頂戴よ、まだ若いひとよ』

というので、何気なく応接間のド

アを開けたトタンに、ぎよツとして顔をかくした。安楽椅子に足を投げだし

ていた男は、何とつれ添うわが夫ではないか。壽命じゆみがいつぺんに三年も縮ん

でしまった。関西へ出張して、明日帰る筈の夫がこんなところへ来ているな

ンて。——あたしはマダムに、口実をこしらえてことわると、マダムは、

『そう。よさそうな人なだがね。ど

こが気にいらぬの。ほんとにはあゝいう人は、鼻の下が長いから得えなんだけどなア』

と惜しそりに言つた。
『何だか、虫が好かないのよ』

その虫が好かない男と、



の女を抱いて寝ていると思うと、へんに昂奮こうふんして眠れない。あゝいまごろ：……なんて考えていると、

『おい、何考えてるんだ。ちつとはみを入れろよ』と、

中老紳士にどやされた。

翌日の夕方、夫は澄

まして帰つて来た

あたしはあたし

で、虫も殺

さぬ顔をして夫

をむかえ

た。あたしに

内緒うちそとで、夫はあ

なところで、大金を消

費している。あたしはまた

下で寝たわけだが、夫がほか

夫みたいな男から、かせいでいるんだから世の中なしてほんとうにイタチこつこだ。妙に昂奮して、その晩のサーヴィスがよかつたと見え、夫は大いに感激し、

『やつぱり、俺はお前ではなくちやあダメだよ』

何いつてるンだい！ とどやしつきたいのを我慢するのに、あたしは大骨折つた。

こんなふうに、あたしは夫にも世間にも知られず、三年の間、秘かに売春行為をつづけていたのである。

満みたされぬ情慾に、賣春

婦うらやさえ美む名流夫人

霞 関 二

*** 華やかな鐵鎖 ***

首輪、腕輪、宝石などが、眩ゆいばかりに散りばめてあつた。誰にも、ちか寄りがたい身分の相異が、そのきらびやかな装いに、無言の威圧を与えているように感じられた。

六年振りの女学校時代のクラス会も

マリ江夫人には、猜疑と嫉妬に充ちた重苦しい雰囲気の中に、孤立したような、味気なく、淋しい集いで終りそうだった。

旧いクラスメート達は、それぞれに卓子をまん中に円陣をつくつて、愉しそうに語り合っていたが、そうした人達から離れて、マリ江夫人はたゞ一人

壁ぎわの椅子にもたれて声高に話している旧友たちの会話に、そつと耳を傾けているより仕方無かつた。

『とても、あたしのとこなんか駄目。イミテーションだつて買つて貰えそりもないわ。何んだ犬じゃあるまいし、首輪なんかつけたがる奴があるか！ですつて』

『オホッ、。ひどい良人ね。犬の首輪と首飾を一緒にされたら、たまらないわ』

『あたしなんか、いくら買つて貰えても、あんなものつけるひまがないわ。まさか、コロッケや大根の買出しに首飾でもないでしようしねえ』

『ホホ、。』

『オホホ、。』

他愛ない話に、どつと起きる爆笑は六年前の女学生の頃と、すこしも変らない女達だつた。

しかし、そのとりとめもないおしゃべりのなかに、マリ江夫人は、自分に

対する鋭い揶揄がふくまれていることを意識した。

(まあ、犬になんか喩^{たと}えるなんて、ずいぶんひどいわ)

と思つた。

マリ江夫人は、その美貌^{ひばう}を見込まれて実業家木崎龍右衛門の後添いとなつた女である。

四十歳も年齢の違ふ木崎は、マリ江の父への出資を餌^えに、その若々しい肉体を取引することに成功した。

ダイヤモンドの指輪も、宝石のきらめく首飾も、級友達が言うように、木崎夫人であるという、外部に対する一種の標示であり、貴夫人という名で縛^{しば}つておく鉄鎖である。

マリ江夫人は椅子を立つた。その場から、一刻も早く逃れたかつたのである。

(お前は、どこを歩いていても、木崎の女房だと云うことがわかるんだよ。そうだろう。こんな宝石づくめの貴婦

人は、木崎の女房以外にはおらんからね)

皺^{しわ}だらけの身体を、執拗^{しつよう}にすりつけてくる木崎の古びた肉体の臭いが、ふつと胸につきあげてくる。

マリ江夫人は、夢中で夜の街へ飛び出した。

パチンコの音が騒々しく流れてくる狭^{せま}い通りを抜けると、ネオンの明るい西銀座の舗道に出た。

流しの車を止めようとして、慌てゝ手をおろした。

(歩きたいわ——独りで、自由に歩きたい!)

切実な叫びが、生ける屍^{しかばね}のマリ江夫人の唇を洩れた。

*** 偽装。パン。パン ***

全線座の角を曲つて、土橋寄りの暗い道にさしかゝつたときである。

『凄^{たゞ}いね。イミテーションとは思えないよ』

ぶーんと、酒臭い息がして、中年の男が肩に手をかけてきた。

『何をなさるんです!』

反射的に——何も考えるまもなく、マリ江夫人は、力まかせに男の手をはらいのけた。酔つた脚がフラフラと、暗い歩道によろめいだが、すぐに硬^{かた}い表情に変えると、

『へん、手前はあの俺を振るつもりなのかい。何だパン助のくせ!』

侮蔑^{ぶべつ}をふくめてニヤリと笑う。

何と云う、淫^{いん}らな眼であるろう。マリ江夫人は、ゾツと背すじに冷いものを感じ、足早やに男のわきをすり抜けようとした。

が、その腕を、男の荒々しい手がぎゅつと握^{にぎ}つた。

『離して!』

叫びが唇をついた。

『面白そうな女だ! 言い値でつき合^あう。案内しな』

酒臭い息がうなじに吹きかゝる。

「あたし、そんな女じゃありません」
 「どんな女でもいいさ。イミテーションの安物で、胡魔化^{ごまか}しているくせに、そんな白を切るもんじやないよ。泊るのが嫌なら、シヨートでもいいんだぜ」

男は、ズボンのポケットから皺だらけになつた数枚の千円札を、マリ江夫人の手に握らせようとした。

「お金？」

「不足なら、もつと出すよ。こいつはイミテーションじゃない。正真正銘^{しょうしんしょうめい}の日本銀行発行の紙幣だぞ！ それにしても、パンパンに惚れるなんて俺も下落したもんだ。ハツハツハハ……」

ぐいと、腕を組んできた。

向側の、シヨートボートの五彩^{さい}のネオンが、頭の中でグルグル廻つた。

（あたしを、闇の女と間違えているのだわ）

三十五、六の男である。

六十を越えた、良人の木崎と異り、

じゆくじゆく^{あふら}と脂の滲み出るような、精悍^{せいけん}な男だつた。

（闇の女のイミテーションに、なつてやろうか？）

ふつと、妖しい冒険が、胸の中に不貞の焰をかきたてる。

ゆきずりの男だ。貴婦人の標示をイミテーションと思つてくれるのが幸いだつた。

（何もわかりやしないわ。いゝわ、どこへでも行つてやれ！）

心のすみで、反抗的な命令の声をきいたとき、マリ江夫人の覚悟はきまつた。

好奇心というより、男の逞ましい肉体が、抑えられ、燻^{いぶ}つていた貴夫人の情慾に火をつけたのである。

パツと、懐中電灯の光が、もつれ合つている二人を照らした。
 パトロールの警官だつた。

『どうしました？』

一人が、不審^{ふしん}そうにマリ江夫人を覗

きこんだ。首飾の、冷い宝石の感觸がマリ江夫人をイミテーションの女から引戻した。

「酔つている方です。保護してあげて下さいませんか知ら」

その声は、凜然^{りんぜん}として、いつもの冷いマリ江夫人に還つていた。

警官の呼んでくれたタクシーに乗つて、わが家へ帰る車の中で、マリ江夫人は、夜の街にうごめく闇の女達を心から羨んだ。

（あの女達だけは、イミテーションじゃないわ——自分の思うがまゝに、どんなことでも、やり通せる女たちだわ——）

頬に、ハラハラと、熱い涙があふれていた。

素晴らしい官能記事と

斬新なヌード寫眞の

読切ロマンス

仮面にかくされた 人妻の淫蕩心理



が？ と世間で首をかしげる
二の句のつけないほど意外な
る。貞節というベールに包ま
剥いた淫蕩心理、淑やかなる
しく織りなす情痴の生態——



まさかあの女
のような奥さんが
醜聞を秘めてい
れた人妻の皮
べき彼女等の妖

町内の一泊旅行の夜初戀の 人に似た男と関係した人妻

寺 島 静 江

◇今は亡き

戀人の幻影◇

小林さんというその人を、はじめて
お店の前に見たとき、あたしは心臓が

とまつてしまつたのではないかと思ひ
ほど吃驚びっくりしました。と、一度とまつた
心臓が急に早鐘のようにドキンドキン
鳴り出しました。

(あつ、宇津木さん！)

思わず叫ぼうとした声を、あたしは
危く呑み込みました。別のお客さんに
渡すためカウンターから取出したお釣
りを手にして、あたしはしばらく棒を
呑んだようにその場に突つ立つたまま
その人の顔をジツと凝視きようししました。

長身の背恰好まがさしといい、広いひたい、
柔和な眼差しまなざしといい、その男の人は、
はじめ見たときは本当に宇津木さんか
と思つたほどよく似ていました。瓜二
つといたいのですが、あとで見なれ
てくると、たしかに宇津木さんの面影
をほうふつさせる共通の顔立ちはして

いましたが、実際には、そんなによく似ているわけではありませんでした。それにしても、宇津木さんの幻影の、あたしの心のなかに占める『座』の広さ、強烈さ、生々しさに今更ながら驚くのです。宇津木さんはあたしの初恋の人なのでした。

そのころ宇津木さんはW大学の学生さん、あたしはY女学校の四年生でした。あたしの夫になる男の人は、この人をおいて他にないと心に誓ったその人は、まもなくあの呪うべき戦争に学業なかばで駆り出され、特攻隊という名のもとに南海の空に散らされたのでした。あとにもさきにもたつた一度の甘い、栗の花の匂いのする接吻をあたしの唇の上にのこして……

あたしには、赤ン坊のころ、親たちが勝手にきめた許婚者がありました。それが今の夫です。下らない義理のしがらみ……。宇津木さんさえ生きていてくれたら、あたしはむろん、たとえ

誰が何といおうと、そんなもののほりりだしてしまっただけの覚悟はきめていました。けれど、愛するたつた一人の人に逝かれてしまつたあたしは、もう抗う力をすつかりなくしてしまいました。人のいうまま、波の流れのままに、生きるべく宿命づけられた生を、なんの生き甲斐もなく生きてゆくだけです。

おかしいでしょう？ 八百屋……八百屋なんです、あたしがいまその人の妻となつてゐる人の商売は。あたしも店へ出ます。

◆あの人の肌の匂いを戀うるがゆえに◆

はじめて会つたその小林さんという

人に、思わず激しく射つけた

あたしの視線を、その

人はきつと感

がいしたの

でしよ

う。

またあんな凝視め方をしてはそうとられても無理ありません。それから、毎日のようにきまつてお店へ果物などを買いにきました。まだ奥さんをもらつていらつしやらない方らしく、自炊でもしているような様子でした。

宇津木さんに似ている方ですもの、あたしにしても、毎日顔をあわせるのがいやであらうはずはありません。ただ宇津木さんの面影が、グツと心の表面に押し出される哀しみに心を傷めることが、あたしにはたまらなく辛い気がしました。

けれど、そんな心配はいらなかったようです。ときどき、その小

M.F.R.

林さんという人とよけいな言葉の一つもかわしあうようになつて、あた

しは、まったく宇津木さんとは

違つた人柄であることに幻

滅を覚えたというより

どちらかというと、

穢されずに済ん

だ宇津木さ

んの面影

を、そつ

と心の奥底

におしもどし

たことを、あた

しは現実を生きる

ことの生き易さのた

めに喜んだのです。生

きるためには、もどらぬ

過去などただ邪魔になるだ

けです。

そんなある日、町内で熱海へ親睦の

一泊旅行をすることになりました。

姑がいうので、あたしたちは夫婦で



ることになりました。

東京駅の八番線から、総勢八十人あ

まり、橙と青に塗り分けられた明るい

湘南電車で夕刻熱海へ。

参加す

ぐお酒になりました。

び男の人達はす

で、ひと風呂浴

丹前にくつろい

いの宿で

海沿

弱いくせに、おつちよこ

ちよいで、人が集つたりすると

きなど、夫は無理矢理お酒を流し

こみながら、猩猩のように真赤な顔

をして騒ぎ廻るのです。そして十八番

の森の石松の浪花節に、ズンドコ、ズ

ンドコとかいう、変てこな歌——あた

しは夫が下劣な趣味をまる出しにして

怒鳴りだすと、背筋に粟の生ずるよう

な不快さに思わず耳を塞ぐのでした。

あたしはそつと席をはずし、洗面所

に近い手摺にもたれて、夜霧にボーツ
とにじんだ街の灯をぼんやり眺めてい
ました。

(宇津木さん……)

シヨパンの練習曲の好きだった宇津

木さん……思わず、その人の名を呼ん

でみると、あた

しの心には、感

傷といいすて

しまうことで

きない、何か深

い淵でも覗き込

むような寂寥感

がさむさむと寄

せてきて、切な

いまでに宇津木

さんを恋うる想

いが堰あけるの

でした。

後から両肩にしずかに

おかれた掌を、さりげなくは

ずす仕草をしながら半分振り向く



と、それは小林さんでした。

『お酒、お飲みにならないの?』

肩をよじつて、手をはずそうとする

と、その手に逆に力が加わつてきてい

ました。

『ぼく、全然ダメなんです』

(おやり)と思いました。いつか、ど

こかで、誰かと交しあつた会話そのま

まです。むろん、それは宇津木さんで

した。

『お話ししたいことがあるんです。向

うに静かな部屋があるそうです……』

そりう小林さんのあとに、あたし

は磁石にひきつけられでもするよ

うについてゆきました。あた

しは、それがどうい

とになるか、その危

機を自分では

つきり

と予感していました。いつのまにか心のうちに忍びいつた魔風……そうかも知れませんか。でも、そのとき、十年前宇津木さんの唇からほのかに立ちこめてきた、あの栗の花の匂いをもう一度嗅いでみたいという欲求が、激しくあたしの心のなかに疼いていたことをいかなければなりません。そして、あたしはあのころと違つて、もう女になつていました。男の人の匂いをかくにはやはりお蒲団のなかで肌を寄せ、激しい昂奮のほとぼりをおたがいの体のなかに燃え上らせなければダメだということ、哀しく思い知らされていたのです。

電燈のスイッチがパチリと消され、仄かなスタンドランプの明りだけになった次の間の、燃えるような緋色のお蒲団のなかへ、あたしのからだはふんわり横たえさせられました。

あたしは拒みもしなければそうかといつて自分の体の昂ぶりに、突きは

なしたよ

うによそよそしい気持でした。あたしは、ただも

う一度だけ嗅いでみたかったです。

ことによると、あの人とおんなじ匂いをもっているかも知れない人の肌からあの、惱ましい栗の花の臭いを。

あたしはじつと眼を閉じていました。パンティが腰をすべり、腿を伝わり、足の指の先からスツポリとられました。シユミーズの前がお乳のあたりまでたくしあげられ、やがて、不貞へのはじめての使者が重い圧迫感をあたしの上におしつけてきました。

小林さんの熱い呼吸が、あたしの顔の上に容赦なく吹きかかつてきます。

あたしは、そのなかからあの宇津木さんの栗の花の匂を嗅ぎとろうと、ときどき深く長く、大きく息を吸い込みました。もし、そのとき、あたしがその匂いのなかに宇津木さんのあの栗の花

の匂

いを嗅ぎとることができた

ら、宇津木さんの肌と錯覚して、わたしは、いままでにない燃やし方をしたことでしょう。

けれど、それは、やはり求めて無駄な希いでした。小林さんの体からあたしが嗅ぐことができたのは、あの不快な男というものの臭いだけだったのです。それなら、何もわざわざ不貞の罪を犯してまで求める必要はなかつたのです。夫から毎夜、いやになるほど嗅がされつづけています。

欲望をみたしてしまつと、急いであと始末して、そのままじつと身じろぎもせずにいるあたしに、

「ゆきませんか？ 人に変に思われるとまずいですよ。……じゃあ、ぼく、



Tr. T. S. R. S

さきに戻つてますから』
慌てて、そそくさと部屋を出て廊下
を踏んでゆく男のスリッパの音を聞き

ながら、あたしは、ふと込みあげてく
る、ある複雑な感情に、思わず声を吞
んで嗚咽するのでした。

まさかと思つた良妻賢母

の人妻から云い寄られて

都 築 孝 策

◇PTAの貞淑夫人◇

いま、某新聞に石坂洋次郎が『丘は
花盛り』という連載小説を書いている
が、あれは、PTAの会員同士の間
における恋物語をテーマにしたものであ
る。

ところで、ここに述べる私の体験も
ちよつとした『丘は花盛り』なのであ
る。

私の住んでいる町は、戦後、急激に

発展した土地なのだが、私はこの町に
ながいこと住んでおり、小さいながら
繊維工場を経営している。政党関係は
自由党であるが、その方面でも相当の
顔でもある。年齢のことを聞かれると
少々困るが、今年五十三歳になつた。
満では幾つになるか知らぬが……と
にかく働き盛り色盛りというのは、目
下の私のことだろうと敢て自任してい
るわけだ。

さて『丘は花盛り』の話に戻るが、

このような私が、私の子供の通つてい
る小学校の、PTAの有力者の一人であ
ることは読者も想像がつくだろう。
たいした寄附などはもちろんしたこと
もないが、校長初め教員たちは、私に
ペコペコしている。運動会やその他催
しなどが学校である場合には、いつも
私は校長の次席あたりに坐することにな
つてゐる。まあ自由党支部の顔役とい
うところで敬意を表しているのだら
う。

このPTAで、いつも顔を合わす村
瀬という奥さんがいる。何でも、教会
関係の人の奥さんだということ、年
恰好は四十くらいだが、細面の色白な
美しい顔だから、三十五くらいにしか
見えない。背もすらりと高く、手足も
のびのびしている。

いつもすつきりした地味な和服だが
時には、パリツとした洋服で出かけて
くることもある。それが、なかなか身
について上品だ。子供が三人あつて、

それが全部この小学校へ通つてゐるのだが、そろつてよく出来るらしい。家庭教育がよろしいのであらうと、私は心の中ですくなからず敬意を表してゐたものだ。

この私の村瀬夫人に対する敬意は、その後、家内から、夫の村瀬氏は肺結核で湘南の方に静養しており、家計の切り盛りから子女の教育等はすべて村瀬夫人が、乏しい親類からの援助を基礎に、内職のミシンを踏みながらやつてゐるのだということを聞いてから、一そう深まつた。

ところが、ある日のことである。PTAの会が終つて、一同そろそろ帰りにかけると、私のすぐ後から廊下に出て来た村瀬夫人が、ふと囁くような調子で、

「あのウ、失礼でございますが、今晚はお暇でございましょうか」

と、丁寧に話しかけてきた。

私は、PTAでは始終顔を合はして

ゐるが、特別に個人的な話もしたことのない村瀬夫人から、ふいにそんなことを聴かれてちよつと面喰つたが、「いや、別に……何か御用ですか？」

「もし、お暇でございましたら、恐れ入りますが、私どもまでちよつとお立ち寄りをお願いできませんでしょうか、少々御相談に乗つていただきたいことがございますのですが……」

「ああ、そうですか、かまいませんよお寄りしましょう」

「ありがとうございます」

村瀬夫人はしとやかに頭を下げた。

一緒に行くのも体裁が悪いような気がしたから、私はそれから知人の宅へ寄り、一時間ぐらい無駄話をした後、村瀬家へ出かけて行つた。

もう夜になつてゐたのだが、村瀬夫人はすつきりした湯上り姿で私を迎えた。

PTAの集りなどで見受ける村瀬夫人とは、また別な趣きのある村瀬夫人

を発見して、私はちよつと妙な興味をそそられたが、とにかく相手は、宗教関係者の堅実な家庭の夫人であり、また母である女性たつたから、かりそめにも冗談口を利くわけにもゆかず、まあこちらも真面目くさつて控えていたわけだ。

ところが奥さんは、別に改まつた用を云い出すでもなく、いつまでも四方山話をしている。やがて、奥さんの手料理が二、三運ばれて酒も出された。信者の奥さんにしてはかなり開けた饗応ぶりだつたが、こちらも嫌いな方ではないから遠慮なく頂戴した。

◇目暈を感じる

エロシズム◇

そのうち、私はすっかり酔つぱらつてしまい、いつたい何の用で呼ばれたのか、それを不審がる気持もどこかへ消えてしまつた。それで、まるで料理屋にでもゐる気になつて、夫人にも酒

を勧めたのだが、何と夫人は、私の差す盃をちつとも拒まず、白いスベスベした咽喉を見せてぐツと一息にあけるではないか。

私もすつかり上機嫌になり、腰を落ちつけているうちに、時間はどんどん過ぎていつて、気がついた時にはもうずい分夜が更けていた。

「おや、こいつは遅くなつた……」

私は、びつくりしたようにいつて、腰を浮かせたが、思わず尻餅をついてしまつた。

「まあ、およろしいじやございませんか」

村瀬夫人は、人の心を誘うような眼で、私の方を流し目に見た。私はひどく誘惑を感じたが、初めて来た他人の、しかも御主人のいない家へ泊るわけにはいかないと思つた。それに私自身、今日はPTAへ出席すると云つて外

出したので、家も近

くだし、外泊するなどと云うことはちと不穩当であつた。いつたい村瀬夫人は、私を何の目的で招いたのだらう。それにしても……と思ひながら、

「いや、いつまでもお邪魔しては……これで失礼しましょう」

ひよろりと立ちあがつた拍子に、思わずよろめいた。すると奥さんは、つと私に寄り添つて、柔い手でこちらの手をキュツと握ると、

「あら、ずいぶんお酔いになつてしまつて。あの、およろしかつたらお泊まりになつていらつしやいませよ」

びつく

りするほど色気のある眼で睨まれて、柄になくドキリとした瞬間、私の鼻腔をブーンといい匂いが刺戟した。

ここまで誘われては、五十を越した一人前の有力者面をした男として、身を躲すといふことは義理が立たない——と妙なところへ勝手に理窟をつけ、

「でも奥さん、ご迷惑じやないんですか、泊まつても……」

「ご遠慮なんかありませんわ」「そうですか、それじや御厄介になりますか。どうも頭がフラフラして」

「後で、介抱してさしあげますわよ。ホホホ」

村瀬夫人は意味ありげにそう云うと、もう一度、私の手をギュツと締めつけた。

ふつくらとした褥に寝かされて、ぼんや



りしている、
すうツと襖
が開い
て奥



「そのウ……、お頭を揉んで

で私を見下して、

私の枕許へ水飲み
を置くと、艶な眼^{まなこ}眸

来た。彼女は

が入つて

さん

て行つた。

三人の子供さんがあるといいながら
村瀬夫人の軀^{からだ}はまるで生娘のように濡
れていた。

翌朝、まだ暗いうちに、私は夫人に

ぐツと彼女の身体を抱えこんだ。

手を取ると、身を起こしざま、

飛ばして、いきなり奥さんの

のトタンに私は理性を吹き

らツと目^め暈を感じた。そ

の体臭に、私はくらく

甘酸ッばい熟れた女

みはじめた。

先で私の頭を揉

魚のような指

わ

わ

差しあげます

揺りおこされて、同家の裏口から秘かに忍び出て家へ歸つたのであつたが、

むろんそれを拒絶することが出来なかつたのである。

それから数日後、もう一度、村瀬夫人に招かれ、その夜も酔つぱらつて泊まりこみ、ある時間が過ぎ去つてから、五万円 of 借金を村瀬夫人から申し込まれ、冷やりとするとともに、初めて夫人の据膳の意味がわかつたのである。

そんなわけで、それ以来、私は村瀬夫人の面倒を見ているようなわけで、PTAの連中も知つていろいろいいが、私の勢力に恐れて何も云わないと云うわけである。

冷やりとしたといつても、その時の私は、一つ褥の中で村瀬夫人の白いスベスベした腕を首の下に突きこまれ、その感触に酔つているときに、いや、私としては、完全に骨抜き状態にされているさなかに申し込まれたのだから

以上が私の『丘は花盛り』の打明け話だが、村瀬夫人はなかなかの珍品をもち、シユンの秋刀魚のようにコツテリした『丘は花盛り』という次第で、私も至極満足しているという事実を書き添えておきたい。

◇女事務員と狂う夫◇

世間には、自分の妻にむかつて、ほかの女との惚氣話をして得々としていゝる夫が割に多いようです。

たとえば、自分が酒場の女にもてた時の様子とか、温泉場の芸者から好意を持たれた話とか——極端なものになると、酒場の女と温泉マークの家に泊まつた晩のことなど。その時、女がどうしたとか、こんなに泣いたとか、そんなことまでいちいち描写して聴かせる夫もあるようですが、私にはその気持ちがわかりません。

手紙話のつもりで話すのか、あるいは、こんなに女から好かれる夫なのだから、もつと大切にしろと云う意味なのか、どつちにしたところが、あまり上品な趣味とは申されません。

これは、何も女に限つたことではなく、男だつて同じことだろうと思うのですが、特に女の場合は、男以上に嫉

夫の惚氣話に反撥して

フト姦通に陥込んだ人妻

栗原良子

妬心が強いのは本当のこと、他人から見たら二束三文の男でも、それが自分の夫であれば、自分だけのものとして、他の女などには指一本触れさせたくないと言うのが人情でございます。

それを何が面白いのか、だらしない顔をして、女がああしたとかこうしたとか、そんなことを得々と口走つているのを見ると、まづたく横面をぶん殴つてやりたくなります。

実は私の先夫と云うのが、この馬鹿氣た癖のある男でございまして、私はたびたびそのために、どんな不愉快な思いをしたか知れませんでした。

私が嫌な顔をする、一そう面白がつて、しつこく描写するのでございませう。聴いている私は耳を掩いたくなるほど不潔で、同時に、眼の眩むほどの嫉妬を、その顔さえ見たことのない相手の女性に感ずるのでございました。

しかし、夫が惚氣を云う相手の女が芸者や酒場の女の場合はまだそれほど

でもございせんでしたが、夫が同じ会社に勤めている女事務員と関係するようになり、その女との閨房の様子まで喋られるようになった時には、まづたく、いても立つてもいられないような氣分に襲われてしまいました。あんな氣持ちを、この世の地獄とでも云うのだらうと、私は今でも思つております。

その女と云うのは、夫より二十歳も年下で、夫の下で働いていたのですがアブレと云うのでしうか、酒も呑むし、煙草も吹かす、もちろん処女ではなかつたでしう。

夫は酒が好きで、毎晩でもやりたい方ですが、私がいまだに好みませんのでどうしても外で飲んでくるようになります。ところが、戦後は暮し向きがかわり、三流どころの証券会社などの課長どころでは、芸者遊びなどと思ひもよらず、酒場やカフェーだつてそなたびた

びは行くことが出来ません。

しかし、根が遊蕩児の夫は、すぐ苦境を打開する方法を発見しました。それは、会社の女事務員を連れて安い飲み屋へ出かけると云う方法です。これなら高い席料や、チップを出す必要はなく、しかも相手はアブレ女性、酒は飲むし、歌はうたうし、まあこんな費用のかからない遊びはないと云うことになりました。

むろん、女事務員全部がそうだとは思ひませんが、夫の相手にした女事務員などは、その方のベテランみたいな女だつたようです。

一度、会社へ夫を訪ねて行つた時、私もちよつと見ましたが、丸顔の色は浅黒い、別に美人と云う顔立ちの女ではありませんが、どこかに妙な色氣の漂う女で、何よりも身体がむつちりと肉がついて、そこが一番の魅力だつたように思ひます。

男と女が酒の交際をしながら、それ

きりで何事もないなどと云うことは、
双方がよほどの粹人か通人なら別でし
ようが、そんなことはまずありつこあ
りません。ましておおよそ粹とか通とか
から縁の遠い夫とその女事務員のこと
ですもの、肉体関係に入るのは、初め
からわかりきっていたことでした。

その女事務員と、初めて池の端の温

泉マークへ輪タクで

シケこんで、

これか

らと云
う時、酒
を飲み過ぎ
た夫が、肝心



のものが自由にならず、まごまごして
いるのを、遠慮と感違かんちがひいした女事務員
が、もう自分が慾情よくせいしているものです
から、たまらなくなり、燃えるような
裸体を夫に押しつけて来て、

『みんなあげるわ、どうにでもして』

と囁いたことなど、詳細に惚気おろけられ

た晩の、煮えくり返るような昂奮を、

私はいまだに忘れる

ことができ

ません。

◆思わぬ男の

腕に抱かれて◆

その頃、夫の従兄にあたるSが、時時
私の家へ遊びに来ていましたが、ある
日夫の留守にそのSが訪ねて来た時、
私は思わず日頃の口惜くやしさ、怨めうらめしさ
が一時に爆発して、わツと声をあげて
Sの胸に泣き伏してしまいました。

それと云うのも、Sは某私大の文学
部の卒業で、ある出版社に勤めており
人間の感情とか思想と云うものに理解
のある人物でしたから、私はかね

て心の中で尊敬そんけいしていました
し、今日だから申せるこ

とですが、Sの妻が

先年歿ぼつし、彼が

さびしい孤独

の人であつ

たと云う

事実も、

かなり

強く私の心に影

響をあたえていたこ

とでした。

Sは、突然 私に泣きながら

抱きつかれて、とてもびつくりした様

子でしたが、やがて、やさしく私をい

たわるようにしながら理由を訊いてく

れたのでした。

泣きじやくりながら、私は一部始終

を述べたのですが、話を聴いているう

ちにも、Sの眼中に、激しい侮蔑と憤

りの炎が燃えて来ました。彼は呻くよ

うな声で、

『何と云う恥知らずだ……』

私は、そう云う潔癖なSに対する好

感が、泉のように湧いてくるのを感じ

ました。同時に、ふと稲妻のようにあ

る考えが閃めきました。

(私は、Sのものになつてやろう……)

会社の女事務員と性関係を結び、そ

れを微塵も悪いことと思わないどころ

か、女との閨房のことまで惚気半分に

妻に

物語つて、

平然として恥じな

いような下劣な夫に対する

復讐として、これこそ最上の方法だと

そんなふうに私は考えたのでした。

それで私は、こんどは意識的に力を

こめてSに縋りつき、一そう激しく泣

きつづけました。私の手はSの肩にか

かり、豊かな腰はSの膝の上に、そし

てスカートの裾が乱れて、左の脚が白

い腿のところまであらわれていたので

す。私はそうした自分の取り乱した姿

を、ちやんと意識しながら、それに気

がつかないようなふりを装つて、今か

今かと心のなかで彼の行動を期待して

いました。



T. T. S. R. S.

ふいに、Sの身体全体が熱ばんでき
たと思うと、私を支えていた彼の手に
異常な力が加わつてきました。

(あゝ、いよいよ来たわ……)

そう思っていると、Sはいきなり、

私の顔を自分の胸からぐつと離して、

強い痺れるような接吻をしました。心

では待ちかまえていたことでしたが、

私はその接吻が、あまりに甘美だった

ので、思わず全身が弛緩し、自分を支

えることが出来ず、ばたりとその場に

倒れてしまいました。その私の身体の

上へ、Sの身体が盤石ばんじつのようにのしかかつて来たのでした。

私とSとの間に、そうした関係が生れたことを知ると、さすがの夫も顔色を変えて怒りましたが、出来たことはどうすることも出来ず、長い間ゴタゴタしたすえ、私はその夫との離婚に成功して、半年ぐらいいしてSと結婚いたしました。現在の私の夫が、そのSで

あることは申しあげるまでもありません。

私と列れてからの先夫はしばらく悄しお気けていたようですが、間もなく誰かの世話で、私と同年くらいの未亡人と結婚しました。相変らず他の女との交遊きゆうゆうを、形容詞けいようし混りまじりにしやべつて、現在の奥さんを悲しませていることでしょう。

貞淑で評判だった人妻が

不倫ふりん、姦通かんつうの常習者

伴

英 作

◆小説家の妻や哀れ◆

小説家の糟糠そうこうの妻というやつぐらいいじめなものはないと思う。海のものとも山のものともわからない、何をや

らしても能なしのくせに、遊びだけは普通の男の五倍も十倍も好きな、丸抱えの文学青年を養うため、いやな酒場勤めをしたり、夜なべの内職うちしやくをしてみたり。しかし、そんな時代には、たと

え苦しくはあつても、男の方で、万一女房に逃げられでもしたら、ことはその日の糊口ここうに関することだから、何かと女房の御機嫌をとつてはチャホヤしてくる。

ところが、ちよつと名前が知られるようにでもなつてみたまえ、彼等は細君なんて全く興味がなくなり、いい気になつて、酒と女にうつつを抜かすようになる。ちつとやそつとの小説の売れ方では、ますますその方で手一杯だから、細君の財布なんていつだつてお寒いこと限りない。相もかわらず質屋しちや通いと借金のいいわけ。

おまけに、まぐれあたりに何か一発穴にはまつて、一躍文名とやらでも馳はせて御覧ごらんじろだ。もう全く天下でもものつとつた気になつて、まあそのくらいまで何とか潰つぶぎつければ、台所も何とかやりくりぐらいいは出来るようになるが、そうなると今度は、大先生、金にあかしてあちこち女に手を出すように



なり、貧乏時代には性慾のトイレット的存在として、夜ごとかぶさつていつた細君の軀なんか、もういつかな求めて来ようとしなくなる。年中仏頂面ばかりして、外で女に振られたといつては家へかえつて当り散らし、たまたま台所に酒がきれたといつてはブイと出ていつたきり、三日も四日も戻つて来ない。細君たちはそこで、(あの人、一生ウダツが上らなかつた方が、あたし、倅せだつたような気がする。今み

たいな暴君にならず、それは優しくして……)と、夫の成功をうらんでみたりする。全く哀れというほかはない。ことにみじめなのは、彼女たちのないがしろにされた軀である。何とか性愛統計とやらに、三十代の人妻の手淫常習者という特殊の場合が記されてあつたが、パーセンテージにすると、小説家の女房が一ばん多かつた。そのくせ、姦通では小説家の女房が、逆に一ばん低いパーセンテージを示してい

た。姦通の少いことは、小説家というやつは、口では問題にしていらないようなエラそりなことをほざきながら、実はこの人種ほどネチツこく、焼餅やきの多い人種はないといふことの証拠である。自分では勝手放題のことをしていながら、こと女房に關すると、虎視眈眈と監視の眼を光らせている。まこと小説家の妻君ほど『虐げられし妻』の感の深い女性はない。

少々前書きが長くなつたが、これといふのも、最近筆者が知つたある小説家の細君の姦通事件について、その動機、心理などの推測を容易ならしめようといふ下心にはかならない。

その小説家といふのは、戦後肉体派作家として一家をなした男で、いへば誰でも、ああ、とうなずく作家であるが、ここでは単にI氏(45才)としておく。細君は芳子(33才)さん(仮名)といひ、このI氏夫妻など、さきに述べた小説家夫婦の典型的型といつても差支え

ない
だろう。
同じ町内に
住んでいる関係
で、筆者は偶然知つ
たこんどの事件には、大いに興味をひ
かれたものである。

☆貞節の妻が

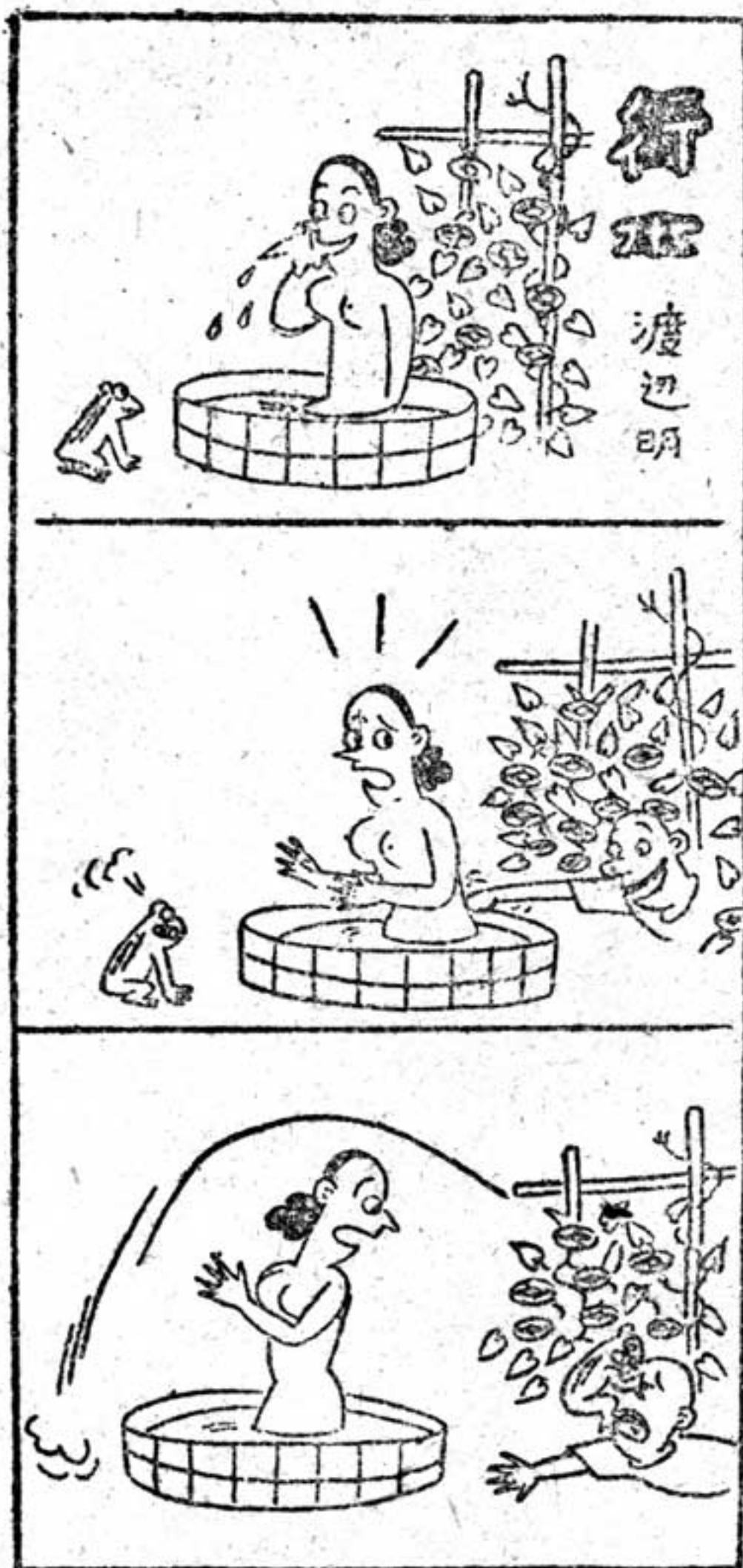
酒屋の小僧と☆

この一週間ほどまえに署で、筆者は

顔見
知りの警
部補からこん
な話を聞いたので
ある。

——こいつは人の名誉に
関することだから、なるべく内密にし
ておいてくれないとこまるぜ。話とい
うのは、ほら、君と同じ町内にいるI
さんね、あの奥^{おく}さんのことなんだ。





実は、一カ月ほどまえ、君の町内におこつた例の殺人事件（「註」○神社境内わきの淋しい小道で、映画帰りの十八になる娘さんが強姦、殺害された事件）の犯人が、最初考えたほど簡単にわからなくて、結局、あの界限のチンピラたちをすつかり洗つてみることになつたときの話なんだ。

そのとき、こいつは黒いと眼をつけた有力な容疑者が一人出てきた。ほら知つてゐるだろう？ 「三河屋」つてい

う酒屋の小僧さ。ズボンに血痕らしいものが附着しているし、それに不在証明がどうも曖昧なんだ。血痕は鑑識課で鑑定して貰つたところ、被害者のとは違うことがわかつたが、アリのバイの方にどうも変なところがある。何かいたそうでいて云えずにいるらしいことがあるんだ。

結局、その事件には全く無関係とわかつたんだが、そのとき、奴さんが吐いた泥というのが、犯行のあつた時刻

に、奴さんがIさんの家にいたということなんだ。そこでIさんの家へいつてみると、Iさんは北海道へ講演旅行に出ているとかで、奥さんしかいない。Iさんの奥さんといえば、君も知つてゐるように、淑か（しよ）で、Iさん一筋に生きてきた、何とかアプレ的なところなんかこれっぽちもない女だから、ぼくだつて、そんなことまるで考えてもいなかつたんだ。

ところが、小僧の件を持ち出したトタン、奥さんの顔が耳たぶのあたりまで見る見る櫻色に染つてしまつたのだ。そこで、その方には相当鈍感のおれもはじめて、おやと気がついた。そして、これはと呆れたね。あのIさんの奥さんが選りに選つて酒屋の小僧なんかと。……署へもどつて小僧に糺（ただ）してみたところ、事実には相違ないんだね。初めてかと訊くと、もう一年越しなんだそうだ。刑事連が面白がつて、情事の細部にわたつて根掘り葉掘り、

小僧から訊いたりしてね。ハハハ、まあ、それは、ことチャタレーの問題にまで発展しそうだから勘弁。

ところで、驚いたことに、その小僧だけじゃないんだよ、奥さんがIさんに内緒で関係していたのは。しかも、それがみんな洗濯屋の小僧だとか、洋服屋の息子だとか、そんな連中ばかりなんだ。それを知つたときは署の猛者連もさすが驚いたね。というより、女の信ずべからざることを痛切に感じたといった方がいいかな。

★舌戯のサービス

料一金五百円也★

それから、二、三日して、筆者は、この話に興味をそそられるままに、その酒屋の小僧を駅前の天プラ屋へひっぱり出した。

まだ二十才にもなつていない、青年というより少年といった方がふさわしそうな顔たちや軀つきをしていた。

はじめのうちは、なかなか喋り出さなかつたが、二人でビールを三本ほどあけるころには、先生、すつかりいい氣持になつて、ベラベラしゃべり出した。

「えらくスカツとした身なりしてるネそのズボンもワイシャツも 奥さんが買つてくれたのかい？」

「ううん、貰うのは現金だよ」

「どのくらい貰う？」

「一回最低三百円はくれるヨ。こつちで永もちして奥さんが声を出すころまでつづけると 五百円ぐらいくれるんだ」

「五百円のとくと三百円のとくとどつちが多い？」

「そうだなア、五百円もらうつてなかなか難しいヨ。おれなんか二分か三分で終つてしまふけど、奥さんときたら二十分から三十分ぐらいしないとダメなんだ。だけどこのごろ、術を覚えて、オール五百円確実になつたヨ。はじめ

指をつかうんだ。これで二十分ぐらい誤魔化してしまえば、あとは、アレはそんなに永もちしなかつていいもの。それから、無条件に五百円くれる方法があるんだ。舌をつかつたときさ。奥さん、とてもあれが好きらしいんだ。でも、おれ、一度だけ、どうしてもできなかつた。女の人には生理日つてあるだろう？ あの日、奥さん、千円やるつていつたけど、やつぱりできなかつた」

聞いていて、興味津々と盡きぬものがあつた。そこで筆者はいま、Iさんの奥さんと関係のあつたほかの少年たちから、次々にこんな話をきくのを楽しみにしている。ついでだが、彼等は口どめ料を含めてもらう三百円、あるいは五百円のため、互いに顔見知りしながら、そんなことをしているのは自分ひとりだと、そう思いこんでいるらしいのである。

ストリッパーの結婚



①



④

では服を
脱いで……



②

今夜は
バダフライ
もいらない



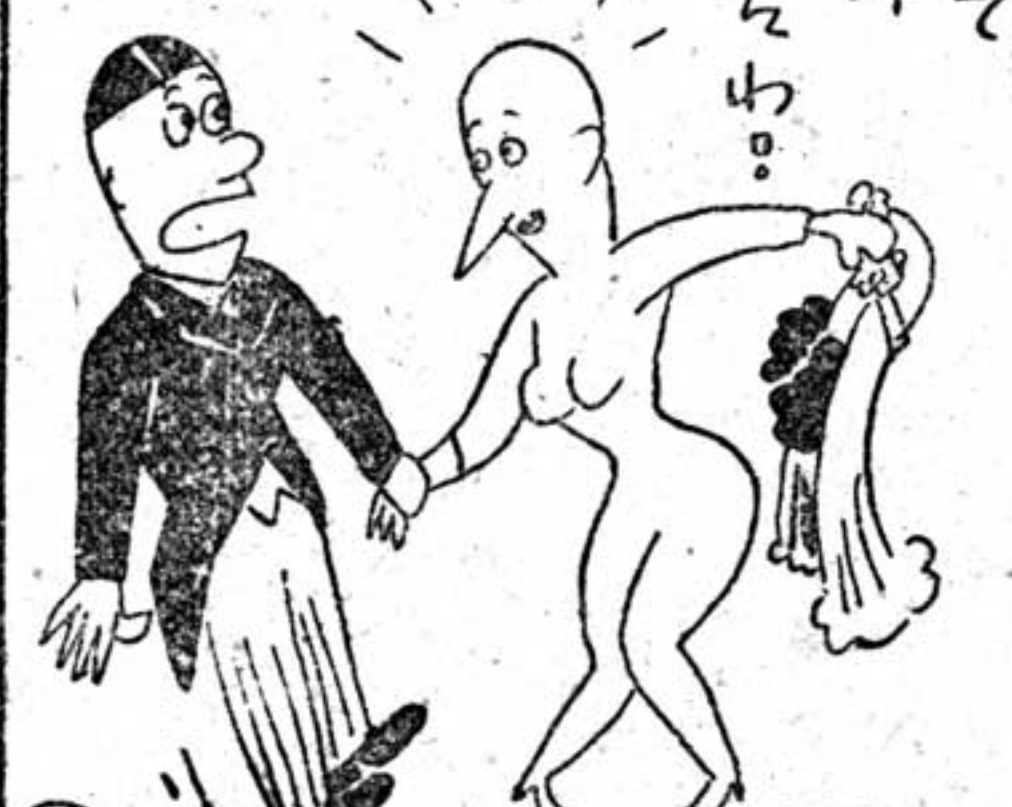
⑤

さあ
床に
いこう



③

これで
全部
脱いで
いこう



⑥



戦争が生んだ悲劇
は怖るべき利那主義
の産物だ！ 戦局の惡
化につれて生命の不安と
明日への絶望とに追いついて



られ、人心は動揺と虚脱の渦中をさまよう時、野獸と化した肉慾本能の犠牲になつた女性は無数限りない。この四篇はそうした悲劇の副産物の一つであるが、数多いこのような秘められた性犯罪の、ホンの氷山の一角に過ぎないだろう。

爆撃下の防空壕で私は三十人の女を犯した

▽闇中にうごめく

女の觸感▽

戦時中、私の住んでいた地区では、数町が協力して大きな防空壕を設定したのでした。もちろん、各戸が小さな章魚壺を一つづつ堀っていたのですが、だんだん空襲が激化してくるにつれて都心に近い私共の地区では、大爆撃でも行われた時には、とては章魚壺な

どでは防げないだろうという恐怖が、みな的心を一致させたわけでした。

結果において、大空襲のためこの地区が焼野原になつた時には、この大防

空壕に逃げこんだものは一人もなく、

もしまた、逃げこんだものがいたとしても、ほとんど窒息して死んでしまつたに相違なかつたのですが、そんなことは、すべて後になつてわかつたこと

でした。

大防空壕を

掘るといつた

ところが、御

存知のような

状態で、労働

力などというものは、どこからも持つ

て来ようがなかつたのですから、各戸

から男たちが狩り出されて、奉仕的に

やつたのです。

私の家から一町ばかりのところに、



かなり広い高台^{たかだい}があります、その高台の下を綱の目のように堀つたわけ、今から思えば、よくあんなことが出来たと吃驚^{びっくり}するほど完全で、大仕掛けのものでした。こう申しましたら、あああの防空壕かと、お氣付きの方があるかも知れません。

東京の東部や南部が、連日の空襲で大部分焼けてしまい、無数の焼死^{やけし}体が隅田川をぶくぶく流れだす頃になると、東京都民は、ほとんど恐怖のために半狂乱^{はんきやうらん}になつてしまいました。したがつて、いざ空襲というとき、私共の地区では、少しばかりの貴重品^{きやうぶひん}や食糧をわが家の章魚壺^{しやうぎょ}に埋めておいて、誰も彼も、大防空壕へ避難^{ひなん}してくるようになつたのです。

私は当時、妻子を家財道具とともに田舎へ疎開^{そかい}させ、勤めの関係でたつた一人東京に残つていたのですが、身体一貫、まことに陽気^{のんき}なものでした。いざ空襲となると、かねて用意した弁当

と水筒をぶら下げて、誰よりも先に大防空壕にもぐり込み、壕の一番奥のちよつと鍵の手に曲つたところにある、二尺四方ぐらいの安全地帯に腰を据えて、蠟燭^{ろうそく}の灯で古い講談本か何かを讀みながら、悠々と時間を過ごすことにしていました。

次第に空襲が激化して来て、私共の地区も毎夜のように、焼夷彈^{しやういだん}のお見舞を受けるようになりますと、この大防空壕も、満員の状態が続くようになりました。ぎゅうぎゅうの壽司詰めで、女が悲鳴をあげるやら、赤ン坊が泣くやら、ひどい修羅場^{しゆらば}の展開でした。

しかし私は、先にも云いましたように、いつも誰より早く、鍵の手に曲つた安全地帯へ避難してしまいますからそこは私一人の占有^{せんゆう}で、身体も楽だし圧されるようなこともなく、もうその頃には、蠟燭も点けませんでしたから誰にも気がつかれずに、まことに天国のようなあんばいでした。

あの夜のこと、いつになく大掛りなそれも大型爆彈と思われる大空襲がありました。その音響^{おんきやう}だけでも、とうてい堪えられないような大空襲なので、あまりの苦しさに堪まりかねたのでしように、一人の女が鍵の手の狭い通路を匍つて、私の安全地帯の方へやつて来ました。遠くの方にたつた一点、微かな灯があるだけです、このあたりはまつたくの暗闇でしたが、それでも闇に慣れた眼には、多少の明りで人間の顔くらいは微かにわかります。

瓜実顔^{うりざねがほ}の、三十ぐらいの、どこかの奥さんらしい小柄な女でしたが、狭い通路を匍つて来て、ふいに、私の坐っているところへ落ちこんで来たのです。通路から一段下つて、そこに二尺四方ぐらいの私の坐つてゐるところがあるわけではんとのことをお話しますと、私は壕堀りの作業^{さぎやう}に狩り出された時、こつそり自分一人のために、この場所を作つておいたのです……

私の胡坐あぐらの上へ、ずるずると

落ちこんで来た女は、あつと

叫んだようでしたが、あま

りの恐怖のためか、ぶ

るぶる震ふるえているの

が、私の身体に

つたわつて来

ます。私

がわざ

と落着

いた声で、

「心配なさること

はありませんよ」

と云いますと、すこし落

着いたようでした。そしてしき

りに、私から身を遠とほざけようとする

のですが、何しろ二尺四方ぐらいの穴

ですから、身動き

が出来ませ

ん。嫌いやが応こたでもずり落ちて来た時のま

まの、私の胡坐あぐらの上へ、まるで男と女

とがある行為をする場合と同じように

両脚で私の胴体を挟んだ恰好で、お尻

をぺたりと私の胡坐あぐらの中へ入れ

て……そうしている以

外には方法がな

いのです。



△女の肉體は微妙

な生きものの▽

瞬間、地軸を揺がすような大音響と地響きが壕全体を揺がせました。

きつと防空壕の至近距離に、大型の爆弾が落下したのでしよう。

とたんに、女はキヤツと叫ぶと、必至に私に獅噛みついて来ました。両腕を私の首に捲いて、ふさふさするパーマの頭をぐたりと私の右肩にかけて、

ふいに、私は猛烈な衝動を感じ、思

わずその人妻風の女を抱きしめてしまいました。しばらく異性の肌から遠去

かつていたので、自分の意志よりも先に手が動いていました。私は噎るよう

な昂奮にふるえながら、彼女のモンペ

の紐に手をかけていました。それは、

わけなくほどけました。むつちりした

腰のまわりに、ズロースのゴム紐が食

いこんでいました。私が手をかけると

それも簡単にずるずると下つてしまいました。

女は途中で、気がついたようでしたが、全然抵抗をしなかつたばかりか、むしろ進んで、肉体的な感覚に酔つていたように思いました。……

ほとんど同じような状況で、私はその後、空襲のあるたびに、こんな状態の下で、名も顔も知らない女性の肉体を享樂し続けました。

そうです。五月二十九日の大空襲であの地区が一望の焦土に化すまで、約二カ月ばかりでしたが、その間、すくなくとも三十人以上の女体を犯してしまいました。

何しろ、真暗な防空壕の奥の、そのまたもう一つ奥の穴です。微かに顔の輪郭と年恰好がわかる程度で、あとは殆んどわかりませんでした。恐らくは美醜取りまぜて、いろいろであつたことでしょう。ひよつとすると、隣家の奥さんや娘さんも、そうしたかも知れ

ないと思つています。いま申しましたように、全く臍氣にしか顔がわからなかつたのですが、その日の調子で、ほのかに光の射すこともありましたから相手によつては、私の顔がわかつたこともあつただろうと思うのです。

でも晝間、近所の奥さんや娘さんと顔を合わしても、誰一人として、思い当るような視線を投げてよこした女性はありません。そういうことを考えると、私は女というものの心理が不可解に思え、よく云う、二重人格の天才だと人知れず思つたものでした。

彼女たちは、戦時下の暗い暗黒の谷間の中に、じつと網を張つて待ちかまえている恐しい毒蜘蛛の手に、われから落ち込み、その貞操を弄ばれた可哀相な女たちのはずなのですが、決して彼女たちが、泣いたり許しを願つたりしなかつたばかりでなく、むしろその反対の、積極的ともいふべき態度であつたことを考えますと、何事も、表面

から見ただけでは分りません。殊に女 心というものは……というのが私の持 論なのです。

(柴田久男)

特高警察官だつた私は赤色女黨員を犯した

△美貌のハウス。

キープ

その夜、私は宿直だつた。

「検事が出張すると云うから、大林ユキの手記をまとめさしておいてくれ」

特高主任の橋田警部補が、帰りがけに、そり私に云つた。

「主任さんに帰られちゃ、心細いですなあ」

「なあに、どうせ検事の旅費稼ぎの出張さ。ロクに調べることなんかないんだから、かまひやしない。主任はどうしたと聞いたたら、急病で帰つたと云つておいてくれ」

特に思想係の検事がそうであつたと

いうわけではないが、出張と称して、検事が警察へ出向いて犯人を調べるのは、土曜日の午後が多かつた。それもたいていは夜の十時頃、署へ到着して夜半の十二時を過ぎると、署長の車にふんぞり返つて自宅へ送らせるのである。

検事は大学出のバリツとした高等官だが、署長と云えば、たいていは巡査上りの年功高等官で、自分の息子ぐらいの年配の検事に、絶対、頭が上らなかつたものである。

だから、車を貸せ、とやられれば、ヘイどうぞ、と愛想笑いも浮べなければならなかつたのである。

検事がそんな優越感をもつて、警察

署を闊歩していた頃だから検事にとつては、深夜の出張も決して嫌な仕事ではない。が、警察こそいい面の皮である。

「ふん、検事の奴さん。出張だなんて名目を立てやがつて、その実、態いい出張旅費稼ぎなんだからな」

先輩の老私服は、心得顔に、土曜日の出張は、夜半を過ぎれば、日当二分、宿泊料一泊分、それに旅費を合せると、相当の稼ぎになるんだよと、忌々しそりに語つていた。

特高主任が、検事の出張をさほど重



大視しないわけである。

私は留置場から、大林ユキを出してきた。

「馬場さん、お一人？」

ユキは薄暗い宿直部屋で、美しい瞳を瞬いた。二十三才だったが、半年近くも、タライ廻しの留置場生活をつづけているので、年齢よりは三つ四つ老けて見えた。

しかし、それでも、党幹部のハウス・キーパーをしていた精力的な面影はいさゝかも衰えず、はち切れそうにふくらんだ胸の厚みに、妖しい女の吐息がうずくようで、まだ若かつた私の心を圧迫した。

「あゝ、みんな帰つたよ」

「そうなの、静かでいいわ」

やがて、ユキは書きかけのザラ紙に手記を綴りはじめた。

ユキは予防拘禁という、その当時、特に制定された法律によつて、態よく社会から隔離されている女である。

一カ月に一、二回、検事の取調べが申訳的に行われるが、あとは毎日、特高の部屋へ出されて、机に向つて手記を書いていけばよかつたのである。

柱時計が十時を打つた。

「検事さん、遅いのね」

ユキは鉛筆の手を止めて、ああと、溜息をした。

「早く書いてしまえよ。検事さんが、今夜読むつもりなんだろうから」

「いやなのよ、書くの」

「どうして？」

「だつて」

とユキは、熱っぽい眼でくすりと笑つた。

私はどきんとした。

「あたしが、い

まどんなところ

ろを書いて

いるか、

わかる

？」



「知らんよ、わかるもんか、そんなこと」

「だから、そんな無茶を言うのさ」

「無茶？」

「そうよ——いまんところ、とても濃厚

なところなのよ」

ユキは、書きかけのザラ紙を持つて私の椅子に歩みよつてきた。

「読んでもいいわよ」

ひらりと、机上に散つた、数枚の紙片を、見るとはなしに眼を落して読みかけた私は、あつと、危うく不覚な声を発するところだつた。

▽官能の火花を

散らして▽

——その日が、私の処女への訣別の日であり、ハウス・キーパーとしての生活に入るスタートだつたのだ。S（党幹部の頭文字）の逞ましい腕が、咽喉を絞めつけ、熱湯のようにどろどろした情慾の火照りが、やが

て処女の肉体を、狂暴な嵐の中
にひきこんでしまつたのだ……

『いやなのよ。あのときのこ

とを思い出すの。それは全

然嫌な男と云うわけで

もなかつたけど、こ

んなふうに、スカ

ートをまくり

あげ、ブラ

ウスの釦ぼたん

を引き



ちぎつて、ぐいぐい押しつけてきたの
よ』

ユキは、椅子にかけたまゝ、上半身
を反らせ、自分の両手で、スカートの裾をたくしあげて、脚をひらいて見せた。

『大林、みつともない格好を
するなよ』

私は慌て、叫んだ。

胸が、カアツとして、身
体じゅうがじーんと灼
けるようだった。

『いやな男、怒つた
りなんかして——男
つて、こんな姿態がほ
んとうは好きなんでしょ。
フフフ……』

ユキはおかしそりに笑つて、
ことさらに股をひろげた。それ
は、明かに男に挑戦する魔女の
媚態だった。

むつちりとした肉づきのいい白い腿



が、グリーンのスカーツから鮮烈に浮び上つて、下着がチラチラと覗いた。

もはや、ユキは単なる留置人の女ではなかつた。全身が、蠱惑の塊りだつた。薄汚れている肌にすら、ぬらぬらと情慾の滴りが漲つて、そのむせるような女体の匂いが、私を狂人のように戦かせたのである。

『大林! ぶざまなことは止めろ!』

微かに、体内のどこかに残っている警察官としての理性が、そんな窮地に

追いこめられながらも、火を吐くように叫んだのであつたが――。

私の肉体は、ユキの煽情的な仕草に氣圧されていたのだ。

私は椅子を蹴飛ばした。

にたりと、ユキが微笑んだようにも思えた。が、つぎの瞬間には、私はユキの身体を、床の上に仰向けに押倒していた。

『フッフ。……あんたも、やつぱり獣だつたのね』

ユキが叫んだ。細い指が爪を立て、私の頸をしめつけた。

痛くはなかつた。ユキのわざとらしい抵抗が、かえつて、私の情炎に油をそゝいだ。

『Sにだつて、Sにだつて、こうして許したんじゃないか!』

私は叫びつゞけながら、頸にからみついているユキの両手をふりほどき、逆に彼女の肩のあたりへ押しつけ、ブラウスに手をかけた。

ぴりッ! と、布地の裂ける音が、夜更けの静寂を破つた。熟れた果実のように赤く色づいた乳首が、にゅッと現われた。

『馬鹿! 馬鹿! けだもの!』

ユキは呟くように弱々しく叫んだ。なぜもつと、大きな声を出さないのか? その疑問はあとでわかつた。

『半年も独りでいて、苦しかつたの。誰でもいいから、目茶苦茶に私の身体をいじめてくれ、ばいと思つたの。』

——でも、凄かつたわ、馬場さんたら……ウフッフフ。……あんなに、夢中になるとは予期しなかつたのよ』

留置の女を犯したという、重苦しい後悔に慚愧の胸をかきむしられている私に、ユキは笑いながら言つた。胸がはだけ、大きな乳房がはみ出ている。油つ気のないパーマの髪がさんばらに乱れて、肩ではあはあと大きく息をし

ていた。

まだ、切長の瞳が情熱の滴りに妖しく濡れているのだ。

『ブロー、とつてよ』

私は、ふるえる手で床に落ちていたユキの下着を拾いユキの手に渡した。『検事さんが来たら、この事実を話してもいいか知ら？ 馬場さんが、あたしを強姦したつて』

もちろん冗談に云つてゐるのだが、しかし当時の私は、みずから署長の前に懺悔しようと思つた。

だが、ユキも私も、その夜の秘密を永久の秘密として葬むり去つた。

ユキは、いまだどこにゐるだろうか？

(高山銀三郎)

燃え熾る人家で友人の妻とその娘を犯した私

▽恐怖にゆがむ

美しい母親▽

麻布、青山、澁谷——わずかに焼け残つていた東京の西部地区が、一望の焦土と化した昭和二十年五月二十九日のことでした。

当時、私がお世話になつていた芝生さんという方のお宅が、青山高樹町に

ございました。御主人は、某海軍監督工場の営業部の主任のような仕事をなさつていらつしやる方でしたが、会社の御用で九州へ出張なさることになり留守中、心配だから、私に時々見廻つてくれということだつたのでした。

あの日、私は家の仕事(製粉)を早目に片ずけて、世田谷中里の自分の家を出て、二、三日前の空襲で玉電が停

まつておりま

したので、電

車線路をテク

テク歩きなが

ら、夕方近く

芝生さんの宅へやつてまいりました。

評判の美人の奥さんと、女学校四年

生の、これもお母さんに劣らないくら

い、美しいお嬢さんと二人きりの御家



族は、私の顔を見ると、ほッと救われたような顔で、心から喜んで私を迎え、戦時中の乏しい時期ながら、出来るだけのことをして私をもてなしてくださったのでした。

『どうでしょう、今晚は……？』

すつかり後片づけをすました後で、たつた一つだけ残した黒布を掩つた電灯の下に坐つて、奥さんは改めて不安そうに美しい眉をひそめて私に質問しました。もちろん製粉屋の私に、今夜空襲があるかないか、そんなことがわかるはずはありませんが、何とか答えないわけにもゆきません。

『さあ、今晚あたり、大きいのがあるかも知れませんよ』

御主人用の配給のお酒を御馳走になつた私は、いくらか陶然とした気持でわざと怖がらすようにそんなことを云つてみました。

『いやあねえ、もう……。綾子さん、防空壕の中へいろいろ運んであります』

か』

奥さんはもう、すこし蒼い顔をして傍のお嬢さんの方へ美しい視線を向けました。するとお嬢さんは、

『あ、お水を入れとくのを忘れていたわ』

『馬鹿ねえ、飲料水がなくちゃ、どうしようもないじゃありませんか。早く一升壺を運んどいてください』

『はい』

お嬢さんはズボン姿も軽やかに、座を立つて合所の方へ行きました。水道の蛇口からはとぼしる水の音……。

私がそろそろお暇しようかと思ひ、

身づくろいをしたとたんでした。皆さん御記憶の、あの不気味な、空襲警報のサイレンが聞えてきました。そしてほとんど間髪をおかずザーツとまるで

何かが鋭く空気を引裂くような凄まじい音……。焼夷弾の投下が始まつたのです。まつたく、いま考えてもあんな

馬鹿々々しいことはありません。まるで、

で、焼夷弾とラジオの警報のどつちが先だつたかというくらいだつたのですからね。

しかも、最初の攻撃が芝生さんのお宅附近に集中されたらしく、たちまちの間にバツと燃えあがつてしまつたのです。

『早く……早く……』

私は喪神したようになつてゐる奥さんを抱きかゝえるようにして、家の外へよろめき出しました。見ると近所の人々は燃えるわが家を見捨ててすでに逃げ去つてしまつたらしく、広い道路のどこにも人数はなく、真紅な火の粉が雨のように降り注いでいます。瞬間ですが、その時、私はその燃え熾る焰の色を、綺麗だなあ、と思つたことをいまでも忘れません。

十間ばかりゆくうちに、奥さんは何かに躓いて、どたりと地上に倒れました。ふと見ると、奥さんは恐怖のあまりでしよう、気を失つてゐるのです。

どうしてそうなつたのかわかりませんが、モンベの片方が脱げて、白いすべすべした太腿とその奥がのぞいています。雨あられのように火の粉の降る中で、気を失っている美人の奥さ

んの、このあられもない
姿体に、突如として

私は気も狂わん
ばかりに昂奮

してしまつたの
でした。

△火焰の中の

不思議な昂奮▽

ふと気がつくと、私は首筋や頭髮に

降りかかる火の粉のことも忘れて、奥さんの豊かな肉体を貪つていました。奥さんは半ば正気らしく、弱々しく首を振っていましたが、すこしも私を拒





もうという気^けふりはなかつたように思
います。それどころか、奥さんの一方
の手が無意識^{むいしき}だつたかも知れませんが
私の腰にかかつていたのです。……
ふと、奥さんが噎^{おどろ}り泣くような声を
漏らしました。

「あゝ、綾子、綾子さんはどこにいる
の？」

その言葉で、私は今まで忘れてしま
つていたお嬢^{じょう}さんのことを、はッと思
い出したのです。



空襲警報と空襲がほとんど同時に始
まつたので、動^{どう}揺^{よう}して私たちは、相擁
するようにして外へ飛び出したのでし
たが、あの時、台所にいたお嬢^{じょう}さんは
どうなさつたのだらうか？……そう考
えると、私は心からすまない気持ちに
なり、奥さんの身体から離れると、一
目散^{もくさん}に家の中へ引返しました。半裸体
のまま、火の粉の降る道路の傍に寝て
いる奥さんをほつたらかして……
すでに火焰^{かえん}が音を立てて燃えている

芝生さんのお宅の前に立つて、声を限
りにお嬢^{じょう}さんの名を呼びました。何し
る熱くて一步も中へ入れないのです。
そのうちに、どツと梁^{はり}の崩^{くずれ}れ落ちる音
響^{ひび}がして、凄^{ひど}しい火焰^{かえん}と煙^{けむり}が吹き出
しました。

あッと、恐怖の叫^{こゑ}び声をあげると、
夢中になつてこの焦熱地獄^{しょうねつじごく}から逃れよ
うとして走り出したのですが、ふと二
三間先に深い防空壕^{ぼうくうごう}が眼についたの
で、私は前後の考えもなく中へ飛びこ
んで行きました。

転^{ころ}げこむように飛び込んだ私が、四
つん這いになつて奥の方へ手をのぼし
たとたん、何かぐにやりとしたものに
触^ふれ、それが微^かかな呻^{うめ}き声を漏らしま
したので、人間の身体だということが
わかりました。

びつくりして、防空壕^{ぼうくうごう}の隙間^{すきま}から差
しこんでくる炎の光ですかして見ると
白い、ふつくらした顔、洋服の豊かな
胸、張り切れそうなズボンの腰……ま

ごろことなくお嬢さんでした。

お嬢さんは、私たちを探している間に、どこもかしこも燃えてきて逃げ場が失くなつてしまつたので、防空壕の中へ逃げこんで気を失つてしまつたのでした。

お嬢さんはさすがに若いだけに、すぐ私と気がついたようでした。すると一時に恐怖が発したらしく、『母さんは……、母さんは……』と云つて、わつと泣きながら全身で私に武者振りついてきました。涙でびしょびしょになつたお嬢さんの頬が、私の頬にびたりと密着し、豊かな胸の二つの丘が、どきんどきんとしながら、私の縮みのシ

ヤツ一枚の肌をとおしてひびいてきました。そして、ぴつちりしたズボンの両脚で、まるで、男と女のある場合の姿のように、左右から私の腰を捲いてきたのです。もちろん恐怖のため、お嬢さんが無意識にした行動でしたが。

思わず私は、お嬢さんの唇を吸つてしまいました。すると、お嬢さんはそれを拒もうともせず、じつと、私の身体を抱き締めてきました。もう私の念頭には、奥さんのことなどすっかり忘れて果ていました。さいわい火の手も落ち、風の方角も変つたので、壕の中はいささかも苦痛を感じませんでした。一晩中、私はお嬢さんを抱擁しつ

づけていました。

私はこの夜のことを、一場の悪夢のように考え、ああした場合には、人間は誰でもあんな気持ちになるものだといふ所の業にあまり自責を感じませんでした。ふとした機会から、このことが御主人の芝生さんの耳に入り、その結果、私は長い間暗いところへ入つていなければならなかつたのです。

いまは娑婆に出て働いていますが、いまだにあの火の粉が美しく尾を引いて降り注いだ夜、幻のように私の胸に飛びこんできた二つの美しい女体のこととは忘れることが出来ません。

(黒部仙之助)

陸軍中尉だつた私は部下の妻を次々と犯した

▽ 陥穽に落ちた

若い人妻

軍人が威張りかえつた時代、そんな時代はもう来ないだろうが、私にはなつかしい思い出がいろいろある。陸軍

中尉の肩書をカサに着てずいぶん悪棘な



こともした。それもいまとなつては胸のいたむ懺悔話なのだが。――

私は世田谷の野砲兵大隊づき、つまり留守部隊にいたものだから、出征している夫の安否を気ずかつて、夫人たち私のもとをたずねて来た。

百姓の匂いなど微塵もしない別嬪の奥さんに、面会を申しこまれたときの気持は悪くないものだつた。

埼玉県熊谷の、素封家の若主人が、私の旧部下で、ビルマ戦線に原隊といつしよに出征していた。その奥さん、

たしか多佳子といつ

たと思うが、私をたずねてきた。

「前線からしばらく便りがございませんが、主人の部隊について何か情報はございませんでしよろか？」

ちようとインパール作戦が行われ、日本軍が殲滅されたという噂が一般に流布されていたときなので、奥さんは心配そうに美しい眉をひそめていた。

「大丈夫ですよ。たしか、御主人はマンドレー附近の防備についている筈です」

そう私が答えたので、奥さんはそのときは安心して帰つて行つた。それが縁でたびたび上京し、その都度、鶏や白米やら土産物を持つて来てくれた。

何回目かに奥さんが上京したときは猛烈な敵機の空襲があつて、交通

は杜絶したので玉川に近い私の仮住居に泊めてやつた。妻子

を疎開させて、一人きりで

住んでいた私の家に、美貌の夫人が泊つたのだからたゞごとではす



まない。

「あッ、嫌

嫌です。そん

なこと……出征

している夫に申し

開きが立ちません」

燈下管制の真暗な部

屋の中で、奥さんは必死に

拒んだ。いつのまにか、奥さ

んは坐りなおっている。

「これほどお願いするのに、どうして

も嫌だというンなら、貴女の御主人の

生命が危険に瀕したつて、知りません

よ」

「えッ？」

「ハハハ……。僕の指令ひとつで、御

主人は最前線の決死的な任務につくこ

とになるかもしれませんよ。いままで

御主人が安全な場所におられたのは、

みんな僕が骨を折つたからですよ」

留守部隊の一中尉に、そんな権限が

ある筈はないから、むろんこれは嘘ッ

八であ
る。しかし
奥さんは真に
うけたらしく、し
ばらく闇の中で思索していたが、やが
て切なそうな溜息を吐くと、立ちあが
つてモンペの紐をときはじめた。

一瞬、私は甘ずっぱい胸のときめき
をおぼえたが、まるで餓狼のように、

▽抵抗する人妻を

犯す昂奮

奥さんの白い滑らかな体に武者振りつ
いた。絶えて久し
い饗宴——ながい
孤閨をまもる奥さん
とてもそれは同じら
しく、甘美ならめき声
を立て、はげしく身も
だえした。私は強姦した
というよりも、惚れた女に
下紐を解かれたようにうれし
く感じ、体が恍惚として、ふわ
ふわと快樂の底におちこんでゆく
ような気持だつた。

これが病みつきになつて、いろいろ
手を用いて私は部下の妻をたびたび犯
した。

ある人妻を玉川の土手に連れだし、
草原に押したおして思いをとげようと



すると、猛烈に抵抗して私の二の腕に噛みついた。私はその女を草原に投げ飛ばし、腰に帯びていた軍刀を引き抜いて女の眼の前に突きつけた。拔身をブスリと大地に突き立てたので、女は蒼くなつてヘタヘタと坐りこんだ。もうあとは何をされても抵抗しない。人の背丈を凌ぐ芦の生いしげつた中で私は女をまる裸にして、飽くことなく愛撫をつづけた。女の白い裸身はじつと石のように動かなかつたが、最後にビクビクと二、三度手足を痙攣させた。しかし彼女はなんの感動も示さなかつた。私は目的を果すと、女の下着で汚れた部分を押しぬぐい、それを顔に投げつけてやつた。惨酷だと思つたけれど、私は自分の性慾が満たされれば、女なんてどうでもいい方で（妻に対しても）さつさと歩きだした。

『待つて下さい！』

女は私を呼びとめた。私は何か用かと云いながらふりむくと女は、蒼い顔

をして、

「自分だけのことをして逃げるなんて卑怯じやないの。あたしはまだ満足してないわよ」

彼女は挑発的に、淫らな姿勢をして見せた。

何だそうだったのかと、私はもう一度軍袴を脱いだ。

それからこんな事もあつた。

ある上等兵の奥さんで、戦死の公報が半年も前に届いているのに、つい最近、戦友からその上



等兵は戦傷は負つたが、近く快癒して内地へ帰還するという手紙が届いた。けれど、どつちが本当かしらべてほしいというのである。私は調査してやると称して、この奥さんを、方々引つぱりまわした。色の浅黒いきゅつと緊つた体をした女で、男の情慾を昂ぶらずにはおかない色気だつた。ところがこの奥さんはなかなかの貞婦で、さすが私も容易に乗じるスキがない。

あそこでしらべてやる、ここでしら

べてやると連れまわしているとき、B

29の白晝爆撃に逢つてしまつたので、

私は女の手を引つぱつて防空壕の中に

引きずりこんだ。近くに直撃弾が落ち、

濛々と土煙が壕の中には立ちこめ

ている。むろん、人ツ子一人いない。

女は度胸がよくて、顔色もかえてい

ない。私は無言で、女の手を握りしめ

た。女はさつと顔色を変えて、私の手

を払いのけたので、心の底を見すかさ

れて、私はむツとして女を羽交絞めし

その場へ押した。おした。私は手足をさかんにバタバタさせ、どうにも始末がわるいので、両手で首をしめた。そのうちくつたり失神したので私は悠々と女を弄んだ。

この女は、あ

とから憲兵隊へ

かけこみ訴えを

した。終戦がも

う一カ月のびた

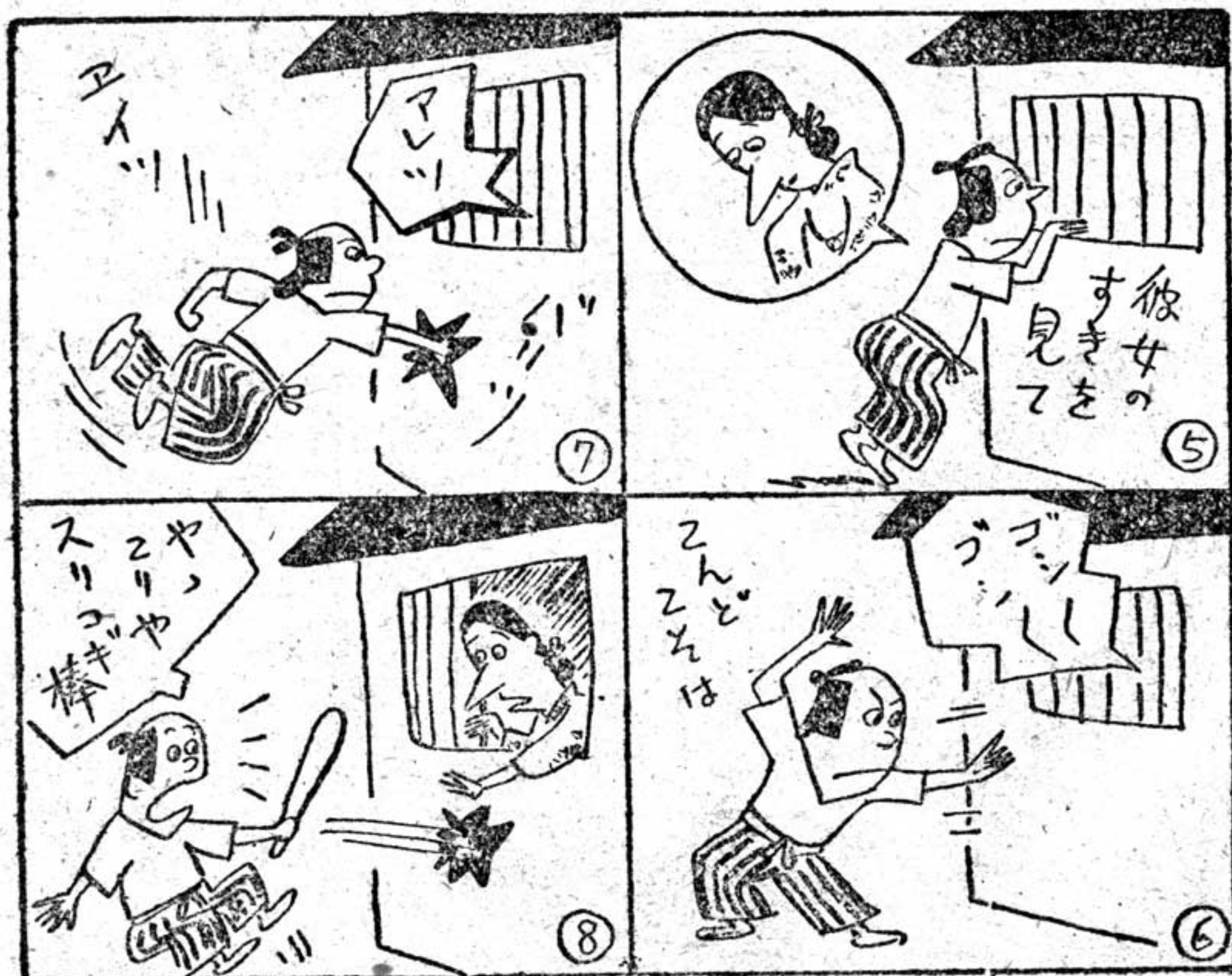
ら、私は軍法会

議にまわされた

かもしれないと

ころだつた。

(朝倉彰郎)



都市吳縦断記

本誌特別
調査部

強姦、凌辱、集團輪姦等、相次ぐ
兇惡事件が、獨立日本の一都市に
白晝堂々と展開され、ついに中央
の問題化するに至つたが、果して
真相はどうか——。その戦慄の街
と化した「吳」に急行した本紙特派
員がその眼、その耳を以て生々し
い実相をキヤツチした現地縦断記

SHINPEI 港

現世の強姦都市吳縦断記



抵抗のすべ

なき娘たち

うら若い娘の胸に拳銃を擬し、脅怖にふるえるのを無理矢理に自動車に押込んだ。

「乱暴しないで……お金なら差上げます！許して下さい！」

二人の荒くれ兵士が両手を押える。もう一人の兵士は、淫猥な笑いを浮べながら、青春の鼓動をひそめる娘のむつちり盛り上った胸に、毛むくじやらの腕をのばして、乱暴にブラウスを引裂く。

「あッ！」

娘の顔色が、さッと蒼ざめる。

純白のシユミーズを透して、うす紅

色の乳首が荒くれ兵士の情慾を煽る。

「ああ……」

身悶える娘——毛むくじやらな腕は

汚辱にふるえる娘の白い肉体を、野獸

が獲物をとらえて愉しむように、互い

に眼を見合せ、ゴクリと唾を呑みこん

で、スカートを捲くりあげて

むつちりした太腿を

撫であげる。

「助けて！」

はじめて、娘の唇から絹を引裂くよ

うな叫声が走つた。

途端に、美女と野獸を乗せた自動車

は、矢のような速さで、白晝の繁華街

を疾駆した。

いずれも、外国の兵士である。

何をしゃべっているのか、すこしも

わからないが、一人がニヤツと笑つて

必死の抵抗を

つゞける娘

の両膝を乱

暴に軍靴

で押し

SHANPEI 港

つけ、素早い動作で下着をずりおろし

た。娘の上半身はびくとも動かない。

二人の頑丈な身体をした兵士が、両わ

きから押えているのだ。

ホックが飛び、皮を剥ぐようにスカ

ートが無惨にも脱がされる。

下半身をまとうものは何物も残つて

いない。静脈が青く浮立つて見えるよ

うなその下肢を、下着を奪つた兵士が

ねちねちとおしひろげていく。

「ああ……」

娘の絶望の吐息！

瞳を燃やす三人の兵士——。

白晝の、しかも、西部劇の開拓史の

一騎ならいざ知らず、独立日本の一都

市でこりした戦慄すべき強姦事件が、

日常茶飯事のごとく行われていたとし

たら——。

誰もが、これを真実と思う者はある

まい。平和の使徒として日本に駐留す

る連合国軍の兵士が、そんな淫獸の徒

輩であらう筈がない！



誰も
が、そう信
じているであ
ろう。

だが――。

七月二日、国民の声を
代表する衆議院において、
大石ヨシエ代議士は、烈々、火
を吐く悲愴な態度で、卑屈な植民
地的根性の土性^{どじょう}ツ骨をたたき直す重大
発言をおこなった。

それは、国会外務委員会の席上だつ
た。

『現在の

吳は暗黒の街で



ある。夜八時を過ぎれば、男も女も
安心して街を歩くことはできな
い。白晝、日本女性が外国兵士
に公然と路上で強姦され、その
泣き叫ぶ声をきいても、日本
の当局者は手も足も出せな
い。

たとえば、被害者がパンバ
ンであつたとしても、
これを黙視してよい筈
がない。われわれの
同胞の人権が、まる
で石塊のように軽々
しくふみにじられて
いるのが、吳の真相
である！』

満場に拍手が湧いた。

戸叶里子（杜右）佐々木盛

雄（自）黒田壽男（労農）の

諸代議士は、その党派を超越し
まなじりを決して憤然と叫んだ。

『本事件は、単に外務委員会としてで

なく、国会の問題として採りあぐべき重大事である』

独立の曙光に浴しながら、なおかつ七年間の卑屈な被占領意識のもとに、悲惨な敗者の立場をとらなければならぬ理由が何処にある！

戦慄都市「吳」が、中央の問題として採りあげられたのは、決してこのときがはじめてではなかつたのだ。

すでに、六月二十四日、鈴木吳市長の泣訴によつて、衆院地方行政委員の大石代議士が、委員会に採りあげたのであるが、第一回、第二回、第三回と回を重ねるにしたがい、吳市側の参考人の陳述がしだいに曖昧になり、結局、委員会は結論を得ず散会となつてしまつた。

大石代議士に言わせれば、これは委員側が腰抜け揃いばかりだし、政府側にも誠意がないからだ、と悲憤慷慨のあまり、ついに外務委員会に持出したものである。

これに対し、地元広島県選出宮原幸三郎代議士(自由)は、

『吳市の暴行、凌辱、強盗などの兇悪事件は、終戦の占領の当時から始まり独立後の今日、まだその跡を絶たぬのみか、かえつて激増している現状である。政府は、かゝる屈辱事件の根絶を期するため、速かに対策を講ずるべきである』

と岡崎外務大臣に要請している。

だが――

齋藤国警長官は、

『調査の結果、吳市の事件は、逐次減少していることがわかつた。最近は目立つほどのことはない』(週間読売)

と至極樂觀的な見解を示し、

外務省当局は、

『乱暴した兵士の言分として「日本人経営の飲食店は、日本の客には安く飲ませるが、外人兵士とみると暴利をむさぼろうとするのは不愉快だ」と云う意見もきいている。これらのことを考

えて、実情を誇大に騒ぎ立てすることは警戒すべきである』

と逡巡し、

金光地方行政委員長は、

『濠洲には、まだ多くの日本人戦犯が抑留されている。この人たちの釈放運動のためにも、吳市の問題をあまり騒ぎすぎることとは懸命でない』

と、暗に不介入方針をほのめかしている。

こんなところにも、悲しむべき敗戦国のみじめな盲点があるのではないだろうか。

果して、真相はどうなのだ？

われわれ情報部員は、この盲点に描かれた、恐怖の街「吳」に急行した。

この眼、この耳で現地の生々しい現実を捕えるために――。

それは、正しい抵抗への、われわれの使命でもあるわけだ。

氾濫するパンパン群像

われわれは戦争の悲惨な結末を、呉市に到着して、ふたたびまざまざと見せつけられた感じがした。

カラリと晴れた真夏の陽ざしを浴びた旧軍港吳の街は、空の碧さにくらべて、鈍重な灰色の息吹を通わせているような、暗い感じのする街だった。

戦時中、黒煙を吐いていた天空を摩する灰色の煙突の下には、壯大な旧軍需工場の残骸が、いまだに空しい影を落している。爆撃に飛び散った瓦礫もそのまゝ、崩れ落ちたコンクリートの下には、飴のようにひん曲つた、赤錆の鉄筋が、夏草の蔓を巻いて戦火の冷酷さを物語っている。

どこかで見たような風景だ。そらだ、ロッセリニの描いた「ドイツ零年」であり、「無防備都市」の

あの生々しい廃墟の印象が、われわれの胸中を重苦しく閉ざすのだ。

終戦七年——きらびやかに復興した東京に住むわれわれには、ロッセリエーの描いた歐洲の街は何か遠いもの、ように感じられたのであつたが——。

おそらく、呉市だけではあるまい。

日本の何処かで、まだこうして空虚な残骸をさらしている灰色の街がいくらかもあるにちがいない。

(戦争は、もう絶対にごめんだ！)

再軍備を主唱する人々に、まずこの灰色の色彩を、明るい健康な彩に塗り替えてくれと絶叫したくなるのは、決してわれわれのみではあるまい。

高層建築はほとんど見当らない。軒のひくい、ペンキ塗りの安普請の建物がひしめき合つて両側に並び——豈だ

と云うのに、広町附近の飲食店からはジャズの奏樂が、ガンガンとわめきだしている。

ジープが砂塵を卷いて疾り抜ける。どつちを向いても外国兵士の洪水である。

『こゝには、B O F K (在鮮英連邦軍) のキャンプがある。アベック・ホテルも盛んですよ』

案内人である地元の新聞記者S君がわれわれに教えてくれる。なるほど、HOTELの横文字看板があちこちに眼につく。

ラツパ呑みにビールをあおりながら歩いている兵士もある。ガツガツと落着きのない、野性的な逞しさが全身に溢れている。

『荒つぽいね』と部員のK君がつぶやく。

『無理もないんです。休暇で朝鮮の戦線から帰つて、すぐまた飛行機で戦線へもどつて行く兵隊もあるんですから』

ね

S君は平然と

して云う。

銀座を散歩するスマー

トなアメリカ兵士を見なれて

いるわれわれには、まるで街に放



りだされた豹^{ひょう}を見るような印象だが、S君は馴れているから、す

こしも動じないのだ。

中町通りの商店街へ向う。

こゝも、兵士の犯濫^{はんらん}だ。

ツバの広い帽子はオー

ストリア兵。

赤い帽子はイギリ

ス兵。

ベレーはニュ

ージランド

兵。

カナダ兵は戦闘帽である。

これらの兵隊の腕に、ぶら下るようにくつついて歩いてる女は、ひと目でそれとわかるパンパン嬢である。

『市内に三千人ほどいますよ。おそろく、全国各地から集つた大和撫子の展覧会らんかいのようなもんですね。こゝで、一年くらい年期をいれ、オンリーになつて横須賀、東京、北海道の各基地へバラ撒かれるんですよ。いわば、吳は、洋パン発祥の地と云うわけですね』

S君は云う。

しばらく立停つて、吳パンの生態せいだいを見学する。

すぐ眼と鼻の、ギフトショップの前で、ツバ広の兵士が、連れてくる女に何事かペラペラとしやべりかけた。

『オーケー、オーケー！』

女は前かゞみになつてスカートをまくり太腿ふともものあたりに手を突つこんだ。

おや？ とわれわれの視線が、女のふつくらとした太腿のあたりに思わす

吸いよせられる。

ガーターの下に千円札が二枚突つこんであるのだ。それを赤い爪の指先でつまんで、兵士に渡す。

『あれは、オンリーですよ。日本駐留中の女房と云うわけです。え？ どうして、あんなところへ金を隠かくしておく

はくじつ

白日の下に春をひさぐ雌鬼めすおに

パンパンのあふれる中町通りの商店

『えッ？』

街をあとにして、われわれを乗せた車

A君が、眼を白黒する。

は、ふたゝび戦災せんさいを受けた灰色の街に向う。

『戦慄の街は、また淫蕩いんどうの町でもあるんですよ。しかも、この町に氾濫する兵士たちは、のんびりと陽の洗むのを待つていられないのです。白晝でも情慾じやうよくをハケさせておかないことには、

腕時計を覗くと、午後三時二十分。『何か、面白いものでもあるんですか』

命令一本で、いつ戦線へ飛ばされてしまふかわからんですからね』

若い部員のA君が、案内人のS君に訊く。

S君は笑いながら云う。

『ナマのストリップをご覧にいますよ』

やがて、車は白い砂塵さじんをあげて、爆



撃で目茶苦茶になつた旧軍需工場の、
着するのを待つ。

嵐れかゝつた石塀のかげに停る。

「こんなところに、ストリップがある
んですか？」

A君が、不審そりに小首をひねる。

「日本パンパンとあちらさんが、裸に
なつて実演するんですよ」

ストリップと云う言葉が、漸く呑み
こめてきたわけだ。

われわれは煙草に火をつけ、野外ス
トリップを觀賞するために、役者の到

着するのを待つ。

やがて疾走してきた一台のジープが

石塀の突端にぴたりと停る。

降りてきたのは、シャツの釦をはず

し、赤い胸毛を覗かせた長身の兵士と

その腕にぶら下つた白いワンピースの
女である。

「相手に見つからぬように、氣をつけ
て下さい。出歯龜を見破られたりする

と、拳銃をぶつ発されますからね」

S君がひくく囁く。

われわれは眼でう
なずき合つて、

半崩れのコ

ンク

リートの建物の中に身を忍ばせる。

女が、兵士の手をとつて、身軽に工
場の中へずんずん入つて行く。

パーマの髪を赤く染め、サンダルの
指先も血の滴るようにまっ赤に彩られ

ている。フレイヤスカートの裾が、大
きな輪を描いて、碎けた瓦礫の上をび

よんぴよんと跳んで行く。

兵士が、シャツを脱ぎはじめ。女

が、長々と脚をのばして仰向けに転ん

だ。兵士は、すでにシャツを脱いで、

ひろげた女の脚の間におよび腰でしや
がみこんだ。

「いやだよ、馬鹿野郎！」

女が叫んだが、それは、媚めかしい

嬌声ではない。憎悪と侮蔑を叩きつけ

るような声だ。憎悪しながらも、金の

ために肉体をひさごうとする、複雑な

女の心理が、冷くわれわれの胸奥を貫

く。

兵士には、日本語がわからないらし

い。馬鹿野郎と云われても、ヘラ

ヘラ笑い
ながら女に
挑みかゝつて
ゆく。

『そろそろ、女がス
カートを脱ぎますよ』

S君が囁く。

『汚れるからですよ。裸になる恥し
さよりも、洋服を汚す方が辛いんです
よ』

なるほど、女は兵士の手をはらいの
け、自分からスカートを脱ぎ、下着ま
でとつた。

われわれは、期せずしてゴクリと咽

喉を鳴らし
乾いて、かさかさとする。

兵士も色の褪せたズボンを脱いだ。

た。口の中が

みついて、すべすべした脚は、あたり
の瓦礫を物狂わしく蹴りつける。

肉体に対する妄執と物慾に対する妄

執が、これほど醜く火花を散らす構図

A君の唇から、思わ
ず呻声が洩れる。若い
だけに、その鮮烈な光
景に感情を昂ぶらせた
らしい。彼の早鐘のよ
うにひびく胸の鼓動が
われわれにもはつきり
聞きとれるほどだ。

女の白い腕が、兵士
の頸に蛇のようにから

みるからに、逞ましい性慾的な毛
むくじやらの毛脛が現われる。
女が何やら奇妙な叫声をあげ
た。

兵士の頑丈な肩が大きく
揺れ、女の白い胸に野
獣のようにのしかかつ
てゆく。



がはたして、他に求めることができる
であらうか。

「彼等を兇暴な淫獣にさせたのも、その原因の一つに、無節操なパンパン嬢にもその罪があるのではないでしようか？ あんなふうに時も場所もなく簡単にやられたんじやねえ」

帰りの自動車の中で、S君は、チョッピリ政府側の答弁に理解？を示す。

アメリカ兵とくらべ 給料もすくない英連邦軍の兵士が、鬱積した禁慾生活から解放された場合——しかも、眼前に妖しい花のような、毒々しいまでの女体を見せつけられたとき、金のない兵士がどんな手段に訴えるか？

「あちらの兵隊の気持も、わからぬわけはないんですがね……」

S君は暗然とする。

しかしわれわれは、卑屈さから起ち上り、新しい、独立した平和の吳市を築きあげようと努力する市民たちから傷けられ、奪われた、悲惨な被害者の

話を、直接この耳に聞いたのだ。

この悲しむべき事実！

肌を粟を生ずる鬼畜の蠻行に対して、敗戦国民だからと云う理由で、ことなかれ主義に頼かぶりする理由はい

さうでもないはずだ！
以下は、その屈辱事件の一二の例である。われわれは、この事実を読者諸賢に訴え、吳市問題に対する参考としたいと考えるものである。

全裸で水浸しのうえ輪姦

午前零時の吳——

兵士相手のキャバレー、飲食店は、女の嬌声と兵士の唄声か、深夜の街に嵐のような喧騒をくりひろげる時刻。

吳市広町、特殊下宿屋の接客婦トシ子(21)が、客引きのため表に立つているときであつた。

びたりと、その前に停つた緑色のジープ。酔つた兵士が二人乗つていた。

「ムスメさん、ドライブしましょう」

まだ若い、おとなしそうな兵士である。乗つてやつてもいいなあと、トシ

子は胸に手をあてて思案した。

「お金、あげます。すぐ帰れます。いらつしやい」

一人が、無難作にポケットに手を捻じこみ、まだ真新しい千円札を一枚差出した。

トシ子は、ひらりとジープに飛乗つた。千円の稼ぎなら悪くないと思つたからだ。

ジープは、わめき騒ぐ街をくぐり抜けて、矢のようにスピードを増す。やがて、仁方海岸の白い波打ぎわが見えてきた。

兵士の一人が、右手を廻してトシ子

の肩を抱きすくめながら、熱っぽい声で囁いた。

「暑いでしょう、裸になりなさい」

否！ とトシ子は強く首を振った。

風が凄さまじい勢いで胸にぶつかりふつくらとした胸の隆起が鮮かに浮び上る。そのふくらみを、肩越しに粘りつくように見下している兵士の眼が異様にかきやいてきた。

「裸になりなさい」

言葉がはげしくなり、肩を掴んでいた手が、あつと云うまもなく、咽喉をしめつけてきた。

「何をするのッ！」

はねのけようとする手を、いまゝで運転していた兵士が、ハンドルを離して覆いかぶさるように押えつけた。

身動きもできなかつた。

羽交い締め、両手の自由をうばわれたところを、運転台の兵士がものも云わず服をもぎとつた。シユミーズも引裂かれて、闇の中に、トシ子の白い

裸像がぼかつと浮び上つた。

トシ子を全裸にしてしまうと、一人の兵士はふたゝび運転台に戻りハンドルを握つた。

ジープはふたゝび全速力で疾り出した。

「否、否！ 離して！ 離せ！」

トシ子は必死に叫んだ。両腕は、交締めにされて自由はきかないが、脚だけは自分のものだつた。彼女は運転台の背になつた鉄板を狂人のようにハイヒールの踵で蹴つた。

豊かな乳房がぶるんぶるんとゆれた。糸もまとわぬ全裸なのだ。その白いうねりを、兵士は淫らな眼で愉しんでいたが、亢奮のあまり突如、がばツとトシ子の乳房に顔を押しつけた。

途端に、いまゝでトシ子の両手を扼していた手が解けて、兵士の四肢からだらりとちからが抜けた。途端に、熱っぽい吐息が彼女の白いうねりに吹きつける。瞬間、トシ子は、このときを

逸して魔の手から逃れる機会はないと思つた。

「うわッ」

後部坐席の兵士が、碧い眼を剥いて叫んだときには、すでにトシ子の裸像は白い弧を描いて、疾走するジープから暗闇の路上に飛び降りた。

しかし、全速力のジープから、飛び降りたのだからたまらない。トシ子の身体は反動を喰つて、二、三回路上に転回すると、そのまゝ、うーと呻いてその場に気絶してしまつた。

ジープが物凄くスリッパの音をひびかせて急停車した。

二人の兵士は互いに顔を見合せたが路上に仰向けにひっくり返っているトシ子を抱きあげると、またジープに乗せた。

そこから浜辺はすぐ間近かだつた。ふたゝびジープが停つて、トシ子が浜辺にひきずりおろされたときには、すでに彼女は、二人の兵士にかわるが

わる凌辱^{りやうじやく}されたあとだつた。下着が、泥靴にふみにじられて、ジープの中に散乱^{さんらん}していた。胸や下腹部に生々しい咬傷^{かみきず}の痕が月光に痛ましく照らされていた。

兵士は、意識不明^{いしきふめい}でいる

裸のトシ子を浜辺に横たえ、ひそひそと何か小声で話し合っていたが、いつたん砂浜へおろしたトシ子を、ふたたび二人で抱きかゝえ、波打ぎわまで行き、海水の中にざんぶとばかり投げおろした。

そのとき、はじめてトシ子は息を吹返えしたのである。

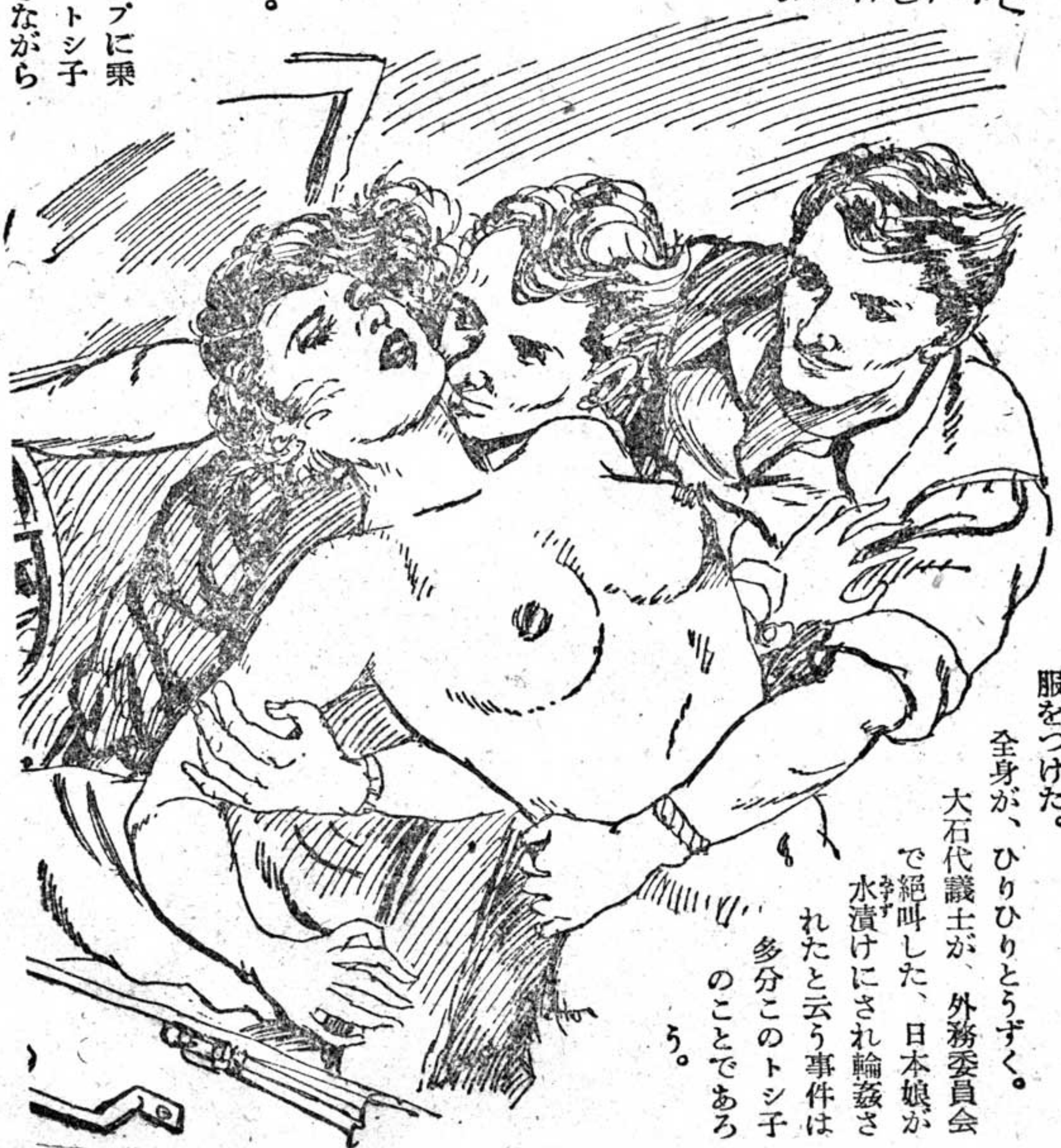
「ああ！ あたしは、あたしは。

……ち、畜生！」

トシ子は声をあげて泣いた。

兵士は黙つて、トシ子にジープに乗れと合図した。ジープの中で、トシ子は泥にまみれた下着を着、泣きながら

SHINPEI 港



服をつけた。

全身が、ひりひりとうずく。

大石代議士が、外務委員会

で絶叫した、日本娘が

水漬^{みずず}けにされ輪姦^{りんかん}さ

れたと云う事件は

多分このトシ子

のことである

う。

白晝の路上に狂

う四匹の野獸

遊江幸子(22)は市内の某銀行の女した。

事務員である。その日は土曜日で、午後二時頃、帰路について阿賀町の小倉壽工業倉庫裏手にさしかゝつたときである。

『中町通りへ行くには、どう行くのですか?』

いきなり、横合いから出て来て道を聞いた外国兵があつた。

突然たつたので、ぎよツとしてあたりを見廻すと、倉庫の横手に煙草を吹かしている三人の兵士の姿が見えた。その六つの見が、何かもの欲しそりに自分をじろじろ眺めている視線を感じると、幸子は思わず背すじに冷水を浴びせかけられたようにぞつと身ぶるい

幸子は、ふるえながら、手真似で中町通りへの道を教えた。

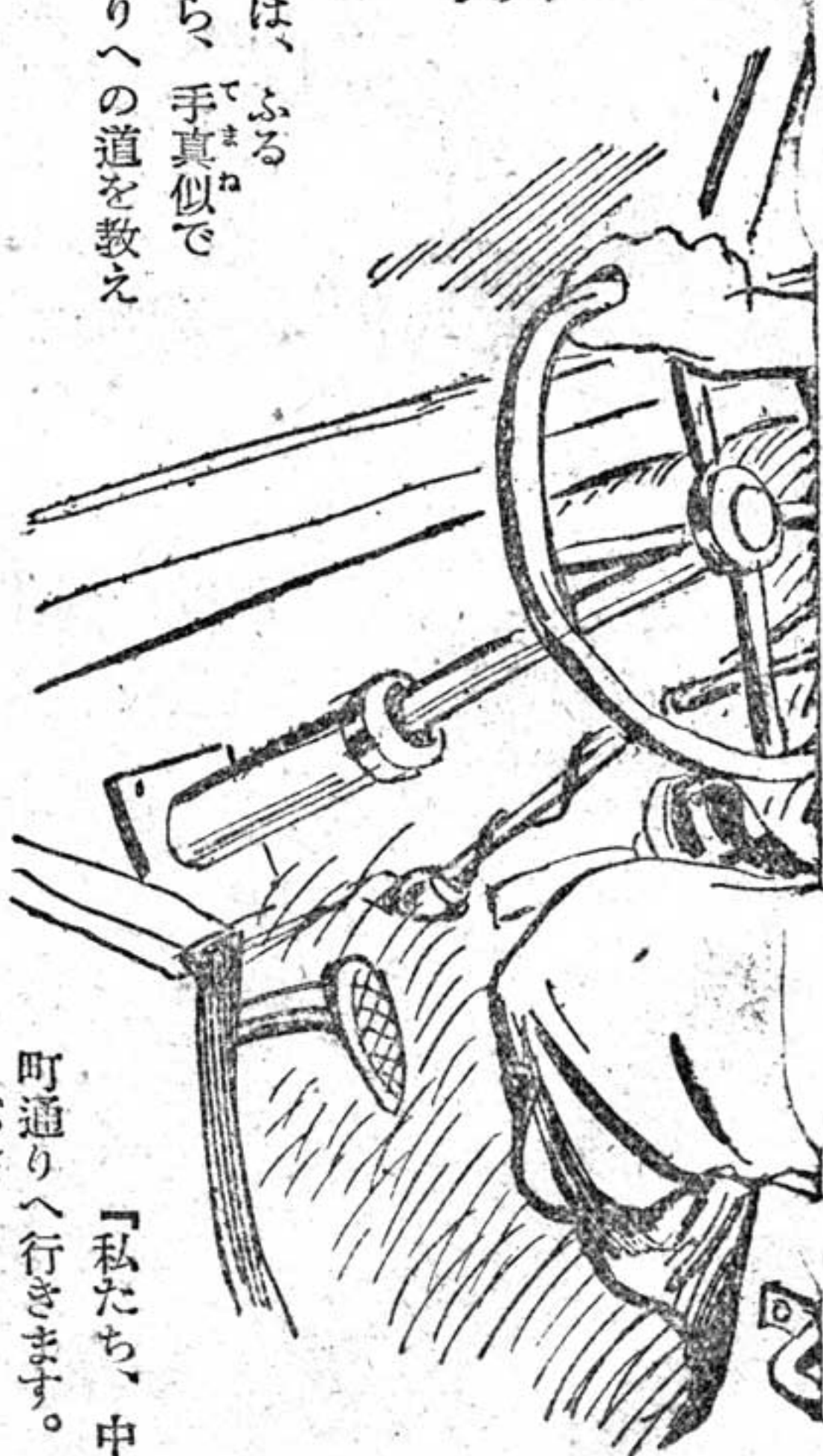
だが、その手真似をニヤニヤ眺めていた兵士は、ビューと口笛を鳴らし、

『あなた、なかなか、親切です』

とにじり寄つてきた。幸子は、さつとうしろへ身を退いた。暴行、凌辱とあらゆる破廉恥行為をほしいままにしている駐留兵は、呉市の娘たちにとつては恐怖の的だつたのである。

(逃げなければ?)

と思うと、逆にかえつて身がすくみ脚ががたがたふるえた。



『私たち、中町通りへ行きます。』

ムスメさん、あなた一緒に行きませんか。欲しいもの、買つてあげます』

兵士は素早く、幸子の肩に手をのばし、のしかゝるように抱きすくめた。

『離して下さい! あたくし、家に用事があるんです!』

突きのけようとしたが、兵士の腕は鉄鎖のように固く、がつちりと幸子の身体を釘付けにしました。

兵士は、またビューと口笛を鳴らした。



その口笛が合図あいずだつたのか、倉庫の横手で、この有様を面白そうに眺めていた三人の兵士が、肩をゆるがし大股で近づいてきた。

「ムスメさん、私たちの恋人になりますか？」

口髯をのばした兵士が、やんわりと幸子の両手を掴んだ。するとべつの二人がめいめいに幸子の脚を掴んで、スカートの下から股を見上げた。

幸子は恥しさのあまり全身の血が逆流するかのよゝな気がした。

「離して下さい！ 警察が来ます。みなさんは、警察が怖くないのですか」

幸子は蒼ざめて叫んだ。

「ポリス、ちつとも怖くありません。
M・P 私たちの戦友です。日本のムス
メさんとの恋は大賛成です」

ニヤニヤしながら、幸子の足下にひざまずいた二人は、片手で、がつちりと彼女の脚を押えつけ、片方の手で理不盡にもズロースをずりおろそうとした。

「ああッ！ いや、いやです！」

幸子は仰天して叫んだ。

下着を穿る兵士の目的が何であるか
いまは、はつきりと覚悟しなければな
らなかつた。はじめに道を聞いた兵士
が、頼に熱い息を吹きつけ、厚い唇を
つきだしてきた。

「いやです！ いや、いやです！」

泣き叫んでも、拒んでも、鬼のよう
な手でしつかりと押えつけられている
顔は、右にも左にも微塵も動かない。

ねつとりとした唇が、じーんと幸子の唇をふさいだ。幸子は、齒をギリギリと噛み合わせた。涙が、たらたらと頬をつたわる。

だが、汚辱は、もちろんそれだけで
はすまされなかつた。ズロースをもぎ
とられた太腿に、汗に濡れた掌が、べ
つとりと密着してきたかと思うと、ず
るずると、奥深く這いこんできた。

幸子の胸が、はげしく動悸した。
口髯の兵士が、地べたにひざまづいて
いる兵士に何か叫んだ。すると、地

べたの兵士は、OK！ と半身を起して、掴んでいた幸子の脚をぐつと引いた。

「あッ！ 勘忍して」

と、幸子の身体が、仰向けになつたまゝ路上に引きずられた。

その一瞬だつた。

重い岩石が転倒してくるように、口髯の巨体が、荒々しく幸子の上に覆いかぶさつてきた。

ビュッ！ とまた口笛が鳴つた。

膝を曲げて、あらんかぎりの力をふ

りしぼり、巨体をはね返そうともがいていた幸子の肉体が、急に、がつくりと力を失い、白い下肢がだらりと地上にのびてしまつた。

口髯の兵士が立上ると、こんどは、はじめ道をきいた兵士が交代になつた。

こうして、四人の兵士は、かわるがわるに、死んだようになつた幸子の肉体を犯したのである。

白晝の路上である。

日本の警察は怖くないと、豪語したという、外国兵士の蠻行！

われわれは、断じてこれを看過してはならない。たとえそれが、一兵士の不用意な放言であつたにもせよ、そうした印象を彼等に抱かしめることは、独立国家としての尊厳が、いまだ敗戦国と云うべールの中に、閉ざされてゐる証拠だからだ。



糞尿ふんの中を渡つて女遊びに脱柵だつさくする兵隊

最近旧軍港都市のY市やT市などと、そのために、酒を飲みたい者、女遊び
ならんで、駐留兵の街としてクロールをしたいた者は、いろいろな方法でキャ
ズアップされてきたS県A町では、公
ンブドレイクを脱柵する。
用かまたは特別の許可がない限り、外
ことに、朝鮮の戦線へおくられる兵
隊などは、

『どうせ、生き
ては帰れ
ない
』

脱柵して女遊びをする。だからA町は
これらの兵隊を相手にするパンパンで
埋まつているといつてよいほど、おび
ただしい脂粉のにおいに包まれる。夜
の十時前後になると、蟬せみの蟻あみのごと
く、これらパンパンが密集してキャン
プの兵隊を誘つていける。

附近の麦畠や芋畠が専門の青カン
地帯だ。しかし監視が嚴重なの
で、彼らは、「糞尿道」を
利用して脱柵する。これ
は、彼らの汚物を地下
の土管によつて川に
流す直径四尺ほどの
大きさで、三百メ



鯨 孫 六

青田六郎

え

主 月 眼
あ る の



奇行を演出する——

膽を抜くような珍態

動物は、アツと度

餓えきつた白色

一變する。女に

ば動物の檻に

もひと皮むけ

いう名の檻

い。軍隊と

こずるらし

理にはて

性慾の處

奔騰する

んたちも

の兵隊さ

る青い眼

文明を誇

トールにもおよぶ汚物の道だ。

それでも、兵隊たちは慾情して来ると、もうじつとしてはいられない。苦

しかろうが、臭かろうが、まるで無頓

着、その糞尿の流れに膝頭まで浸り、

長い体をえびのように曲げ、汗だくにな

なり、長い時間をかけてその通路から

農家の裏手に這い出して行く。

そこには、必ず十数人、多い時では

数十人のパンパンたちが首を長くして

待つてゐるのだ。

その中で気に入つた女の顔を見つければ、兵隊は汚れたままで武者振りにて行く。

何しろ時間に束縛されているから、

少しでも早く処理したいのだ。パンパ

ンは、悪臭に襲われ、派手な衣裳を汚

してしまふのだが、そんなことは、彼

女らは実に平気である。

『アチラさんは、ちやんと心得ていて

終ると、汚してすまないと言つて僅か

二、三十分足らず、シヨートで五千円

もフンパツしてくれるから、臭くても汚されても、かえつて得をするわ』

と、パンパンたちは逆に喜んでゐる

くらいだ。

そして、この、半時間足らずのうち

に、彼らは数回連続で愉しむというか

ら、いかにそのことに飢えていたかが

わかる。

慾情のための脱糞も、綺麗ずきの外

国兵が糞尿の中を渡つてまでも行きの

だから驚くべき次第だ。

自分の房事を覗かせて金を儲ける變態兵

戦地から帰つて来ると、十日前後の

休暇が与えられる。この時こそ、彼ら

は飽きることなく遊びまわるのだ。こ

の兵隊の相手をするために、國際の街

T市では、千人に及ぶパンパンがうご

めいている。

しかし、いくら休暇があつても、彼

らは、あまり金にめぐまれていないの

で、思うような遊びが出来ない。

イギリス兵のSは、そのために、一

石二鳥の金もうけを考え出した。

『國際のぞき』というのがそれだ。S

は、パンパンをそば屋とかバーの二階

へつれこむ前に、町の愚連隊に金を握

らせて、

『一時間、百円

でのぞかせるか

ら客を集めてくれ』

とたのみこむ。その愚連隊のボン引

きの手で日本人の助平客がワンサと押

しかけると、隣室で、パン助相手にア



チラ仕込みの四十八手の特技
を公開するのである。何し

る日本人と違つて、体質の

相違からそれが物凄く濃

厚でアブノーマルだ。し

かもそれが一時間にも及

ぶのだから、いかに商売

女といえど、さすがのパ

ンパン嬢もくたくたにな

つて、立上る気力さえな

くなつてしまふ。

それが終ると、二、三時

間休養して、Sはまた新しい

パンパンを相手に同じようなこ

とをする。

Sによる『国際のぞき』も、い

つか街中の人気をさらつたまではい

いが、これがMPに知れて、仕事の最

中に職場を襲われた。

その時、あわてたSは全裸のまま、

興奮した男体を堂々とさらけ出して表

に飛出した。そのあとから相手のパン



宮

パンも同じような恰好

で彼を追つて逃げた

が、すぐに捕えら

れてしまった。

前代未聞の『国

際捕物帳』とし

て、市の大き

な話題とな

つてい

る。

フエラチオで未亡人を窒息させた兵隊

女に体を吸わせて悦ぶことをフエラチオという。これを日本では『尺八』
といっているが、アメリカでは、この愛好者が多く、ロスアンゼルス地方には、フエラチオ専門の女がウヨウヨしているくらいである。

米国兵のBも、またこれの愛好者だったが、日本へ来ると、好奇心から、

『日本ムスメの味はどうだろう?』

と、お得意のフエラチオをやめて、もっぱら正常にパンパンとその実験におよんだが、困ったことには、Bの武器は特別に大きかったので、何人ものパンパンを実験したが、いずれも充分に満足することが出来なかつた。

そこでBは、

『若い女よりも、未亡人なら、どうにか満足出来るかも知れない』

と考へて、兵舎へ草取りの人夫として働きに来ていた四十歳になる本田京子(仮名)という未亡人に目をつけて口説いてみると、京子も貧乏暮らしであったため、金になることならと承知した。

そして、自分の家でBと実験をころみることになつたが、さてBの特別製のものでは、五人の子供まで生んだ京子でも間に合わなかつた。

Bはいよいよ興奮して、どうにも始末がつかなくなる一方なので、
『仕方がない、フエラチオなら、心配なく、目的を達することが出来るだろう』

と、それを京子にたのみこんだ。

『まあ、そんなこと……?』

さすがに京子は、顔を赧くして躊躇

つたが、千円札を五、六枚投げ出されてみると彼女は思いきつてそれを承知したのである。

しかしBのそれは、京子の口中にやつと入るくらいの大ささだつたので、彼女は、息がつまるように苦しかつた。

それでも、Bにかたこと交りの日本語や、手まねで注文されて、京子は大汗をかいていろいろと愛撫をこころみた。そして十分ほどすぎたころ、やがてBは絶頂に達したので、夢中になつてぐいぐいと体をおしつけて、京子の体を力一ぱいしめつけて目的を達したのである。

ところが、Bは立ち上るまで気がつ



かないで
いたが、
どうも女
の様子が
変なので、
体をゆすぶ
つてみたが反
応がない。

『どうしました』

Bはあわてて京子
の体を抱き起した時に
は、すでに心臓はとまっ
ていたのである。

愕いて医者呼んだが、も
うどうにもならなかつた。Bは
もちろん、口を咸して京子との変
態行為を語らなかつたが、死体を調
べると、口の中にあつた液体で、彼女
がフェラチオによる窒息死であること
がわかつたのである。



精力人夫の恥毛を守り神にする婦人將校

夫が戦地へ行つてしまつた後、婦人將校のK夫人は、毎夜ひとり寝のさびしさに堪えられなくなつていた。

ちやうどその頃、ハウスの近くで地ならしをしている、日本の人夫たちの日に焼けた肉体が、まぶしいほど彼女の官能を刺戟して来た。

その人夫のうちに「ナカムラ」という二十五、六歳の、米国兵も及ばない逞しい肉体をもつた男に、気がひかれた。彼女はある日、

「ナカムラ」

と声をかけた。

「アタシ、たのみたいことがある。今夜、十時ジャストに、柵の外の芋畠で待つていて下さい」

と云つた。

その夜、彼女は十時にハウスの裏に

ある芋畠へ出て行くと、中村が待つていた。

「よく来てくれたわね」

彼女はニヤリと笑つて、三千円程度の金をつかませると、

「私は、あなたを愛している。夫を戦地にとられた妻の氣持を察して——」

と言つて、いきなり、かみつくようなキッスをした。

中村も若く逞しい男だつた。外国の婦人將校の乱行も耳にしていたので、喜んで彼女の要求に応じた。

芋畠が無残にふみにじられるほど彼女の愛情は激しい。

豊満な肉体は、逞しい男体を絞め殺すほどであつた。

五分、十分、二十分——。戦いは続

けられたが、男の体には限りがある。

商売女相手に

強さを誇つていた中村の体も、

さすがにもうこれ以上は自由にならなかつた。

「だめです、そんなに……」

「男のくせに弱いね。日本人つて、それだから戦争に負けるのよ」

彼女は、もうどうにもならない中村の体にしがみついてくやしがつた。

「ナカムラ、もう一つお願いがある。

あなたの毛を記念のために下さい。これは、いつ戦地に行くとも限らない私の守り神にするの。私の国にも、異性の毛をもつて行くと無事に還れると言ふ迷信があるのよ」

と、彼女は、実に変態的な要求をした。中村は驚いたが、三千円もらつた



手前いやとは言えなかつた。彼はついに、彼女自らの手で、股間の毛を全部根元から切りとられてしまったのである。

それから一カ月ほど経つたある日。

中村はK夫人に呼ばれて、仕事の休み

時間に彼女のハウスを訪ねると、そこには、同じ仲間の

人夫たちが五人ばかり並んでいる。

(一体、どんな用

事なんだろう)

と、中村ばかりでなく、一同

はお互いに案じ

顔でいると、間もなくK夫人が

姿を現わした。

「みなさん、私もい

よいよお別れよ。大変

お世話になつたわ。明日

前線へ出発します。でもお

蔭さまで、生命の心配はないと思うわ。ほら」

と言つて、彼女は右腕をまくつた。

そこには、風変りな腕輪がはめられている。人夫たちは、互いにあつという

顔を見合せた。

自分たちが、止むなくプレゼントした例の毛が、立派な腕輪に生れ変つて

いるではないか——。

結局、同じような経験をさせられたその六人の荒くれ人夫たちは、今更のようになるほとと頷き合つた。



そこで彼らは、すこぶる神妙な顔を して、ほろにがい送別のお茶を御馳走 になつたのである。

裸女の群れを相手に精力競べをする將校たち

『恐怖の街』として最近クローズアツ
ブされた国際都市K。そのキャンブ
に勤務する將校たちにとつて、唯一の
楽しみは『土曜日の夜』である。

それは毎週の土曜日の夜、トラツク
二、三台に満載されてくるパンパン嬢

(中には未亡人、人妻、時には素人娘
まで狩り集められてくる)の全ストシ
ヨウと、その後に行われる『精力競
べ』の催しが、彼等に
無上の満足感を与
えてくれるか
らだつた。

夜にな
ると、



七色の電光に彩どられて夢の世界と変
る大ホールのステージに、四、五十人
近くの女が入り乱れて踊り狂う。しか
もそれが、全員一人のこらず全ストと
云うのだから、まさに筆舌に盡しがた
い光景を呈するのだ。

それはシヨウというよりも、『人肉
の市』といった方が適切だ。ずらりと
居並んだ將校たちは、ビールを飲み合
いながら、そのむせ返えるような肉と
肉の絢爛たる群舞を、好色に輝く
眼で凝視する。

全ストの群舞もなかなか
物凄い眺めであるが、
それを凝視する
將校たちの
妖しく

炎え立つ眼、ニ
ヤリとうす気味
悪く頬をゆがめ
た顔、これがエ

チケツトを云々し、文化を誇る人間の
集合とはどうしても考えられないほ
ど、それは異様な雰囲気をかもし出し
ていた。

やがて三十分間の踊りが終ると、彼
女らは一斉にステージに体を横たえる
のだ。

そこで將校たちはニヤリと笑う。そ
して、手なれた調子でトランプをきつ
て、簡単な勝負をする。最初に勝つた
者は、ビールと全スト見物で沸ぎりた
っている体を、ステージに運んで行
く。



つ
まり、
これから
彼らの『精
力競べ』が開
始されるわけ
である。
全ストの女たち
を何人相手とること
が出来るか、一番右端
の者から戦いを挑んで行
く。
最初の一人が三人目で終る
と、次の者は左のはじから相手
にする。
次は中央から右え、それから左
え、だが、必ず三人以下と言うこと



はない。

三人から五人が普通で、七、八人から十人が中等、中には十数人を相手とする豪の者さえあるという。

全員の勇士が一渡り決戦を終了すると、最後に、一番多く戦つたものは『元帥』の名称が与えられる。そして彼等が賭け合つた金を賞金として等級別に与えられるのだつた。

そして、この夜出場した女たちには、それぞれ一人宛に五千円程度の報酬が与えられる。

国際都市のカーテンの向うに繰りひろげられるエロとグロの痴呆図、浅ましき色慾地獄は、いつまで続けられて行くことか。

中女御殿する

川越金平



江戸城の大奥に秘められた、

女護ガ島にうごめく三千人

の美女。男子禁制の鐵則

に縛られ禁慾にあえぐ

御殿女中たちが、自慰

に溺れ、同性姦に現を

ぬかし、嫉妬に炎えて

狂亂する落花瞭亂の愛

慾繪卷！

張形に狂喜する長局

お江戸の真つ只中に「女護ガ島」と言

われていた江戸城の大奥。そこには三千

人の御殿女中が囲われ、いづれも歴代將

軍の乱行相手を勤めていた。しかし三千人

と言つても、実際にその相手を勤める者は僅

かで、しかも残された者は、はち切れんばかり

の女体を、男子禁制の鐵則の中にのたうちまわつ

て、禁慾に苦しまなければならなかつた。

史実大戸流れたらめ秘 乱狂に慾禁



もちろん、それらの男の味を知つた多くの女たちが、全然、禁慾ばかり続けていられる筈がない。その泉のように溢れる精力の排け口を、彼女らはどんな方法で慰めたか、つまり彼女らを僅かに慰めてくれたものは、御殿女中専用とまで言われる、例の『張形』だった。

彼女らは、最初にもつとも素朴な手段で『指』を用いていたが、家康時代に、町家の娘から御殿奉公に上つた『お茶の間』付きの多江という女が、持合せのコケシを愛用したところから、それに暗示をえて、御祐筆の月乃という中年増が、出入り商人の小間物屋に特別誂いしたことにはじまる。

それ以来、男体を形取つた、『張形』というものが、空閑に悩む女中にとつて、まさに救世主に等しくクロイズ・アップされて来たのである。

この『張形』も始めのうちは、木製の型に紙を厚く貼り、羽二重または革(鞣皮)などを貼つて彩色したもの、水牛、ベツコウなどがあつたが、一般には水牛の角で作つたものを愛用したらしい。

これらは、その頃大奥に出入りを許されていた、御用商人の小間物屋が売りつけに来たものだつた。

小間物屋スポスポさせて一つ売り

ほんもののように動かす小間物屋
小間物類の、底にかくした張形を、
色好みの女中たちに見せ、なかなかゼ
スチュアータつぷりに売れつけたもの
だ。

だが、長局も年をとると『張形』の
愛用だけでは、満足しない者も出てく
る。

『小間物屋さん、本物をつくりと言う
けど、ほんとうかどうか、貴方のものと競
べてごらんなさい』

長局に言われて、商売熱心の小間物
屋、一本でも多く売ろうとして、仰せ
にしたがつて、前のものをお目につけ
た。

『まあ、全くそつくりだね、どつちが
張形だか分らない。では、もらつて
おくわ』

そう言つて長局が、ぎゅつと
張形を握ろうとした途端、小
間物屋が、
「痛いッ！」



と、悲鳴をあげたので、長局は、
『本当に生きているようだわ』

と言つた。江戸小咄の一つで、長局
のいたずらを表現したものらしいが、
とにかく、張形もそのように、だんだ
ん進歩して、生きているように巧みに
出来たものさえ現われた。

革製の品がその一つ、これは実感を
出すために、その胴の中へ湯を入れる
仕掛けになつてゐる。

湯加減を握つて見たと長局

という川柳があるように、人体に等
しい熱度のものを愛用して喜ぶが、こ
れが余り熱すぎて炎傷をおこすといふ
場合もあつた。

一升の湯では足りない長局
淫奔多情、精力強靱な女中になると
湯を入れ代へして用ゐるので、一升で
は足りないという川柳だ。

それほど彼女らは、豊かな精力を持
てあましていたのだ。

ぬく灰がよいと局の伝授なり

張形愛用に慣れ、経験と工夫を積ん
だ長局は、新入りの使番、御手下など
の女中に、湯よりもぬくみの持続する
灰を入れた方が、喜びが多いと教へる
わけである。

なるほどと張形へかんの酒

昔から、湯上り女に、ほろ酔い男と
いわれ、この男女が関係する場合が一
番理想的だと伝えられている。つまり

女にとつては、ほろ酔い程度の男の
肌から包み酒の香が、喜
びを加えるので
ある。

だから、
張形へも酒

のかんをしたものを入れ
て、匂いをかきながら
用いると余程楽しめ
るというわけだ。

これに用い

た酒のこと

を『下

酒』と

言つた。

つまり

下の口

に飲ま

せるか

らであ

る。下酒

について、長

局の変態小唄を紹

介してみよう。

長局たち、下酒を捨て

るのは惜しいと、互いに寄せ

集めて面白半分に小間物屋に飲ま

せる約束をした。酒に酔えば、品物を



安く

するだ

ろうと、

或日、著い

小間物屋に集

めた下酒を五合

ほど飲ました。

いい気持になつた

と見えて、その小間

物屋は、品物を安く売

つた揚句

『ああ、こんな酔い加減

のいい酒は、生れてはじめ

てだ』

と、言う。

『それじゃあ、好きな女のところ

へでも行つて、存分に遊んでおいで

な』

と、長局がからかうと、

『いや、数十人の女と楽しんだような

氣持だから、それには及ばない』

と、答えたと言う。

変態女中になると、張形を足首にく

くりつけて用い、両手にはふとんを抱

きしめて実感味を出す者もある。

張形を激しく使用する女中のそれは

だいぶ大きくなつていると見えて、か

かとまでがかくれたと言うから、物凄

い。

これら、大きくなりすぎた女中のものには、特製の張形がある。

づないもの湯が二三合入るなり

つまり大きい張形になると、二三合の湯が入つて徳利よりも大きいと言うのである。

稀代の色豪六代將軍家宜は美しい御祐筆頭千波に目をつけて、一夜愛することになつた。その時、家宜がどうも

余りこたえないので、変に思つてゐると、千波が、

『上さま、焦らさずにお早く』

と、せきたてた。

『いや、もうとつくに』

と、言うのと、

『あら、そりですか』

と、答えたと言うくらい千波は偉大であつた。これも張形によつて体を変化させたもので、女中たち仲間から、『千波の五合』と言うニツクネームまで頂戴していた。五合徳利ならマツチすると言うわけだ。

家齊を襲つた

女中百人

『徳川の三大色豪』と言えは家康、六代の家宜そして十一代の家齊だ。家齊は十五才から七十才までに、つねに二十人の女を寢所にはべらせて、五十五人の子供まで生ませてゐるくらいの猛者である。

ところが、三千人の女中がゐると言うのに、特別に一定した二十人の女ばかり寵愛していたため、彼の時代にはかなり、女中の性犯罪が続出したほどだ。

そのために、女中たちは、

『二十人だけを特別に御寵愛なさるとは片手落ち、私たちだつてそり禁慾ばかり続けてはいられない。この上は、死んだつもりで上さまを襲うことにしましょう』

と、御錠口付きの花江をはじめ、闘

士？ 百人の女中が慾情する身に恐しい企みをした。

家齊は五十畳の寢所に二十人の妾と共にやすむのがつねで、或る嵐の夜、寢所に入つてそろそろお楽しみをはじめようとした途端、言葉もかけずに花江を先頭に、殺氣立つた美女百人が入して来た。

『夜中、何ごとじや』

家齊は、ただならぬ女中たちの様子に吃驚して叫んだ。

『上さま、私たちも、御寵愛くださりませ』

花江は言うが早いか、家齊の体に武者振りついた。と、一斉に数人の女中が加勢して家齊を押し倒した。

『これ、余に向つて乱暴を……』

家齊は、叫ぶ口をおさえられ、四方から手足をおさえつけられた上、全身とろろきらわずにかみつかれた。

女中たちは、獲ものにくらいつく飢えた女豹のように家齊を襲つた。



御殿女中と言つても、上は『上臈年寄』から下は『お手下』『お使番』まで約十五の階級に分れている。

これらの女は、貧乏な旗本や御家人の娘、金持の町家の娘もあり、親たちは、娘に上流の行儀作法と教養を与え、ために奉公させることが、当時の嫁

入り条件の一つでさえあつた。

だから例え、將軍に手をつけられても、一種の名誉と考へて親子そろつて光榮にしていた。

中にはお妾として、奉公する者もあり、これはまず『御中臈』を拜命し、子供を生むと『お腹様』と言われ『御上臈年寄』の最高位に昇進する。

また一般御殿女中でも、手がついて、寵愛され続ける、と、上様づきの御中臈になることが出来た。

しかし

さつぱりお声もかからず、お手がつかない場合は、絶対に異性にふれることが出来なかつたから、彼女らは、美しい男を見ると、矢も楯もたえられなくなつてしまふのである。

幕末のころ、老中であつた松平伊勢守は、当時『業平』と謳われた美男子で、道を歩くと、彼が踏んだ土さえ持ち帰る女まであつたくらいだ。

この美男老中が、月に一回大奥を檢分する。かねてから、この日は女中どもの腰も浮きたち、姦しい動搖をしめす日だつたが、伊勢守を垣間見るだけの楽しみでは我慢がならず、かえつて炎をかき立てられ、積りに積つた男恋しさが堰を切つて、或る日、とうとう一大エロ事件を捲き起すに至つた。

女中たちは、いつものように明間にかくれ、障子や櫺の隙間から眼を皿にして、いまや遅しと伊勢守を待ちかまえた。

やがて、今業平の伊勢守

が現れ
ると、彼

女らはゴク

リと息をのん

で、俄かに浮き腰

立つた。

『ほんに、いつ見てもよい殿御
じや』

『あれ、あれ、わたしを御覧になつた
わ』

『まあ、ひどいわ。そんなにお押しに
なつて』

『あれ、あなたこそ……』

と、互いに思い思いの声をあげて

しめき合う。

あまりの騒々しさに、

『何事じや!』

伊勢守は足をとめ、さわがしい座敷
の襖を自らの手でサツとひらいた。



『あれッ』

『伊勢守さま』

慌てふためいて逃げまどうもの、一

時に混乱したとさくれねに、感極ま

つた数人の女中が、伊勢守の足もとに

すがりついた。

『無礼者ッ!』

伊勢守は、女をふりはらつて、ハッ

タと睨み据える。ところが、その女中

たちが逃げ去つた落花狼藉の跡には、

点々と『張形』が散らばつていたので

ある。

これが將軍に知れて、
問題は大きくなつた。し

かし何分にも江戸城中の

ことで、この変態エロ事

件は、表沙汰にはならず

内落で終つたが、これ以

後は伊勢守の城中検分は

許されなくなつた。慾情する御

殿女中の淫行の中でも、この事件は稀

に見るスクープであつた。

恐るべき同性愛

とサディズム

男子禁制の『女護ガ島』における女

中の性慾処理は、自慰のほかは『同性

愛』がある。

一つ芋上下にくらう仲のよさ

などと言う川柳が残されているよう

に、同性愛用『複張形』がないころは

専ら芋とか手ごろの大根など野菜類を

用いたと言う。

『表使い』の尾花、『御三の間』の町江の同性愛が、代表的なもので、同じく『表使い』の妹瀬と三角関係におち入り、町江は尾花のサジ行為のために殺されたほどだ。

尾花が病氣になつた時は、二十三才で、十八才の町江に肉親にもまさる世話になつたところから、互いに愛し合うようになつた。

そろそろ起上れるようになつたころ尾花は町江を呼んで、

『わたしは、あなたが大好きよ』

と、言つて、町江を抱きしめた。町江も好きな尾花であつたので、

『わたしだつてあなたが好きですわ。』

お姉上のような氣持がします』

と喜んだ。すると尾花は、

『じゃア、わたしの言うことをきいてくれますか？』

『ええ、どんなことでも……』

『それでは、わたしのお乳をもんでお

くれ、何だか張るように痛むから』

と、町江に乳をもませた。そのうちに彼女は、次第に興奮して来た。

『あれ、もんでは少し痛いから、今度は吸つておくれ』

『はい、よろしゅうございます』

『その代り、わたしも、あなたのを吸つてあげるから……』

『まあ、そのようなこと……』

こんな調子で、二人の愛情は深くなつて行つたが、或る夜、二人が、同性愛における最も極端な愛接、69なる行為をしているところを、尾花の先輩である三十才の年増妹瀬に見つかつてしまつたのである。

『これ、町江、何をしている。そのような淫らな行為で、清い間を汚すとは許しておけませぬぞ』

と、町江ばかりを怒り、中庭につれ出した。

この妹瀬と言うのが同性愛の常習者で、いつも男役をつとめている氣の荒

い女だが、根が多情の性だつたので、古い相手に飽きると、新しい相手を物色しては暴力的に満足をしていたのである。

この恐い妹瀬に見つかつたのだから、たまつたものではない。町江は、妹瀬にぐいと髪の手をつかまれた。

『わたしの言うことをきけば、よし、さもなくば上さまに申上げる。さあ、どうじゃ』

『はい、どのようなことでもお仰せにしますがいますから、どうぞこのことは御内聞に……』

『おゝ、きくと申すのじゃな。ホッホッホ、可愛い娘じゃ』

そう言ふと、妹瀬はガラリと懷剣を引き抜いた。彼女こそ、愛する者の体に疼痛を与えて喜びを充たすサジ患者だつたのである。

妹瀬は、いきなり町江のむつちりした尻にチクリと刀を刺した。

『あれ、お助け……』



「しッ！ 静かにせぬか！ 声を立てると身のためにならぬぞ！」

町江は、じつとこらえていた。

「フツフツフ……我慢強いね……」

さすがの町江も痛さにたえかねて、

「お許し下さいッ！」

と悲鳴をあげて中庭を逃げ出した。

妹瀬は町江を追いかけると、後から抱きしめ、ぐいと押し倒した。

月を見上げて横たわる、町江の体に馬乗りになると、妹瀬は、同性愛用の

張形を取り出した。

こうして町江は、妹瀬に手ごめにされた。

恐しく苦しいとは思いつつも、目上でもあるし、暴力的な勢いにのまれ町江は尾花にかくれて妹瀬の相手をとめるようになった。

しかしこのことは、いつか尾花の耳に入つた。命をかけて、自分の妻のうちに愛していた町江が、自分を裏切つて妹瀬に寝返りを打つたことは、尾花

としては、可愛さ余つて憎さが百倍の憎悪に燃えたのも無理はない。

或る夜、尾花は町江を明間につれこんで、いきなり下腹部を短刀で突き刺して昏倒させてしまった。

「お前は、誰にもわたさない」

と言つて町江を殺し、彼女の大事なものを抉り取つた。そしてそれに頼りしながら狂つたように長い廊下を駆け出した。

「尾花さまが氣狂いになつた！」

「町江さまが殺されている！」

と御殿女中はさわぎ出した。

一同がかけつけて町江の死体を見ると、全身赤い生傷と、紫色の斑点で、雪のように白かつた肌が無残にも汚れ果て、肉体の一部はむごたらしくぐり取られていた。

禁慾が原因した恐しい変態殺人事件として、江戸城大奥史を猟奇的に彩つたものである。

女の泣きどころを発見するのは實さがしよりも難かしい。
どこのボタンを押せば女は絶叫するか——なんて問題はい
とも簡単、ひと握りの小さな器機で萬事OK! 人混みや
乗物の中でチヨツト觸れれば女の急所がたちどころに判る
と云う新發明探知機の話!

▼ネバネバは
不衛生だわ▲
女性をシンからよろこばすことので
きる男性こそ、女性にシンから愛され
るのである。

では、如何にしたら、女性をシンか
らよろこばすことができるか?

この問題は、妻帯者のうちの
何割かの男が、すぐに
手を上げて応え



ることが
ができる。

「ボクは死ぬほ

ど、キミを愛している

よ。たとえ火の中、水の中

にでも飛びこむし、キミがやれ

と云うなら、銀行ギヤングにもなる

よ」

などと、ひろくまもん百万言ついやしてみても、

女性をシンからよるこぼすことはでき

ない。

『では、どうするのです?』

独身者なら、まずこころ開くのがあた

りまえである。

恒岡三十五

わかりやすく一言にして云えば、女
体の肉體そのものに満足感をあたえる
ことだ。

天は二物をあたえず、というが、女
性はお気の毒にも分曉ぶんげんという苦しみを

造化ぞうかの神様も、つくづくこの苦しみ
には同情されたに違いない。さればこ
そ、いかなる男性も味わうことの出来
ない、深い性のよるこびをあたえたの
である。

だが、この理窟りくは承知していても、

味わ

ねばな

らぬ。一ツ

間違えば、あ

の世へ直行する

危険が多分にある。

文字通り生命がけの苦し

みなのだ。

造化ぞうかの神様も、つくづくこの苦しみ

には同情されたに違いない。さればこ

そ、いかなる男性も味わうことの出来

ない、深い性のよるこびをあたえたの

である。

だが、この理窟りくは承知していても、

なまなかのことでは、女性の深い性のよろこびを掘りあててやることができない。

若ければ若いほど、経験の不足と、自己満足のために、自分だけさつとよい気分になり、あとは野となれ山となれで、高いびきで眠つてしまふ。

これでは生涯、女性は浮ばれない。せつかく神様からあたえられたよろこびを、生涯味わうことができないとしたら、女性にとつてこれほど不幸なことではない。

と、考えた性科学者？　たちが、女性諸君をよろこばすさまざまな薬や器具をつくつたが、筆者にいわせれば、まだまだ不足である。いや、それとも実は、男性の自己満足のための道具にすぎないのだから――。

『ね、おつぱい、吸つてよ……』
よろこびの絶頂に達しようとする前に、こんな要求をする女性がある。
つまり、一方だけの攻撃でなく、あ

ちらちらと同時に攻めたてられるところに、彼女たちのよろこびが一そう強まるからである。

女性は男性とちがい、体全体が性感帯になつてゐる、と学者先生はおつしやる。しかしながら、女性の顔がみんなちがうように、毛のはえぐあいにもいろいろ趣きがあるように、ピリリと電気にうたれたようにひびく性感帯のある場所は百人百色である。

ある女性はキッスを好み、ある女性は乳房を吸わせ、ある女性は耳たぶを噛ませるなど……。

ここまでお喋りすればおかりのことと思うが、すなわち、その女性の持つてゐる急所を知る人こそ、彼女をシンからよろこばすことが、できるのである。

ところが不幸なことに、女性自身が肝心の自分の急所がどこであるか知らないのである。

あそこか、ここかと、探つてゐる

ちにやつと発見できるのだ。したがつて、チョツとやソツとの経験では、ただ何となくものたりない味をのこすばかりである。

筆者の知人が、ある女子大生に二度目のコイツスをのぞんだところ、
『あんなのきらいよ、なんだかネバネバして、不衛生よ！』

と、ニベもなくことわられてしまつた。

これなぞまさに、男の方だけがいい気になつて、女子大生の彼女の方にいささかも快感を、あたえなかつたからだ。いや、自分が満足する時には、女性の方も満足しているのだろうと考えつてゐるのが多いから、こんなことになつてしまふ。

しかし、不衛生！　とは、何んと味気ない表現ではないか。

▼小型だが性能は

百パーセント▲

電波探知機なんて、トテツもない機械が発明されてるのを知らなかつた日本人は、B 29が暗夜に落すバクダンの的確さに、驚き怖れるばかりであつたが、その正体がわかつてみれば、ナンダということになつた。

このように、人間の世界には、人間がえがく夢の可能性を実現しようとして、無数の人間が必死になつてゐることを私たちは知つてゐる。

たとえば、たいがい人間は、身体のだこかを患つてゐるか、弱めてゐるのであるが、それを本人が意識せずにいる場合が多い。だから、

気のついた時には手おくれになつてゐる。

これではいけないというので、ある電気化学者が、病氣探知機なるものを

発明した。

この機械がひとたび人体にふれると病源体の秘密が、たちどころに発見されるのである。まことに不思議なほどはつきりしている。胃の悪い人、

肺の弱い人、その他あらゆる病氣のところとその機械

がふれると、ビリ

ビリとひびくのである



る。つまり、何処も悪くない人には、少しも電気が通じないシカケになつてゐるのだ。

ところで、私の親しい友人に、Y君という風変りな男がいる。この男はなかなか奇抜な才能の持主だつたが、彼がこの機械を一見するや、ウーン、となつた。彼はすばらしい啓示にあつたように、それから、ある特別な研究にボットウしはじめた。

読者諸君、それが、何であつたと思ふ？

サテ、話がだいぶ余談にわたつたようであるが、Y君は、万人の女性に福音をたれようとしたのである。

いや、万人の女性から愛されんがため、の研究にふけつたというのが正しいかな？

とにかく、はじめに書いたように、女性の第一の性感帯（性器）は誰にでもわかるが、第二、第三の性感帯がなかなか発見できないために、お互いが

幸福の絶頂を知らずにすごしているのである。

そこで彼は、病氣探知機ができるくらいなら、性感帯探知機だつて發明できないことはないはずだ！ そう決心したのである。

指頭サツクの先にイボイボをつけたものをつくり、女性をくすぐることによつて性感をたかめた、なんて昔話はあまりにも原始的ではないか。

Y君は、幾たびか失敗しながらも、半年ほどの後には、問題の性感帯探知機を完成することができた。

この機械の特質は、小型でポケットの中に入れて、持ち歩きができることだ。しかも、愛人でも充分に使用ができる。

くわしくいうと、横二寸に縦三寸五分、厚さ一寸という、懐中電燈みたいな大きさのものが、電源池になつており、そこから長短自在にできるコードが出ており、その先には、体温器のよ

うなガラス製の棒がついている。大人の手の中にならポツカリ入るほどの物であるから、たくみに使用すると、誰にもさとられずにすむのだ。

それだけに、この性感帯探知機の一般的な販売を許可すべきか、どうかか、厚生省で問題になり、今だに許されていない。

つまり、悪用されるおそれが強いからだ。しかし、ある種の研究家が使用するにはさしつかえないことになつてゐる。

したがつて、読者諸君は、このような便利な機械があることを御存知ないと思う。

以下は、發明されてから間もない頃Y君が実験をこころみた時分の話を紹介しよう。

▼商賣女も

たちまち悲鳴▲

とにかくY君は、探知機が完成した

時には狂喜せんばかりのよろこびを感じた。

もつともな話だが、その時、彼の頭にフツといったずら心が浮んだ。何しろ研究に没頭^{ぼつちう}していた間は、すっかり女性から遠ざかつていた彼だけに、ホッとすると同時に、そのことがまず第一に思い出されたとしても、不思議はない。

ただ、すこし違ふところは——
新宿特飲街^{しんじゅく}にいるS子とカケをしよ

うと思いついたことである。

商売女というものは、誰もが知つてゐるように、肉体を売りものにしてはいるが、自分は決してオルガスムを感じないようにするし、そういう特別な鍛鍊^{たんれん}をしているから、正攻法ではとても勝負にならない。

もちろん、彼女たちだつて人間だから相手によつては、恋をすることもあつて。恋をした男にだけは、心からサービスする気になるのだから、その時は

ごく自然な気持でオルガスムに達することができるのである。

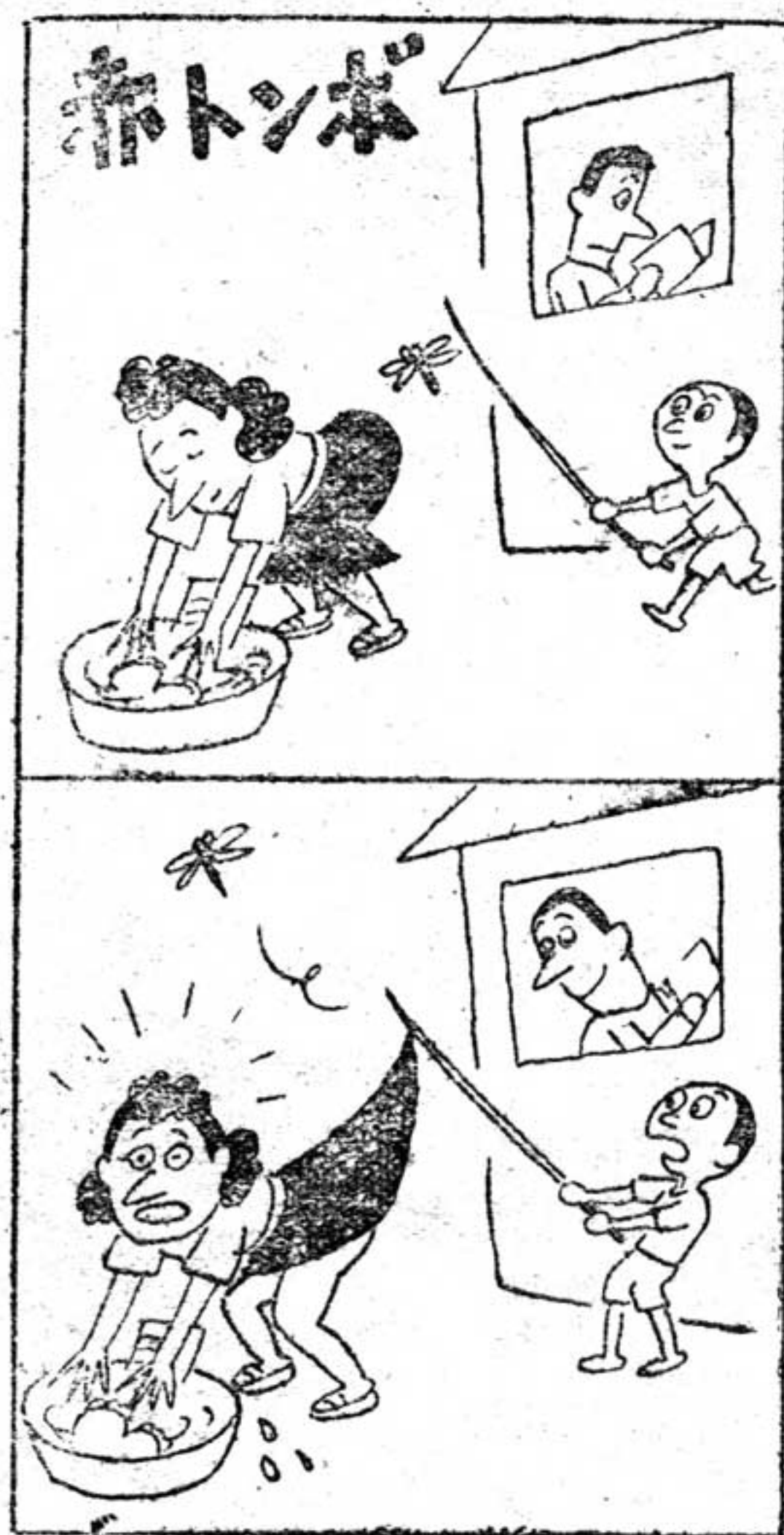
しかし、彼の知つてゐるS子というのは、まことに見事な肉体の所有者^{しよそしやう}なので、彼はいつも心をひかれるのだが一度だつてオルガスムに達したことがない。いや惚れられていながら、いつもホドよくあしらわれているのである。

残念だが、今までの彼の技術では如何ともすることができなかつたのである。

そこで、今夜こそと、Y君は覚悟^{かくご}をきめた。これで失敗するようならば、自分の血の出るような今までの研究も水の泡になるのだ。

いたずら心とはいいいながら、その時はちよつと悲愴^{ひさげ}なものがあつたにちがいない。

『あ、おめずらしいわね。すっかりおみかぎりかと、心配してたのよ』
会えば、相変らずホドのよいことを





云うS子
である。
『実はね、何とかしてキミに勝ちたい
と思つてね』
『だつて、いつも上になつて、勝つて
るじやありませんか』
『ふふん、あんまり僕を、甘くみるな
よ』

『では、
今夜は逆でゆ
くの……あたし、
あんまりアレは好きじ
やないのよ』
『まあ、態位などは、如何でもよ
い。それより僕は一度キミを負かして
やりたいんだ』
『あら、そりやア無理よ、せつかくだ
けどね……』
『いや、断然ノック・アウトしちやう』
『じやア、つまり、あたしを泣かすこ
とが出来ると思つてゐるの？』

『そうなんだ』

『強壯剤でも嚙んできたの？』

『そんな薬ぐらいで、負けるキミじや
ないことくらいは、すでに試験済みだ
よ』

『あら、今まで使つたことあつたの？
うッ、ふ、ふ……。でも、あたしが泣
かないとしたら』

『一週間、続けて来るよ』

『で、泣いたら……』

『まさか、今夜をロハにしろとも言え
ぬが……』

『いいわよ。そいじや約束するわ』
と云つたぐあい、二人は約束をし
て風呂にはいつた。性感帯探知器は、
血液のたかぶつてゐる方がハツキリす
るからである。

さて、いざ合戦となつたときには、
さすがの友人も興奮のあまり手先がふ
るえたという。

一週間続けて来るか、今夜が無料に

なるかなんてケチなことを考えたから
では毛頭ない。

用意して来た探知機のガラス棒を持
つて、

『S子さん、今夜こそ、キミの神秘が
どこにあるか探つてみせるから覚悟
したまえ』

『ふふふ……。わかるもん
ですかア、そんなこと。

そこがわかつたら

あたしの敗けに
なるもの。知つ
ているのは彼氏
だけよ……。だけ

とまさか、あ

んなた彼氏から

聞いたのじゃ

ないでしよろ

ね』

『よせよ。キ
の彼氏なんて
前も知らぬし、

顔も知らんじやないか』

言いながら、うすい寝巻の上からさ

するように、探知機をあてた。

『あら、あたしの体温を計るの?』

『そりなんだ』

『そんなことで、わかるの……』

だが、Y君は、それにはもう答えな
い。

乳房にあてると、八〇までピンと上
る。なるほど、ここは高い。しかし、

どこかに一〇〇の場所があるに

ちがいないことは、そ

れまでに乳房の

技巧はここ

ろみて

いる



からよくわかる。腰にきて、臍に下るにしたがつてメートルは下つて行くばかりである。

デルタ近くの内股にあてると、八五まで急に逆上したが、まだ安心できない。

キッスも駄目であることを知つていゝる。残つたところは耳たぼであるが、はじめは左にあてると九〇に登つた。次に右にあてると、びたり、一〇〇になつた。

彼のすることがあまり無気味なのでさすがのS子も息を殺している。そのこと自身が、ある種の効果になつたのかもしれないが、あとは、そのメートルに現れた一〇〇と、彼女のオルガスムが合致するかにあるのだ。

S子の方にしても、いつもの方

決とちがうので、両方がさながら真剣勝負のように、緊張してしまつたのである。

本来からいうと、こんなことではまずいのだが、これに勝てば、百パーセント探知機の性能を発揮したことになるので、Y君にすれば、さながら天下をとつたも同様なのである。

何も知らぬ客なら、デルタ地帯に前戯の手をさしのべるところであり、いつもは彼自身がそうであつたが、その夜はまず、右の耳たぼに吸いついた。そして舌の先で軽く舐め、急緩自在、さながら赤ン坊が母親の乳房を吸うときのように、時にはそツと歯先をあてたりする。と、何と云う不思議！五分もたつたためかのうちに、S子の吐く息は次第に荒く喘ぐようになり、くねくねと軀を動かすようになった。もちろん、これが何を意味をするか、Y君にはすぐのみこめたので、すかさず彼はデルタ地



帯の

攻撃に

うつつた。

つまりY君は、

二つの性感帯をい

どに攻めると云う方法に

したがったわけである。

『あゝ……』

ただ一声であつたが、いまだか

つて聞いたことのない、S子の遺精な

い悦びの声を耳にしたY君は、そこで

始めてエンマリと北豊えんだ。

それからのことは、くわしく説明す

るまでもない。

『敗けた、完全に敗けたわよ。どうし

てあたしの耳に秘密があるのがわかつ

たの?』

戦い終つて、S子は眸をうつとりさ

せながら、正直にカプトをぬいだので

ある。

これは成功した話だが、次には失敗



した話
をしよう。

Y君は、S子の試験ですつかり有頂

天になつた。そこでつい、その帰りに

混雑する都電の中で、美しい婦人に身

体をすり寄せて、性感帯何処にありや

と、片ツぱしから、素知らぬ風で、背

中にあてたり、腰にあてたり、臍にあ

てたりしているのを、おり悪く乗りあ

わせていたスリ係りの刑事にあやしま

れて捕まつた。

警察に連行されて、いろいろ取調べ

をうけた時には、さすがの

彼も弱つてしまつたが、

とにかく、スリでない

ことを証明するため

に探知機の実験をし

て見せることになつ

た。

Y君がズバリ探知

機をあてたのは、

男性の最も大事な

場所である。と、

それは一〇〇であ

る。

『それなら俺のはどうだ』

『いえ 男はどうなたでも同じです』

そんなわけで、Y君は無事に釈放さ

れたが、市販することの問題は、都電

中で失敗したことが原因になつたのは

いうまでもない。

だが、この機械の偉力を読者諸君に

見せることのできぬのは、何としても

残念至極である。



女の體臭で彼女の
前夜の秘事が
ズバリと當る——
そんな犬みた
いな鋭い鼻があつ
たら便利だろ
う。ところが、
頗る嗅覺術にタ
カ



けた男が、女體を嗅いだだけで
女性器の鑑別、處女非處女まで
見破るという鼻利き天才兒の嗅
覺修業談！



氣持で漫談的
に述べて見ようと思

妻の體臭は絶品

終戦後、性の研究が盛んになつたこ
とは、まことに結構であるが、どうも
自ら実験した上での研究というものが
少いように思われる。たいていの著作
が、外国の学者の受け売りであり、紹
介にすぎないものが多いようである。
しかし、私がこれから述べようとする
のは、そんな有りふれたものではな
い。ことごとく私自身の実験によるも
のである。と云つて、堅苦しい学術的
なことを述べるつもりはない。極く

う。

正直に云つて、私は女が非常に好き
である。今年四十六才、子供が三人あ
るが、未だ子供よりも女房の方が好き
である。年をとると、女房よりも子供
の方が好きになると云う人があるが、
私にはその氣持は分らない。

と云うと、よほど綺麗な女房だろう
と思うかも知れないが、実は、あまり
偉張つて他人に見せられるご面相でも
ない。

では、肉体に、特に魅力でもあるの
かという、そりでもない。

浜田凡児

では、ど

こにどんな魅力

があるのか——。つまり

彼女は素晴らしい体臭を持

っているのである。体臭美人と私は云
つてゐる。

今年四十一才、三度目の、女房であ
る。私も若い時は、容貌本位で女房を
もらつた。相当な美人であつたが、或
る時、某遊廓に遊んで、一人の遊女と
接したところが、その腰部から発する
芳香の魅力に溺れてしまつて、終にこ
の女に乗りかえてしまつたのだ。

ところが、この女が、わずか二年半
で病死してしまつたので、それから半
年後に、今の女房と結婚したのだが、
それにはこういふ面白い話がある。

当時、私は東京西郊の馬場に住んで
いたのだが、或る晩、おそく会社から
帰つてくると、林の中で女の悲鳴が聞

またのだ。

強姦かな、と思つて走つて行つて見ると、正に最中なのである。

『馬鹿野郎!』

と思ひ切り大きな声で怒鳴ると、男はあわてゝ逃げて行つた。女は氣絶したまゝ、ズロースは破られ、太股が現れている。私は、声をかけながら乱れた着物をなおしてあげたのだが、その時、ブロンと鼻を刺戟したなんとも云えない素晴らしいにおい!

『これだ!』

と私は喜び、やがて女が正氣に返つたので医者につれて行き、その翌日、さつそく結婚を申込むと強姦をされた女であるから、直ぐに

● Kと相成つた次第である。

磨けば光る嗅覚術

以来私は、女の体臭というものに趣味を持つて、いろいろと研究をしてきたが、人間の嗅覚というものは、訓練によつて相当発達するものだということに分つた。

むろん、私の鼻は生れつき相当鋭い感覚を持つていたらしい。と云うのはまだ母親の顔など識別できない頃の話だが、その日母親が留守をしたので、隣の奥さんがお乳を飲ませようとしたがどうしても飲まず、ただ泣くばかりで困つていたところへ、母親が帰つて来て、お乳を与えると、飛びついて飲んだ、というのである。母親のにおいを知つていたに違いない。

中学二年生の頃、
兄にラブレター
が来たこと

があつた。机の抽出しに入れてあつたのをそつと出して読んだのだが、名前はまだM子と書いてあるだけ、文面から考えても誰だか分らなかつたが、紙にうつっている臭いをかいでいるうちに、ハツと女の顔が浮んだのだ。半年前、新宿の本屋で立読みをして

いると、
『あたし杉原ですが、あなたの兄さんと同級生だつたのです。どうぞお帰りになつたら宜しく……』

と云つた女があつたが、その時にブロンとスマイレの臭いがしたのを、思い出したのである。

試みに兄に聞いて見ると、やつぱりそうだつたので、自分ながら驚いたものだつた。

しかし、そのままに過したら、今日のように、処女、非処女を嗅ぎ分けることが出来るほど発達はしなかつたに違いない。

では、どんな訓練をしたかと云うと



毎晩
一時間
ぐらい目か
くしをして、
色々なものを女房
から匂わせて貰つたの
である。盲人は聴^{きこ}や触^ふ覚^{かく}
が発達しているといふことが
ら思いついたのだ。



まず最初
に嗅
では触らない。それでもちやんと当て
ることが出来た。腰のにおい、胸のにおい、頭のにおいと、それぞれ特有の
においを持つていたのだ。なんでもな
いことのようにだが、代つて女房に
嗅がせたところが、完全に失
敗してしまつた。

『自分の臭いだからです
わ』

と云うので、私の衣類や帽子
を嗅がせたが、わかつたのは
帽子だけで、あとはみんな失敗
だつたので、

『どんなもんだい』

と私は鼻を高くしたものだつた。

それから女房は面白がつて、私の知
っている近所の奥さん方の着物を集め
て来て私に嗅がせたが、五つのうち、
四つまでピッタリと当てることが出来
た。つまり、平素から奥さん方の銘々
の臭いを知つていたので、当てること
が出来たのだ。

帽子であつた。むろん手

ところ
が、一ッ
だけはどうして
も当らなかつたが、
あとで聞いて見ると、私
の知らない親類の娘さんが来て
いて、ためしにその着物を出して見



たのだと分つて、かえつて私の嗅
覚の鋭敏さに感心したのであ
つた。

臭いて當て る性行爲

こんな風に鼻がきいて来ると、一人の人間の身体の各部分の、それぞれの臭いを嗅ぎ分けるなどは序の口で、体臭の個人差までちゃんと分るのである。こうなるともう犬に近い。犬は自分の主人の臭いを立派に心得ている。嗅覚の総元締めとも云うべき、いわゆる嗅覚中樞きやうちゆうというものは、脳の中にあるが、犬のは人間のよりそれが遙かに大きい。それであんなに鼻がきくのであるが、その他に鼻の中の粘ねん膜神経まくしんけいが、犬はよく発達しているのに、人間のは著しく退化している。

嗅覚中樞
の方

はどうにもならないが、鼻粘膜びなんまくの方は修練によつて、相当発達するものだと言われているが、私はそれを見事に実証したのである。

そのために私は、相手があればよく賭けをやつた。賭けをすると真剣になるからだ。何事も真剣にならないと極意は分らない。負けてはならないので鼻をクンクンさせて十分間も女の腰を嗅いだこともあつた。

腰を嗅がせる女なんかあるのかと、不審がる人があるだろうから、一つだけ話して置こう。それは正月三日の晩であつた。女房の友達が四五人来て、カルタ会をやつたのだ。その時に、私が嗅覚の自慢話をすると、

『そんな馬鹿なことあるもんですか』と云うので、それなら賭けをしようと言ふことになつた。

どうしたかというとき、私が目かくしをしていて、並んで立つてゐる彼女達の腰を、着物の上から嗅いで、誰々だと

云い當てるのだ。

私としてはなん

でもないことだが、彼

女達にとつては不思議だつ

たに違いない。私は、難なく云い當て

て、その時の金で、一人から五円、宛せ

しめてやつた。

そこで今度は、

『これは正直に云つて貰わなければ困るが、昨夜旦那と寝たかどうかを、云い當て、見ようと申すのであります』

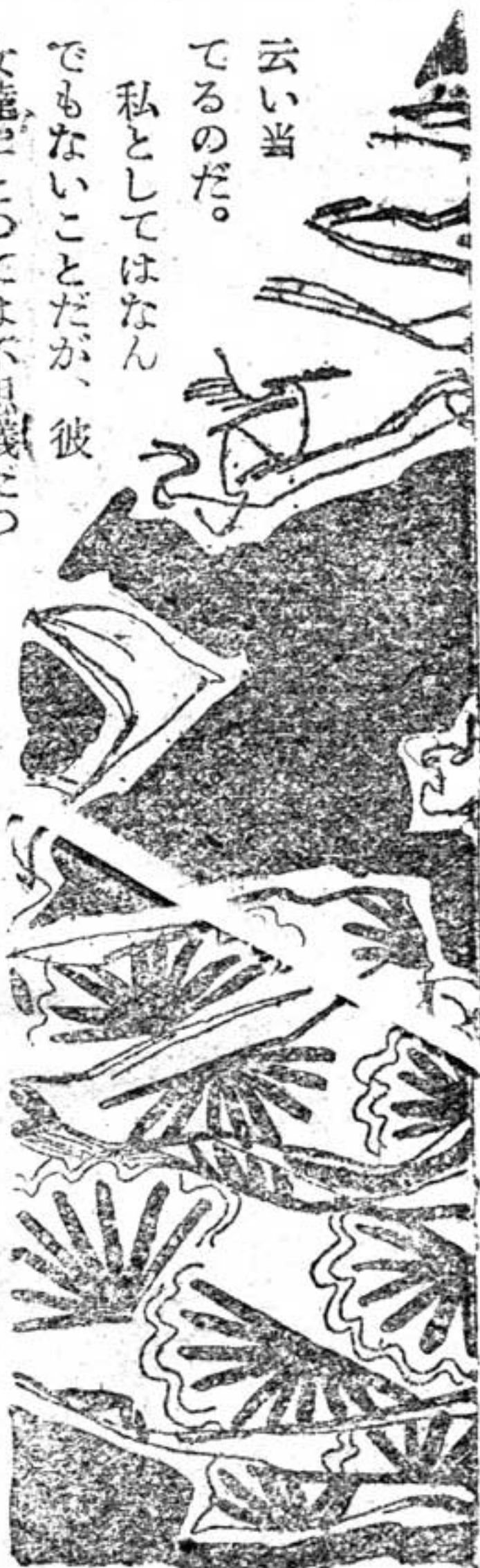
と云うと、取られた五円を取返そう

と思つて、彼女達は直ぐに賛成。

『しかし、これはちよつと微妙ですから、着物の上からでは工合が悪いのですか……』

『あらいやだ。そんなこと云つて、そろと見るんじゃない？』

『いや、とんでもない。このタオルで



目かくしをして貰うんだし、あなた方がちやんと監視かんししているんだから、そんなことは出来やしませんよ』

何しろ大事なところを露出するのだ

から、彼女達も直ぐには賛成できず、

いろいろ相談をしていたが、

『じゃア、そうしますけど、絶対に、

誰にも云わないという約束をして下さる？』

『え、それはもう』

そこでいよいよ初めたのだが、今度

はジカであるから、うつかり鼻がくつ

ついてはいけないというので、女房の

ヤツが、私の頭を両手で支えてそつと

近づけるのだ。

実は、着物の上からでも分つたのだが、四五人も並べて置いて、ジカに嗅がせて貰うなんていう機会は滅多にないので、わざと注文をつけたのであつた。正直のところ、私も非常に亢奮した。

素人から見ると 見えないのだからと思うだろうが、私の鼻は、鼻でありながら既に眼の働きをしているのである。臭いと同時に色や形までが、ホウフツとして眼に浮んで来るのだ。

私は見事に云い当てた。確か五人のうち三人がしており、二人はしていなかつたと記憶している。

「まア！」

と、彼女達は顔を見合せ、文字通り開いた口が塞がらなかつた。

「また五円とられるの」

と、ペソをかきそらだつたので、「なアに、さつきの五円も返してあげます。嗅がせて貰つただけで沢山さんですよ」

私はこう云つて安心させたのだが、

どうして分つたかと云うと、男のザーメンの臭いで、前夜の行為を知ることが出来たのである。

栗の花とチーズ

さてこのザーメンであるが、これには特有の臭気があることはどなたも承知であらう。俗に栗の花のおいではないが、私の女房はこのにおいが好きである。女にとつては仲々乙なものに見える。異性であるからだろう。

女の方のアソコはチーズのにおいがあると云われている。甘辛くて、肉の腐つた様な臭いで、普段は余りいゝにおいではない。しかし、ベッドの中で

これを嗅ぐと、非常に、亢奮をおぼえる。私はひと頃、あまり無理をしたのが、つて、半ばインポになりかけた時があつたが、これを嗅ぐと、たちまち勃起したので、その後は最初にまずそれを試みることにして今日に及んでい

けである。

むろん人によつて異なるであらうが、私としては、風呂から上つたばかりの女の体臭には余り魅力は感じない。体臭というのは、汗腺から出る汗や、皮脂腺からの脂肪や、陰部なら、不断から少しづつ出ている分泌物とか、発情の際、バルトリン氏腺から出る愛液とか、月経時に出る血液とか、排泄物としての小便とか、そう云つたいろいろな分泌物から発散される臭気であるから、風呂から上つたばかりでは、余りに清潔すぎて、臭気としては味にとほしいのである。

少くとも、一時間から三時間くらいたつた頃のおいが一番よろしい。小便はきたない様だが、あのツンと鼻をさす様な臭気は、やはりなくてはならない調味料である。だから私は、ベッドに入る前には、かならず女房に排尿させることにしている。これがなくては、チーズにならないからだ。

それから愛液だが、これもチー
ズの臭いを作る上にはぜひ必
要である。この意味から
も前技が必要となる
わけである。こ

の液には蛋
白質が含ま
れていて、
それが分解
すると、ス
カトールやイ
ンドールの如
き芳香を発する
ので、あんなにお
いがするのである。

月経時の臭いも私は
好きである。少し生臭い
けれど、それだけに複雑な
味がして、一そう上等なカク
テルの様に思われる。月経中
は、性交は出来ないので、私はそ
の臭気を存分に味つて、それで満足

をするのである。

それから更に、性交後にも嗅
くのだが、これにはザ

メンも交つてい
るので、味

は更に
複雑



である。おそらく最高の芳香と云えよう。終ると直ぐ退陣する人が多いようだが、私から見ると、せつかく自分が骨折^{ほねお}つてこしらえた料理を、食べないですますという愚を演じているようであり、気の毒である。

体臭のうちに、女の腰部の臭いほど複雑で、しかも甘美^{かんび}なものはない。いやいや、どんな香料だつて、これに及ぶものはない。まさに香料中の粹である。

独逸の哲学者シヨペンハウエルは、女の腰の臭いを嫌^{きら}つたが、彼の鼻にはそのよさが分るだけの審美的^{しんびあき}な能力が欠けていたのだ。だから、彼にはこの世の中が面白くなく、厭世主義に陥つたのである。

そこへ行くと、ナポレオンは流石だ。皇后ジョセフィンのチーズを毎晩のように頂いて、あの旺盛なるエネルギーを養つていたという。

彼が戦場で仮眠中、重要な用事が出来たので、部下が起そうとしたがどうしても眼をさささない。そこで一人の部下が、チーズの一片^{いつぱん}を彼の鼻にあてがうと、ニヤリと笑い、『おり、ジョセフィン！』と親子共に起き上つたという話まで残っている。

こんな話
変態^{へんたい}だとも
思ふ人も
ない

をみると、私を
思ふ人があ
知れ

が、トンデモハツブン、花を見給へ、花を……。あれは生殖器ですぞ。花に鼻をつけて嗅いだとて、変態ではあるまい。女のアソコだつて同じことではないか。まさに花である。だから芳香^{かうこう}を放つのだ。

処女・非処女の鑑別^{かんべつ}

最後に得意中の得意を一つ。処女の鑑別^{かんべつ}は昔からむずかしいものとされてゐる。むろん、処女膜を調べて見れば直ぐ分ることだが、結婚前に、『ちよつと見せて下さい』というわけには行かない。

ところが私には分るのだ。会つて



私を愛する能^{あた}と思ふ勿^なル

花を見給へ

二言三言話をすれば直ぐ分る。

さつきも云つたように

男のザーメンの臭いで分るのだ。と云つて

腰部に残つてゐる

ザーメンではな

い。これは一週

間もたつと、女の

身体に吸収されてしま

うから、臭いがなくなつて仕

舞う。

ところが、血液の中に、吸収される

と、それが肺に巡つて行き、そのため

に、鼻や口から出る息の中に、ザーメ

ン特有のにおいを見せるのである。

私の研究では、処女を失つて三ヶ月

位までは、息のにおいで分る。それ以

後になると、ザーメンの臭いが薄らい

で、当つたり当らなかつたりする。だ

から、半年以上も前に失つた処女なら

においでは分らない。しかし、何かフ

喉ルでと花を

嗅ぐでい

ないか

ツと感じ

させるものがあ

るから、その体つきや

言語動作等に気をつけていれば、

大体、見当がつくのである。

では、コンドームを用いて失つた場

合はどうかという疑問が起る。この場

合は、ザーメンが女の体内に入つてい

ないから、臭いで判断するのは困難で

と臭う。

うか。

どういうわけである

が、多い。それは

られて、分ること

いがフツと感ぜ

だか、男の臭

張り、なん

私には矢

しかし

ある。

多分、キッスのためではな

いかと思う。男の唾液が女の

口の中に入り、それが身体に吸収され

て、身体から発散される。それでフツ



しかし、長い以前に失つた処女と、
コンドームを使用して失つた処女の場合
合は、本当のところ、鑑別することは
恐らく困難である。その『フツと来
る』という奴が、余程こちらが冷静で
しかも精神の統一している場合でない
と、来ないのである。

こう云うと、何んだか妙に神がかり
みたいで、信用願えないかも知れない
が、そうかと云つて私にも、これ以上
の科学的な説明をする術を知らないの
である。ただし、動物類がよく地震や
津波などの天災地変を予知すると云わ
れるが、私の嗅覚術はそれ以上に科学
的で確実性のあることだけは自信をも
っている。

結局、一種の靈感だと思つている。
すでに臭いと云うべきものではないか
も知れない。この靈感を受けるため
に、近頃、私は坐禪ざぜんをしている。エロ
から宗教へ……。一見おかしいようだ
が、本当なのである。



今日の性科学問題

強姦殺人淫樂症の生態



全國に横行する強姦魔の跳躍ちようやくとその被害に泣く女性はおびたゞしい。犯される女性の心理、性感の有無、肉體の損傷とその影響など、殺人淫樂症の強姦生態を解剖した今日の性科学問題！

医学博士 小比木 昭



強姦と女性の心理

妻を強姦されてよろこぶ男性(夫)は一人もいないだろう。映画『羅生門』

は、盗賊に手ごめにされる人妻の性心理を実に巧みにえがいている。はじめは

盗賊にたいして

憎しみと恐

怖を抱

いている妻が、次第に野性的な荒々しい盗賊の性的魅力にひきずられてゆく過程。強姦される際に、はじめは必死になつて抵抗している彼女の手が、次第に力を失つてだらりと垂れて行つたかと思ふと、間もなく爪を立てんばかりに、男の肩を激しくつかむ。心では嫌悪しながらも、肉体の快感がわきあがつてきて、夢中で相手に抱きつかずにはいられない。女のかなししい生理である。

強姦されるとき女の心理は、いつたいていであろうか？ ある未亡人の家に強盗が押し入つた。強盗はこの娘を強姦しようとした。すると未亡人は、近く結婚する娘をキズものにしたくない一心から、強盗に哀願して娘の、身代りになつた。四十二歳のまだ残んの色香のただよりの未亡人に強盗も食指が大きい

にうごい
て、娘をうち
棄てて未亡人を犯
した。恐怖や嫌悪も忘
れ、未亡人は娘が救われた
ので、ほつとしてむしろよろこ
んで強盗に身をまかした。この場合は
進んで強盗に身をまかせたのだから、
一種の和姦にはちがいないが、娘の貞
操を恐迫されたのだから、やはり強姦
罪が成立するだろう。

多くの強盗が、あとから告白したと
ころによると、恐迫された女は、わり
あい簡単に身をまかせるそうである。
だから彼らは、逮捕されてから和姦だ
と主張する。

貞操と生命の、どちらをえらぶか？
というギリギリの際には、女は生命の
安全のために貞操を犠牲にする。考え
てみれば、何ものにもかえがたい生命
を棄てることにくらべれば、ちよつと
のあいだ眼をつぶつて身をまかせれば



るのだ

ろう。

人妻ある

いは未亡人のよ

うに、すでに性交の経験をもつ女は、
そういう場合、比較的簡単に貞操を棄
てるが、処女の場合には容易にふんぎ
りがつかない。終戦時のドサクサまぎ
れに七人の女性を強姦し、殺害した小
平義雄の告白によると、処女といえど
も、生命の恐怖の前には脆くも身をま
かせている。

小平の犯行のやり口は、甘言をもつ
て処女を人なき場所にさそいだし、ス
キをうかがつてイキナリ殴りつける。
次いで首をしめて仮死状態におとし

れる。ビンタをつづけざまに三
つ四つくわせると、大抵の女はひ
るんでしまふ。首をしめる時、最初
あらんかぎりの力をふりしぱつて猛烈
に抵抗するが、まもなく氣絶するそ
うである。

小平は、タバコを吸いながらじつと
これを見つめている。と、間もなく女
は息を吹つかえし、喘ぐように深い呼
吸をしはじめ。そこを揺り起して、
着物を脱げと命じると、女は魂をうし
なつたように、しぶしぶながら、着物
を脱ぐ。もう女は抵抗しないで体をま
かせる。そこで小平は、慾情を満たし
たのだから、そのまま女を放免してや
ればよいのだが、鬼畜の彼は、犯行の
発覚をおそれ、殺してしまつたため
に、死刑をまぬかれなかつたのであ
る。

殺人淫樂症小平

小平が犯した四人目の犠牲者は、脅かしただけで、すぐに云うことをきいた。女が帰り仕度をしているとき、小平は飛びかかつてしめ殺した。

五人目の犠牲者も、きわめてアツサリ体をまかした。彼女は、雨あがりで水がたまっていたので、着物をよごさないように自分から着物を脱いだ。目的を果したあとで、小平は彼女をもしめ殺してしまつた。

十人目の犠牲者は、終戦当時の混んだ国電の中で、小平が悪戯をしてそれで知り合つた娘だが、彼女は小平から悪戯をされながら少しも厭がらなかつたというから、この十七になる処女は多分にアプレ的傾向の娘だつたにちがいない。

彼女は、三回も小平の家を訪ねている。小平は、まことしやかに就職口の世話をしてやるといつてこの娘を芝山内に連れこみ、いつしよに弁当を食べたあとで、例によつて関係を迫つた

が、娘が嫌だと断つたので、彼は娘の横つ面を引つばたいてこれを犯した。おわつて娘が下穿きをはいていると、小平は背後から矢庭に首をしめて殺してしまつた。この場合も、無理に殺さなくてもよいのだが、殺人淫樂症の小平は、殺さずにはいられなかつたのである。

第二の犠牲者は人妻で、小平は山林の中でいきなり彼女を殴りつけた。彼女は、

『私は出征軍人の妻です。妊娠でもしたら世間に申しわけがありません。でも、あなたがどうしてもとお仰言るのなら、料理屋へでもどこへでも連れて行つて下さい。こんなところではイヤですわ』

と云つた。小平は、

『そんな手に乗るものか。こんなところでいくら大声を出しても駄目だぞ』と、脅かした。彼女は覚悟をして体をよこたえた。おわつて女が後始末を

して帰り仕度をはじめたとき、うしろから飛びかかつてしめ殺した。

さて、小平は告白している。

『私は一般に洋装の女が好きだ。胸のところに乳が盛りあがつているのを見ると、たまらなく挑発される。……感触から云うと、やはり、処女の方がよい。新しい雪の上を歩くような氣持がする。しかし快感は処女も人妻もおんなじだ。性感のいいわるいは、関係中は夢中だからわからない。……女と関係するのは、自分の性慾を満足させるためだ。たゞ性慾を満たせばよい。女が満足してもしなくても構わない。その女のことはすぐ忘れてしまふ。関係する時間はせいぜい二、三分。和姦のときは関係する前に、女を裸体にして愛撫するのが好きだ。強姦のときは、そんなことはしてられない。合意の性交を行うときは、私も裸体になつて必ず女を満足させたものだ。商売女を裸にしてみたことはないが、やつぱり

強姦したあとで女を裸にして見るのが
愉しみだ』

横行する計画強姦

恐るべき殺人淫樂症小平の告白に、
戦慄しないものはないであろう。彼の
告白によつて、強姦される女の心理を
おぼろげながら知ることが出来る。嫌
悪と恐怖を抱きながらも、ひとたび生
命をおびやかされると、女はしぶしぶ
ながらズロースを脱ぐのである。女は
いざとなると覚悟をきめるらしい。強
姦されるような環境に連れこまれるま
での女の心理の方が、研究に値する
かもしれない。

いつの時代にも強姦魔は存在する。
彼らは奸智をはたらかせ、悪智慧をし
ぼつて女をだまそうとする。たとえば
食糧の不足な戦時中には、それをエサ
に、就職難の時代には、仕事をあたえ
ると云う口実で。……彼らは、その時

に応じていちばん効果のある武器を用
いる。

昭和二十一年秋、栃木県下に現れた
第二の小平も、初代同様、東京から買
出しにきた人妻や、若い娘たちを、米
の世話をしてやるというつて附近の山林
に誘いこみ、これを強姦している。

同じころ札幌に現われた男は、警察
のものだといつわつて、十九と十五の
女性を犯した。その手口は巧妙をきわ
めた。映画を見おわつて、帰宅時間の
おくれた二人の女性が、街を歩いてい
ると、

『警察の者だが、ちよつとしらべるこ
とがあるから来てくれ』

と一人の男に呼びとめられ、附近の
公園に連れこまれた。それまで四時間
も、あちこち連れ歩かされたと云うか
ら『警察の者』と云う言葉が、封建時
代の圧力に慣らされてきた無智な女性
たちに、いかに威力を発揮したかがわ
かるのである。

その男は、

『不法所持品の有無をしらべる』

といつて、二人の女性の身体検査を
行い、腕時計と現金五百円ならびに風
呂敷包みを取り上げた。そして全然抵
抗しない二人の娘を金槌で殴打、まず
ヤキを入れておいて、最初に十五の娘
を、つゞいて十九の娘を強姦し、何を
思つたか現金だけ返却し、翌晩もう一
度来るように約束させて二人を帰宅さ
せた。

彼女たちの訴えで足がつき、この池
上某(29)は逮捕されるに至つたが、
おどろいたことに、強姦手帳ともいう
べき、犯した十数名のうち若い女性の
名前と日附を記載したノートをもつて
いた。このノートが動かせぬ証拠とな
つて、彼は犯行一切を自供した。

警官だと名乗ると、相手がビックリ
して平身低頭するので、それが面白く
はじめは冗談半分だつたのが、そのう
ち所持品を奪うようになり、果ては強

姦するようになったと云う。

下関鉄道局員で、下関の小平と呼ばれた佐伯某(31)は、昭和十八年五月から、検挙される二十三年四月までのあいだに、実に、百二十八人の女性を毒牙^{どくが}にかけている。被害者はことごとく食糧買出しの女性で、弱い尻をもつていたばかりに『警官』の者だといつわられて大事な尻を自由にされたのである。彼の手口はもつとも悪質で、捕縄や手錠^{てじよう}までひけらかして、買出しの人妻や娘を脅迫し、御丁寧^{ごていねい}に手錠をかけて暗がり^{くらがり}に連れこみ、片っぱしから強姦した。年齢も十五歳の少女から六十二歳の老婆に至るまでの女性が、彼の毒牙^{どくが}にかかつている。この男も、被害者の住所氏名、年齢、犯行の日時、場所、回数まで丹念^{たんねん}に記した手帳をもつていた。

ニセ警官に次いで、『新聞記者』『警察医』『鉄道公安官』など、婦女子にこわもてのする職業が利用される。就

職をタネに、弱味につけこんだもの、三万台(外人)、四万台(公務員)の自動車^{自動車}をエサに女性を毒牙^{どくが}にかけたのも少くない。強盗や痴漢^{ちかん}の発作的な犯行にくらべて、こういう女性の弱点につけこんだ計画的な犯行は、はるかに悪質だと云えるだろう。

輪姦された

処女の心理

埼玉県下の某村で、村の青年十数名が、同じ村や隣村の若い娘三、四十名を、次々に輪姦してまわつたという事件があつた。これは新聞その他で、事件の内容を御承知のことと思うので、詳述は避けるが、一対一で犯される場合もむろんだが、数名の男に恥かしめを受けるときの女の心理はどんなものであろうか? 恐怖のあまり、失神してしまふのではないだろうか?

毒牙^{どくが}にかかつた娘たちの殆んどは、最初、顔見知りの青年から誘いかけられると、それが誰であろうと好奇心にかられ、学校の裏だとか神社の境内^{けいだい}などまでついて行つたが、どんなことをされるかと云う不安などまるで自覚しなかつたと云つてゐる。いよいよ肉体を要求されたときは当惑したが、その瞬間をすぎると、拒絶とも同意ともなく身を投げ出したそうである。

一人の男に自由にされて、もうこれで済んだのかと思つて立ちあがると、思いがけない伏兵^{ふくへい}が現われて、『おい、みんな見てたぞ。俺の云うことをきかないと、村中に言いふらすぞ!』

と脅かされ、娘は自由になるほかなかつた。他の数名は車座になつて、この光景に淫蕩な瞳^{ひとみ}を輝やかして、自分たちの順番を待つてゐる。地獄絵図^{じごくえず}さながらの光景である。このとき犯された娘の一人は、次のように告白してい

る。

「Aと云うのが、最初の男だつた。不自然な姿勢をさせられたので、股のつけねが痛かつた。アノときはひどく

痛んだが、まもなく痛

みがとまり、同時に

感覚さえなくなつ

た。どんなこと

をされている

のか知れた

いと思う

気持があ

りながら

眼をあける

のが怖かつた

のでじつと眼を

つぶつていた。その

うちにAが立ち上つた

ので、自然に眼があいたが、

多勢の男が私をとりかこんでいる

光景に、思わず奈落の底にでも突き落

されたような感じがした。眼を

つぶれば、こわさから逃

げ出せると思い、眼

を閉じた。B

が今度

は低い声で、二言三言、何か云いなが

ら重たくのしかかつてきた。Bがいつ

立ちあがつたのか、まるで気がつか

かつた。後頭部がしびれ、全身から力

が抜けたようになって、何人の男に犯

されたかわからなかつた。そのうち、

気がつくとも男たちの姿はなく、立ち上

ると頭がおもく、足がふらふら

して、局部や腿が痛み、

まともに歩けないの

で、ものにつか

まりながら

家に迎



TTIT SUR I S

りついた……』

むろん、この娘は処女であつた。集団暴行に逢つた村の娘の心理は、大体これと似たりよつたりといつてよい。娘たちは、積極的に身をまもらうとする気持はもろんのこと、何ら警戒心を抱かないで、やすやすと狼どもの罠におちいつている。またそういう娘たちが多いからこそ、農村の集団暴行事件は跡を絶たないのだ。

初交による

処女膜損傷

戦後の性犯罪（強姦）の約六〇—七〇パーセントは青少年である云う。

女性には、性交の経験のない場合、必ず処女膜を有している。この処女膜は、ふつう結婚初夜にやぶれるものだが、

お産をするまではその痕跡が残つていゝる。しかもその痕跡によつて破れたときの状態がわかるので、女性には、その初交が男の暴力によつて行われたが、それとも合意の上か、また半分暴力によつて、破瓜したかがわかるのである。

処女膜は、初交の際に簡単に破れるのもあれば、容易に破れないのもあり、破れるときに必ず出血するとはかぎつて

いない。たゞし処女膜の破れ方には解剖学的関係から一定の型があることはたしかである。いま処女膜の上部（陰核の方向）を北、下部（会陰の方向）を南、右方を東、左方を西と仮にさだめると、処女膜は通常

の性交では西南または

南々西、東南ま

たは南々東

の方向、

すなわ

ち下



方左右にむかつて破れることが多い。垂直に下方に破れることは少いし、上方に破れることはほとんどない。

上方にひどく破れたのは、異物などで破つたものであり、合意の性交、準強姦、強姦等によつて、処女膜の破れかたがいちいち違つており、その裂口をしらべれば、初交の際の男と女の態度がわかると云われる。

合意の性交（和姦）の場合は、処女膜の痕跡は一カ所ないし八カ所の裂口となつて残つてゐる。特に、女が積極的、能動的に出た場合には、裂け目は四個以上になることが多く、受動的な場合は四個以下のことが多い。準強姦の場合には、裂口が二カ所ないし二カ所で、処女膜の下端にまで達している。強姦だと、裂口はたいては一カ所で、処女膜の最下端寄りに深く裂けてゐる。

この説が確かだとすれば、その女性がお産をするまでは、たとえ何人の男

と何回性交しても、処女

膜の初交の際

の裂口には変化し

ないで残つてゐるそ

うだから、その女性の初交のときの態度がハッキリわかる筈である。

しかし、強姦の有無をこれで決定してしまふのは危険である。初交の際には、たとえそれが合意の上であつても処女の本能的な羞恥心や恐怖心がはたらいて、いきおい男にとつては強姦のような形をとりやすいからである。

むしろ、暴力、脅迫、誘惑等をもつて強姦が行われた時には、ある程度の



反抗した痕跡が、

被害者の女性

や、加害者の体に

残るから、それによつ

て鑑別した方が間違いがな

い。無理に股をおしひらくとき

に生じる股間内部の擦過傷、石の

上や砂利の上に、無理矢理に組み伏

せられたときに生じる臀部や脊部のか

すり傷、外陰部の受傷出血、これらは

強姦されたことの確な証拠である。犯

人の方は、腕や足を噛まれたり、顔を

引つ搔かれたりする引つ搔き傷を残す

ことは、襲われた女性の忘れてはなら

ない防犯行為で、米国などではこれが

ないと、強姦罪が成立しないそうであ

る。

たゞ恐ろしいのは、格闘中、首を締めたり、頭部を殴られて殺されること

MITSURU S

である。
小平のように、抵抗してもしなくても殺してしまふ殺人淫樂症は別だが、強姦しておいて、顔をみられたと云つて殺す凶悪な男もいるから注意が必要である。男の股間のものは、勃起したとき

に大きな力を加えられると、

腕力(暴力)をふるわないで、智的

見た強姦

法醫學的に

折れてしまふことがある。
この辺の微妙な呼吸を心得ていて、あの瞬間に、満身の力をこめて握りしめ、相手手を氣絶させて難をのがれた女性もいるし、また相手の舌を吸うふりをして、噛みきつた勇敢な女性もいる。沈着でさえあれば、逃れる方法や手段はいくらでもあると思う。



に抵抗不能の状態におちいらせ、または失神させて強姦するものもある。下関の小平は警官のふりをして、手錠をかけて婦人を姦淫しているし、本物の小平は首をしめて失神させ目的を達している。催眠術、手術中の麻酔、薬剤による謀略的麻酔、交通事故による失神、ヒステリー発作、テンカン発作、あるいは泥酔中、その他意識を喪失した際に姦淫するものも、法律的には暴力とみなされる。このほか重い荷を担いでいて、軀の自由のきかないのを幸いに襲いかかる男もいる。

法医学的には、たとえ射精が行われなくても、ペニス挿入の事実が証明されれば強姦とみとめている。また挿入（性交）未遂でも、精液が腔内に証明されたとき、被害女性の外陰部周辺、股間、衣類、下着等に精液が附着した場合には、いずれも強姦既遂と認定するのである。

強姦の証明としては、このほかに細

菌検査が行われる。強姦でも働こうという男には、性病羅患者が多いので、淋疾、梅毒軟性または硬性下疳、時としては第四性病（ニコラ・ファブル氏病）を感染させられることがある。十歳以下の少女に対する強姦は、会陰破裂、陰粘膜裂傷を起し、出血多量の際には死に至ることも少くない。この場合は細菌検査どころではなく、屍体解剖を行わなければならない。

精液の検査は、最近非常に進歩してきて、被害者の腰巻またはズロース等に附着したカサカサにわいた精液斑からさえ、精虫を検出することができ。ただし、被害者の腰巻などから精虫を証明することはできても、誰の精虫かわからないのでは証拠として不十分である。

そのときはこの精液斑から血液A型をしらべる。もしも被疑者が型で淋病にかかっている場合、女性の腰巻などに附着したものを検査した結果、それ

が証明されれば、犯人がいくら知らぬ存ぜぬと言いつても、絶対にシラをきることはできない。動かしがたい証拠となる。

腔内に射精された精液は、腔内の分泌液と混合するから、腔内液を採取して血液型を検査すると、犯人と被害者の混合した血液型が検出される。しかし、これは両者がほぼ等量であつた場合にだけ適応できるので、量的に一方が遙かに多いときは、多い方の型しか示さないから駄目である。

強姦された女性の外陰部に附着した男の陰毛が証拠となつて、ついに犯行を認めた犯人もいる。その遺留した恥毛の長さおよび太さ、尖端の恰好、色素の状態、毛髓の状況、毛上皮などにはそれぞれ特有の所見があるから、容疑者の恥毛と対比すれば一目瞭然、人間の眼はごまかせても、精密な検微鏡の眼をごまかすことはできない。

解剖の心理慾性態変

被虐症の女体は濡れる



女は不思議な軟體動物！ 男性に屈服し、その性的支配のもとに隷屬しながら性の愉悅にむせぶ變態性慾心理の解剖！

医学博士 小林 正二

マゾヒズム（被虐症）は、色情倒錯症の一種で、異性から虐待されることをよろこび、相手の暴行にいつまでも服従し、それが淫楽のきつかけとなるのだが、特に女性にこの傾向が強い。

性交そのものが、一種の男性の女性に加える暴力行為であり、女にマゾヒズムが多いのは当然と考えられる。男にはじめて喜ぶ心理があり、女にはじめられて喜ぶ心理がある。

變態性慾心理の研究で世界的な名声をもつクラフト・エービングは、女のマゾヒストの心理は考えれば考えるほどわからないと云っている。一度も男から暴行や残虐行為をうけたことがな

いくせに、そう云うことにあこがれをもち、男にそうして貰うことを熱望する。
男性に屈服し、
その性的な



支配のもとに
隷属した
い傾向

からといつて、それが女の性的特質による病的産物であるときめることはできない。むしろ、特殊な女性の病的な徴候として見る方が正しい。

多くの若い女は、夫や恋人の前にひざまずいて、意のままになることをよろこぶ。スラブ民族の低級な女たちは、夫に鞭打たれることを身の仕

合わせと考えていると云う。被虐症の女の場合には、単に男に屈服することがうれしいのではなく、このうれしさ快さが、直接性慾、性感にむすび

ついているのである。鞭打ちにたいする激しい渴望をもつ女性、多く性交を希望しない。まるで裸になつて、恋人に鞭でオルガスムに達するまで、足の裏、ふくらはぎ、臀などを叩かせるのである。肉体的な苦痛にたいし、悲鳴をあげるけれど、その悲鳴は性的な満足を伴い、彼女の性器は正常な行為のときと同じように

は、女性にとつて、ある程度まで生理的現象と云えないことはないのだが、だ

充血し、機能昂
進をおこし

粘液の分泌
がさかんに
行われる。

マゾヒスト

は、鞭打ちをよる

こぶだけではなく、

四肢をきびしく緊縛さ

れ、または樹上や、天井等

に吊しあげられ、あらゆる残

酷な責をこうむつて、喜悅の情

をおぼえる。この場合、相手(夫)が

サジスト(加虐症)であれば、両者の

あいだは比較的うまくゆくが、そうで

ないと、一方が変態にたえられず、離

婚しなければならなくなる。

加虐も被虐も、はじめは単に性的昂

奮をたかめるための前戯的な意味で行

われるのだが、しまいには、それだけ

で性的な満足とはげしい歡喜をおぼえ

るようになる。大正の末頃、サジスト



花
SHINPE

妻』と焼印

をおさせた。彼

女はその文字が背中

にかかれるあいだ、手拭を口

にくわえ齒をくいしばつて我慢し

ていたが、ついに最後まで痛いと言わ

なかつた。かえつて、満身歡喜にふる

えおののいていたと云う。これなどむ

として有

名だつた小口末

吉の内妻は、姦通し

た現場を、夫末吉に發見され、自ら希

望して背中に焼火箸で、『小口末吉の



ろん例外だが、たいていの女は被虐の
よろこびに^{ひた}浸り、夫や恋人から叩^{ちやうやく}擲

されてもさほど苦痛を感じない。まし
て性的な疼痛にたいしては、かえつて

よろこび、昂奮するものである。
白い肌^{はだ}に加えられる激^{はげ}しい鞭や叩擲

のもとで、らわずつた叫びごえを

あげてのたうちまわる女体に、

慾情をそそられない男はな

いだろう。サジストでな

い男が、次第にサジス

ト的傾向^{けいこう}を帯びてゆ

くのも当然である

被虐症^{ひやくしやう}の女が、

男からいため

つけられ粘液

の射出を行うの

は、むろんオルガ

スムなのだが、男の

射精現象^{しやせい}とちがうこと

は云うまでもない。大体

女の性器は、男とちがつて

常に濡れ^{しつじん}（湿潤状態）ている

ので、その濡れる程度が、いつ

そう激しくなるにすぎない。

マゾヒストの女には二種類あつて、

※ SHINPEI

肉体的な苦痛をあたえられただけで、
佳境に達するのと、苦痛を
あたえられればあたえら
れるほどいつそ
う性的に昂
奮し、
性交

を渴望
し、性交に
よつてその快感
が爆発点に達す
るのと二つある。



男から苦しめてもらいたいと
いう気持、

それは、深窓に育つ貴婦人から橋の下
に住む浮浪者の女にいたるまで、女が
男にたいし抱いている感情である。

美しく着飾つて取りすましてい

る貴婦人も、閨房の中

では、男から苛

めさいなまれ

て、あられもな

い叫声を發して

よろこび狂うの

である。それが

女性の本当の姿

なのだ。

本誌にあつか

われている縛ら

れて悦ぶ女の心

理も、やはりこ

れと同じもので

あり、単純に残

酷とのみは断言

しえない点があ

るのである。

港
SHINDE!



赤坂慧

人妻の媚態に繰られて童貞を弄ばれた若い男が、姦通という妖しい法悦にしびれきつて抜きさしならぬ泥沼に陥ちこんだ頃は、もはや女の肌には秋風が沁みて火照らない。罪つくりな人妻の浮気心とその生々しい姦通生態を抉る！



SHINDEI・流

肉體の呼ぶ聲

(たいした女でもないが……)

島津は、下宿先の山崎洋服店の二階でごろりと仰向けになり、今日、会社で聞いた山崎の妻しげ子のまるぽちな顔をふツと臉に描いた。

『おい、気をつけろよ』

『何を?』

『君は三船^{みふね}ばりの好男子だし、みんな猫に鯉^{こい}節だなんて云つてるぜ』

『さつぱりわからん。一体、何の話なんだい、それ?』

『知らんのか? 君の下宿し

ている山崎ンと

この妻

君は有名な浮気女だからさ?』

『ふん、それが僕と、何んの関係があるんだい?』

『大有りだね。そのうち、君も誘惑されるよ』

『馬鹿々々しい、あんな女に! それに、亭主持ちじゃないか』

『そらだ。結婚して、五年もたつていゝる。だから、男の急所^{きゅうしよ}を知りつくしている。君のような、独り者の堅造^{かたぞう}なんか、わけなくコロリと誘惑できると思つてゐるかも知れんよ』

『止せよ。そう云う話には、僕は興味がないんだ』

島津が不快そうに、顔をしかめたので、同僚はニヤリと笑つて口をつぐんだ。

有名な浮気女だと云う当のしげ子は女も盛りの三十を越して、ぶよぶよと脂肪肥りの身体をもてあましてゐるよるな女だつた。

外国ものだという、光る白粉をぬりたくつて、ピカピカする顔にどぎつい口紅を、唇からハミ出すほど彩つたしげ子には、不潔な娼婦の匂いを感じられた。

島津は、一カ月前に東京の本社工場から技術指導という名目で、現在の高崎工場へ移つてきた男である。

二十九になるまで独身でゐるのも、べつに肉体的欠陥^{けつかん}があるというわけでもなく、復員が遅かつた関係で、まだ、いい結婚相手に恵まれなかつたのである。

それだけに、どうせ結婚するなら、おそらく戦



後の倫理^{りんり}

では、とう

てい考えられな

い、童貞のまゝで

花嫁を迎えようと心

にきめ、いまだに女を知

らない聖童児^{せいどうじ}である。

そんな島津だから、同僚の噂

をきくまでは、しげ子の存在など全

然問題にもしていなかつたのだが――

島津は、天井を仰いだまゝうふツム

と笑う。

(いままで、あんな女の浮気^{うき}の相手に

なつた男は、一体どんな人間なんだろ

う？ 世の中には、ずいぶんもの好き

な野郎もいるもんだ)

襖^{ふすま}があいた。

びつくりして、島津は撥ね起きた。

しげ子が赤い唇をつきだして、ビール

壺をお盆に載せて敷居ごしに立つてい

た。

「おや

すみでし

たの？」

「いや」

「主人が帰ると思つて

冷やしておいたんですけど

電報がきましてね、明日の帰りですつ

て――勿体ないから
島津さんに、飲ん
でいたたこうと
思いまして
ね」

山崎は、親^{しんせき}の不幸で埼玉県の本庄町へ行つて不在だつた。女房には、絶對に頭の上らない男で、帰宅が一日延びたからと云つて、すぐ電報を打つてよこすあたりにも、この地方の名物と云われる^{かかめ}燗天下の氣風がよくうかゞわれた。

島津は苦笑した。

『すまんですなあ』

『あら、お辞儀^{じぎ}なんかされたら困るわ。さあ、どうぞ』

としげ子が、なみ^{なみ}なみとつぐコツプを、一息^{ひといき}に飲みほす島津の顔を、しげ子は熱ッぽい瞳^めで眺めながら、

『島津さんは、お強いね』

『それでもないんですが、このビールはおいしいなあ』

『いやですわ。お世辭^{せじ}なんか……』

はちきれそうな、でつかい尻を動かして、しげ子は膝をすゝめ、

『もう、一杯』

またゝくまに、燗^{びん}が空ッぽになると

しげ子は、とんとんと階段を下り、両手に二本つつ、ぶら下げてまた現われた。

『駄目ですよ。僕、そんなにはやれません』

『いゝじやありませんかこれくらい。じきに醒^さめてしまふわよ。さ、おひとつ……あたしもいたゞくわ、久しぶりに。山崎も留守^{るす}だし、たまにはハメもはずしたいわ』

飲まないうちから、しげ子の瞳はもとろんとして、あられもなく裾^{すそ}をみだして、島津にぴたりとより添つてきた。

浮氣の虫が、すでに肉体のすみずみを這^はい廻り、軀中の血管が妖^{まじ}しく疼^{うづ}いているのだ。

(早いとこ、愉しんでやれ!)

肉体が、淫^{みだ}らな声でそう呼びかけているのだつた。

童貞テスト

しげ子の熱い吐息^{といき}が、ふーッと島津のうなじに吹きつけても、白い手首が肩に重くもたれかゝつてきても彼にはふり放すことができなかった。不思議な魔力^{まじりよく}にがんじがらめにされて、島津はたゞハアハアと喘ぐばかりだつた。

『ね、島津さん。あなた、ホントに童貞なの?』

それつの怪^{あや}しくなつたしげ子の甘い声が、ねつとりと耳朶^{じた}に覆いかぶさつた。

『奥さんも、嘘だと思つているんですか?』

『いまだきの若い方で童貞だなんて……ホントに思えないわ』

『どうしてです?』

『第一、あんたみたいな男らしい人、女が、そつとしておくかしら!』

膝が崩れて、むつちりした太腿がチ
ラツと覗く。吸いよせられるように島
津の瞳がチカツと火花を散らした。

「いや！ 童貞かどう
か、あたしが
調べて

やるのよ」

「そ、そんな……誰か、来たらど
うします」

たつたすこし前、
(たいした女でもないのに)
と嘲つた脂肪肥りの
女に、おだやかだつ

た彼の理性が、突

如あらあらしい
慾情の突風に捲

きこまれてし
まつた。

酔つてい
る証拠だつ
た。

それでも

彼は、

「いけませんよ
そんな！」

と、のしかゝつ

くてゐる女の赤い唇をさ

けようとしたが、



「大丈夫、表戸は閉
めてあるわ。誰
も来やしま
せん」

その
一言が
島津の最後
の防波堤を打碎
いた。拒んだしげ子
の唇を、両手を頬にかけて
ぐいと引寄せた。

ずるずると、しげ子の身体が崩れるように、島津の胸にもたれかゝつた。

二つの身体がもつれ合つて、青畳の上をくねつた。

『駄目、接吻だけじゃ……』

亢奮したしげ子の声が、溷濁した島津の脳天に突き刺つてくる。

それは、蜜のように甘い、夢のように強靱な執拗さをもつた三十女のあくなき情慾のほとぼしりであつた。

しげ子の手が、島津の頸をしめつけた。

『苦しい！』

『弱虫ね』

『手をゆるめて下さいよ』

『ゆるめない！ あたしが、何をしてもいいと云うまでは勘弁しない』

島津は、いまだかつて感じたことのない、妖しい陶酔のなかに引きこまれていつた。

白粉の匂いと、むせるような、ねつとりとした女の体臭が未知の世界へさ

そいこんで行つた。

島津は両眼を閉じた。

蠱惑の虫が、全身を灼きつくす。かあツと火照つた身体から、しげ子の手で、男の浴衣が脱がされてゆく。

彼はもう、拒もうともしなかつた。

皮膚に触れる女の感触が、快よい旋律となつて鬱積していた情慾を遮二無二に煽りたてる。

『あたしも、スリッパになろうか知ら？ 暑くつてたまらないわ』

くすりと笑つて、横になつたまゝ片手で器用に服を脱ぐしげ子の肌が、汗に、キラキラ濡れている。

乳房がすけて、子供を生んだことのないうす紅色の乳首が、ピンと突き立つようにくつきり見える。スリッパの吊紐が肩から下り落ちた。

ぱつと、露わな白い胸が、島津の視野いつばいに飛びこんできた。

その途端、ねつとりとした感触が、

島津の下肢をぐいとしめつけた。

『調べるわよ！』

妖女の勝誇つた叫びだつた。

だが島津はもう拒もうとはしなかつた。いや、彼ももはや一匹の野獣でしかなかつた。

窓の鴨居にぶら下つた風鈴が、チリンとはげしく鳴りはじめた。

電灯のついたまゝの明るい部屋に、狂奔する浮氣の虫が、思いのまゝに暴れ廻つてゐるのだ。

童貞は風鈴の伴奏によつて、他愛もなく碎け散つた。

駈落の前夜

島津が夢中になればなるほど、しげ子の態度は、次第に白々しくなつてきた。

島津にとつては、眠れぬ夜がつゞいた。会社から帰つて、階下から山崎に

話かけるしげ子の鼻にかゝつた甘い声をきくと、五体の血がかあつと狂奔した。たいした女でもないのに、と思ひ侮蔑の眼で見ていた女に——。何と云ふ不思議な飛躍であらう。

夜更けに、眠れぬまゝに雑誌を讀んでいると、閨房から洩れる妖しい吐息が、島津の胸をかきむしつた。

(しげ子! しげ子!)

島津は読みかけの雑誌を壁に叩きつけ、もの狂わしく、両手で頭髮をかきむしつた。

しげ子の、ぶよぶよした白い肉体が仰向けになつた胸の上へのしかゝつてくるような錯覚にとらわれると、四肢の力がずるずると抜けていき、彼は、いつしか妖しい艶夢に悶えるのであつた。

全身に汗がびつしより濡れている。それは、白い肉塊に憑かれた哀れな情慾の虜だつた。

すると、微かに、障子のあく音がし

た。

誰か、寢間を立つ気配を感じ、島津はぎくりと耳をすませた。

微かな足音が、廊下を渡る。

(しげ子だ!)

島津は、むつくりと起上つた。足音を忍ばせて、階段を降りる。

便所の中へ消えるしげ子の足音をやり過してから、そつと夫婦の寢間の動靜に耳をすませる。

疲れきつたらしい山崎のいびきが聞える。

島津の瞳が、異様に光る。くると向き直ると、便所の戸に手をかけた。

『あッ!』

と暗闇の中で、しげ子が棒立ちになつた。

派手な長襦袢一枚のしどけない姿で

おまけに帯をしめていなかった。

慌てゝ、前をかき合わせる裾から、つやつやした白い下肢がこぼれる。

『二階へ来てください!』

腹れた声が、闇の中で火を囁く。

『駄目よ。主人が居るじゃないの!』

『死んだように眠っている。わかりやしないよ!』

『駄目よ。眼をさましたらどうするの!』

それに、あたし、疲れているの!』

『ふん。そんなに、山崎を愉しませてやつたのか!』

『いやな男、嫉んでいるの? 仕方ないじゃないの、夫婦だもの!』

『じゃ、僕は——たゞの、君の浮気相手にすぎないのかい!』

肩越しにぎゅつと乳房のあたりを抱きすくめ、うなじに齒を立てる。

『痛ッ! 変態ね!』

『変態かも知れないね……だが、こんな僕にしたのは、みんな、君なんだぜ!』

『馬鹿ね、そんな大きな声を出して——主人が眼をさましたら、どうするのさ!』

白い指先が、乳房を圧している男の

手を弄ぶ。いつのまにか、衿をかきよせていた手が離れ、背後からおおいかぶさるように抱きすくめている島津の頸とからまつているのだ。

しげ子の肉体は、知らず知らずのうちにふたゝび激しく燃えたつてきた。そのくせ、

『ね、今夜は勘弁して、あとで、きつ

と行くから……』

と濡れた下唇を突きだし、男の情慾を煽りたてるのだつた。

島津は、この女の夫としての権利をもたない自己の立場をふと感じて、一瞬、せつない表情を浮べたが、身内にうづく昂ぶりは、激しい炎となつて彼の眼の底でギラギラ燃え立つた。

『いやだ——二階へ行くのが嫌なら、

ここだつてかまわない』

『なに云つてんのよ。まさか、こんなところで？』

『僕は、もう気が狂いそうなんだ！

一分でも、

一秒で

も、君のそばから離れていられないんだ！』

『だつて……』

しげ子は、甘えるように軀をくねらせた。

『でも、こんなところじゃ嫌』

『二階へ行こう』

『抱いてくれる？』

『うん』

白い肉体が、島津の両腕にかゝえられ、横にくねつた。帯のない長襦袢がだらりと身体から垂れ下つて、豊かに張つた乳房が白々と廊下の薄暗いなか

に浮いて見えた。

ひっそりした夜の静寂を破つて、山崎のいびきが、前よりも一そう高くなつてきた。

『くたくたなのよ、あのひと。今日はとても凄かつたもの』

それが、一途に島津の亢奮を昂めることを、浮気の虫はチャンと算盤に弾いているのだ。





『山』

崎と

あん

まりい

いとこ

を見せつ

けるなよ』

『フッフ……。そん

なことを云つても無理よ。

亭主なんだもの』

『君は、山崎に惚れてゐるのか

い？』

『惚れてなんかいないけど……』

『僕はとうなんだ？ 浮氣の相手に過

ぎないのか？』

『いやなひと。浮氣だけだつたら……

こんな夜半に、のこのこ上つて来ない

わ』

『ホントかい？』

をかきむしりながら、足の爪先で、男の下肢を責めつける。

それが、この女の巧みな前戯行為だつた。良人の山崎もいままで何人もの浮氣の相手に対しても、この手で散々、奔弄してきただのである。

『しげ子！ それがホントなら、明日、僕と一緒に東京へ行つてくれ！』

『えッ！』

『東京で、夫婦になるんだ』

しげ子の足の先が、ぴくツとけいれんして、そのまゝすくんでしまった。

『いやかなのかい？』

『……』

頭からたゞみかけられても、突壁に返事ができなかった。

口惜しいわ！ と云つて島津の頭髮

しかし、

(それも、面白いかも知れない)

淫婦のふてぶてしい神経は、はじめてぶつかる恋の冒険に、好奇心を湧きたせていた。

淫婦の倫理

島津にとつては、一生一代の灼熱の恋だつた。たとえ、その結びつきが不純だつたにせよ、純な愛情で汚れた過去は拭い去れると思つていた。

島津が二十九年の純潔の生涯を賭けるだけの価値が、しげ子にあるかどうかは彼にとつては問題ではなかつたのである。

おそらく、恋愛に対しては、精神年齢は二十代の少年にひとしい島津だつた。

夜のいとなみによつて狂奔する肉体の愉悦も、朝がくればその稚い精神年齢の働きによつて霧散し、将来に対する

幸福な設計を夢に描いたりするのである。

つまり、しげ子に対する執着は、単なる肉体だけの結びつきではなかつたのだが――。

島津の若々しい甘い夢は、一週間もすぎぬうちに顛えされてしまつた。

突如、山崎が上京してきたのだ。

二人の隠れ家へ、山崎が現われたとき、島津は蒼くなつて、しげ子に食つてかゝつた。

『どうして、彼奴にこゝがわかつたのだ？ 僕は逢いたくない。追い返えしてしまえ！』

しげ子は、そんな島津の剣幕に、いさゝかも驚かず、笑いながら云つた。

『わかるわけよ。あたしが、教えたんですもの』

『何ッ！』

『ね、あんた。もうあたしに飽きのくる頃じゃないの。あたしも、そろそろ高崎へ帰りたいのよ』

島津は、脳天を打ちのめされる思いがした。

そこへ、いつまでたつても誰も現れないので山崎がのこのこ入つてきた。

『島津さん、どうも、しげ子が面倒をかけまして……』

とペコリと頭を下げた。

島津は二の句がつげなかつた。

自分の妻を連出した男に、この男は微塵も憤激をおぼえぬのであろうか？

島津はむしろ拍子抜けしたように、思わず苦笑しながら、しげ子の顔を見た。

しげ子は平然と笑っている。

『しげ子。東京見物はどうだつたね。』

置手紙ひとつで、島津さんと出掛けたと云うので、あのときは驚ろいたよ』

そのにこやかな顔には、不貞の妻を責める儼しさなど微塵もみとめられなかつた。

その夜、この変つた夫婦は、島津と枕を並べて寝たのである。

床に入ると、汽車の疲れが出たのか山崎はたちまちいびきをたてた。

なめらかなしげ子の脚が、やんわりと島津の下肢にからんできた。

「怒った！」

島津は唇を噛みしめて、一言もしや

べらなかつた。怒るには、あまりにも鉄面皮の女だからだ。

『今夜だけだから……いいわよ。どんなことをしても……』

そんな甘い囁きも、島津の情熱を燃やすことはできなかつた。

翌朝——しげ子が、山崎と連れ立つて家を出て行くと、島津ははじめて、しげ子のいない自分の生活に、何物にも替えがたい不滅の光をもぎとられたことに気づいた。

(あんな女に……)

自分の胸に説ききかせながらも、耐えがたい空虚さをどうすることも出来なかつた。

決心した島津は、上野駅へ車を飛ばせた。

下り列車を待つ、山崎としげ子の姿を、待合室に見つけた島津は、ツカツカと二人のそばへ歩みよつた。

『わざわざお見送り下さらんでも』

人の好きそうな山崎が、にこにこ顔で腰をあげようとする肩口へ、島津の右手にピカリとひらめいたものがあつた。

「あッ！」

さツと噴き出る血潮を浴びて、山崎の身体が前のめりに崩れた。

島津の右手には、血を吸つた短刀が無気味に光っていた。

満員の待合室が、にわかに色めいた。

公安官が駆けつけて、島津を取押え公安室へ連行した。

(しげ子は俺のものだ！俺一人のものだ！)

島津は胸を張つて大きく呼吸した。

だが、彼は公安官がちよつと座をはずした隙に、有り合せた荒縄をドアの鴨居にかけると、その輪の中へ己れの頸を叩きつけるように噛ませて飛びついていた。

あッ！と、公安官が驚いて、宙にブラ下つた島津を、ずり降したときには、その両眼は空しく虚空を睨んでいた。

重傷の良人を、駅長室で看病していたしげ子は、島津が縊死したと聞いてふふんと鼻先で笑つた。

『何て馬鹿な男だらう。女の浮気なんて、男の女遊びとすこしも変りやしないのに。面白く愉しめばそれでいいのに、死ぬ奴があるもんですか。ねえ、あんた』

しげ子は、肩にぐるぐる縋帯を巻かれた良人の唇を、チュツと吸つてにやり笑っていた。

万華鏡



束摘花^{すくひばな}などにも女中を諷刺^{ふうし}したエロ川柳が多いが、とかく女中の振りまくエロチシズムはいろいろの問題を起すもの。まして奥様より女中の方がポツチヤリとしていたらなおさら一悶着^{ひともんぢやく}は當然の話。題して女中エロチシズム萬華鏡^{ばんわきやう}。さてどんな特ダネ、愛慾^{あいよく}圖繪^{ずえい}がとび出すやら——

女中エロシズム



がある。

一盗、二婢、三妾、四妻と云う言葉

は

し

が

き

昔から、女中のもつエロシズムは、姦通の次に魅力があるものとして世の漁色漢共に騒がれている。

逆コース時代の影響でもあるまいがこの頃ではまた女中志望者がゲンと増

えてきた。ヘタに勤めに出したのでは食べたり着たりでタイヘンだからかも知れない。通勤費、化粧代、弁当代とかさんで、下手をすると持ち出しになつてしまふ。そこへゆくと女中奉公に出れば、食べて着て、お給金がもらえ行儀見習い？ と一石三鳥。そこで近頃は、澁皮のむけた女中が目立つて多くなつてきた。

もつとも、女中と云つてもピンから

佐々木初太郎
江戸川ハ郎

キリまであつて、料理屋、旅館のエロ女中から待合の姐さん、商家の下働きや子守りにいたるまで、実に多種多様

彼女たちのかもしだすエロチックな事件と雰囲気の数々——

お 妾 と 情 人 と 女 中

◇間男とコツテリ濡れるには、まず口止料に情人に女中を抱かせてから——

*** 一 號 さん の 奸 計 ***

玄関の名札を見ると、田崎幸と云う男紛いの名前であるが、この女主人

は、かつて赤坂で左棲をとつたことのある水も滴るような中年増。小股の切れあがつたと云うのだらう、ぽちやツとして、そのくせ贅肉などこれッぽツちもないのだから、さぞかし緊りがいいだらう——とは、彼女に

食指をうごかす漁色漢たちもつばらの下馬評である。

『うめ



やア』

『はアーい』

女主人に呼ばれて、おずおずとその前に膝をついたのはこの家の女中のうめ。これがまた、女主人のゆきに劣らぬ美人である。

『奥さま、お呼びでございますか……』

『お前、このごろ、ほんとうによく働いてくれるわね』

『あら、いやですわ。奥さまつたら』

この社会では、おメカケのことも、奥さまと呼ぶのである。

『これね、お前に上げるわ。よく働いてくれるからね』

『まア、奥様。こんな素敵なもの、頂いておよろしいんですか』

『きつとお前に似合うよ。あたしにはもう派手で着られないんだよ』

気前よく、ポンと投げ出したのはこの頃流行のギャバジンのツーピース、うめは感激しておしただく。

『そこでお前に、たのみがあるンだけ



どう

しま

しよう

ど…
ね、わ
かつてるだ
ろう？」

女主人の眼が
意味深にかがやく。

『何でございましょうか？』

『あら、しらばつくれてるよ、この娘ッたら。あたしのところへ来る男の人……ね』

『あ、お兄様のことですか』

『そうよ。表向きはあたしの兄ということになつてゐるんだけど、お前知つてゐるんだらう？』

『そりアね、奥さま、オホホ、』

『お前は口がかたいから、大丈夫だと

げ出した。奥さんの彼氏はどうやら歌

思うけど、旦那さまに知れないように

たのむわよ。もし、知れたらお

払い箱になつて、明日から、

路頭に迷わなきアならないン

だから』

ゆきの兄だと云う色白の優

男が訪ねてくるようになった

のは、もうかれこれ二カ月ぐ

らい前からだ。はじめ、うめ

は正直に本当に奥さん、兄さ

んだと思つたのだが、訪ねて

くると、いつも二人きりで密

室で喋々喃々とたのしそりに

語りあい、必ずうめを使い

出すので、怪しいと思つてあ

る日、外へ出かけたふりをし

て立聞きしてみた。

すると、奥さんは、兄さん

と称する男と、タイヘンなこ

とをおつぱじめていた。うめ

は、顔負けして、こつそり逃

舞伎俳優らしく、それも女形らしい。

「奥さま、そのことなら、どうぞご心配なく——」

「それをきいて安心したわ。今日ももうそろそろ、くるころよ。あゝ、惚れた弱味つてつらいもンね。待ち遠しいつたらないわア」

「まア、奥さまつたら……」

「あら、ごめんなさい。おのろけ聞かせちやつて。ホホホ……」

間もなく、彼氏が現われると、ゆきは生娘のようにいそいそと奥の居間へ連れこんだ。どうせガス会社の重役をしている旦那は、夜おそくでないと現われない。それもせいぜい週に二回くらいである。

*** 思わぬ御馳走 ***

ところが、うめが不思議に思つたのは、今日に限つて、ゆきはうめに使いにゆけといわないのだ。だから、いやでも、二人の喋々噂々に耳を傾向けざ

るを得ない。間もなく話し声がびつたりやみ、緊張した空気の中で奥さんの荒い息使いがきこえはじめた。あたりはばからぬ殺し文句のやりとり、さすがに役者だけあつて演出がうまい。おたがいの名を必死になつて呼びあつてゐる。男と女の愛情の極致は、こんな殺氣立つものかと、若いうめは昂奮してひとりで顔を赤らめていると、間もなく、真赤に上氣した奥さんが居間から出て来た。

「うめや、たアさんが呼んでるから、あつちへ行つて頂戴」

「え？ ああ、あたくしが……でも、奥さまは……」

「あたしは、こつちで休んでいるわ。ね、うめ、お前とあたしは秘密を明かし合つた仲なんだから、お前、たアさんの云うことをきいてあげてよ」

「えッ！」

「それに、あたしだつて、お前と口約束だけじゃア、安心ができないのよ。」

いえ、お前をうたがうわけじゃアないけど、たアさんは、あたしとお前の共通のいい人にした方がいいと思うの。たアさんに話したら、たアさんも、その方がいいだろうつて云うのよ。どうやら、たアさんお前にホの字らしいんだよ」

「あら、奥さま、どうしましょう」

「そんなに赤い顔しなくたっていいよ。お前だつて、たアさんが好きなんですよ。早くむこうへ行つて可愛がつてお貰いよ」

うめは処女ではない。去年、ある学生に騙されて処女をうばわれ、その男と二ヶ月ほど関係をつづけたことがあつた。そんなうめだつたが、奥さんから、その情人といつしよに寝ろと云われると、さすがに胸の鼓動がたかまつてきた。

「お前、いやなのかい？」

「いいえ……でも……」

「それじゃア、すぐ彼方へ行つてよ。」

たアさん、たしか楽屋入りまでにもう
一時間ぐらいしかない筈よ」

「ハイ」

うめは、半分夢心地で立ち上つた。
そのうめの宙に浮いたような体を、ゆ
きは押しこむように奥の居間へ連れこ
み、襖をびつしやりしめてしまつた。
男は淫らな眼でうめを見つめている。

うめは、真赤な顔をして、男の前に体
をよこたえた。

ゆきの計画はマンマと図にあたつ
た。一度たアさんに体をゆるしたうめ
は、自分の秘密を口がさけても絶対に
しやべらないだろう——と、この二号
さんは狡猾な、そして淫らな微笑をも
らすのであつた。

奥様と主人と女中

◆私の方がズツと上味だと旦那様が仰言つたわ

と女中は自信満々——

*** 浮氣ならイヤ ***

「あなた、トキやはこの頃、とても生
意気になりましたのよ」

「ほう、そうかい。どしどし叱つてや
つたらいいじゃないか。遠慮はいらな
いぜ」

細君のちか子は夫の英三に、そう云
つてこぼした。主人の手がつくと、女
中は急に威張り出すと云われている。

つまり、奥さんが何よ。あたしだつて
旦那さまのお情けをうけているんだか
ら愛人なんだわ——と云う氣になるら
しい。トキやが威張り出したときいて

英三は実は内心ぎよツとした。

英三が女中のトキやを口説くように
なつたのは、もう半年も前のことだ。

「いやですつたら、旦那さま。あら、
奥さまにいいつけますわよ」

細君の留守に、ボチャボチャとして
エクボのあるトキヤの手を握つたりす
ると、彼女は羞かみながらそう云つた
ものだ。夜中に、トキヤの寢室にし
びこんで、柔かい体を抱きしめ、
「僕は、君が本当に好きなんだよ。女
房なんか追いだしてやろうと思つて
るんだ」

「あら、いけませんわ、そんなこと。
可愛いお子さんがあるのに……」

「さ、いいだろう？ ね、この手をち
よつとどけてごらん」

「そんなご冗談をなさつてはいけませ
んわ。あら、いやですつたら、あ、い
や、いや……おやめにならないと大き
な声を出しますわよ」

「うわッ、かんべんしてくれ……し、

しずかに……
ほうほうの
態で、英三は逃
げ出した。しかし、
根気よく何度となく口
説いているうちに、
『浮気なら、いやですわよ』
『絶対に浮気じゃない。生命がけでお
前に惚れてるんだ』
『そんなら……』



というわけでやつと下紐を解
かせることに成功した。
初物をたべれば七十五
日生きのびると云
うが、女の初
物はまた
格別

『あらまあ、またですか？』
と云うトキやもまんざらではなく、
いそいそと英三を柔肌のなかにむかえ
入れるのである。細君が子供にかまけ
て、英三の方へごぶさたしているので
英三の方ではかえつてさいわいだと思
っている。

そこで英三は、その方の精力をトキ
やの方へ向けるものだから、トキやは
もうスツカリのぼせてしまったの
だ。

トキやが眼に見えて威張り
出したので、細君のち
か子は変だと思ひよう
になつた。そこである
晩、眠むいのを我慢し
て、狸寝入りをしてい
ると、側に寝ていた夫
がある。英三は有頂天になつた。一盗
がムクムク起き、しばらくちか子の顔
を見まもつていたが、やがて、足音を
盗んで部屋から出て行つた。廁へ行つ
たにしては少し時間がかかりすぎると

思つたので、細君も、起き出して女中部屋の前の廊下^{ろうか}にたたずんで、そつと耳を澄ましていると、やがてトキやがあられもないことを口走り、それに負けじと夫の英三も何やら怪しからぬ世迷いごとを云つてゐる。「女房の寝耳に下女の……声」ではなくて、まのあたり目撃^{もくげき}してしまつたのである。

奥さまの夜這い

さあたいへん。ちか子はわれ知らず頭がカアツとしてしまつたが、何を思つたのか、そのまゝ自分の臥床に戻つて行つた。しばらくすると、夫がかえつてきてあたりを見まわし、何くわぬ顔で寢床にはいつた。と、胸に一物ある細君は、子供の寢ている枕元を通つて、ノコノコと夫の蒲団にはいりこんだ。英三はしばらくそのことのご無沙汰^{ぶさた}していたので、今夜はちか子の奴めずらしく訪問に相成つたわいと思ひ、いさ腹一杯たべてきたばかりなので、

いささか食傷気味だつたが、これも浮世の義理だと思ひ、至極く事務的ながら細君を抱き寄せようとした。と、そのトタンに、イヤツというほど脇腹^{わきばら}を蹴飛ばされた。

「痛いッ、何するんだッ！」

「口惜しいッ！ この助平野郎！ あんたは一体、いま、どこで何してらッしやつたのよッ！」

細君は夫の胸に武者ぶりつく。英三はしまつた、大事露見かと思つたが、あくまでゴマかす以外に手なしと思つて、蒲団の中で暗闘数刻、手ごめ同然にして細君の鬱積^{うっせき}するものを鎮めてやつた。それでいくぶん半狂乱の細君はおさまつた。

翌日、あとのことが気がかりだつたが、ともあれ英三は、薄氷を踏む思いで会社に出て行つた。そのあとが大変だつた。二人の子供が、一人は小学校一人は幼稚園へ行つたあとで、
「トキやア！」

女中を呼ぶちか子の声は殺気だつてゐる。

「何でございますか。奥さま？」

言葉だけは丁寧だが、トキやはスツカリ奥さんを舐めきつてゐる。

「お前、白状おし、スツカリわかつてゐるんだからね」

トキは、フンと云つたような顔をして下をむいてゐる。旦那さまは、奥さまよりも、あたしの方がずつと味がいいと云つた。あんな古女房^{ふるにようば}は追い出して、お前といつしよに、水いらすずで暮らそうともいつた。フン、奥さま顔をして偉そうにしているが、あたしの方が勝ちなんだわ……

「さ、返事をしなさい！」

「……………」

「図々^{ずく}しいつたらありアしないわ。お前みたいな女は今日限りヒマをあげるから、旦那さまのおかえりにならない前に、さつさと出て行つてちうたい」
「いやです」

「何ですつて？」

「いやです。旦那さまは、奥さまを追
い出して、あたしといつしよに暮らす
つて云つてらつしやいます」

「まア、何だつて……」

「あたしの方が、ずつと味がいいつて
……おつしやいましたわ。ホホホ」

「バカ、バカ、バカ！」

ちか子の眼が吊りあがつたと思うと
いきなり立ちあがつて、トキやの頬ッ
ぺたを殴りつけた。さアそれからがタ

イヘン。女剣戟さながらの乱闘がはじ
まつた。

当然、トキやはこの家から追い出さ
れるはずだつたのに、どんなふうに話
がついたのか、その翌日もトキやは依
然、酒蛙々々として働いていた。いや
そればかりではない。それから四、五
日後、御主人の英三を真ン中に、三人
仲よく肩をならべて近所の映画館へ出
かけて行つたのである。

も、金がごしやまんとあるンだから、
何もあくせく働く必要はないンだが、
それにしても、独身で男ぶりのいい若
旦那がブラブラしていると、二十人近
い若い女中たちが棄てておく道理がな
い。

お久美さんという三十近い女中は、
熱海、伊東、塩原などの温泉旅館を転
々としてきた渡りものだけあつて、客
扱いがうまく重宝がられている。この
お久美さんが、若旦那をマンマと誘惑
してしまつた。

「若旦那。私に英語を教えて下さいま
せんこと？」

と持ちかけた。

「英語？ そんなものおぼえて、どう
するンだい？」

「だつて、外国人の兵隊が四六時中来
るでしよ。英語をおぼえといたら、そ
れだけ当館の評判がよくなり、お客が
増えますでしよ」

「なるほど」

若旦那と年増女中

◆初心な若旦那を蕩して、アノ道の法悦を
手ほどきする年増の手管——

飛んだレッズン

温泉旅館といつても、東京あたりの
チヤチなさかさくらげ印のとはだいぶ

違う。箱根湯本に近い数百坪の庭園づ
きの宏壯な温泉旅館。ここの若旦那と
いうのがK大学を卒業しているくせに
これといった職業をもたない。もつと

一應スジが通つてゐる。そこで若旦那は、自分の部屋へお久美さんを通れこんで、真面目くさつて英語の講義をはじめた。はじめのうち、お久美さんはしごく神妙な顔で講義に耳を傾けていたが、もう女も三十近くなると脳細胞がかたまつてゐるから、どうも彼女はおぼえが余りよくない。そこへもつて来て、はじめつから、おぼえる気持ちにサラサラないのだから、なお始末がわるい。

『どうしたんだい？　ここんとこ、さつき教えたばかりじゃないか』

お久美さんは返事をしないで、穴のあくほど若旦那の顔を見つめている。彼女の顔は汗ばみ、眼はうるんでいてどうもたゞごとではない。見つめられた若旦那は、おもわず胸をドキドキさせて、視線をそらしたが、トタンに久美さんは厚ぼつたい膝でいざりよつて『ねえ、若旦那。英語もいいけど、もつといいこと教えてよ』

と熱っぽい手で、イキナリ若旦那の手をにぎりしめた。

『いいことつて、何だい？』

お久美さんの眼もと、口もと、身のこなしはまさにエロ百パーセントだったので、若旦那もいささか昂奮せざるを得ない。

『あら、イヤですわ、いまごろの若い人が……。いいことつて、男と女が二人つきりでするいいことよ。知らなきア、私がおしえてあげるわ』

という次第で、お久美さんは、女上位の法悦を若旦那に伝授してしまつたのである。

『どう若旦那、英語よりもこつちの方がよつぽとおもしろいでしょ。まあ、いやだわ。蒼い顔なんかしてさ。タバコ一本ちようだい。……でも、若旦那はとてもせつかちだわ。もつとゆつくりなさなけりア、つまんない……。あら、もう一度？　うあア、たのもしいわア！』

摘みそこなつた蕾

若旦那の教える英語には、まるつきりお久美さん落第であるが、彼女の教えた二人きりのあそびは、若旦那は実によくおぼえこんだ。

温泉旅館などというものは、土、日祭日、その他行楽の季節にはものすごく忙がしいものだが、ふだんは森閑として、まるで閑古鳥の啼くさびしさである。

女中たちも、スツカリのんびりして油を売つてゐる。若旦那とお久美さんとのレッスンはだんだんすゝんで、いまや若旦那は、お久美さんに仕込まれた腕前をたれかにためしてみたくなつた。

小田原在のお百姓の娘で、今年十八になる美代子という娘が、最近この旅館へ奉公に來た。キレイな眸をした可愛い娘である。若旦那は、この娘に眼をつけた。

はにかみやで、入浴なンかも、ほかの連中にかくれるようにしてこつそり入るらしい。

ある夜更け、若旦那は美代子のはいつている家族風呂に侵入した。お客のない日は、どの浴室を使つてもいいことになつている。ほかの連中は大浴場でキヤツキヤツキヤといつてさわいでいる。

『あら!』

美代子は、薄ばら色に匂うばかりの裸身をあわてゝかくそうとした。しかし、かくれる場所はない。若旦那は、だまつていると眼で合図を

すると、さつと着物を脱いで浴槽に飛びこんだ。

『あゝ、いい気持だ!』

ざぶり、ざぶりと湯の音をさせて、隅に小さくなつている美代子のふつくらした体をかるく抱き

しめた。美代子は、上気した真赤な顔で、途方に暮れて胸を大きく波打たせている。初心だから逃げだすことはむろん、抵抗することもできない。こるいう処女はわりあい簡単に初花をもぎとられてしまふのである。濛々たる

湯気の中、あわや落花狼籍という瞬間、ガラリと硝子戸が開いた。カギをしておかなかつたのは千慮の一失。『若旦那、何してらつしやるの!』

『う、うん、この娘に英語をおしえてるんだよ』

『お風呂ンなかで教えなくたつていいでしょ』

嫉妬に柳眉をさかだてたお久美さんが、壯烈な裸体美をかがやかして、美代子と若旦那のあいだに割りこんできた。ざアツとお湯がこぼれる。

『美代ちゃん、あんた、先へおあがり、私、若旦那に話があるんだから』

『うへッ!』

若旦那は、飛んでもないことになつて眼をパチ



若旦那
何して

クリしている。
救われたのか、おあ
づけをくつたのか、ど
うもハッキリしないが、
とにかく美代子が、真赤
になつて出て行つてしま
うと、お久美さんは、嫣然
と笑つて、若旦那に英語のレ
ッスを強要したのである。

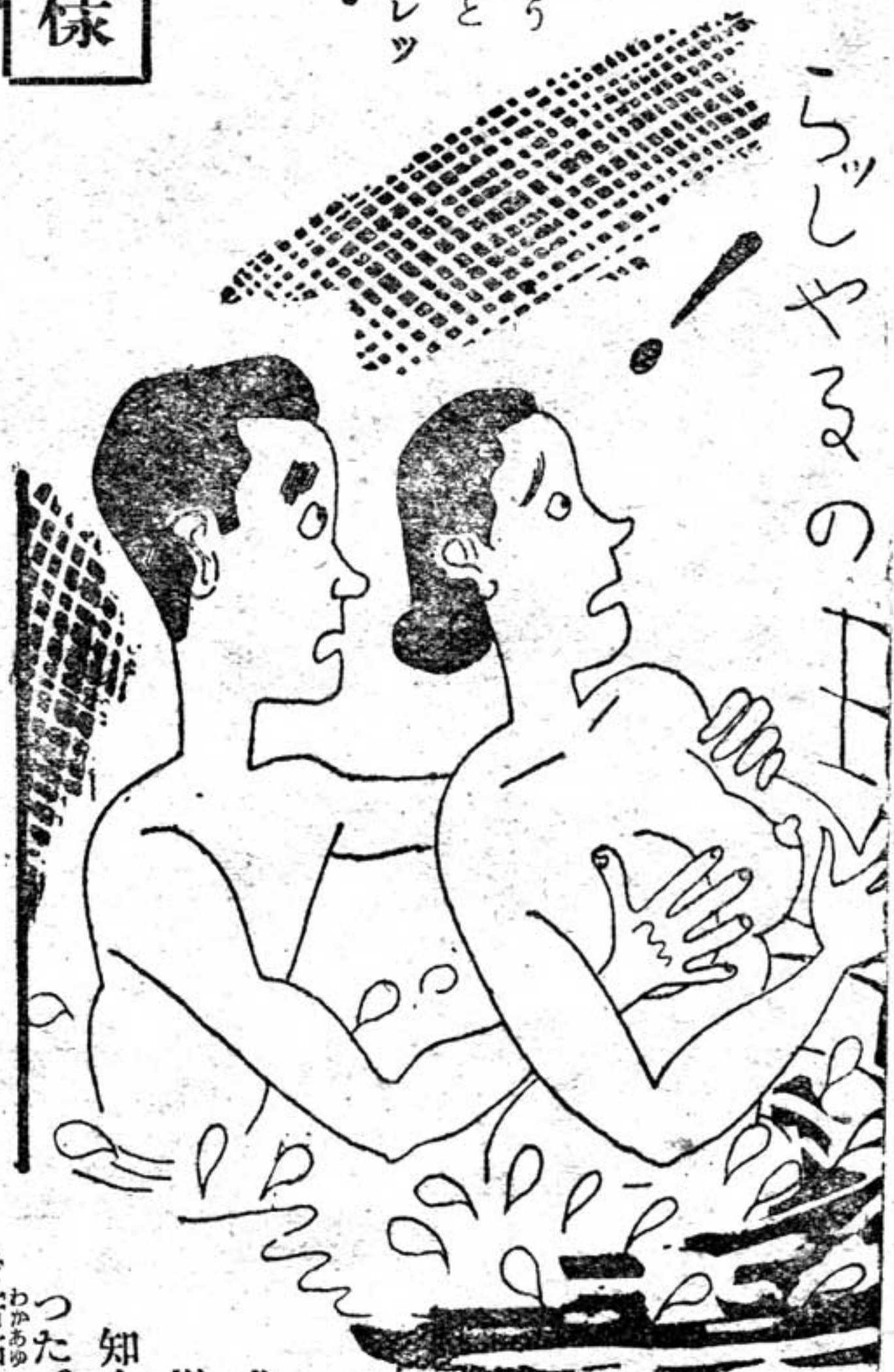
旦那様

と 變 態 女 中

◇打つ、蹴る、殴るの大立廻りの後で、トテモ
いいわと眸をうるます變態女中——

*** 春本に彈む息 ***

『旦那さま、あたし、この頃ヘンなん
ですよ』



『何が、変なん
だい?』

女中といつて
も、近ごろの女
中は気がきいて
いるので、往來
ですれ違つても
どこのお嬢さん
かと間違える。

北井啓吉は、最近
川口しづ子とい

知人の娘を女中に雇
つた。齡は十八、色白
で若鮎わかあゆのように、ピチピ
チした体をしている。彼は三十二歳の
サラリーマン、細君の政江が胸部疾患
で、入院したため、この娘にきてもら
つたのである。

『あの毎月のものが……』

『えッ、どうしたというんだい?』

主人の啓吉はビツクリした。毎月の
ものが無くなつたと云つたからつて、

彼は彼女に指一本だつてふれたおぼえはない。実はしづ子のビチビチした肢あし体に時々生唾なま唾をのみこむことがあつても、我慢しているのである。それなのに彼女は、肉体の異変を訴えたのである。

「メンスがとまつたのかい？」

「いいえ、そうじゃないんです。急に量が増えたんで心配してるんです。どう云うわけなんでしょう。それにお腹がとても痛むんですの」

「なアんだ、と思つた。それにしてもこの頃の娘は開放かいほう的になつたといつても、しづ子は少しさばけすぎている。

恥かしげもなく、女の秘密を平気で打ち明ける。啓吉は、いささかタジタジとなつた。その時は、どうにかごまかしたが、夜蒲団にはいつてから、隣の部屋に寝そとているしづ子の張りきつた肢あし体を想像そうぞうすると、何とも惱ましくなつてきた。細君が病気だから、そのことにこの頃はスツカリ不自由している。

といつて、女中の寢床に這いこむほどの不徳漢ふとくかんではない。

どうも寝つかれぬままに夜を明かしてしまつた。その翌日は日曜日なので寢坊ねぼうして眼をさますと、しづ子は甲斐甲斐しく働いている。健康そうなバラ色の頬ツペた、恰好かつこうのいいお臀しり。スカートの裾からのぞく太腿の白さが眼にしみる。

「旦那さま、こんなものがありましたわ」

晝前に書齋の掃除をしている途中でしづ子は一冊の古ぼけた和本を持つて来た。

「何だい、これは？」

めくつてみると、四十八手を図解ずかいしたあやしげな本で、本箱のうしろに落ちていたと云う。

「とても、おもしろいですねえ」

「えッ、見たのかい？」

「ええ、でも、こんな恰好かつこうつてできるでしょう？」

そう云いながら、寝そべっている啓吉に寄りそうように坐つた。

ふーむと思わずうなつた啓吉は、もうこうなつては意馬心猿いばしんえん、ものをもらわずにしづ子をその場に押ししたおした。

「アレ旦那さま！」

と口の中で云つたが、しづ子は抵抗をしない。いや、ねつとりとからみついてきたのだ。久しぶりで味あじわう女体の温か味。しかも發刺はつせきとした若いからだの弾力である。

「あ、痛い！」

*** 兇暴な愛慾 ***

ぐつと抱きすくめた啓吉の腕の中でしづ子が彼の肩に噛みついたので、啓吉も反射的に、太腿ふとももをいやというほどつねつた。

「もつと、つねつて！ ね、もつとつねつて！」

しづ子は夢中になつて叫ぶ。叫ばれ

た啓吉は、しづ子の肉体のここかしこか、見境なしにつねり、しまいには殴つてくれと云うので、彼は臀部と云わず太腿と云わず殴りつけた。

しづ子はヒイヒイ悲鳴をあげながらよろこぶのである。

しづ子が、処女であることはまち

がいな

しかし男に暴力をふる

るわせて、よ

ろこぶ心理は、何と解したらいい

だろうか。

女中と主人が、無人の家で、いつたん体の関係が生じると、あとはブレイキがきかない

のは当然である。その夜、しづ子は主

人の部屋にはいつてきた。十八の処女 啓吉に飛びかかつてきた。啓吉が疲れの（先刻までは）積極的な媚態は、啓て、フツとちからを抜くと、『旦那さまの意地わる！』

と云つて、白いむつちりとした女体は緊つていて、筋肉がビリビリふるえ、まるで白い悪魔みたい

に、しづ子は主人に挑み

たわむれ、襲いかかった。歯型のつ

くくらい啓

吉の手を噛み、胸をひ

つかき、足を

つねるので、たま

りかねた啓吉は、傍

らにあつたモノサシでび

しりツと、雪より白いしづ子

のお臀を殴りつけた。

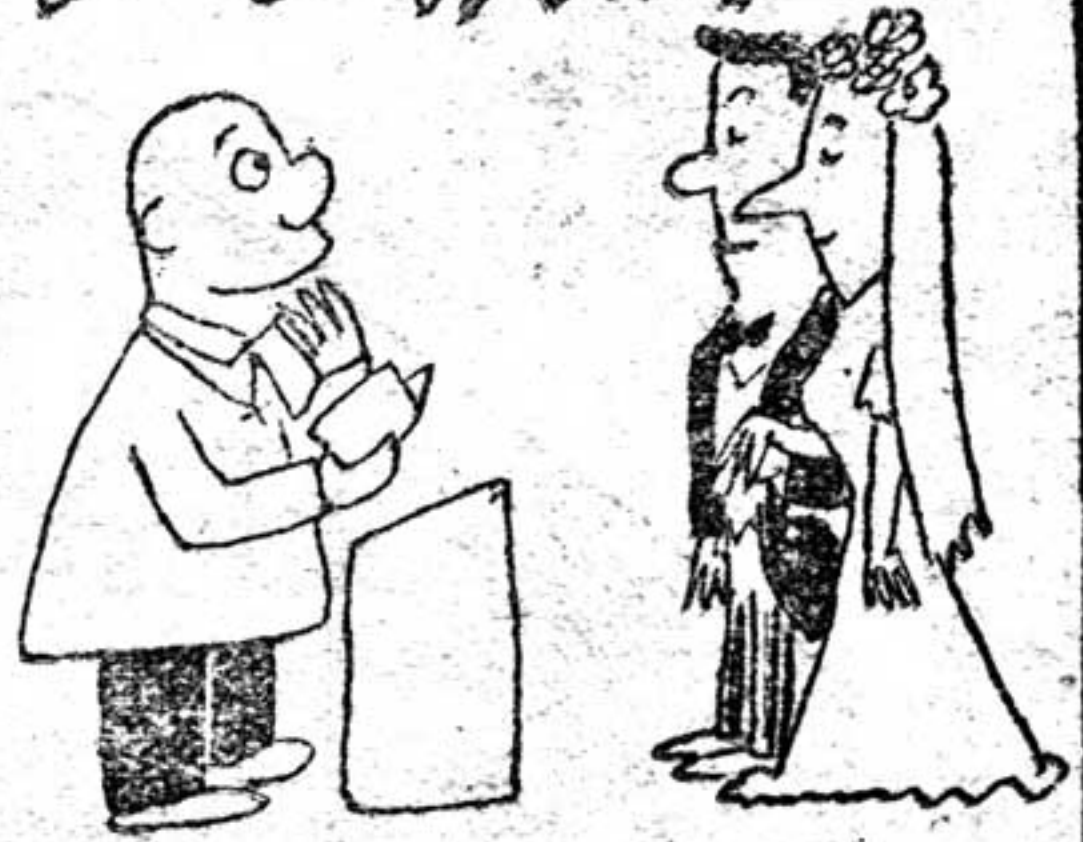
『痛い！』

『どうだこれでもか！』

啓吉も、いつか昂奮しきつて、眼を血走らさせ、二度、三度とモノサシを



師教セニ



お手を



打ちおろす。ヒイヒイ悲鳴をあげるの
だが、しづ子は逃げようとしないで反
対に体を押しつけてくる。殴られるた
びに苦痛の声を発し、そのくせ、顔は
歓喜に燃えている。

『もつとぶつて、旦那さま!』

『よし、殴つてやるぞ』

啓吉も次第に兇暴になつて、しづ子
の両脚を掴んで座敷中を引きずりまわ
した。髪が乱れ、息を切らし、胸がはげ

しく波打っているのだが、しづ子は、
ますます挑戦してくる。

『どうだ、まいったか』

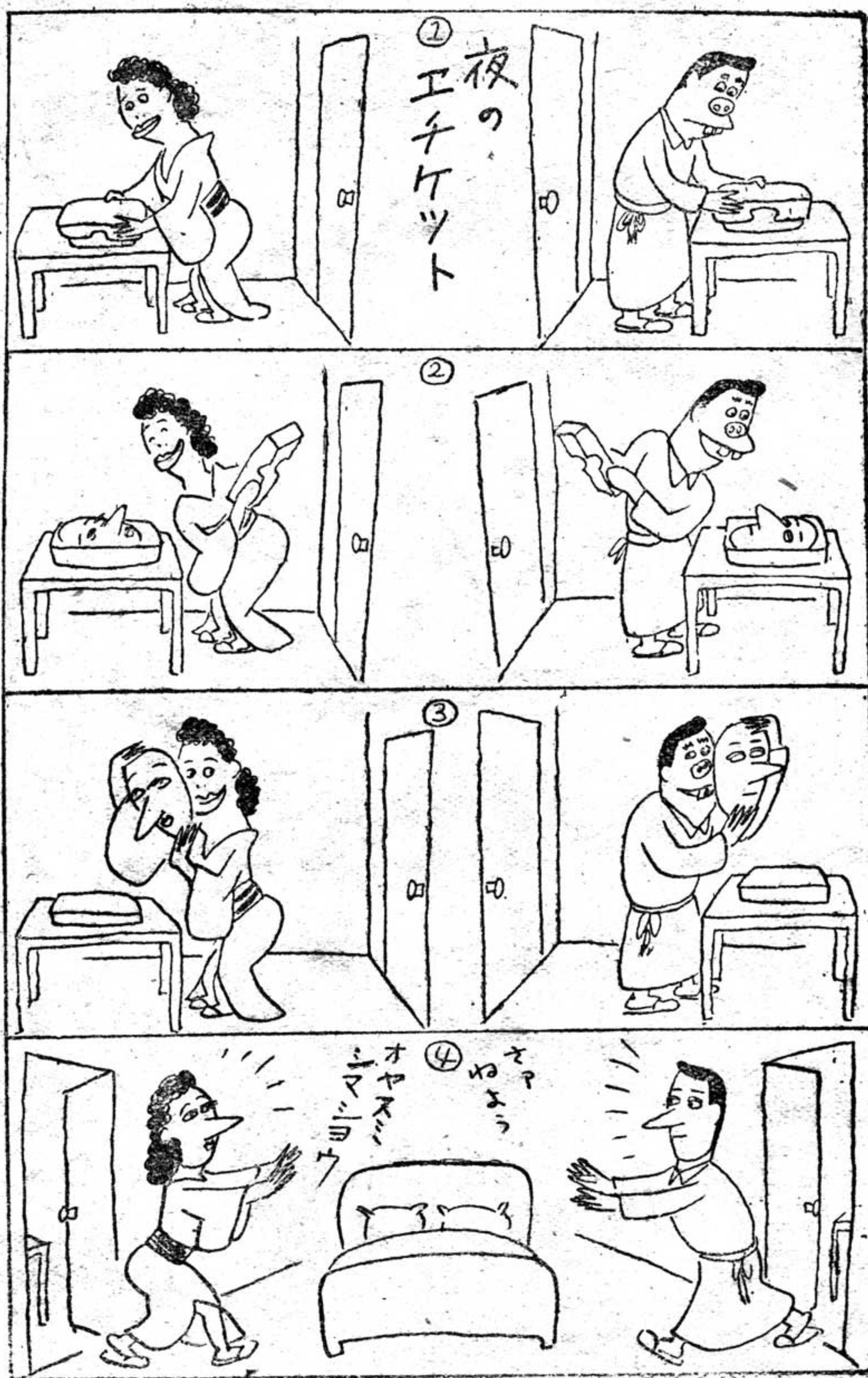
やがて動かなくなつたしづ子を、ひ
ややかに見つめながら、啓吉がそう呟
くと、しづ子は、けものみたいに啓吉
に抱きつき、

『うれしい! とてもうれしいわ。お
願いだから、いつまでも、あたしを可
愛がつてね』

燃えるような熱いくちびるを、啓吉
の口によせてささやいた。

『うん、うん……』

うなづきながら、啓吉は無我夢中で
しづ子のくちびるを吸う。しづ子の体
は、火のように燃えている。乱れた髪
の下から、煽情的なうるんだ眸がじつ
と啓吉を見つめている。啓吉は、この
女のためならどんな犠牲でもと、固く
固く抱きしめるのである。





燈下親しむ頃、そろそろ陽気がよくなつてく
ると、カッドウ屋はウズウズしてくる。旅に出
たい、ロケに行きたいと、ソゾロ活動屋の遊蕩
心を誘うのである。

秋から初冬にかけてのロケーションはまた格別である。それに、涼風とともに酒もグンとろまくなるし、暑くて狭苦しいスタジオで蒸し返っているよりも、カラリと天高く晴れわたったカ

ット視野の展けた地方は素的である。都会女性の伶俐でレジスターのような頭脳とお色気よりも、へんぴな異境の素肌にくる、コッテリとした素朴なお色気の方が懐しくなってくるのだ。

*** 煙草喫う間に

女をいなす

一步踏み出しや旅の空、有名無名を

活動屋にはロケと女はつきもの。ファンの血を沸す人気スタアも、ロケともなれば愛慾シーンを實演で行く。キヤメラマンも録音係も、そして大部屋俳優も照明係も、ロケの夜は徹して亂痴氣騒ぎに羽目を外す。さあ、どんな話が飛び出すか？ 一頁目からドキドキワクワクする珍談奇譚總まくり！

問わず、カッドウ屋はみんなノビノビしてくる。宿場々々に女ありなんて云つてネ。だからロケのない、あつても都内の日帰りロケなんかの組にはつきたがらない。黒沢明の「生きる」などはスタジオにへばりついたきりまるで動かない。こんな組のスタッフ一同は、芸術と云う名の牢獄に入いつたようなものだ。スタアだつて、ロケがないといい顔はしない。さてロケがあるとなれば過去の幻影を追つてアソコがいい、いや、ここがいい、と云つた具合に紛糾する。プロデュウサアも、巾着をしめて手近なところで済まそうとするが、

どつこいそろはいかない。

ロケずれのした土地はなにかと面白くないものだ。東京附近ならば伊豆地方、これから陽氣がよくなれば、たいがい各社のロケ隊がカチ合つて、したがつて女性群のサービスマンになにかと行届かなくなってくる。

ひどいのは時代劇の多い京阪地方で「無断撮影を禁ず」てな貼紙が軒並に出ている。土地全体がこんな風だからカッドウ屋などは好色漢の助平野郎の集団くらいにしか見ていない。ちよつとしたカッドウ屋のオフ・リミットで深窓育ちの娘などはゼツタイに外出しないし、芸者、女中、パンパン嬢に至るまで、寝た真似くらいで東京の一流どこの玉代をフンだらけでしまふ。



土地の人達がこんなになつてしまつたのも、もとはと云えば罪はカツドウ屋自身にある。ロケ隊が帰つた後で、娘や人妻、未亡人などがあわてて婦人科医へ駆けこむようでは、どちらにしてもカツドウ屋の所業と指弾しだんされても仕方があるまい。

『違ふ、医者にだ
よ』

つまり、女房に
感染しては大
変であるから、医
者に打つのだと云
うんだが、その電
文がフルつている
『デタ、ニヨウボ

タノム

志摩半島に着い

た時は、伊豆の珍
現象もカラリと癒なお

り、そうなればコツチのもので、さつ

両雄に賭けたものである。

そく伊豆は池部と妙な賭かけを始めた。つ

さて、池部良の前に現われた女性は

まり口ヶ地に着いて最初に見付けた御

海で鍛えた赤銅色の肌、筋骨隆々たる

婦人を、齡は二十才から四十才くらい

海女のNO.1。池部はトタンにフエ

まで、それを煙草一本喫う間にイタし

ツとなつたが、そこはペテラン、おま

た方が勝ちと云うのである。これを洩

けにこの四十年増の海女さん、熱烈な

れ聞いた面々も、俺は良ちゃんだ。僕

る池部ファンだから、こんな上手い話

は断然伊豆ちゃんだ、私は良ちゃんに

はないとばかり、煙草に火を付けるよ

千円よ、てなぐあいには種馬ではない

り早く、タレ込んだものである。おま



Sim

けにロケ中は、凄^ひいアワビにサザエを
鱈腹御馳走してくれ、真珠のお土産ま
でくれたのである。ロケがなければ映
画なんかに出たくないネと、仰^{おしや}言^いるの
も宜^{よろ}なるかなである。

***ロケで

はみんな

ムンムン

する

古くは「馬」

のロケで黒澤明

監督と高峰秀子が

出来てしまつたり、

「銀嶺^{ぎんれい}の果て」では谷

口千吉監督と若山セツ子

が出来てしまつたり、カッドウ屋同志
のロマンスも少くない。奔馬空を行く

山田五十鈴が、「蛇姫様」のロケで、

凍餅^{こもち}と凍豆腐の名産地、東北は北上川

の上流に行つた時、何しろ孤閨二十日



間に及ぶのでムンムンしてきた彼女、

東京にいるマネージャーのHに、

『アス、ケツコンシキスル、スゲコイ』

と電報を打つた。寢耳^{ねみみ}に水のHは、

モオニングを着用に及んで、さて北上

なもの。

『もう、離婚しちやつたわ』

とすましこんでいた。女優さんは、

ロケに行つてムンムンしてくると、こ

んな珍現象がよく起るものだ。男達の

ように、そりやたらに土地の衆とはや

れませんからなあ。

男でムンムンしてきた異色奇談^{いしよくきだん}があ

る。「東京ファイル」で、日本に初登

場したアメリカのブレイクストン・プ

ロ。そのプロのスタアでロバート・ペ

イトンと云う奇人がいる。「ゲイシヤ

・ハウス」という突拍子もない映画を

撮りに再度来朝し、北海道へ出掛けた

このペイトンと云う男、何しろ、北極

洋で泳いだりして、熊だか人間だか解

らない人物。おまけに七尺近くもある

偉丈夫なので絶倫^{ぜつりん}中の絶倫、二日も空

闊だと、ゴボゴボと溢れこぼれる始末

である。その彼が、北海道の原野で放

浪するシーンときたのだから罪な話。

たちまちペイトン氏、下半身がムンム

ンしてきた。同行の女優連もムンムンしたが、さすがに日頃の行状もどこへやら、彼に近づく女傑も現われず、そのうえバター一日一ポンド、生卵十五箇、牛肉のさしみを一片と云うまさにアレ専門みたいな食物をパクついているのだから、たまつたもんではない、ムンムン中のムンムンになつてしまつた。

十日の後、やつとのことで札幌の町に出た。森繁久彌、灰田勝彦と云

つた連中が、人ごとではないとばかりに、ムンムン氏を連れて適当なところへスウィーツと消えてしまつたが、ベイトンだけは土地の芸者も一眼見るなりギョツとして、寄り着く者がない。そ

逆退治から来た!



こで森繁見るに耐えずと、待合の女將に打明けて相談すると、なんとか御相手を探して見ましようよと、ボンと胸を叩いてひきうけてくれたのはいいが

「命が惜しゅう御座んす」

てなぐあい、一人のこらず帰つてしまつた。ボンと胸を叩いた手前、いまさらこの大男を一人にもして置けず女將は重大な決意のもとに、

「私ももとをただせばドコソコのナニと云われた女。よろしうございます、私がお相手いたしましたよう」

狒々退治の覚悟で、この四十をとりに越えた夢よりも一度の女將はベイトンが札幌を離れるまで面倒を見たのである。おかげで彼はガツクリ瘦せてしまつたが、しかしその歓びは一通りでなく、彼が駅を発する時には、リラやスズランの花束をもつて女將が見送りに来たくらいだつた。で結局、一番モテたのは彼らしいと云うことになつた。ロケは愉しい、逸物には逸物が現われるものである。どつちが狒々退治だか解らなかつた話である。

若サギと予科練で有名な勝浦へ「思春期」のロケ隊が行つた時、岡田茉莉

子はじめ一行は、十七、八前後のうら若い少女スターばかりと、血気旺んな裏方連中の同勢二十四、五人。その日の仕事がおわつて宿へ帰ると、入れ変り立ち変り、少女達に噛りついたり、妙なところへさわつたり。ほんの軽い気持でやつているのだが、やかましい連中がいないこととて、かなり手の込んだイタズラをやらかしたので、とうとう岡田茉莉子を先頭に少女スター一同が、

『ロケは愉しいんですが、晝夜兼行でイタズラされたのでは、とても身体がモチません』

と、丸山監督のところに苦情を申し込んできた。ところがこの丸山監督でさえ、後頭部がすつかり脱落しているにもかかわらず、眼を細くして、乳臭いような、甘ずっぱいようなこの思春期の乙女達を眺めて、内心、甲狀ホルモン線を刺戟し、夜はチョコチョコしかるべきところへお出掛けになつてい

るくらいだから、こんなロケはちよつとした若返り療法にもなるわけなのでこの苦情を、さてどんなふう処理したものか、ホトホト困つてしまつたと云うのである。

佐渡情話で有名な柏崎は、駅弁もろまいが、鯛の子の塩カラ、三面川で捕れるサケはことのほか美味である。この柏崎の奥に瀬波温泉と云う静かな仙郷がある。旅館は一軒もなく、島や田の中から湯煙が上り、人情一段と細やかで、なんとなくモチ肌の姐さんといふ刻千金を愉しみたくなるような気持になる。ここに

は宿屋がないが、そのかわり遊廓が二、三軒ある。だから中学校の宴会などでも、登樓することになつてゐる。大映の「続馬喰一代」のロ

ケ隊が、この仙郷にやつて来た。さつそく登樓分宿することになり、市川猿之助、三橋達也、菅原謙二の面々、情緒纏綿たる愛情にコツテリと濡れてしまい、たつた三日間のロケだが、一同明日は雨が降らぬか、今日は曇らぬかと、ロケの延びることばかり考えていたが、こんな時は好事魔多しで、連日ピーカン（晴天）である。喜んだのは三條美紀、轟夕起子、伏見和子、の女優連



ばかり。

『三日もいれば情もうつるし、味もよくなつてきますよ。これからと云うところで、幕とはチト殺生ですなあ』

猿之助までボヤクのだから、若い連中は云うまでもない。役者を止めたい急病になりたいなどとエライことになった。菅原謙二が纏綿たる別れの悲劇を展開している。その傍で若いカメラの助手がせつせと何か書いてある。よく見るとこれが辞表である。

『東京なんか帰りたいかアありません。会社を止めて、ここで世帯を持ちますよ。何しろ僕の彼女は、それはまた格別の代物でしてネ』

と、本当に辞めそうになる奴を、無理矢理に東京へ連れ戻つたのである。

*** 二枚目スタア

の恋愛哲學

東海道の終点、下関は、練りに、龜の子せんべいが名物。左党にも甘党に

もいけるところがミソだが、少し氣ツ風が荒つぽい。それでも、海千山千のカツドウ屋にかかれば一コロ、わけても女性においておやである。新東宝の「南蠻戦国船」

のロケ隊が浮気の虫に誘われて、ワツとばかりに繰り込んだわけである。

さて、落着いた宿で、沖の黒潮を眺めながらちよつと一杯と云うところで、

『俺は、あのポツチャリしたのがいいな』

『俺は、あの年増だ』

『うむ、俺はアレにしよう。どうだいあのふつくらとした胸を見ろよ』

俺はもう帰らない



と云うわけで、宵のこの一刻は正にカツドウ屋のロケ天国である。ところがこのロケは、予算ギリギリなのでロケマネ（出張会計主任）が澁いことばかり云うので、

ムンムンしていた一同、その夜は、各部屋でそれぞれ適当な女性をタレ込んで情慾の発散に全力を上げたのである。

澁いロケマネ氏も、こりみんながイチャついたのでは我慢が

できない。エイツままよと、女体征服のコースをたどつたのはもちろんである。ところが翌朝、出された請求書を見てロケマネ氏、途端にヒエツとばかりに腰を抜かしてしまつたのである。

何しろ、大変な金額だからである。それとも、一人一人の名前入りで丁寧に書いてある。

「みなさん、おぼえがおありじやろ」
一同はドキリとした。昨晚の女中さんの顔が、廻り燈廊のようにフェイド・アウトした。

「わかつたよ。それにしても、俺が高すぎるじゃないか？」

と、ロケマネ氏がボヤくと、彼氏の相手をした昨夜の女がにやりとして、
「でも、旦那さんは四度も何しなかつ

たじやないの」

と、こんなナンセンスもある。ロケの失敗談はまた愉しからずやである。

「へえー、それで、天下のカツドウ屋が金を払ったのかい？ アツハハハ」
なんて大笑いするのは、人気絶頂にある二枚目スターである。

こう云うスター連になると、すべてあの道はロハと決つてゐる。だから、口説きも堂に入つてゐる。鶴田浩二に云わせれば、

「俺は、美人とか醜婦しゆうぶには関係しない

よ。大体、痩せ型の方が好きだね、昏倒こんどうするまでゆかなきゃ、おさまらないからネ。体質にもよるだろうが、本当の味を知らないで何時までも慾求ようきゅうする奴ネ

本当のを知れば後が続きませんよ、身体がもたないもの」

などと、ウンチクのあることを云つてゐる。ケンケン服膺ふくようすべき言葉である。ちよつとした閨房哲学である。龍崎一郎のロケ談義は、

「ロケ中の女の見きわめ方はですな、一見、助平そろに見えない女が、実は大助平なんです。顔のいいのはすぐ陥おちますな、特に、インテリぶつてオツにツンとしてゐるのはネ。熟した柿みたいなもの、竿で突けばポロリです。一見、助平そろな女はやつぱり助平だし、結局、女は全部助平てえことになるますネ。第一、この女は好きか知ら？ いや嫌いじゃないかな？ なんて考えていたんでは、女は口説くどけませんよ」

識見しきけんかくの如く豊かである。なにしろ据膳食しよたんわぬはスターの恥てえことになつてゐるらしい。

松竹の「海の花火」で鹿児島へ行つ



た三国連太郎、イナのブツ切りも美味かつたし、焼酎を半分くらい水で割り、荔枝と豚肉を油でいためた卵とじ、片口鰯(ひこ)を海水に豆腐と一緒に叩きこんだ文字通りのうしをなど自然の味覚もさりながら、土地の女達のドツ

さすがの三国連太郎、悠然と一人で寝てみたくなつた。女は嫌だなあ、第一自分で狙つて口説き落すところに愉しみがあるのだが、今宵は一番、女から遠ざかろう、なんて思つてるところへ湯上りの香りも艶然とすべりこんで来た女がある。連日の奮闘で肉体はもうクタクタなのであるのにどこかの附随筋肉は、五体とは無関係にニョッキリなのである。しかし、今夜は慎しもうと思つても駄目。女は鼻を鳴してくねりくねり。飛起きて妄念を払うべく湯殿へ行き、水をジャアジャア一件に浴びせたら、ジューと音



た女がある。連日の奮闘で肉体はもうクタクタなのであるのにどこかの附随筋肉は、五体とは無関係にニョッキリなのである。しかし、今夜は慎しもうと思つても駄目。女は鼻を鳴してくねりくねり。飛起きて妄念を払うべく湯殿へ行き、水をジャアジャア一件に浴びせたら、ジューと音

がして煙が上つたとか。何も勿体ねえ話さ、遠慮なくいただいておけばいいのに、スタアともなれば、飽食してゲツプが出ると云うんだからうらやましい話である。

*** 処女を捧げて

『ごめんなさいね』***

二枚目のモテっぷりが、水際だつてゐるのに比べて、三枚目の連中は飽くまで三枚目である。五尺ソコソコの小粒珍優堺駿二が、「悲しき口笛」で、花は橘、男は次郎長の、茶所静岡へ行つた時、茶の香も澁い処女の蕾を目当てにしていたのだが、彼と意気投合したのが、何と五尺七寸、十八貫もあろうと云う大女。そこで戦果や如何にと前夜の模様を訊くと、

『うん味はともかく、身体が違いすぎたよ。上下同時に用いんとするときはいろいろ不都合を感じましてネ……』と頭をかいていた。この堺の小柄に比

吸いこむ力は、五体を溶ろけさせるよりであつたと云う。入れ変り立ち変りスタアの愛情にしつぽり濡れようとする女達が、連日連夜ひしめき合つた。が、そうになると、どうも勝手なもので

係にニョッキリなのである。しかし、今夜は慎しもうと思つても駄目。女は鼻を鳴してくねりくねり。飛起きて妄念を払うべく湯殿へ行き、水をジャアジャア一件に浴びせたら、ジューと音

べると、これはまた三十八貫、六尺二寸の岸弁明、どこのロケに行つても、女たちが恐れをなして満足したことがない。仲間が同情して女をとりもつてやり、そこで口を酸っぱくして、

「あいつは洋服と食物は二人前だが、アレは半人前だから、心配することはないよ」

と、女を口説いてやつても、一晚中寢床に入らず、しまいにはシクシク泣き出してしまふと云うのだから、あんまり大きいと、ロケも愉しくないと言ふ結論になる。

山村聴みたいに学界の謎みたいな超特大型の保持者になると、ロケ先から一度味を知つた女達が、恋々の情もだし難く上京して来るのだから始末が悪い。だから彼は、一度行つたところへは二度と行きたがらないのである。

こうなると、スタアの浮気も簡単にはすまなくなる。第一、土地で評判になるでしよからネ。スタアには、ど

うしても行きたがらないロケ地がある池部良は伊豆の大島、森雅之は北海道若原雅夫は京都と云つたぐあいに。いづれも、それ相当なことをしたムクイと云うわけである。

「ねえ、また来てよオねえ、本当よオ」

なんて別離の情切々たるところを見せるのが、律気でトツチヤン坊やみたいな小林桂樹



彼氏はロケに行くに妙なノートを持つていて、人には滅多に見せたことがないが、これはまあ性戯点取り表とでも名付けるようなものである。なにしろこの三等重役、自分の持物を酷使し出

したのは極く最近なのである。だから、相手女性の観察が非常にうるさい。

伊香保ロケ カイ子嬢

第一位 八十点

カイ子嬢、両脚をのばして昂奮す

る。大いに苦しみもだえる。近來まれに見る女性なり。

「な具合にしるしてある。」

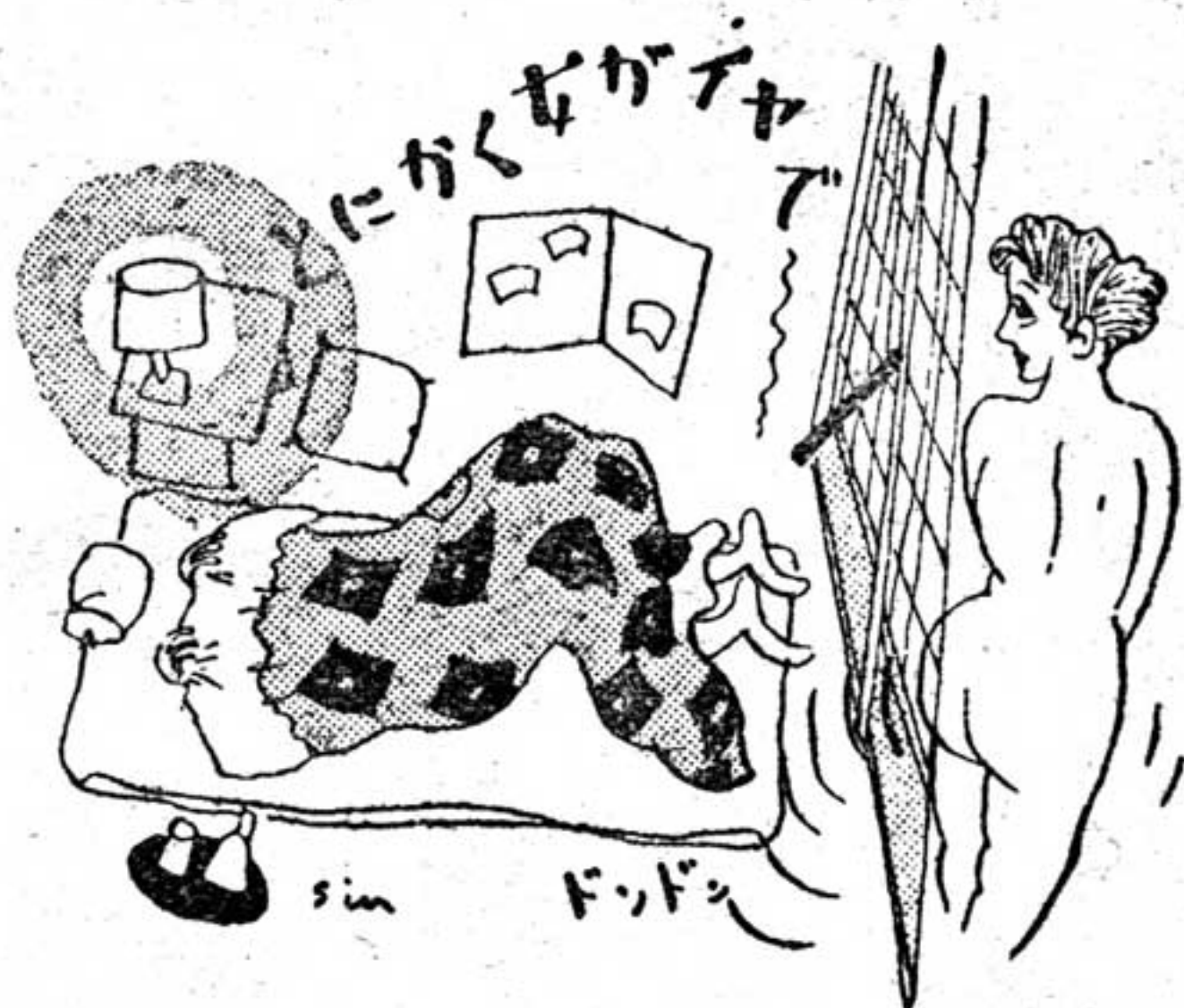
「伊香保へ行つたら、あそこの宿で女中はカイ子に限るよ」

なんて、後輩

に訓示をあたえ

ている。ちよつと調査狂の彼らしい所為である。純情な彼には、またロケでの美談がすこぶる多い。純情なるがゆえに、相手の女性も純情なる人がぶつかる。「続三等重役」のロケで千葉の

白浜へ行つた時、土地のお嬢さんで典型的なオサセが現われた。オサセと云うのはヤチヨロク芝居の用語で、口説かれると誰にでも厭と云えない純情可憐、愛すべき女性のことなのである。白浜燈台の下、燈台下暗しの真の闇でコツテリ愉しんだ小林桂樹にオサセ嬢



が、着物のチリを払つて静かに云つたものだ。

「ごめんなさいね」

すると、純情な彼の文句がいい。

「いいえ、いいんですよ」

これはいいに違いない。その彼に悪知恵をつけて愉しんでる罪な連中がいて、

「素人は怖いよ。桂ちゃん、子供ができたことだぜ。アノあとでアスピリンを十粒位吞ませるんだよ、そうすれば大丈夫だから」

この冗談を真に受けて、一汗かいたあとで相手の女にアスピリンを無理にのませ、

「君、これで、大丈夫ですよ」

と当人、洒蛙々々としているんだからいい気なものだ。風邪薬を囁ませ、何が大丈夫なのかわかつたものではない。スタアばかりがモテるわけでもない。裏方連が凄くモテるときもある。「宵待草」のロケの時、

洋服と喰物は二人前



小道具、大道具の連中が、毎日、加茂の河原に何百本と云う月見草を植えた。すると河原の両側は慾望と云う名の町の宮川町である。その色町の姐さん達が、晝間は暇だから、なんとなく出てくる。まあキレイねえ、なんて云つてるうちにすつかり裏方連中と仲良くなつてしまい、真晝間からイタダキと云うことになつて時ならぬ濡れ場を展開した。この時ばかりは佐田啓二

や、佐野周二までが、

「おゝい、俺にも花を植えさしてくれ」とボヤいたそうだ。

*** 睡眠不足に

なるロケの夜 ***

広島は原爆で一躍世界的になつたが

原爆以前の昔から、カ

ツドウ屋にとつて広

島は魅力である

流川筋、紙屋

町、八丁堀界

隈など、水が

実に美麗であ

る。水がいい

から酒がうまい。

いさゝか甘口だ

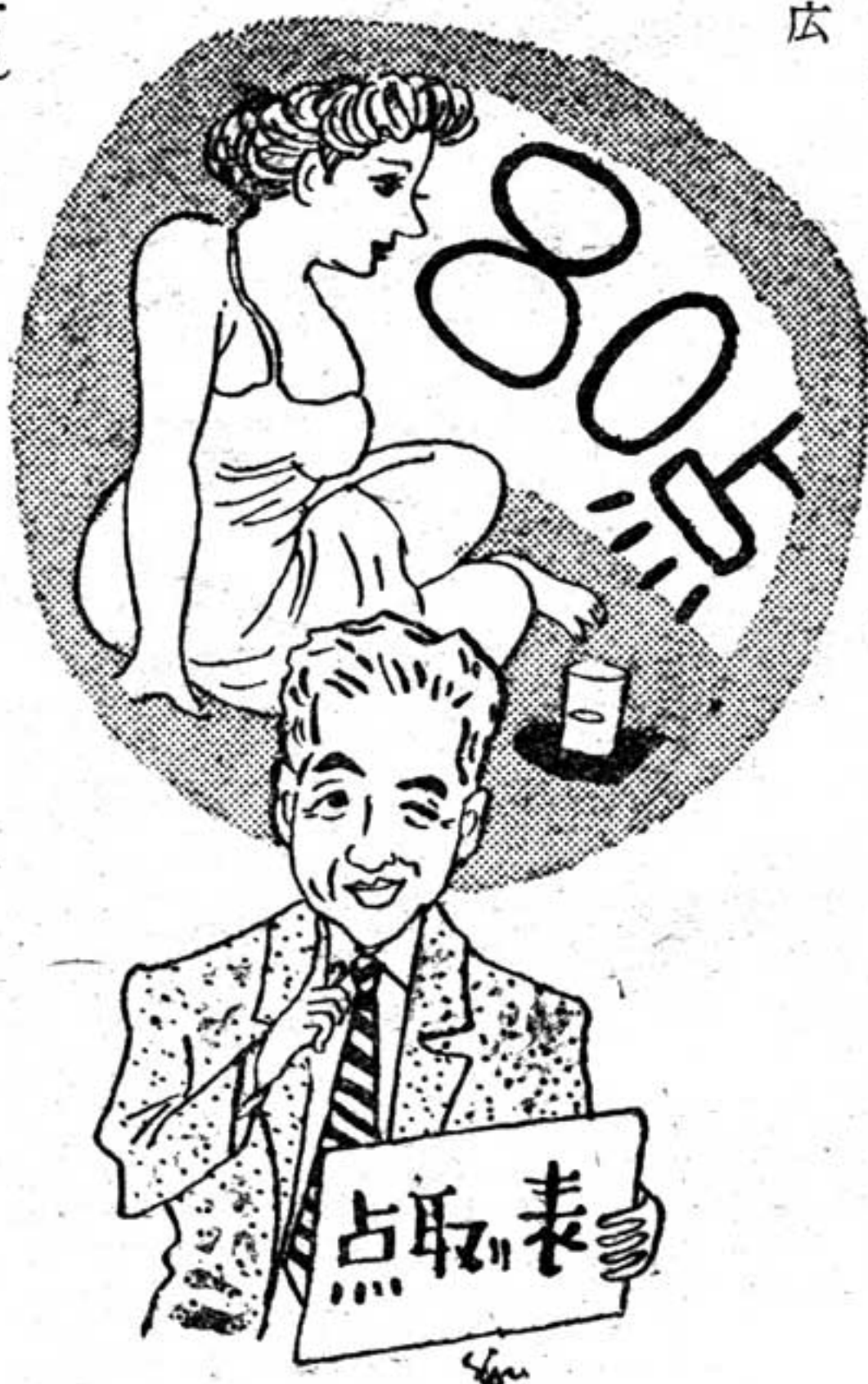
が豊醇な加茂鶴、

酔心などがある。それ

に蠣、かまぼこ、穴子など、食物の豊

富なところの女はお色気にも充分油が

のり切つていて、決して男を失望さ



せない。吉村公三郎監督の製作で脚本

の新藤兼人が民芸と協同で演出する、

「原爆の子」は、広島に腰を据えてい

よいよ長期ロケに入いつた。地元ぢもとの援

助も絶大なので一同感激しているが、

この広島は宿がいずれもバラツクの安

普請であり、そのうえヤミ姫日本一の

が手に取るごとく。窓越しにモツブ・シ

ーンが見えるといつたぐあい、おま

けにお茶をひいた姫君達の無料奉仕の

陣中見舞があり、スタッフ一同嬉しい

悲鳴ひめいを上げているとか。

しんねり無口むぐちでテレヤの三船敏郎も

ロケに出ると、酒が入るほどに大い

に開放的になり、この間も「激流」と

云う発電所を舞台の荒つぽい映画のロ

ケで信濃川の奥に乗りこんで行つた。

宿の女將と女中頭が、三船にゾツコン

のスツボリ惚れで取合いになる騒ぎ、

どどのつまりが若い女中頭の勝ちとな

つたが、女將の方は名もなき仕出し

(大部屋俳優)と出来てしまった。こ

れが三船旦那の心証しんしやうを害して、酒の勢

いから、その大部屋氏と喧嘩になつて

しまった。その殴り合いに驚いて宿の

男が留男に入り、三船さんともあろ

うひとがこれは一体どうしたと云うん

です、と云われて、三船敏郎がひよい

ツとその男の顔を見て驚いた。宿屋の

番頭だと思つていたら、なんとその人は女將さんの旦那だつた。

酔えば、得意で喋るのがエノケンのですわ」

十八番。怪談あ

り奇談あり珍談

ありで、なかなか

かバラエテに富

んでいる。その

珍談の一つに、

「エノケンの天

一坊」で伊豆の

長岡へ出掛けた

時、宿に着いた

エノケン、一眼

見ると釘付けに

なつてしまつた

アツプヘアのき

りりと腰のしま

つた三十女。プ

ルルツと身内が

痙攣して、すでに妄想が雲の如く腦中

を駆けめぐり、いかんとも制止しがた



いことに相成つた。

「あの方は二号さんで、お一人の湯治

ですわ」

と云う宿の

女中の情報

によるこん

だが、なに

しろ眼のま

わるように

忙しいロケ

ーション。

それに夜と

もなれば、

夏場は暇と

見えてパン

パン嬢が宿

の廊下を行つたり来た

りする。床に入ればすでに諸嬢が寝

ている状態。これではアツプヘアの君

を探しに出歩けない。酔つたまぎれに

内風呂へ下りて行き、ひよいと浴槽を

見てハツとした。心臓がキュンとしま

り、奈落へ落ちるような気分に見え

た。その年増がただ一人、向うむきに

なつて、こちらに大きなお尻をむけて

中腰で髪を洗っているのである。震え

る声で、『入いつてもいいですか?』

とエチケットぶりを発揮すると、『ど

ろぞオ』に、たちまちシャツキリ、そ

のまま年増美人の後ろに突進すると、

「アラ……」と腰をおとした瞬間、す

るするつと。――

「なにしろ、彼女はシャボンだらけで

しよ、潤滑油みたいなもんでさあ。あ

つしはあの時、入りますよと云つた

のか、入れますよと云つたのか、今や

モオロウとしていませう。だけど、彼

女が、どおぞうと云つたのは、確かに

すべて承知したつてことのようにした

がねえ」

*** 純朴の處女

がお種拜領

後醍醐天皇で有名な笠置山に「修羅

城秘聞』のロケ隊一行が、長谷川一夫、大河内伝次郎、三浦光子、轟夕起子といった多彩な顔ぶれで出掛けた時、なにしろここは眼玉の松ちゃん、尾上松之助以来、カッドウ屋と名のつく者が入りこんだことのない辺境である。であるから、宿の感激まさにこれに過ぎたるはなし、そのサービスは空前にして絶後だつた。さてロケに出るので晝の弁当を頼むと、番頭は心得顔で、『ウチは以前、松之助はんがロケに来たはりましたさかい、よう心得とりますで、任しとくれやす』と云うので、さてロケ隊の一行が溪谷で仕事をしていると、晝頃、川下の方から番頭と女中四、五人が大八車を曳いてワッショワッショとやつてくる。ずいぶん大掛りなことをすると思つてみると、弁当ではなく、二の膳つきの料理を運んで来た。死んだ目玉の松之助は、絶対に弁当飯を喰わなかつたそらだ。だから、数十年たつた今日でも

老番頭はカッドウ屋のロケは二の膳つきと心得ていたのである。

その夜、宿に帰ると長谷川一夫の部屋に、宿の主人が羽織、袴の盛装で、これも万艦

飾に着飾つた娘をつれて、ウヤウヤしくまかり出た。さてそれから

が大変、やおら長さんの枕頭に進み寄ると、

『あのウ：お種拜領に上りました』

これには、さすがの長さんもギョツとなり、一晩中寝られなかつた。娘も一睡もせず、枕頭にはべついていた。

女優連の枕頭には、『お種植付に上りました』と出たかどうかは訊き洩らし

たが、実に純朴愛すべく、さすが海千山千のカッドウ屋を手ばなしで感激させた。

ロケが終つて帰つてくると、お土産も数々あるが、深入りしすぎて、間接に悪友の病気をいただいて来るなんて云う話もある。森雅之がこのお土産を頂戴してしまつて、彼氏えらくクサつてしまつたことがある。

『女房が、ストライキをはじめたよ』

こんなのを、カッドウ屋はマンストと呼んでい

入りますよ



る。よくあることなのでめずらしくはないが、マンストを食うと急に浮気ツぽい連中が愛妻家に変化するから妙である。

『女房が、ストライキをはじめたよ』

こんなのを、カッドウ屋はマンストと呼んでい

る。よくあることなのでめずらしくはないが、マンストを食うと急に浮気ツぽい連中が愛妻家に変化するから妙である。

『女房が、ストライキをはじめたよ』

こんなのを、カッドウ屋はマンストと呼んでい

る。よくあることなのでめずらしくはないが、マンストを食うと急に浮気ツぽい連中が愛妻家に変化するから妙である。

『女房が、ストライキをはじめたよ』

こんなのを、カッドウ屋はマンストと呼んでい

る。よくあることなのでめずらしくはないが、マンストを食うと急に浮気ツぽい連中が愛妻家に変化するから妙である。

カッドウヤ淫語学

銀幕Y談

★ 千一夜 ★

活動屋社會では辭苑じえんや言海にもない、珍妙
キテレツな隠語ならぬ淫語が用いられてい
る。普通社會の一般語も、こゝでは飛んても
ないエロ語になつてしまふから怖いみたいだ！



高橋 晋

1952
I. Yama.

ペレ帽が流行すれば、上は監督から下は風呂焚きの爺さんにいたるまでトタンに流行するのが撮影所である。その徹底ぶりは、戦時中の国民精神総動員なんて、チャチなものではない。第一、撮影所の空気それ自体が、すでに先走りのカッドウ屋の気分を作り出しているのだ。

スタジオで澁い顔をして、日本の文化がどうの、なんて深刻がつている奴は一人もいない。いるとすれば、それはカッドウ屋ではなくて、映画人と云う傍観者たちである。でなければ、回虫でも湧かして唸つてゐる奴と相場が決つてゐる。

最近、学生の隠語がいろいろと問題になつたが、学生の隠語はテキヤの言葉と英語の略しが過半数だが、カッドウ屋のはちよつと変つてゐるし、その歴史も古い。その淵源をたずねれば、大正十二年の、大震災に源を発している。東京にあつた撮影所が地震でボシ

ヤリ、カッドウ屋はみんな関西落ちをした。その時覚えた関西弁が、今だにスタジオを風靡している、と云うよりそれが目下のカッドウ屋用語になつてゐるのだ。どことなくユーモラスで、時にはドギツイところもあつて、カッドウ屋の好みに、合つてゐるからである。

キング・サイズ

★山村聰はその代表的

『顔色が悪いネ、どうしたんや』

『喰いすぎだよ』

『あゝ、暴淫暴色のむくいカ』

こんなのは、他で聴いていても品がいい。品のいいのに、『キング・サイズ』と云うのがある。洋モクのラツキーストライクよりその長さがちよつと長いのに、パルメルと云う赤箱のシガレットがある。このちよつと長いところがミソで、キング・サイズ、長さの王様と云うことになる。これを男性のシ

ンボルに転じて使つてゐるのだ。

『山村聰もそうだが池部良もキング・サイズだつてよ』

てな具合である。女性の前で喋つても、アラ嫌らしいわ、なんて云われずに済むし、当人同志ならこれで充分に通じる。この隠語は、女優連も大いに刺激されて用いてゐる。

『チー坊の彼氏、凄いいキング・サイズなんですつてね。羨ましいわア』

そうなると、並製の標準型を保持している連中はイササカさびしくならざるを得ない。あゝ俺はラツキーストライクか、となると、これはもうラツキーストライクである。男性にとつて、そのシンボルの弱少なくらい悩み痛切なことではない。勢い生活力が鈍くなり、日蔭でコソコソするようになるし、人生が愉しくなくなるものである。大臣であらうとかなろうと、キング・サイズを望まぬ男は、一人もいない。冷水療法、石叩き、などが流行する原因であ

る。一躍スタアになるような男は、い
ずれもキング・サイズ級に属し、生活
力とノビノビした容貌をもつている。
キング・サイズこそ、男の推進力と
なるのだ。

バズーカ

★一発必中、
専らお素人
専門。これ
では年増は
泣かせられ
ない。

ちよつと再軍備熱
みたいなことになる
が、バズーカ砲と云
うのがある。

「アイツは女に持て

つこねえぜ、バズーカだもの……」

てなくあいである。一発必中、一発

コツキリ。その命中率^{めいちゆう}はともかく、一

発スポンと飛び出すと、お後の仕事に

ひどく手間が取ると云う代物である。



一発の勢は凄絶^{せいぜつ}、鬼人にあらざる女性
を泣かせる代物だが、残念ながら後続
が効かない。若い女性なら、このバズ
ーカでも結構満足なさるだろうが、す
こし骨のある御婦人には、このバズー

続バズーカ砲なんてえのは、本物の方
もまだ見参^{けんさん}していない。三船敏郎が、
愛妻たゞ一人の孤壘を猛攻して他に転
進しないのは、いささかこのバズーカ
的性能のしからしむるところらしい。

バズーカ愛妻術とでも申そ
うか、つまり女房以外には
自信^{じしん}がないらしい。但し、
バズーカの一発は、凄絶無
比なる例が非常に多い。

噴射推進型

★陸續と後から後か
ら噴出する物凄さ

このバズーカとは対照的な
武器に、噴射推進型と云う
のがある。ジェット機など

がそれで、精力を圧縮して、陸續と後
から後から噴出^{ふんしゅつ}するエネルギーを云う
のである。

カ砲策戦では問題にされない。

「アラあんた、それつきりなの。まあ
純情^{じゅんじやう}なのねえ——」

てな風にあつかわれてしまう。これ
では残念である。そうかと云つて、連

「奴には敵わねえよ、女を奪られても
文句^{もんぐ}は云えねえからな。奴のはそれ、



噴射推進型だからさ」

これは、女性の敵であるかもしれない。彼女が骨抜ききのくの字になること必定であるからだ。

女性側にはこの噴射推進型の珍品が多い。山田五十鈴などはその雄たるもので、よほどこちらが鋼鉄的耐久力を

保持していないと、一夜にして討死してしまう。

閨 徹

★くんずほぐれつ、決戦

いつ果てるやら……

この噴射推進型によつてロングタイ

ム接戦すること、

カッドウ屋はこれま

た閨徹と呼んでいる

閨房において徹夜の

持久力のあることを

云うのだ。徹夜の好

きなカッドウ屋も、

閨徹の出来るサムラ

イ、またそれに相対

する大和撫子は非常

にすくない。だから

たまさか、閨徹同志

の奮戦になるとカッ

ドウ屋は自分のこと

みたいにタケリ昂奮

オペチヨコ

★原節子がトタンに世の男

性をシインとさせた名語

だいぶ前だが、オペチヨコという淫

語が風靡した。女性の象徴であり、男

性のアコガレそのものズバリを呼んだ

言葉だが、なんとなくユーモラスで、

あどけないところから、このオペチヨ

コなる言葉流行すること、スサまじく、

ひところ新聞にまで書かれた。そのた

めオペチヨコ・ガールと云ふ単語が出

来たくらいである。公式の大宴会で、は

にかみ処女の原節子が、テーブル・ス

ピーチに立つて、彼女何を感じていた

か、恐らく大変謙遜したつもりであつ

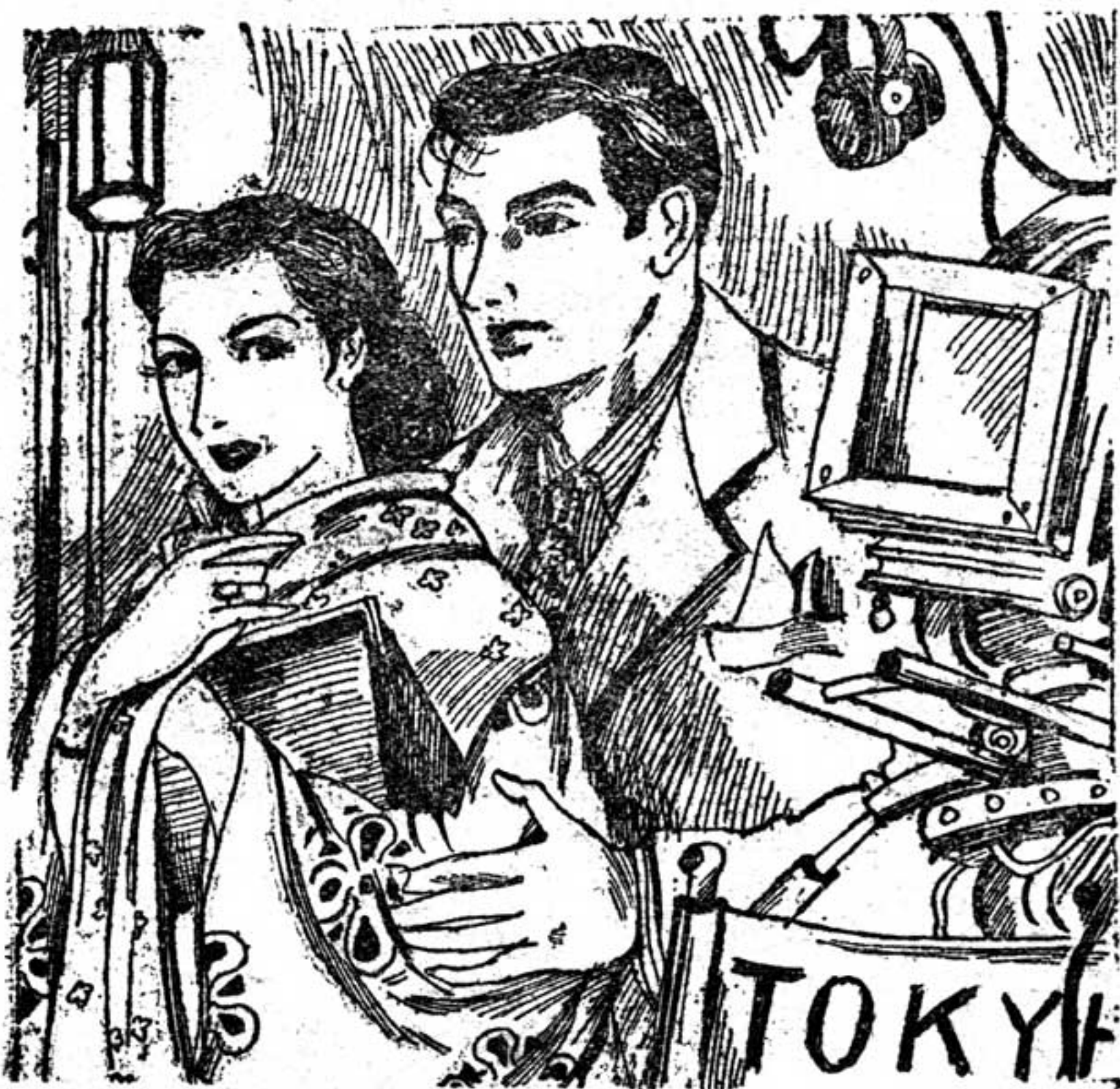
たのだらうが、

「私は、ほんのオペチヨコ・ガールに

すぎませんわ」

と、やつてしまつて、なみいるカッ

ドウヤを、トタンにシインとさせ、忘



然自失の態にさせたことがある。

エバグレース

★布地のことではない、あのヒダヒダが曲者なんだ

的淫語に変わって、

「彼女はエバグレースだつてよ。鶴田浩二が云つてんだから、ホンマやぞ」と云つたぐあい、すでに流行期に入っている。全面ボツボツと襷の連続

今年の夏、御婦人連の服装界を席捲した布地にエバグレースと云うのがある。全面こまかいボツボツと凹凸のある新型織物の布地で女性は

このエバグレースに随喜の涙を流したのが、カッドウ屋もそこへ眼をつけた所以である。女性の象徴の内

とは凄いきはみである。今度は男性が季節はずれのエバグレースにあこがれるところである。喜多川千鶴がこのエバグレースの最たるもので、河津清三郎を泣かし、今また夏川大二郎がエバグレースに陶然としている。このエバグレース、見た眼よりも腰がしつかりしているところも、なんとなく女性の最高峰に似通っている。

淫出家

★演出家の誤植ではない。

監督さんの、もう一方の演出を云う新語

松竹大船の監督で原研吉と云う超人がいる。撮影所の娘をみんな一人前に仕立て上げて仕舞うので、弗箱津島恵子に手を出した時は、大谷社長の忌避に触れてあえなく映画界から追放になるところだつた。お詫びに「今後、断じて女優に近接せず」と云う、まるで伝染病患者みたいな誓約書を入れて復

帰したが、血は水よりも濃しで、たちまち岸恵子、小林トシ子とつまんでしまい、再び進退谷まつてしまった。であるから、彼のことを、カッドウ屋は演出家とは呼ばずに、『淫出家』と呼

湯や女便所を覗くわけではなく、レッキとした職業名で、キヤメラを覗くところからきている。この覗き屋は、軽犯罪に触れないから、カンヌの映画祭でキヤメラ賞、覗き賞まで貰っている。

女性を見ると軟化する男性、男を見るとすぐモーションをかける女性を指して4Bと呼んでいる。鉛筆の芯に硬軟を見分ける略号がある。硬いのがHで軟かいのがBである。



貞操が硬いなんてえのはカッドウ屋の世界では、砂の中に落ちてるダイヤモンドを探すより骨が折れるから、Hの方は懐具合の澁さの表現に使われ、お色気の方はもつぱらBが代表している。

『彼女は4Bじゃあないぜ。すくなくとも6Bぐらいだよ。懐の方は、そりだな4Hぐらいかな』

帰しているが、つままれる女優の方にだつて罪の一過半はある。愛慾両成敗が本当である。
演出家が淫出家なら、キヤメラマンは『覗き屋』と呼ばれてる。これは女

4

B

★鉛筆のことではない。

カッドウ屋社会ではト
テモ多いんでね……

懐の方まで4Bなんてスタアは、そりザラにはいない。月並なのがHBである事も、どおやら、鉛筆にそっくりである。

オール・チヨン

★あのことは、紙を揉む音が
すれば萬事終りである

職場に於ける

術語に、英語辞

典をひもといて

も出ていない言

葉が多い。オー

ル・チヨン、オー

ルが全部、チヨ

ンが歌舞伎の柝

頭のチヨンのな

だから、ちよつ

とやゝこしい。

彼と彼女はオー

ル・チヨンなん

て場合は、もう

終りだと云う

別名。撮影終了がオールチヨンの正式

術語なのだが、他の淫語に代用されて

いる。

生ダブというのがある。同時録音、



ダビングのことで、彼と彼女がノウサ
ツクでイタす場合もこの生ダブなる術
語が転用されている。

オニギリ

★おさせの女優さんなど、プ

ロデュウサーや監督のイタ

イところを握っている

撮影が終ると、みんなのうしろでブ

ラブラしていた男が大声で、

「えゝ、オニギリ一丁ッ！」

と叫ぶ。スチール・マン（普通写真

屋）で、暗箱の下にブラ下つている玉

をニギルから、オニギリというのである。

これがまた妙なところで使用され

ている。粹も甘いも噛み分けた、お色

気百パーセントの年増スターなどがそ

の専売で、

「あのプロデュサーなら断然オニギリ

よ」

てな風に使用するので、つまりあの

プロデュサーなら、自分が肝腎な急所

をニギツているから、云いなり仕第と

云うわけ。

ちよつと意味深な気分がでるから不

思議。

サキル

★こんな淫語があるから、

撮影所に処女なしという

ことになる

「サキル」と、いうのがある。「用いる」「ねがう」と同意語で、イタス別名である。「サキル」は「サキサキ」と云う音感から来たもので、だから国電に乗つて駅員が「オオサキ」と呼ぶのを聞くとカッドウ屋は思わず吹き出してしまふ。

ワンサ・ガール

★ワンサワンサというと、

ちよつと感じが出るてし

ようが……

ニユウ・フェスも、カッドウヤ語なら、ワンサ・ガールもそりだ。ワンサワンサは女性のオケケをピツクアツプしたに外ならぬ。それが今や公然と世間をノシて歩いているんだから、オベチヨコと同じである。ある高貴の方が撮影所見学に来た時、

「あの建物が大部屋と申しまして」

と案内の社長が説明すると、この高貴の方がこそぞと、「ワンサ・ガール

の部屋ですネ」とおいでなすつたのは、一同ウ・ーツと驚いたそりだ。まさか、ワンサ・ガールがオケケのワンサワンサとは、カッドウ屋以外にはあんまり知つていまい。そこがカッドウ屋には嬉しいのである。世間には新流行語として、紳士も淑女も口の端に涼しい顔で上せるから痛快である。

レッド・パージ

★御婦人方には毎月こ

の追放日があるンでね

左翼追放旋風が各撮影所を風靡した時に、カッドウ屋は、すかさずこれを酒落のめした。すなわち女性の毎月の赤い定期便を名づけて、

「レッド・パージ」

と、呼んだのである。

メンス中は、あんまり労働のはげしい撮影は遠慮申上げるのである。「赤道祭」という映画の撮影中には、この「レッド・パージ」が「赤道祭」に変

化した。

『沈黙は金』で無駄口を喋らない若原雅夫、鳴かない猫は鼠を取るで、ちよいちよい可愛らしいネヅミをつまんでいるが、彼氏、『夏子の冒険』でしばらく東京を離れていたが、愛人の水原真知子にあてて電報を打つたのが、撮影所にとどいた。それが、

「アスカエル。ゴタキイコウ」

ときたので、流石のカッドウ屋も慌てざるをえない。

ところが、肝心の水原真知子が赤道祭の期間中だったので、

『どうしましよろ……』

と、電報を片手にウロウロ……。

これを伝え聞いたあるオセツカイな男、人ごとならずと、さつそく返電して曰く、

「レッド・パージニプツカッテ」

こんな親切な男もいるんだから、カッドウ屋の面目躍如たるものがある。

口攻勢の正体



大特集 赤色王

赤色陣営の大物が一齊に地下に潜入して以来、警察官襲撃、火焰ピン投下、デモ騒擾事件等相次いで社會の耳目を奪い、その作戦、戦術においてもあの手この手と新案、奇案を編み出しつゝある。また一方では、毎日の新聞紙上を賑わせている犯罪面にも、赤色攻勢とおぼしきものが頻繁に現われつゝあるが、その眞疑の明らかでない疑似的なもの、あるいは完全なる凝装犯罪の難魚も少くない。その赤色戦術に躍らされた女黨員が、スパイ行動、桃色遊戯、性病攻勢、淫虐リンチ、変態拷問等にさらけ出した肉慾本能と愛慾情痴の行狀を収録した赤色エロ攻勢の正体！



スト中は雑魚寝で桃色遊戯

ストよりも青カン

×月×日

私たちの工場がストに入つてから今日でもう五日目だ。会社側はなかなか私たちの要求をのんでくれない。委員の桑原さん（くわはら）にいわせると、出せるのに出さないんだという。私たちの要求なんて、幹部が毎晩のように渉外関係に遣つているお金にくらべれば、ホンの蚊の涙ほどののに、事務は出せないというそらだ。仕方がないから、私たちは坐り込みストに入つた。職場というのは小さな町工場で、働いている全員は男女合して三十人くらい。職場の片隅に、薄団をもちこんでの雑魚寝である。

外部から応援にくる人があるが、私はそんな人を好まない。私たちの生活は、私たちの手でまもればいいと信じているからだ。会社の幹部の人たちに外部からアジられて、などと歪んだ眼で見られては、不利だと思つたためもある。

何といつても、スト中はお湯に入れないのが一番辛い。それと、男女入り乱れての雑魚寝には最初の夜から困つてしまつた。男の人たちの前で着替えもできないから、着物のまゝ、木俵鈴子さんのとなりにもぐりこんで、みんなが寝しずまつたところ、洗面所へ行つて双肌ぬぎで体をふいていると、カタンと誰かが簀の子を踏む音がした。びつくりして肌を入れると、いつ起きて

きたのか、旋盤の少年工青木二郎がボンヤリ立つていた。

「まあ、何してんの？ 坊や」

私が睨むようにいうと、

「ううん、便所に起きてきただけで暗いところに白いものが見えたんで、もしかしたら、お化けじゃないかと思つて吃驚したんだよ」

この子は十六だ。もう子供でないことを私は知つてゐる。口ではそんな風にいつてゐるけど、もしかしたら、先刻から私のあらわな上半身を物かげから生唾を囁んで覗いていたのではないかと思ひ、逃げるようにあわてて寢床へ戻つた。

×月×日

昨夜は、鈴子さんと二人で不寝番に立つた。

「とてもじゃないけど、きみちやん。出来るだけ見ないよ」にするよ」
懐中電燈を片手に、先へ立つた鈴子ちゃんが小さな声でそうつた。何のこ

とだか、始めは納得できず、みんな
の寝ているそばを足音を殺して
通りぬけ、材料置場の見ま
わりに行つた。

すると、小高

く鉄材をつん

だ蔭で、

妙音

ミミ

がし
た。青
い月の光を
浴びて、鈴ち
やんがニヤリと
笑い、見てこいとい
うように、そつちを指
さした。私はちよつと怖
い気がしたが、鈴ちやんが行



けと眼で会図をしたので、そつと
鉄材のかけを覗いてみた。

「あッ！」

私は、あわてて自分の唇
をおさえた。

あろうことか、今

の物音。し

かも青白い

星空の

抱き合つ

ている二人の

男女。男の顔は

上から見えなかつた

が、女は確かに事務の駒子

さんだ。アジ演説のうまい駒子

さんが、男に抱かれて眼をつむつて

下で

いた。

見てはいけないものを見てしまった私は、ガクガクと膝がすくみ、その場にしゃがみこんでしまった。鈴ちゃんに肩を叩かれて、私たちはそこから足音を立てないように逃げて来てしまつたが、何だか胸がドキドキしちやつて変な気分になつてしまつた。私は余程うろたえてしまつたらしい。あれもこれも、結局はストのもたらしたお土産であると思ひ、ほんとうにいやな氣がした。

雑魚寢で桃色攻勢

×月×日

今日でもう十日にもなる。初めのころと違つて、だんだんみんなの士氣がゆるみ、誰もかれも、だらけ切つた顔をしてゐる。そればかりか、この頃はひどく風紀が、乱れてきた。昨夜などは、もうなかば公然と、平氣で私の寢てゐる五、六人向うで、男女の妖しい

ささやきが起つた。

『だめよオ、まだみんな起きててよ』『かまやしないよ。みんなだつてよろしくやつてるさ。もう俺はストなんかあきたよ。人生をできるだけのしみたいのさ』

『ねえ、おねがい、もう少し小さな声でさ』

女は北岡とみ子。男は現場事務の益田祐三であることが声でわかつた。この二人は、前から仲がよかつた。けど、そんなところにまで發展してゐるとは夢にも思わなかつたので、少し私は興味をひかれた。

会話はそこで途切れ、キツスでもしたらしく、唇のかさなり合う音がきこえてきた。私だつて、もう子供ではない。ストのおかげで、いろいろ見せつけられたり見たりしてゐるうちに、男女の本能というものがやつと判りかけてきた。好きだとか嫌いだとかいうことは、結局その目的に達するまでのう

れしがらせであることがわかつたような氣もした。

とみ子と益田のあたり構わぬ行為、耳をふさぎたくなるほどの露骨な物音に、私は反射的に寢巻の上から左の乳房をつかんだ。掌の下で、心臓がドキン、ドキンとなつていた……。

と、となりに寢てゐる鈴ちゃんが、うーむと寢返りをうつてきて、大きな足を私の腰の辺にドーンとのせた。

重たいわア、と口に出してはいわなかつたが、その足を払いのけようとした私の手首に、寢てゐると思つた鈴ちゃんの手がからみついた。

『ねえ、こうして……その代り、私がこうしてあげる……』

それは、生れてはじめての経験だつた。鈴ちゃんは指先を動かしながら、『馬鹿にしてる、とみ子つたら。益田と私が出来てるの承知の上で、わざわざ聞かしてるのさ。だから私たちだつて、女同志だつて、こうも出来るツて

こと聞かしてやるのさ』

軀からだを小さくすくめてゐる私の首の下から、鈴ちやんは手をすべりこましてきて、私の首をかかえこむと、

『ね、きみちやんわかる。あんただつて、わかる筈よ。私には、いいえ、私の指先にはもうわかつてるのよ。可愛い顔して、きみちやんだつて、もう娘じやないんだらう』

私は鈴ちやんに自由じゆうにされ、もう心は空にういてゐるようだつた。

『だめよ、私の方もうまくしてくれなくつちやア。自分だけ悦えぶなして、エチケットに反するわよ。フ、フ、フ』

私の襟筋えりすじに鈴ちやんの唇がふれて、ながいこと一箇所を、吸いつづけられた。私は身体からだの力をなくして、もう鈴ちやんのなすがままにまかしてゐる。その唇は蛸きゅうはんの吸盤きゅうはんのような強さで、襟から胸もとに移動して行く……。

そんな風ふうにしているうちに、私は鈴ちやんの指先の魔法に、もうすつかり

魅せられてしまつたのである。

『しょうがない娘ねえ』

ぐつつたりした私を突ツころばすように離れた鈴ちやんは、いきなり身を起したと思うと、寢ふている人をまたいで、どうやら益田ますだの方へ匍はつて行つた模様だ。私はあきれて物もいえなかつた。やがてとみ子のすぐそばで、鈴ち

北京から来た桃色密偵

紹介された貴婦人

鞆たもとを膝ひざのうゑに抱えた千木良代議士は、快よい車の振動に、寢不足の眼を重く閉とじた。しかし、眠れなかつた。臉おほのうらに、昨夜の女の、あまりにも白すぎる肢し体たいが浮び、ふたたび血ちのうずきをおぼえて、思わず生唾なだを嚙くはみこんだ。

やんの鼻声はなこゑがきこえはじめた。

このストで、会社ではあらかたの男おとこ女めが性の享きやう楽らくにふけつた。私も、この時、須田と云う中年の男によつて十八歳の処女つぼみの蕾つぼみをひらいたのである。

(玉川喜代子)

たつた一枚の名刺から、まるで小説のような事態が展開し、何とも云えない甘い陶醉感とうずいかんがいつまでも千木良の脳裡のうりから消え去らない。せいぜい不見みず転てん芸者かキャバレイの女給の味しか知らない千木良を、全く有頂天にした出来事だつた。

『先生、早越はやこしさんの御紹介だとかいつて、御婦人の方が御面会です』

秘書の森村が、昨日の晝どき、議員食堂で一杯やつていた千木良のそばへくると、名刺をテーブルの上に差し出した。

早越というのは、つい先頃、モスクワから北京へまわり、中共との貿易について相当な話題をまき散らして帰国した元代議士である。千木良とは、

あまり関係のない間柄だったので、

「用件は、どんなことなんだ？」

千木良は、

さもうる

さいと

云った表情で、名刺をテーブルにおいてた。

「はい、直接お眼にかかつてお話したいと申されて。なんでしたら断ります、先生、顔くらい御覧になつても損はしませんよ。あんな美人はまつたく珍らしいですよ」

耳のそばで、こら囁いた森村

は、意味あり氣に

ニヤリと笑つた。

「うむ、逢つてみよるか。早越君の紹介とは、ちよつと解せんがね」

名刺には、(知人降旗みえ子さんを紹介します、よろしく)とだけしか書いてなかつた。

その降旗という女を一眼見たとき、好色の千木良は、思わず、ウームと唸り、しばらく、口もきけないほどだった。

「はじめまして……。あたくし、降旗でございます。——あら、いやですわ

そんなに、あたくしの顔をごらんにな

つて……ホホホ……」

孔雀の精の化身とも形容したい、長身にまとつた印象的なドレス。ヴェー

ル越しに見詰める切

れ長の眸。年のこ

ろはまだ三十前

だが、貴婦人

らしい装いが

びつたり身に



ついて、
落ちついた物
腰のせいか、いきなり
くだけた口のきき方をしても
かえつてそれが魅力（みちりき）を誘うのである。
「いや、失礼いたしました。で、その
御用件は？」

自分の頭の中で、もう千木良は相手の
女性の衣裳を一枚々々脱ぎとつてい
た。

「あのちよつとここではどうも……」

女は周囲（あたり）をちよつと窺（うかが）うようにして
何か秘密めいた表情をした。

「失礼でございますが、今晚おいそが

しうご
て？」

明日の委員会の打合せがあるにはあ
つたが、どうせ決定的（けつていてき）な会合ではなか
つたので、千木良は女の小さな赤い唇
をみつめ、

「長い時間でなかつたら……」

「まあ、うれしうございますわ。では
七時に、銀座のルパンの地下室でお待

消え失せた用件

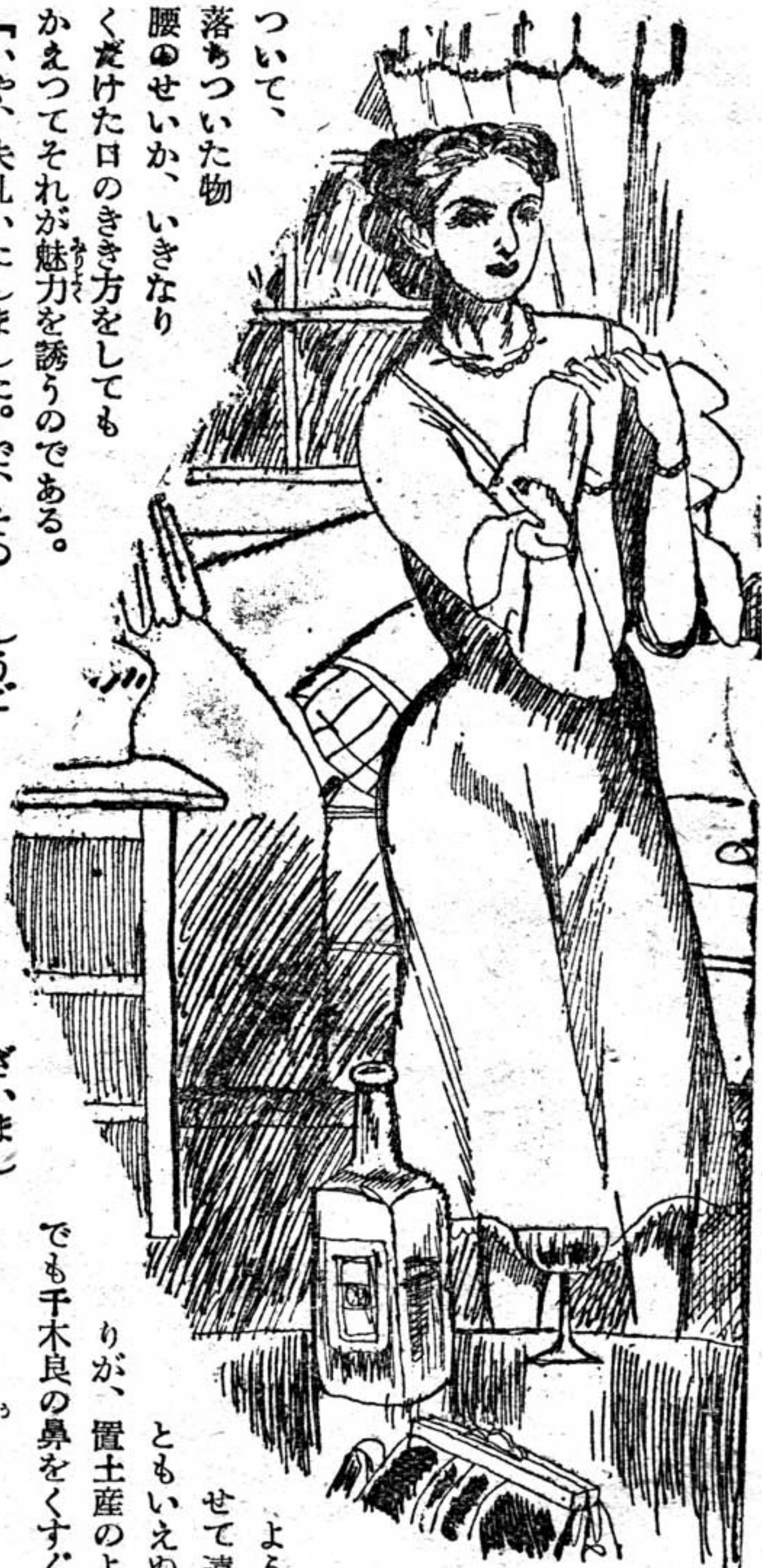
でも千木良の鼻をくすぐつた。
りが、置土産のように、いつま

ように後ろ姿をみ
せて遠ざかった。何

ともいえぬふくよかな香

「降旗さん、あんたは、実にお美しい
が、酒の方も、たいした酒豪ですね。
いや、感服（かんぷく）しましたよ」

約束の七時に、千木良はルパンの地
下室へおりて行くと、隅のボックスか
ら女の白いレエスの手袋が、台図をし
た。



ちしておりま
す」

千木良がい

いとも悪いと

もいわぬうち

に、女は軽く

目礼をして、

すうつと風の

女は場慣れた態度で、いろいろと千

木良には初めての洋酒を命じたりして彼と同じように飲んだが、少しも酔をみせなかつた。それだけでなく、一向に用件というのを切り出さない。とにかく相手の得体が知れないだけに、千木良はいきなり奥の手も出せず、つとめて鷹揚に振舞い、いかにも紳士らしくみせ、もう用件はそつちのけで、女の興味を呼び起すことに懸命だつた。

『千木良さんは、アメリカにいらつしやつたそりですね』

『いやア、ほんのアメシヨン組、おつと、レデイの前で失言、失言。ハハハ……』

わざとおどけて頭をかき、女の容子をみると、面白そうに口へ手をあてて笑つたので千木良は安心した。よろしいいつは組し易いぞ！

『降旗さんは、アメリカには？』

『あたくしは、もつぱらヨーロッパしか存じませんの。亡つた主人が、外交

官をしております関係で……』

おや、この婦人は未亡人なのか、と思つたが、そう思うと、こいつはかえつて都合がいいと、彼は何気ない風をよそおつて女の手をとつた。すると女は黙つて握らせている。よろし、チャンス到来。だが、今夜の相手は女給とちがうから、おい千円でどうだともいえない。一体どういう風に切り出したのかと、女の指を弄びながら思い惑つてみると、ニコリと頷いて女が立ち上つた。

千木良が戸惑つていると、彼女は大股にスタンドの方へ歩いて行つて、ハンドバッグから抜き取つた何枚かの千円札をバーテンに手渡した。そして千木良の方を見て、チラツと片目をつむり、そのまま階段を下りて行くので、あわてた彼は、もう少しで帽子をおき忘れるところだつた。

女は、意外にも、帝国ホテルを宿舎にしていて、千木良を自分の部屋へ招

じ入れた。ポカンとしている千木良の前で、

『もう少し、飲みませんこと』

といつて、ナイトテーブルの上においてある洋酒の瓶から、二つのグラスに琥珀色の液体をそそいだ。

『千木良さん、あたくし、とてもよく効くお薬を持つてゐるんですけど、あなたのお酒に入れてよろしいこと？』

女は媚然と彼の方を見遣つた。

『薬？ 一体、なんの薬？』

『まあ、千木良さんほどの人が、お察しがわるいわねえ……』

『あゝ、そりですか。なるほど……』

千木良は、ちよつと慥ぐつたい氣持で頷いた。

『毒薬だけはごめんですが、よく効くのなら、ぜひおねがいします』

ハンド・バッグのなかから一服の薬包をつまみ出した女は、白い粉末をサラサラと彼のグラスに注ぎ、毒でない証拠に、私がお毒味するわ、とそのグ

ラスの酒を一口二口飲んでみせた。

なるほど、と頷いてみせたものの、

千木良にはもちろんその薬が何である

かハッキリわかつたわけではないが、

女と盃をカチリと合わせ、一息に酒を

のみほすと、咽喉がヒリヒリして、ゴ

ホンゴホンとむせた。女はむせている

千木良の前で、灯も消さずに、はやド

レスを脱ぎはじめている。彼はそれを

見たとたん、むせるのが急に止まつで

しまった。

シユミーズ一枚になつた女は、ベッ

ドの上に身をよこたえて、何か聞き慣

れない鼻唄をうたつていた。

はめられた代議士

クスリの効き目は全く原爆的でも

いおうか、おどろくべきものだつた。

千木良は、自分のエネルギーが自乗三

乗されたようにもおぼえ、それにもま

して、やがて、全裸で嬌声をあげなが

ら、たゆまなく肉の挑みをつづける女

の精力に、彼は完全に圧倒されてしま

つた。女も、おそらくそんな薬をひそ

かに嚙んでいたのだらう。

『まあ、意気地なしなのねえ』

明け方の薄紫の光線がカーテンか

らしのびこんできても、女は千木良に

しがみついて離そうともしない。彼は

疲労しきつて、もうどうしようもなく

眠かつた。

『君のいいようにしてくれ』

ポツンと、こんなことを呟いたとた

ん、彼はもう眠りの泥沼へ引きずりこ

まれていた。

『もう、お盡ですわ』

千木良は身体をゆすぶられて眼をあ

けると、昨夜とはガラリと変つた訪問

着姿の女の顔が、鼻の先で、笑つてい

た。

『さア、坊や、おつきしてらつしやい。

あたくしも出かけなきやならないから

……』

女の前で千木良は面映ゆく身仕度を

すると、女は、まだ未練の残っているら

しい彼の背を押すようにして、ホテル

の正面玄関まで送り出した。

『御機嫌よう。また、御縁があつたら

お眼にかかりましょう』

用意しておいた車に、押し込まれる

ように乗せられた千木良は、車が正面

玄関を滑り出してから、一体あの女は

何故自分と一夜をとにしたかという

ことに、ようやく気がついたほど慌た

だしい別れ方だつた。用件があるとい

つて呼び出し、バーで酒を飲み、女の

宿で一夜を明かし、別れの間際にも、

その用件に一言も触れぬ妙な女。

だが、千木良はそのとき気がつかな

かつたが、降旗という女は、すでに自

分の用件はとうに果していたのだ。千

木良が綿のように眠り疲れてしまった

その隙に――。

昨夜の出来事が、いつまでも千木良

の脳裡から消え去らない。迎え酒でも

やるつもりで、車を降りた千木良が議員食堂の方へ行きかけると、秘書の森村が息せき切つて飛んできた。

「先生、弱りましたよ。委員会は九時からはじまつているんです。先生に預けたあの書類が必要なんで、委員長が慌ててますよ」

はッとして、千木良は椅子においた鞆をひつかきまわしたが、その重要書類は影も形もなかつた。そればかりではない。連合軍との話し合いに関する書類の控えまでが、そつくり消えてしまつていた。

「畜生、あの女だ。おい車を呼べ、帝国ホテルまでだ」

しかし、もう女はとづくに引き上げた後の祭。地団駄ふんだ千木良は、紹介者の早越のところへ車をとばしてみたが、ここでも無駄足。早越は、そんな名刺を書いたおぼえがないといい、事実、名刺の筆蹟は早越のものではなかつた。

千木良は周章狼狽し、検察庁の友人をたずねて、あからさまに事情を話した。

「君もやられたのか。弱つたな。手配はさせてあるんだが、なかなか巧妙に出没するんでね。大体、北京から流れ込んだ一味らしいことだけはわかつたんだが、君でもう五人目だよ。みんながみんな色仕掛でやられている。敵さん、もうだいたい目的を果したらしいから、そろそろ国外逃亡の時期だと睨んでいるんだがね。あんたたちのとられ

た書類は、そつくり北京に送られちゃうよ。よわつたね。とにかく捕えることが先決問題さ」

不思議と、千木良の頭の中には困惑したもの意識されなかつた。白い肉体が喘ぎ悶え、それが波のようにゆれる昨夜の惱ましい女の姿態が、いつまでも彼の脳裡に愉悦の尾を引いているのだつた。

(草野傳七)

裏切女黨員への淫虐私刑

スパイ女黨員

京都下加茂のS撮影所に潜入しているMから、「今夜十時、比叡山の横川ハ号杉に集合」と連絡して来たのは、

その日ももう夕方頃でした。

当時、私は太秦の島田製作所のオルグOの助手として暗躍していたのですが、Mは、数カ月前から私たち京都班のキャップとして、上部から命令を受

けて東京からやつて来た男で、シベリアで教育を受けて、いわゆる天皇島へ上陸して来た、一見して筋金入りと見える精悍な党員でした。

日本のストライキ東上でも、有数の大争議といわれている東宝争議の最中で、三船敏郎とか岸旗江などというスターたちが、連日のように街頭に繰り出されて争議資金の獲得に血眼になっていました。党としては東宝争議に呼応して、京都のスタディオ街にも火を点けようという作戦だつたのだろと思ひます。

MはS撮影所演出部の助監督として表面は何くわぬ顔で働いていたのですが、むろん撮影の助手などはそつちのけで、毎日のように烏丸二条の下宿を本部にして、各大工場のオルグや全学連、朝鮮人連盟などと連絡を取つて党勢拡張に努力していたのです。

ところが、Mの必死の活動にも拘らず、党勢の拡張は意外なほど振わず、

むろん東宝争議に呼応して京都スタディオ街に火を点けることなど思いもよらない形勢でしたから、Mはたびたび上郡から叱責され、うつかりすると、東京へ呼び戻されそんな工合でしたので、蒼くなつて煩悶していました。

四、五日前のことでした。私が工場で働いていると、窓の外をOが二、三人の男工と喋りながら通りましたが、左の手で長髪を二、三度掻きあげました。それは今夜、連絡しろという合図でしたから、私はいつも彼と会うことにしている彌坂神社下の喫茶店へ出かけて行きました。

Oは私の顔を見ると、

「昨夜、Mさんに会つたら、なぜ京都班の活動がうまくゆかないか、その原因がわかつたと云つていたよ」

「それは、どういふ原因なの？」

「スパイがいるんだそらだ」

Oは低い声で囁きました。私の顔色が変わつたことは、申すまでもありません。

ん。

「誰でしょう、その卑怯なやつは？」
「名前は云わなかつた。近いうちに証拠を押えて人民裁判にかけてやると云つていた」

こう云う会話が交された数日後に、深夜、しかも比叡山の集まれと云うのですから、これは必ずOの云つた人民裁判に違いないと、私が張り切つて、所定の時刻に出かけて行つたことはもちろんでした。

比叡山は、御承知のように東塔、西塔、横川の三つに分れておりますが、その横川の鬱蒼たる森林の中の大きな杉の古木を、私たちは八景杉と名づけて、最も秘密を要する連絡や会議の場所に使つていたのでした。

党のためには命を捧げて——と云うくらい気負つていた私でしたが、何にしても若い女のことですから、深夜たつた一人で比叡山などへ登るのが怖く、途中で何度も引返そうと思ひまし

たが、まあ勇氣を出して、ほとんど死物狂いで険しい坂道をたどつて行きました。

そんなことで時間におくれ、私がやつと八号杉にたどりついた時には、すでに会議が開かれていたのです。

恐怖の人民裁判

私は、皆の邪魔にならないように氣をつけながら近ずいて行きましたが、

男女六、七人の真中に、囚人のように

に坐らされ、慄えている人間を

と眼見た時には、危く驚愕の叫

び声をあげるところでした。

それは、S撮影所の

スクリプトガール

の川田早苗と云

う、いつも

Mの助



手のような仕事をして、私達のところへレポや指令を運んで来る女でした。さては、この川田早苗が、私たちの組織にもぐりこんでいたスパイだったのか。そう思つて、私はしばらく茫然として口も利けない氣持でした。キャツプの助手がスパイだったのでは、何もかも敵方へ筒抜けですから、先手々々と打たれ

て党活動が成功するはずがありません。

私が呆れている

と、裁判長みたいな恰好で坐つていたMが、ふいに威丈高に大きな声をだしました。

『よろしい、証拠は充分だ。これ以上調査の必要はない……』

断言するようにそり云うと、屹と一同を見まわして、

『では諸君、この憎むべき裏切行為に對して判決を下そう。だがその前に、誰か裏切者を弁護したい者は申し出てくれたまえ』

誰も、一言として発するものはありません。

夜は死のように静まり返つて、時々夜鳥が不気味な羽搏きの音を立てながら、樹の梢の間を飛んでゆくのが聞えるばかりです。森の奥の方で赤ん坊の悲鳴のような声が微かに聞えるのは、この山に住む猿の啼き声に

違いありません。

『無い、では判決を下す！』
Mは重苦しい声で、

『裏
切者に
対し私刑
……』

そして、当夜の人民裁判に出席した者全員を刑の執行者に任命すると宣言しました。その後、展開された光景は、いま思い出しても体が慄えます。慾情と残忍性でギリギリ眼を光ら



の物まで取つて、見るに堪

して
いる男
たちが、
寄つてたかつ
て一人の若い女
を押さえつけ、スカ
ートをまくり、その下

私は杉の古木の蔭に立つたまま、喪神したようになつてこの光景を眺めていたのですが、こればかりそめにも人民の幸福のために闘争していると称している人々のすることかと、心から青い、恐怖を感じていたことは事実です。

この一夜の事件以来、私は彼等の主

えないような残酷な私刑を加えたのです。女の恥部を露出し、性毛を抜いたり、蠟燭の火で焼いたり……。でも、さすがにスパイとなるだけあつて、川田早苗は蒼白な顔を背けて、一言も発しませんでした。最後に、同性の女党员たちが、狂的な態度で男たちと同じように、彼女の肌に残酷な私刑を加えはじめた時には、さすがに苦痛と恥辱の声を放つて泣きはじめました。

義に対する信頼感を失つてしまい、間もなく脱党したのでございました。

(木村駒子)

パンパン女黨員の性病攻勢

予備隊さん大好きよ

暑いせいもあるが、どうにも眠れなかつた。相手のパンパンは、ひどく事務的に、ことをすませると、『アタイね、ゆうべ、黒ちやんと徹夜しちまつたから眠いのよ。悪いけどひと眠りさせてね』と云つた。

どうもありがたくない女だ。それに、外人相手専門だつ

たらしく、サイズが、とても大きいので、どうもうまくなかつた。汗くさい薄団が身体にべたついて気味も悪い。酒のさめかけというやつは厄介なもので、ひどく水がのみたくなり、便所へ行つて水道の栓に口をつけ、ガブガブ腹一杯飲んだ。

それで、ますます眼がさえてきたところへもつてきて、隣りの部屋へアベツクが、こんなに遅くなつてから泊りしてきた。何しろベニヤ板の仕切りみたいの壁だから、隣室の話聞こえはつつぬけだ。

『アタイ、予備隊つて大好きさ。だからアタイ、お客は予備隊さんしかとらないことに決めてんのよ』

鼻にかかつた女の甘い声。それに答える男の声はまだ若かつた。

『おいおい、そう予備隊、予備隊つて云うなよ。気差かしいじゃないか』

『何云つてんのよオ、予備隊だから予備隊つていつて、何がわるいのさア』

『頼むから、もう少し、小さな声で云いえよ。隣りにだつて客がいるんだらう』

「いたつて、どう

せもう寝ち

まつ



てるよ。羞
かしがらず
に、ね、さ
アつたら…
…」

女の声につれ
て、ベッドがその
気配に軌んだ。

「いやだよ、そんな
の使うの。アタイ、そん
なのつかう男さらいよ」

「だつて君、病気が……」

「何云つてんのさ。このお政が、病
気でもしているつて云うのかい、フン
失礼しちちやうわね」

「と、云うんじゃないけど……」

「そんならいいじゃないか。アタイ、
アンタがそんな水臭い男とは思わなか
つたわ。第一、気分がこわれるじやな
いのさア」

「俺だつて、そんなもの使うのはきら
いなんだが……」

「そ
うだろろ。」

誰だつてそうだ

よ。いい方で行こうよ

ねえ、予備隊さん」

どうも話の模様では、男がコンドー

ムを使うと云うのに、女がそれならイ
ヤだといっているらしい。そして、話
ア、あんな声がどこからとび出すのか



しご
えは
それつき

り聞こえなくなつた

が、間もなく、誰でもがそうである、

その物音が聞えてきたが、その物音た

るや、どうにも大変である。よくもま

と感心しているうちに、ピタリと静かになつた。そして、また、ボソボソと話し声がしてくる。

『アンタ、とても純情なんだね。見かけによらずさ。フフフ……』

『よせやい、おだてるなよ。俺はチョンガアだし、それに、滅多に外出や外泊できないから、たまつちまつてるんだよ』

『そのたまつてるやつ、朝までみんな絞りとつてやるから、そのつもりでいらつしやい』

『おい、おどかすなよ。寝かさないつもりか』

『当り前じやないか、好きな予備隊さんと一緒にこうして寝てさ。寝るのは晝間にすりやアいいわ。夜は夜つぽておきて、こんな風に好きな人に抱きついて——おやツ、しやれた真似をするわねえ、このひと。そんなこと、一体どこの女におそわつたんだい。憎らしいねえ』

恐るべき病菌戦術

今度は、痴話喧嘩みたいにからみ合ひ、ドシンと壁に身体を打つつけてきた。女も女だが、男も男だ。商売女の口車にすつかりのせられてしまつたのみえ、ペラペラ予備隊の自慢ばなしをはじめた。

普通の女なら、やれ訓練がどうの、装備がどうのなんて話には、耳もかさないのに、このパンちゃん、なかなか穿つた質問をして、相手を時々おどろかす。

『おい、君、予備隊のこと、いやに委しいじやないか。もしかしたら、君はスパイだろう』

『フフフ……。アタイがスパイだつたら、どうするの?』

『絞首刑だな、こんな風に……』

『ウツ、く、くるしいよ。いい加減におしつたら、予備隊小平め』

『畜生! 云つたな、高橋おでん』

大変な騒ぎだ。眠るとこの騒ぎではない。どうやら予備隊小平が、パン助おでんの上に馬のりになつて、羽交縮めでもやらかしていると思つていると案の定、第二回戦がはじまつた。

こんな調子で、朝まで実におどろくべし、颯々六回戦にもおよんだのだから、文字通り一睡もしていない。でも流石に六回戦がおわつたら、とうとう予備隊さんも音をあげてしまつたらしい。

そろそろするうち、私もいつの間にか眠つてしまつたらしい。どのくらい眠つたかおぼえていないが、フツと眼をさますと、同じベッドに寝ていた女の姿はなく、もうまぶしい陽の光がさしこんでいた。

『お政、昨夜の男、どうだつた?』

そろそろ起きようとしていると、例の隣りの部屋から、いきなりさびのある男の声がした。

『どうもこうも、先生。もうお政の病

氣の手当してくんなくちやいやだよ。あいつで、もう十八人も病氣をうつしたんだけど、どうにも、こつちの身体も本格的におかしくなつてきたらしいもん』

『いや、わかつている。早速、今日中にでも入院したまえ。なあに、三日も寝ていりや直るクスリがまた手に入つたよ。今度の番は誰だつたかな?』

『同志おらの番よ。だけど、おらんちやんは、シンが強いにはおどろくよ』

『その通り。われわれの計画は着々と進んでる。この調子で行くと、いまに予備隊さん、大さわぎになるぜ。あの病氣は、今のところわれわれの手に入れるクスリでしか癒らないからな』

『カービン肩に、ビッコ引き引きなして、わらわせるね、先生』

男女二人は、大きな声で笑つて、聞いていたこつちは、ぞおツとして思わず薄団を頭から引つかぶつた。

もし、私がそんなことを聞いてると知つたら、二人は自分に何をするかもしれないと思つたからである。

だが、さいわいなことに、四、五分もすると二人の足音が隣りの部屋を出て行つたので、その際に二階から屋根

づたいに命からがら逃げ出した。実に怖ろしい世の中になつてしまったものだ。

(二階堂 勉)

アオカン街頭連絡員

お客を断わるパン助

新宿の二幸の横丁で、これと思つた女を捕えて、

『どうだい、あそばせるかい?』

ボーナスで懐ろがあつたかいので、ひどく気がつよい。

ところが、普通なら飛びついてくる相手が、フンと肩をひねり上げると、顎をつき出してこつちに背を向けた。そのあたりはパンスケの縄張りだし、

間違つても素人の娘なんかが立ちどまつてなどいられないはずだ。ちよつと酒も入つていたから、思い切つて肩に手をかけ、

『おい、君は、パンスケじやないのかい?』

と顔をのぞきこむと、女はその手を払いのけて、ぺろりと舌を出した。

『仰せのとおりだけど、私のとるお客は、あんたみたいな意気地なしじやないわよ』



『フン、酔っ払いつて、しつこいから
して、
その男をみると、急にニツコリ
女の肩をポンと叩いた。女は
うな恰好で、鳥打帽の男が
へ割つて入つてきたよ
からず、もう一度
と思ふ背後から、仲
つてゐるのかわ
体、何を云
し？！一
意
気地な
意
』

『いやさ』
当てつけがましく
ペツと唾を吐く
と、腕を組ん
で、恋人同
志のよう
に歩
き出しやアがつた。胸くそがわるくて
たまらない。畜生、どこへ行きやがる
と思うと、その後を尾けてみる気にな
つた。
二人は、こつちが後を尾けて行くの
を知つてか知らずか、ガードをくぐつ
て西口の方へ歩いて行く。淀橋の浄水
場ちかくの広場へ行くな、と睨んだか
ら、よろし、あの辺で、おどかしてや
れ、先刻の腹いせに、大きな声でおど
かしてやれと、そつと足音を忍ばせ
ながら尾行して行つた。

アベツクを尾行

西口広場の近くに便所が
ある。こころに洋装
のおかまが出没して
いると話にきい
ていたが、
おかまな
ンて、て
んで興味

はない。

先に行く女がすうツと男から離れ、おやツと思つているとその便所へ入つて行つた。なアんだ、生理的必然かアと、知らん顔で遠く赤いネオンの灯を眺めたりしていると、間もなく女が出てきた。

すぐにまた腕をくむと、女はあたりが暗いのをさいわいに、男の肩に首をのせるようにして歩く。俺はますます腹が立つてきた。外人専門ならいざ知らず、ボーナス景気の俺を袖にしやがつて、どう見たつて、金に縁などありそりもない貧相な男と、アオカンをしようとする女の気が知れない。

そこここにアベックが腰を下ろし、何やら妖しい雰囲気、立ち罩めていゝ。二人はいつの間にか、妙なところへ入りこんでしまつた。何しろあたりは暗いし、酔つてゐるせいもあつて、もうそのときは、自分でどこを歩いてゐるか見当がつかなくなつた。しかし、

前方

を歩いて

行く二人か

らは、決して

眼をば離さなかつ

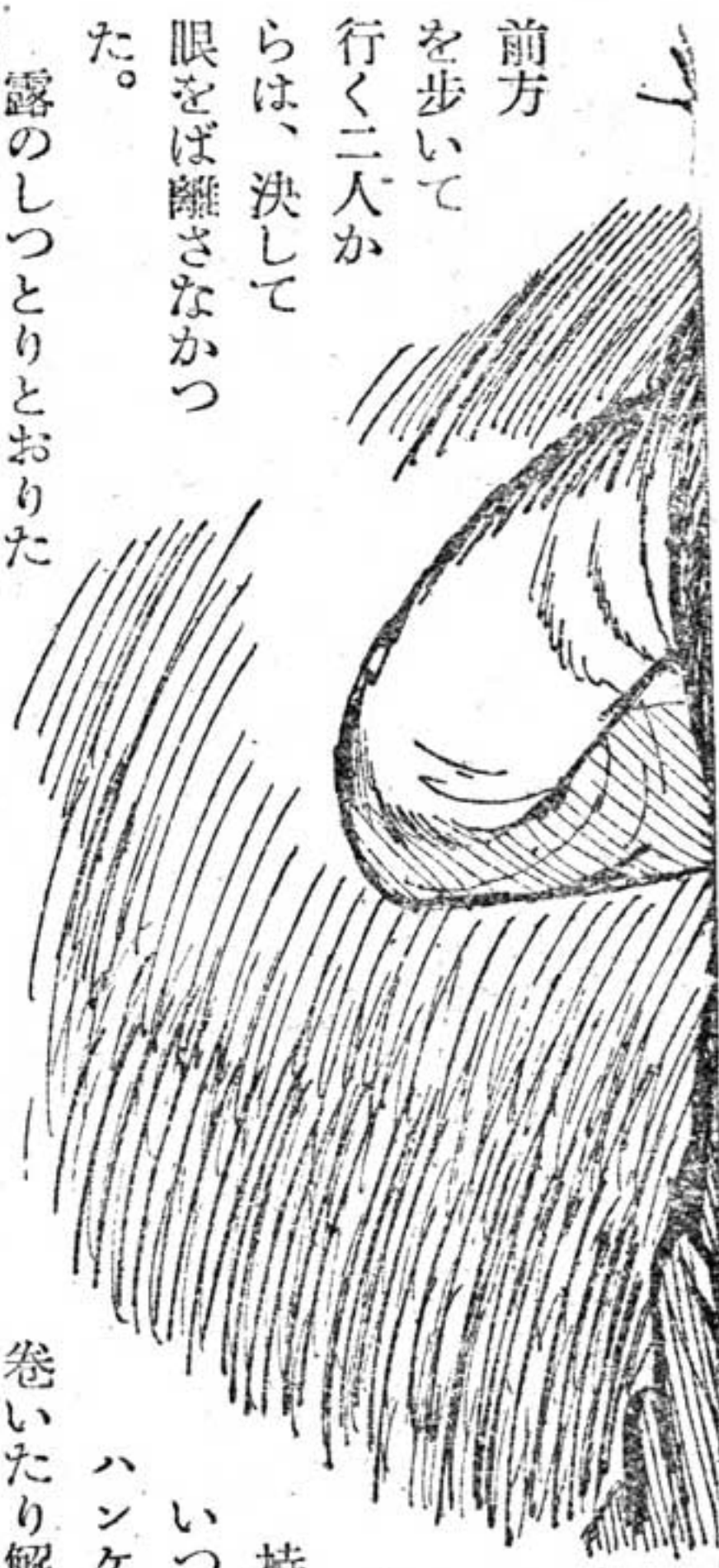
た。

露のしつとりとおりた

芝生のある小さな広場みたいなところへくると、やれやれという風に二人が腰を下す。こつちもやれやれというくらい疲れてしまつて、二人から見えないところへ腰を下ろすと、さていよいよ始めやがるな、と固唾をのんで闇をみつめた。

私はピンクのお利根

ところが、二人ならんで腰を下ろしながら、一向に手一つ握り合うのでもなければ、もちろん抱擁も接吻もしない。二人共しごく冷静で、男は煙草を



すいつけ

て空へ煙

をはく。

女は、い

かにも手

持無沙汰と

いつた恰好で

ハンケチを指に

巻いたり解いたり、

そんな状態が十分近くもつづいた。

いいかげんしびれが切れてきたし、

咽喉も渴いてきたもんだから、えーい

糞ツと立ち上ると、ツカツカと二人の

前に出て行つた。俺は別にどうと云う

こともなかつたのだが、ただ無性に腹

が立つてしまつたので、とにかく不意

に驚ろかしてやれ、くらいのところだ

つた。が、相手はひどく度胆をつぶし

たらしい。とたんに、弾かれたように

男が跳ね起ると、いきなり俺の胸へ飛

びこんできたと思うと、

『犬ツ、犬めツ!』

と叫んで、いきなり横ッ面を二つ三つなぐりつけられて、ころりと芝生の上に転がってしまつた。その隙に男は一目散に走り出してゐた。どうにもさつぱりわからない。犬とは一体、何のことをいうんだらう？

耳がガアンと鳴つて、起き上ろうとすると、

『大丈夫？・お兄さん』

手をかして立ち上らせてくれたのは、たつた今まで男と一緒にいた女だ。さア、竊にさわつた。

『貴様、あの男を知つてゐるんだらう。云えッ、あいつはどここの野郎だ』

江戸の仇を長崎とばかり、氣負いこんで女の手首を握りしめ、よくよく見るとおどろいた。女が變つてゐる。二幸の裏で、意氣地なしと云つたあの女ではない。

『ごめんなさい。私、何にも知らなかつたのよ。こんなことになるとは思つてなかつたの。便所から出ようとして

いたら、赤のお銀ちゃん、変な奴に尾行されているから、ちよつと私の身代りになつて、と頼まれたのよ』

それでわかつた。お銀とかいう女は便所で籠ぬけしやがつたのだ。赤のお銀で、というわけだときくと、赤は赤じやないの、お兄さんは白足袋覚なの？とやられてしまつた。

身代りの女は、利根子というのだと云つたが、おわびにお交際するわ、と云つた。

そこで利根子のドヤに案内させて、明るい灯の下で、裸の利根子を眺めて眼をこすつた。こんな清潔な女の肌を見たのははじめてだ。それに、無技巧の技巧というよりな彼女の技巧が、俺をいつまでも眠らせなかつた。

『ほんとを云うと、私、商売人みたいな、そうでないみたいなのよ』

『それ、どういう意味なんだい？』

『私はね、お銀ちゃんを追ひこまれたときの替え玉なの』

この一言で、大体の輪廓が掴めたよ
うな気がした。

『先刻、お銀ちゃんと歩いてた人、知
つてゐる？』

『誰なんだい？ ああの野郎？』

俺の耳に、利根子が口をつけて、あ
る名前をささやいた。嘘か本当か知ら
ないが、俺もどこかで聞いたような名
前だつた。

『いいのかい、そんな名前を俺にしや
べつたりして？』

『大丈夫。お兄さんは警察の人じやな
いもの。だつて、警察の人なら、あ
なへマはやらないわ。それなのに、あ
の人、随分泡くつて逃げたりして、ホ
ホ……』

お利根が笑うたびに、しまつた胸の
くびれが一緒に笑つてゐるようにみえ
また、俺の慾情を、かき立てるのだつ
た。

拷問に慾情する変態女黨員

抱きついた女豹

太平洋戦争も、すでに末期的症状を呈していた頃のことです。

私は当時、山西省太原の特務機関で情報活動に従事していたのですが、ある日、用があつて憲兵隊本部を訪ねると、本部事務所の隣室から、人を殴る不気味な物音と低い呻き声が聞えてきた。

毎度のことなので、私は特に気を惹かれることもなく、煙草を吹かしながら用件の相手を待っている、突然、聞き慣れた山本憲兵中尉の声で、『あつ、何しやアがる！ この女！放せ、こら、放せ！』

と叫ぶのが聞え、続いて誰かが床に倒れる響きがしたと思うと、いきなり扉が開いて、山本中尉が真ッ赤な顔をして口のあたりを軍服の袖で拭いながら荒々しく入つて来ると、すぐその後から古泉通訳がニヤニヤ笑いながら入つて来て扉を閉めました。

『どうしたんです？』

と私が聴くと、山本中尉はプリプリした調子で、

『どうしたもこうしたもない、あの助平女、ひどえことしやアがる……』

そう云いながら、彼は、なおも口のまわりを気持ち悪そうに拭いているのです。

『古泉君、何かあつたのかい？』

私の質問に対して、古泉通訳が、相変らずニヤニヤしながら説明した話によると、当時、太原地方の山地へかなりの大部隊の中共軍が進出してきて、夜間を利用して、中共黨員がひそかに太原市内に潜入、攪乱工作を行い、日本軍に捕われたものも多数あつたのです。

ちやうど、私が憲兵隊本部を訪ねた前の晩も、そうした女黨員の一人が捕われたのですが、彼女は憲兵隊の取調べに対して頑と口をつぐんでいるのです。そこで、日本軍憲兵のお得意である拷問が開始されたのですが、彼女はちよつとくらの痛い目には一向に閉口垂れる様子も見せない、いやそれどころではないのです、どうやらいささか変態じみたところがあるらしく、拷問が激しくなればなるほど、苦痛に歯を喰いしばつてこらえながらも、その顔は次第に上気して、双眼を妖しく光らせはじめたのです。

どうも様子が不審おかしいので、さ

すがの山本中尉も少々薄気味

わるくなつてしまつて、取

調べを打切るつもりで縄なわ

をほどくと、いきなり

中尉の首ッ玉へ抱き

ついてきて、ア

ッと思う間に

中尉に接吻

したと云う

のでした。

私はこの話

を聴いて、気

味悪そうに口の

まわりを拭いてい

る山本中尉の苦い顔

の意味が初めてわかり

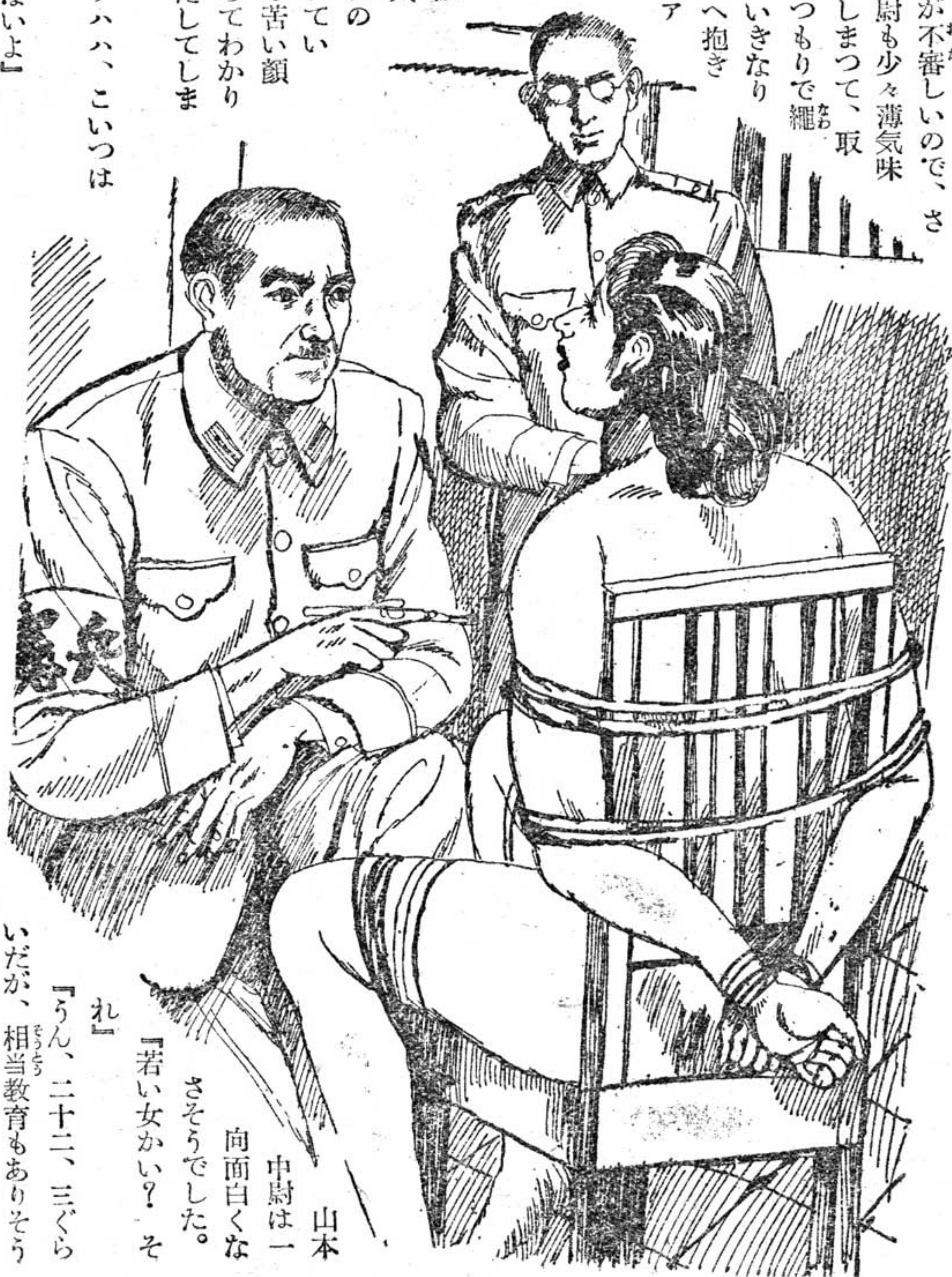
思わず吹きだしてしま

いました。

『ウワッハッハハ、こいつは

傑作だ』

『冗談じゃないよ』



れ』

『若い女かい？ そ

さそうでした。

向面白くな

中尉は一

山本

『うん、二十二、三ぐら
いだが、相当教育もありそう

な、なかなか、理知的な顔をしているが、それよりも、凄（さま）いぐらいの美人だぜ』

古泉通訳のこの話に私は急に興味を感じてきました。そこで、

『じゃアひとつ、私が調べてみよう。』

かまわないでしょう』と云うと、

『かまわん、やつてみる』

と、山本中尉は、ほッとしたような表情で頷（うなず）きました。

淫（よ）らな拷問（ごうもん）

古泉通訳をしたがえて、私が隣室に入つて行くと、女は中尉に突き飛ばされたまゝの姿で床にぐつたり横（よこ）坐（ざ）りに坐つていました。顔に垂れ下つたパーマネットを掻（か）きあげもせず、じろりとこちらを視（み）た眼は、何だか酒にでも酔つたようなトロリとした感じでした。青（あ）いような中国服を着ていましたが、拷問（ごうもん）の時に脱（だ）がされたとみえて、腰のあたりまでずりさがつて、白い上半身

を露（あらわ）

出（だ）してい

むつちり

した腕で胸

のあたりを掩（おほ）つていゝのですが、裾の方（はら）もだらしなくなつていて、靴下（くつ）に包まれた脚（あし）を太腿（ふともも）まで見せて無氣力（むきりき）に坐つていました。青光（あざ）りのするほど白い肌の肩（かた）や背（せ）に、赤い筋（すぢ）が何条（なんじょう）もついているのは、中尉（ちゆうゑ）に帶皮（おび）で殴（う）られた痕（あと）でしやう。

私は女（おんな）を椅子（いす）にかけさせ、古泉通訳を介（か）して訊問（じんもん）を開始（かいし）しました。

『名（な）は？』

『名（な）など、どうでもいいでしよ』

冷たい表情（へいしやう）で女（おんな）は答（こた）えます。すこしも恐怖（こふ）の色（いろ）がありません。私は、これは相当（さうたう）のやつだなと思（おも）いました。

『どうでもよければ、名乗（なをの）つてもよいだろ（う）う』

『ソービレイ……』

『何（なん）だと？ もう一度（いちど）云（い）え』

『宋（そう）美齡（みれい）……』

私は、この阿魔（あま）！ と思（おも）いました。

『悪（あく）ふざけをすゝると、痛（いた）い目に会（あ）わせろぞ』

女（おんな）は、フンといつた表情（へいしやう）で横（よこ）を向（む）きました。

『何（なん）日（にち）、太（たい）原（げん）へ潜（ひそ）入（り）して来（き）たのか？』

『忘（わす）れた』

『太（たい）原（げん）に來（き）るまですゝどこにいたか』

『忘（わす）れた……』

『延（えん）安（あん）から來（き）たのだらう』

『どこから來（き）たか、忘（わす）れた……』

『山（やま）の向（む）うの、中（ちゆう）共（きゆう）軍（ぐん）に加（か）つていたのだらう。隠（かく）すな』

『山（やま）の向（む）うのことなど、知（し）らない……』

私は痺（しび）れを切（き）りました。

『強（きやう）情（じやう）を張（は）るか！』

ピシリと平手（へいたし）打ちをくわせますと、キラキラと光（ひかり）る眼（め）を据（据）えて、じッ（じ）と私（わたし）の方（はら）を睨（にら）んだのですが、それがまたぞくツとするくらい凄（さい）艶（えん）な感（かん）じでした。

私は冷笑しながら、女の両腕を椅子の背にくくりつけ、さらに両股を開かせて椅子の左右にしばりつけました。こうすると女の両股が、思い切り開いて、深部が真正面から見えます。

この恰好をやらされると、たいていの女は落ちる（白状すること）のですが、この女は平然として私の方を睨んだままです。まくれた裾前から下穿きのない深部を曝露しながら……。

私は、これは大変な女だ、と思いましたが、ようしともう一と責めしてやる気になり、

『さあ、おとなしく、白状するかどうだ』

そう云つて、机の上の筆の穂先で、

女の最も敏感な部分をなぶつてやりました。この方法は、女に最大の刺戟と苦痛をあたえるのです。なぜと云うとこれをやられると女は生理的に極度に刺戟され、たちまち遂情してしまふので、敵の前でそうした醜態をさらけだ

すことは何よりも屈辱なわけです。だから、私の手がけた女のスパイで、この手で陥落しなかつたものは一人もなかつたのですが、この女に限つて全然その反応がないのです。

いや、平氣と云うよりも、眼をとろりと潤ませて、縛られている身体をくねくねと動かしながら平氣で何度も遂情するのですから、さすがの私も馬鹿々々しくなつてしまいました。それで、

『今日はこのくらいにしといてやる。次の取調べまでよく考えておけ』

そういつて、椅子にくくりつけた手と足をほどいてやつた瞬間でした。

女は咽喉の奥から獣のような呻き声を

漏らしながら、いきなり私に抱いかぶさつて来ました。

ちようと左足の縄をといっていたところで、屈みこんでいましたから堪まりません。私は不意を打たれて思わず床の上へ倒れてしまいました。その倒れた私の身体の上へ、女は馬乗りになると両腕を私の首に捲いて、べろべろと私の顔を舐めまわすのでした。

この女は、それから間もなく処刑されたようでしたが、その後の報告によると、被虐症のかなり昂進したものであることがわかりました。

(河内 信)

赤を桃色に塗りかえた女黨員

物凄い女の氣焰

広川かず子は、とにかく風変りな女だつた。女子大生のくせに、男と一し

よになつて焼酎しょうちゆうをあおる。それも一合や二合ではない。相手によつては、四、五合も平げてケロリとしているんだから全くおどろいてしまふ。

かず子のことを、仲間の池田たちは『女党员』と蔭でいつているが、彼女が本当に女党员であるかどうかは誰も知らない。第一、破防はぼう法なんてものが議會を通過しちまつた今日、私は党员でございますと名乗る馬鹿はいやしまひ。

二十一にしては割合に緻密ちみつな頭の持主で、下手をするとい僕達なんかも、時どき云いくるめられてしまふことがある。ことに、酎ちゆうをあおりながら吐く虹のごとき気焰は相当なものだ。

『だめねえ、あんたたち。そんな古臭い観念論者たちは、もう相手に出来ないわ』

きつぱりところ絶縁ぜつえんを宣言しておいて、すぐその口の下から、資金カンパだからと、アカハタを買わせる腕のよ

さ。

その夜も、池田と僕はかず子を相手に、安い酎をのんでいた。酔がまわるにつれて、議論がだんだん混線こんせんしはじめてきた時だつた。

『広川君、君たちの仲間は、恋愛も共産主義かい？』

押され気味の池田が、いつもの揚げ足とりの癖を出して、彼女をからからように云うと、かず子は細い眉まゆをキリリと上げて、

『当り前じやないの。聞くだけ野暮だわ、そんなこと』

こう云つて、大分ひどく酔がまわつたらしい彼女は、卓に手をついて立ち上つたので、

『大丈夫かい、帰るなら、送つて行くよ』

池田が手をかそりすると、見事に極めつけられた。

『何云つてんのさ、生理的現象せいりてきけんしょうよ。馬鹿！』

あたりの客が一斉にこつちを見たので、僕までが氣まり悪い思いをさせられた。

池田は、かず子が便所へ行つた留守に、

『おい間宮まみや、ぬかしやがるじやないか女党员の奴。こらしめのために、へいじやおうか？』

その方が専門せんもんの池田である。彼女の言葉のアヤに食い下り、恋愛共産主義とやらを實踐させちまおうと誘いをかけてきた。普通のときなら、よせと止める僕も、満座まんざの中で馬鹿よばわりされた意趣がえしに、よし悪戯いたずらしてやれという氣も手伝い、

『賛成。しかし、どこか場所があるかい？』

池田はニヤリと片目をつむつた。間もなくかず子が戻つてきて、帰りましようといひどく殊勝しゆしょう氣にいつた。顔を見ると少々蒼い。どうやら便所でゲエをして来たらしい様子だつた。

おどろくべき処女

口ではいつぱし大人じみた文句をならべ立てるかず子が、いざとなつたらまるでネンネなのには呆れた。

車の中でかず子がウトウトしている暇に、池田とジャン拳であとさきを

なると池田は妙に勝負強く、残念ながら負けてしまった。

『どこなの？　ここ？』

もう少し飲もうと、池田が顔を利かせて連れこんだ待合で、かず子はどりやら感ずいたらしく、急に警戒の色を見せた。

『まあいいじゃないか、飲もうよ、もう少し。』

われわれの恋愛共産

主義のために』

こう云つて、

池田がコッ

プの

酒を目七分に捧げたので、彼女の顔色がさつと変つた。

『あたし帰るわ』

『何ッ、帰る？　冗談じょうだんいつちやいけねえ、帰るつたつて帰すもんか』

急に威丈高になつた池田が、眼をむいておどかしにかかつた。彼得意のハツタリである。

『帰さないつて？　フン、じゃア、どうするのさ？』

『よせやい。さつき、恋愛も共産制きやうさんせいだとおつしやつたのは、一体どこのどなただつたけ』

こうなると、池田の悪党あくどうぶりはいつぱしだ。いきなり池田はすくいあげるように彼女を両腕に抱きあげると、足をバタバタさせるかず子を隣りの部屋に運んで行つた。いささか興ざめがして、一人でコップ酒を呷すすっている

決めた。
こう云
うこと



『わからねえ女だな、こいつ』

ピシヤリ
と頬の鳴る

音。かず子のし
やくり上げる声と、

何か許してくれとたの

んでいる言葉が耳に入つて

きた。可哀そ^{かわい}うだが、自分でまい

た種は自分で刈ることさ、とこち

らはチビリチビリやりながら隣室の

物音にきき耳を立てた。

三、四十分もたつたと思うころ、う

しろの襖があいて、髪を乱した池田が

顔を出した。

『どうだつた?』

『おどろき桃の木、あいつ、処女さ』

『えつ! 本当かい?』

僕には何だか信じられなかつた。池

田もさすがに意外だつたとみえ、コッ

プの酒に口をつけながら、

『処女だと知つたら、こつちが負けと

くんだつた』

と溜息をついた。



枕
行燈の灯

影にてらさ

れた彼女の肌

は、想像以上に白

かつた。眼に痛いとい

つてもいいくらい清潔な肌の

色だつた。それに、泣きはらした

顔も痛々しく、足からすべりこんだ

ものの、すでに、荒々しい行動もでき

ず、そうつと抱いてやると、



『やつぱり女はだめね。

口ばかり強そうな

こといつてもいざ

となれば……』

と云つて、胸

に顔を埋

めて

きた。

『愛して

るの、好きだ

の、なんて云わない

で……私の身体を利用し

て。その方が、あたし、すく

われるわ。好きだなんて、癖云わない

で……』

(間 宮 譲)





長篇読物

伝奇小説

才2回

版肉蒲団

18 h

にし

30"

とん



不羽周一

佐野 博志

連載

私



戀も金次第

のこと

『あゝ、峰君。どうしたのか今月は、浜田澄江がまだ金を取りにきていないんだ。面倒でも帰りに届けてやつてくれないか』

峰仲男は、故寺本社長の後を継いだ滝沢社長から頼まれて、内心渡りに舟と北叟笑んだ。

仲男が目星をつけた寺本前社長の愛人たち津村京子と浜田澄江に、早急に近づく手段もつかないままに、三カ月ばかりがいつの間にか経つていたのだ。寺本前社長の遺産分配にあぶれた二人の女に、泣きこまれた人の好い滝沢新社長は、社長の交際費の中から割いて、毎月二万円ずつ一年間補助することを約束したのである。

『はあ、それでは、早速今日行つてや

小指のごとき男性のシンボルを嘆く青年が、勃然と發心した一大悲願！ 極めつき絶品の女性はいづくにありや、奇抜な構想はいよいよもつて奔放自在！

前号のあらすじ——社員慰勞の一泊旅行で伊豆山温泉に来た寺本建設株式会社の一団百余名、変り者の社長のとんだ出来心で、深夜奇怪な男もの競べの珍景が演ぜられ、意外にも峰仲男が最短小賞の嘲笑をかつて男泣きに泣き崩れたが、これまた意外にも、その侮辱の慰藉料として社長はポンと百万円の大金を投げ出した。——ばかりか、その小指のごとき、男性のシンボルの強大法を懇々と伝授され、千人に一人と云われる極めつき絶品の女をもとめて奇想天外のエロ修業を思い立つたが——

りましたよう』

答えた仲男の声は、思わず弾んでいった。

『馬鹿に喜び勇んでいるようだね。もつとも、相手はなかなか肉感的な美人だからね』

と、社長はニヤリとした。

『いえ、そんなことは……』

仲男は、へどもどしながら、社長印の押された出金伝票を受け取ると、早に社長室から逃げるように出た。

会計課の自分の席に戻ると、出金伝票を示して植村会計課長から二万円受け取り、机の抽出しから祝儀袋を取り出し、「浜田澄江」と表書きを書いておくと、横眼でそれを眺めていた隣席の小野好太が、

『ちよつと羨ましいみたいなの役目だな。代ろうか』

と云つてニヤリとした。

『馬鹿云え。いつも他人にいやな仕事ばかり押しつけやがるくせに。その手

は桑名の焼蛤だ』

『ハハ、……。俺は、あの焼かないう蛤が食つてみたいよ。いい身体つきだしね』

『エゲツない奴だ。相手は梅毒もちだろう、毒蛤だぜ』

『ハハ、……、そいつだけはちよいとただけながね』

と小野好太は首をすくめて見せた。大金庫を脊負つた植村課長の鹿爪らしい眼が、ジロリと二人の方を睨む。

好太は真妙な顔に戻つて、パチパチと算盤などをはじきはじめたが、課長の椅子をチラリと見て、その折、ちよろど課長を訪ねて来た来客と対談をはじめたのを見て、

『オイ、如何に現代が経済的に押しつまつた時代だとは云え、ちよつと浅猿しい気がするな』

と、小声で話しかけて来た。

『何が……？』

『そりじゃないか。現代では働き手が

参つたら、その家族や、それに依存していたもろもろの種族がたちまち路頭に迷う時代だからな』

『なんだい簀から棒に……一体、なんの話をしようにしてゐるんだ？』

『アツ、そりか。いや、何、津村京子と浜田澄江のことさ。二万円ずつ貰うことになつたせいもあるか知れないが寺本社長が死ぬと、たちまち後釜になつた滝沢さんに、猛烈なモーションをかけはじめたそりじゃないか』

『ウン、その様子はうかがえるね』

『ところが、滝沢社長が英国型の紳士と来ているから、二人ともまるで反応がないので、ひどくしよげ返つたぜ。とにかく、恋も金次第の世の中とは、

なんたる味気なき御時世であらうか』
おどけた詠嘆口調で云つて、好太は大げさに溜息をついて見せた。しかしその金も、百万円という大枚の金を握つている仲男は、心中ひそかにニヤリとして、

『徒手空拳で、現代の奇蹟を現出して見ようぜ』

とこれも勿論小声である。

『ほんとか。若しその壯図が見事に成就したら、逆立してそらだ日本橋でも渡



つてやるかな。何しろ、最短小賞授賞者だからな』

とすっかり多寡をくっつけている。どうも伊豆山以来、この小野好大め、何かと云うと最短小賞のことを持ち出すのだからまつたくいやな奴である。今に目に物見せてやろと、その意味でも仲男は張り切つて、『よろし、じゃ、約束したぜ』

と、思わず意気込んだ声になつた。

『オイオイ、俺の方はそれでもいゝが、もし、澄江が手に入らなかつたら、お前の方はどうするんだい？』

そろそろ期限をつけなくちや、俺の方が分が悪いや。どうだ、その期間を一カ月としよう」

『よし、それだけ期限があれば十分だ。熱海の一流旅館へ一泊、芸者つきと行こうか』

『オイオイ、大丈夫か。半月分の給料が吹つ飛ぶぜ。家庭争議の尻なんか持ち込まれちやいやだからな』

『ナアニ、大丈夫。亭主のヘソ繰りと云うやつをちやんと持つている』

『亭主のヘソ繰りか、そいつはいゝや。アツハ、ゝゝ』

好太は手を打つて笑つた。植村課長の眼がジロリとそれを睨む。好太は、癖の首をすくめる仕草を見せて、ちよつと静まり返つたが、間もなく、

『オイ、それはいゝが、証明方法をどうする』

と囁く。

『彼女に、堂々と言明させると云うのはどちらかね。しかし、このことはあ

くまで二人だけの秘密だぜ』

『オーケー。しかしもう彼女扱いをしやがつて呆れた奴だ』

と、好太は、机の下で仲男の膝を蹴つ飛ばしたのであつた。

やつぱり役目は

辛いといゝうこと

それから一時間ばかりして退社時間がきた。仲男は勇躍して、澄江の築地のアパートまでタクシーを乗りつけたが、澄江の部屋には十三、四歳と見うけられる妹の麗子が一人ポツンと坐つて、少女雑誌を読んでいる切りだつた。

仲男の間に、

『姉さんは、四、五日前から勤めてるのよ』

と眼鼻立の整つた、将来はちよつとした美人になりそな麗子が、ませた口調で云つた。

『どこへ』

『銀庭のクラブ・パラダイスよ』

クラブ・パラダイスと云えば、並木通りにある一流のキャバレーだ。仲男も位置だけは見知つていた。

さらにパラダイスまでタクシーを奢つて、仲男は五彩のネオンも眩しいパラダイスの中へ這入つて行つた。荷物預り所へオーバーとカバンをあずけてボーイの開けてくれるドアから一步中へ這入ると、場内は深海を思わせる晝光色のネオン一色の明るさである。まだ時間が早いので、真中の踊り場には二、三組踊つてゐるきりだつた。周囲のテーブルもまだ四、五組しか客はないようだ。

仲男はボーイの導くまゝ、一つのテーブルについた。懐には、いざ鎌倉というときの用意に、いつも二、三万円の金は忍ばせてあるから平気である。事務所へ訪ねて澄江を呼んで貰うなどという、ミミツチイことはしたくないので、客として堂々と這入つて来たわ

けである。

『誰方か、お名差しがございますか』

清潔な白の上衣に紺ズボンのボーイ

は、上体を傾けてうやうやしく聞く。

『そう、浜田澄江さんに願いたいんだが』

仲男は応揚に云う。

『そんな名前の女は……』

とボーイは小首を傾げたが、

『あゝ、本名でございますね。店での

名前はお分りになりませんので……』

『あゝ、そうだったな。実はそれは分らないんだが……』

『じゃ、事務所でもよつと聞いて参りましょう』

とボーイは立ち去つたが、すぐ十六

七のこまちやくれた感じの接待娘が

おしぼりを持ってきて、

『あの、何をお持ちしましょうか？』

と聞く。

『ハイボールにチーズでも貰おう』

と仲男はなかなかソツがない。

土建会社のしがたい会計係ではあつ

たが、役目柄、関係官庁の役人や取引

関係の客の饗応の際には、支払い役と

して時折りお伴をしていたから、一応

こんな場所には慣れているのだ。それ

に冬服も靴も新調して間もないパリッ

とした品々だったから、ひけ目も感じ

ないせいもある。服装が貧弱だと、何

糞と腹では思つていても、場所へ出る

と何となく気おくれするのが人間の常

なのだ。以前はいかにも役得のお伴に

過ぎないという姿が歴然としていて、

実力なくして、晴れがましい場所に列

なる者の持つ劣等感を味わいつづけて

いた仲男だったのである。

『ハイ、かしこまりました』

ラウンド・ガールも去つて行つた。

仲男はおしぼりで顔を拭いながら、正

面に一段高いバンドの席へ、女の歌手

が現われ、バンドの伴奏につれて、

アイ・ウオズ・ワルツイング

ウィズ・マイ・ダアリン

ツウ・ザ・テネシー・ワルツ

と物倦い沈鬱な調子の「テネシー・

ワルツ」を唄い出したのを、聞くとも

なく聞いていると、

『分りました。マイアミさんです』

という声。ヒョイト振り向くと、さ

つきのボーイに並んで、澄江がけん

そりな額で立つていた。それでもすく

職業的な御愛想笑いを浮べて、

『よくいらつしやいました』

と変に落ちつきのない口調で云つて

仲男の向い側の椅子に腰を下した。名

差しをする以上、知つた人に違いなか

ろろが、一体誰だったか知らんと、考

えているらしい。

『他に誰か』

とボーイが云つた。

『それはマイアミさんにおまかせする

として、ちよつとマイアミさんにお話

ししたいことがあるから……』

と仲男が云うと、万事承知という額

で肯いて、ボーイは去つて行つた。



「マイアミという名前は、どういいう謂われがあるんです。私の友という意味ですか？ いや、それじゃ英語とフランス語がちゃんぽんになつてしまいませんか」

「アラ、それはお考え過しですわ。平凡なんです。ホラ、アメリカの海岸にマイアミ海岸という海水浴場があるじやございません。このうちでは店での名前には、地名をつけることになつて

るんです。たとえば京橋さん、橋立さん、モナコさん、ロスアンゼルスさんというぐあいですわ。ちよいと変ですよ。オホ、、、」

「そうですね。でも、それがまた特徴となつて覚えられるという面もあるでしようね」

「まあそんなところが狙いなんでしょう。アラ、何かお話があるとか仰有つてましたが……」

マイアミの澄江は小首を傾げて見せる。せ

き立てるような調子だつ

た。気になつてしようがないらしい。

「えゝ、実は……」

と云い差して、仲男は情なくなつて言葉を途切らせた。見かけではどこかの小壯重役と云つても通りそりなりユウとした服装、上脊のあるガツシリした格幅、それにジャン・ギヤパンに似ていると云われる、重厚な頼もし型の美男の仲男も、土建会社のしがたない一會計掛りに過ぎない正体を、いやでも現わさねばならない破目に立ち至つているからだ。しかし、こんなことはさりげなく最初にあつさり云つた方がいゝと決心をつけて、

「滝沢社長に、先月の貴女へのお手当をとどけるように頼まれてきたのです……」

と切り出した。

「あら、そうだつたの。貴方、あそここの社員の方ね。私つとめはじめたでしょう。だから疲れ

伺いそ
こねてい
たの』

と案の定、急に澄
江は心易そうな口調に
なつた。

女心は頼み

難きこと

それから仲男は三日目毎ぐらいにパ
ラダイスに通つた。

『釣り上げるまでは餌がいるが、釣り
上げた魚に餌をやる馬鹿はない』

というのは、フランスのある色道大
達人の云つた言葉だそうだが、仲男は
その定跡通り、行つたばに澄江に何か
をプレゼントした。いわゆる南京虫と
云われる、スイス製五型角金張の腕時



計がまず澄江の左手首におさまつた。
次は人造真珠の耳飾り。次はチタニヤ
と称する本物より光度の強い模造ダイ
ヤモンド入りの金指輪。次はウールの
布地。次はグレイのラクダのオーバー
地という風に、高価のものゝ間に、一
回ずつ安上りのものをまぜはしたが。

仲男の予定では、澄江と
京子に五十万円ずつ使
つてもいい腹だつ
た。もともと故寺本
社長の発狂前の朦朧
たる頭惱の気まぐれ
から、全く何の努力
もなしに手に入つた百
万円なのではないか。
もつとも、それは満座
の中で受けた恥辱とい
うものの上に立つてはいるが
それだけに建設的な方へ使用
する気もなく、一夜のうちに蕩
盡できるものなら、それで受けた
恥辱が拭うように消えて失くなるもの
なら、サツパリと使い果してしまいた
い気がムラムラと起ることもある忌々
しい金なのだ。
三度目の金指輪の時は、さすがに澄
江も気味悪そうに、
『あんた、まさか社のお金を流用して

るんじやないでしようね』

と尻ごみしたが、

『そんな馬鹿なことがあるもんか。僕は生れつき博才があるんだよ。だから競馬とか株をやると必ず儲かるように出来てるんだ、心配するなよ』

と仲男は云い抜けて、指輪を澄江に押しつけたものである。もつとも、勝負運が強くて博才はないこともないがせいぜい麻雀や花札賭博に強いくらいで、薄給の身で競馬なんか近寄つては身の破滅と、競馬、競輪などには足踏みしたこともない、小心翼翼たる典型的なサラリーマンなのだ。

『マア素敵。それも一つの立派な才能よ』

と澄江も、その頃から仲男を相当買ひ初めた模様である。

澄江のところへ通ひ初めてから二十日目のこと、その日は、お軽くナイロンの靴下一ダースをプレゼントしたのだが、ほろ酔い気廉で踊っている最中

に、

『今夜、飲み明かさなにかね』

と澄江に囁くと、もう下地はすつかり出来上つていたらしい澄江は、
『えゝ、いゝわ』

と二つ返事で承知したのである。そしてクラブの閉場するのを待つて、タキシードに乗せ、まつすぐに、かねて目星をつけていた高級温泉旅館に乗りつけたのだが、澄江はべつに不平らしい素振りも示さず、易々として女中の導くまゝ仲男の後について一部屋へ通つたのである。

生娘じやあるまいし、部屋へ通つた以上、もう受入態勢は十分と見ていい。女中が床をのべて去ると、仲男はいきなり澄江を抱きしめて接吻をしたが、それにも達者な技巧で志じて来る。後はもう言葉の必要でない営みがづくばかりだ。

しかし、梅毒のことがやつぱり気にかゝる。

『サツク使つていゝね』

といざとなつて仲男が聞くと、

『アテ、今まで放つておいたと思うの。今じや梅毒なんか、ペニシリン三〇万単位を十六本打てば、短時間に癒るつてこと知らないの』

とピツシヤリやられてしまつたが、それで一応安心は出来たのであつた。

この、三カ月、何も知らぬ妻の幾代を相手に、仲男は性科学書から得た知識をもとに、必死に持続力の養成を計つていた。昔からある春本類も読んで見た。濡れ手拭を用意しておいて、射精にさしかゝると、それを握つて気をそらせて、爆発を一時喰ひ止める努力もした。足の親指で一から百までの数字を書いても見た。そんな努力をつづけているうちに、不思議なもので、今まで五、六分しか持たなかつたのがどうやら二十分ぐらひは持たす力が出てきていた。しかし故寺本社長の三時間までに辿りつくには、まだまだ幾

山河を起えねばならぬことであらう。だがそうしたことの可能性を信じて、一步一步努力することによつて、次第に進歩するものだという確信だけは、どうやら握むことが出来た。

しかし、まだその程度の実力では、澄江に立ち向つたとしても、正に螳螂の斧をもつて龍車に立ち向うごときものだった。短小のせいもあるが、仲男が三回目のエアクラチオンに達したとき、漸く澄江に第一回の絶頂感を感じさせることができたに過ぎなかつた。大達人の寺本氏の相手をしていた澄江が、そんなことで満足する筈がなかつた。澄江はいつまでも物足りない顔で、曉方まで仲男を攻め立て、とうとう仲男は白旗をかゝげて澄江の軍門に下るといふ哀れな始末になつた。

ある。だが、肝腎のきんちやく問題はほぼ見当がついた。この三カ月間、妻の幾代にも命じて、その気持で努力させた結果、最近では、微弱ながら陸括約筋の活動が感じられるようになったが、澄江のもそれにちよつと毛のはえたくらいで、一呼吸ごとにきつく来るなどということはなく、それだけは寺本氏の法螺ではなかつたかと思つた。ことによると、生来のきんちやくは津村京子の方かも知れない。早く京子の方へ河岸を変えねばならないが、小野好太の奴との賭の結末をつけてからでなくてはならない。ザツと計算して見ると、澄江に使つた金は今までに三十万円余で、予算よりずつと少なく落んでゐるのも幸である。

後四日すればこの年もあらたまるのだが、好太の奴との賭の期間は正月三日までである。しかし、早いのは別に差し支えなかりと、大晦日一日前の三十日に忘年会をやることを、好太と澄江に切り出し、それぞれ承諾を得た。勿論澄江には親友一人を加えるということは云つてあつたが、好太には澄江が来ることをだまつていた。

七時半頃、かねて澄江と打合せてあつた待ち合せの場所、銀座裏の喫茶店ソレイユに仲男が好太を連れて行く目立たない片隅のボックスで、仲男の贈つたグレイのラクダ地を、しやれた形のオーバーに仕立て上げたのを着た澄江が写真雑誌に見入つていた。

ツカツカと近寄つて、

『やあ、待たせちやつたね』

『いゝえ、それほどでもないわ』

という一応のやりとりのあとで、仲男が振り返つて見ると、好太がさすがに驚異の眼を見はつていた。

『紹介します、社の小野好太君。こちらはパライダイスのマイアミさん。実は浜田澄江さん。知つてゐるだらう、故寺本社長の……』

『ウン』

と、好太は眼を白黒させて、

『はじめまして……。と云つても、社においでせうの節はよくお見受けしてました。お美しい方だなとかねがね崇拜すうはいしていましたが、今夕こんせき計らずも御同席の栄を得ましたことは、全く望外の喜びでして……。どうぞよろしく』

どうにも口数の多い男である。

『ホ、ホ、ホ、こちらお口が上手ね。私こそどうぞ……。』

澄江は艶然えんぜんと受けたが、立ち上りもしない。小野のお追従ついでに、二人とも昔の旦那の部下ともだという意識いしきが、あらためて戻つて来たせいか、何か澄江の態度は尊大そんだいになつてゐるようだ。

三人はソレイユを出ると、バーからバーを飲み歩き、池袋マーケット街の中に、ある夜通し飲ませる汚ない飲み屋に、好太の案内あんないでなだれ込んだのはもう二時を過ぎていた。好太の紹介したところによると、こゝは品のいい老人夫婦だけでやつてゐる店で、その夜は

ほかにお客もなかつた。こうしたところでは流石にはじめてらしく、澄江も興味を感じたらしく、大はしやぎだ。時分はよしと、仲男は、

『ねえ、澄江さん。この小野君は口の固かたい人だし、僕の親友なんだから、僕達のことを発表して、今後力になつて貰おうじゃありませんか』

と澄江に切り出した。それまで澄江の気を兼ねて、好太の前ではワザと澄江に対して慣れ慣れしい態度は控ひかえていた仲男だつたのである。

『僕達のことつて、何のことですの』

澄江は気のなさそうな返辞へんじをした。仲男は、いつたん切り出したからには騎虎きこの勢である。

『僕達が、愛人関係になつたということをです』

と云うと、澄江の眉まゆがピクピクと動いて、

『止してよ。おかしなことを仰有ひとる男ね、何をすつとぼけたことをお仰言る

の。いつ私が貴方とそんな関係になつて……。貴方あなたはたゞのお店のお客じゃありませんか』

何とも白つぱくれた手厳てきびしい言葉だつた。この時の澄江の心境を、あとになつてあれこれと仲男は推測すいそくするのだった。が、万一、小野の口から洩れると滝沢現社長からの手当もフイになるだろうということからであつたらう。しかし、帰きするところは、仲男の性力に對して少しも満足せず、たゞ贈物の代償として、何の感激かんきもなく身体を与えに過ぎず、そうした犠牲や氣まづさなどを乗り越えてまで、仲男と当分でも運命を共にしようという氣が、少しもないからだつたに違いない。

『でも……。』

と仲男は恨めしそりに澄江のオーバ―や、デシン地のワンピースや、南京虫や指輪に忙しく眼を走らせた。それらはみんな自分が買つてやつたものじゃないかとは、まさか口に出すわけに

も行かなかつた。好太には徒手空拳で物にして見せると放言してあるし、また贈物をしたからとて彼女をものにした証拠とも云えないし、かえつて甘い男として笑い者になるのが落ちではないか。

『でも何なのよ』

と澄江は、荒々しく立ち上つたと思

うと、

『不愉快だから私、帰るわ』

と、ガラ

ツと威勢よく硝子戸

を開けて

外へ飛び

出した。仲

男は追う気力

もなく、悄然と

腕組みして下俯向

くばかり、怨みに思



うのは、彼女を心身ともに征服し切れなかつた自分の性力のつたなさばかりである。

『ハ、ハ、ハ。こんなことだろうと思つ

た。しめしめ。飛んだいゝお正月が出来るというもんだ』

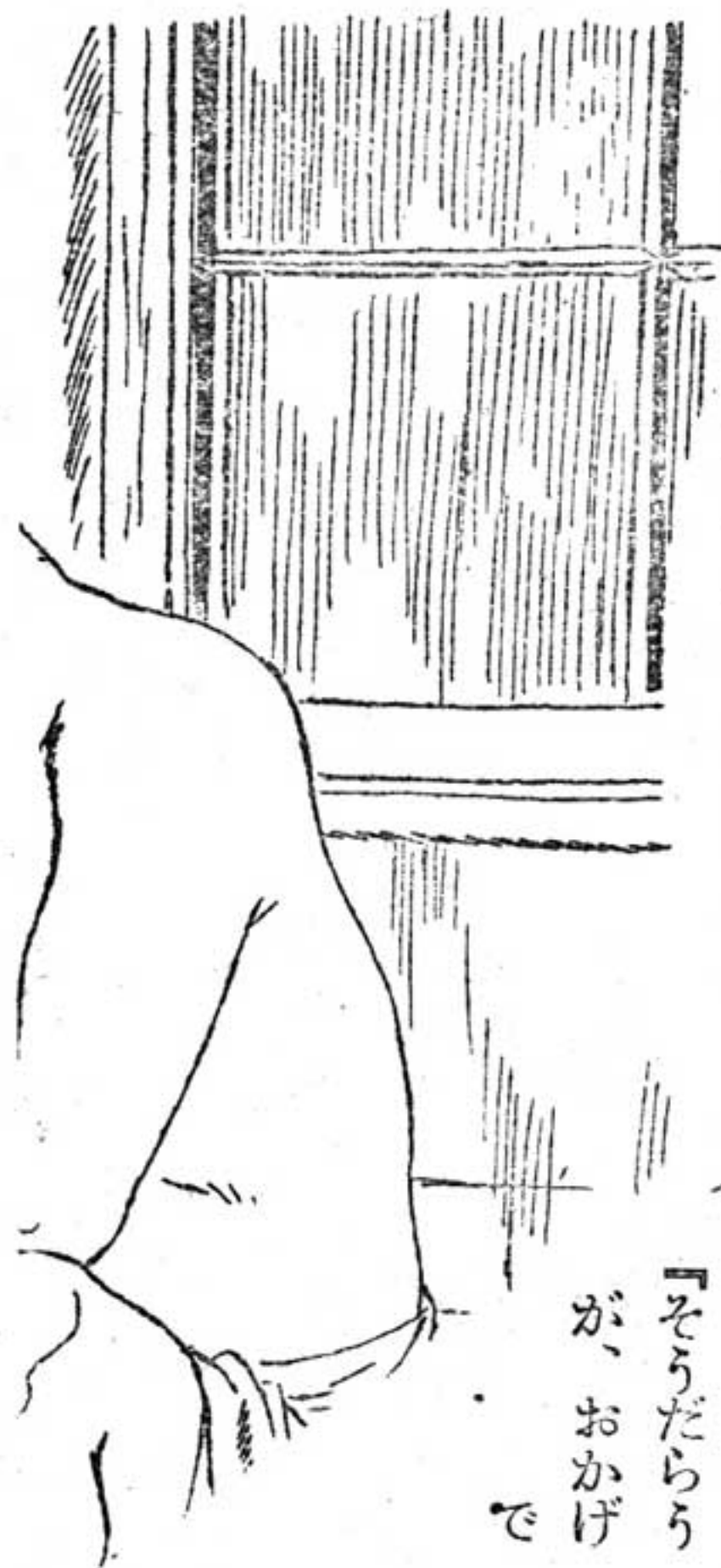
好太が小躍りして手を叩くのを、無念の涙でこらえ、女心の頼み難いこと

男郎の同情

を得ること

をヒシヒシと感ずる仲男だつた。

越えて正月三日の夜、熱海の一流旅館A館の大浴場に、のびのびとつかつてゐる二人の男があつた。峰仲男と小野好太の二人である。夕食後の頃合いなので、向うの隅に三人ばかり、こちらの隅に一人と浴場は閑散である。こつちの隅にいる彼等とは一間とはなれないところで、湯舟の縁に頭をのせて冷たい濡れ手拭を額に当て、眼をつぶつてゐる一人の男は、四十年輩ながら不思議と何か若々しいところがある。澄んだ湯を通



して見えるその男の一物は、なかなか立派なもので、仲男の眼は時々羨ましそくにそちらへ走る。別に憚るような人物とも思えないので、好太は、

『夕食後につくなんて、まづたく気の利かねえ話だぜ』

例の高い調子の声で不服そうに云う。

『だつて、正月三日だろう。一泊旅行に出掛けると云つたつて、女房の奴、何かと食い下がりやがつてなかなか出してくれなかつたんだ。自分も連れて行つて貰い度い気持でもあつたんだろがね』

『そうだらうが、おかげで』

二時間も東京駅で待たされちやつたぜ。もう帰ろうかと思つたくらいだ』

『近頃女房の奴、何かとうるさくつきまといやがるんでね』

『どうしてだ?』

『それがさ。以前はあの時五、六分しか持たなかつたのに、近頃は二十分位はつゞくようになったから、急に見直すようになったんだらう』

『こいつ、きわどいところでのろけやがる。でも、ほかの男のことを知らないから、奥さんも結構幸福なんだし、お前も助かつてるというわけだな』

『そんなことをズケズケ云うなよ』

『やあ、失敬、失敬』

と、おどけて拳手の礼を示した好太は、『だ澄江にはものの見事に脊負い投げを食つたな』

『でも、二度も何したつてことは事実なんだがなあ』

『しかし、証明方法は彼女に言明させるといふことだつたんだから、明

らかに賭^か
は俺の勝ち
だぜ。

「うん。それと

云うのも、僕のあれ
が貧弱^{ひじやく}だつたせいだな。

つくづく産んでくれた親を怨^{うら}
むよ』

『今日は馬鹿に素直なんだな。そう

しよげるな。もう先刻^{さつき}口をかけた芸者

どもも来ているところだろ。ワアツと

一騒^{さわ}ぎして、そんな憂鬱^{ゆううつ}を吹ッ飛ばす

んだ。サア、そろそろ上ろうぜ』

『俺は、もう少しあッたまるよ。先に

遠慮^{えんりょ}なくやつていてくれ給え』

『そうか。じゃ、先に上つてるぜ』

と好太はイソイソと浴槽^{よくそう}を出て、身体

を拭きはじめてが、

『男がよろうて金持で、それで女が惚^ほれ

るなら、何故に高尾は仙台様に惚^ほれな

んだア』

といふ

気持に浪花節^{ななわぶし}をうなりはじめ



浪花節をうなりながら去つて行
くと、『あの、失礼ですが：

…』

という声がかゝつた。ふ

り向いて見ると、手拭

で額^{ぬで}を冷やしてい

る、例の四十男

が起き直つ

てこちら

を向い

て



る。何

気なく好太

は、うなつて

るんだろが、

今の仲男には、

痛烈^{つうれつ}な皮肉と聞えて

来るのであつた。好太が

いる。

『何でしようか?』

仲男は小首を傾げた。もつとも旅の温泉場のことゆえ、知らぬ同志の口でもどちらからともなくほぐれるもの。仲男はいつか人なつつこい微笑を浮かべている自分を意識した。四十男もニンマリと笑いを含んで、

『いまお話を承つていますと、面白い賭をなさつたようで……』

ちやんと聞いていたらしい。

『ハア、いや』

仲男はすつかり赤くなつて、ドギマギした。

『貴方のものが貧弱なせいで、賭にも結局お負けなさつた、という風にお聞き申したんですがね』

思ひなしか、相手の顔に哀れむような色が浮んでいるようだ。

『お恥かしいんですが、そうなんです』

『それに、いま二十分はつゞくと仰有

つたようですが、お若いにしてはなかなかのお腕前。いくら貧弱なものにしても、それだけつゞけば一応十分の筈ですがね』

『それが、相手が大変な代物だつたものでしたから』

『ハアハア、なるほど。よつぽどのあばずれつていうわけで……』

『いえ、あばずれと云うわけではございませんが、その女の前の相手が、大達人なものでしたから……』

『ほほう、そんな大達人が、私のほかにいるとは頼もしい。どんな方です。』

その大達人と仰有るのは?』

相手は身をずり寄せて来た。水を入れた小桶はチャンと傍へ持つて来ている。

『ア、貴方も頭をひやしなさるといい。のぼせますからな』

相手はすつかり話し込むつもりらしい。云われた通り、仲男は一たん上になつて、小桶に水を入れて浴槽に引

浦島太郎実話

あれは

龍宮

城



①

あう
乙姫さま



②

つ返した。何となくこの男の云うことは、心にひかれるものがあり、もつと話をしたいた気になつたのだ。仲男がタオルをその小桶に浸して、頭にのつけたのを見ると、

『貴方は素直でいゝ。好きになりましたよ。こうなれば何もかも参考にお話して上げますがな、実は私は、商売往来にもない仕事で飯を食つてゐるものなんで……』

『どんなお仕事なんでしろう？』

仲男は、俄然好奇心を起した。

『ハ、ハ、ハ、仕事なんて、大げさに云つたら笑われるようなもので……。実は……』

と男はちよつと声をひそめて、

『この一物で食つてゐるんですよ。女のそれは女郎と云いますから、まあ男郎とでも申しますかな』

とケロリとして云つた。仲男は流石に相手の顔を見直した。浅黒い顔色だが、なかなか苦み走つた顔で、なるほ

ど年増女の好きそうな顔だ。

『ハア、なるほど』

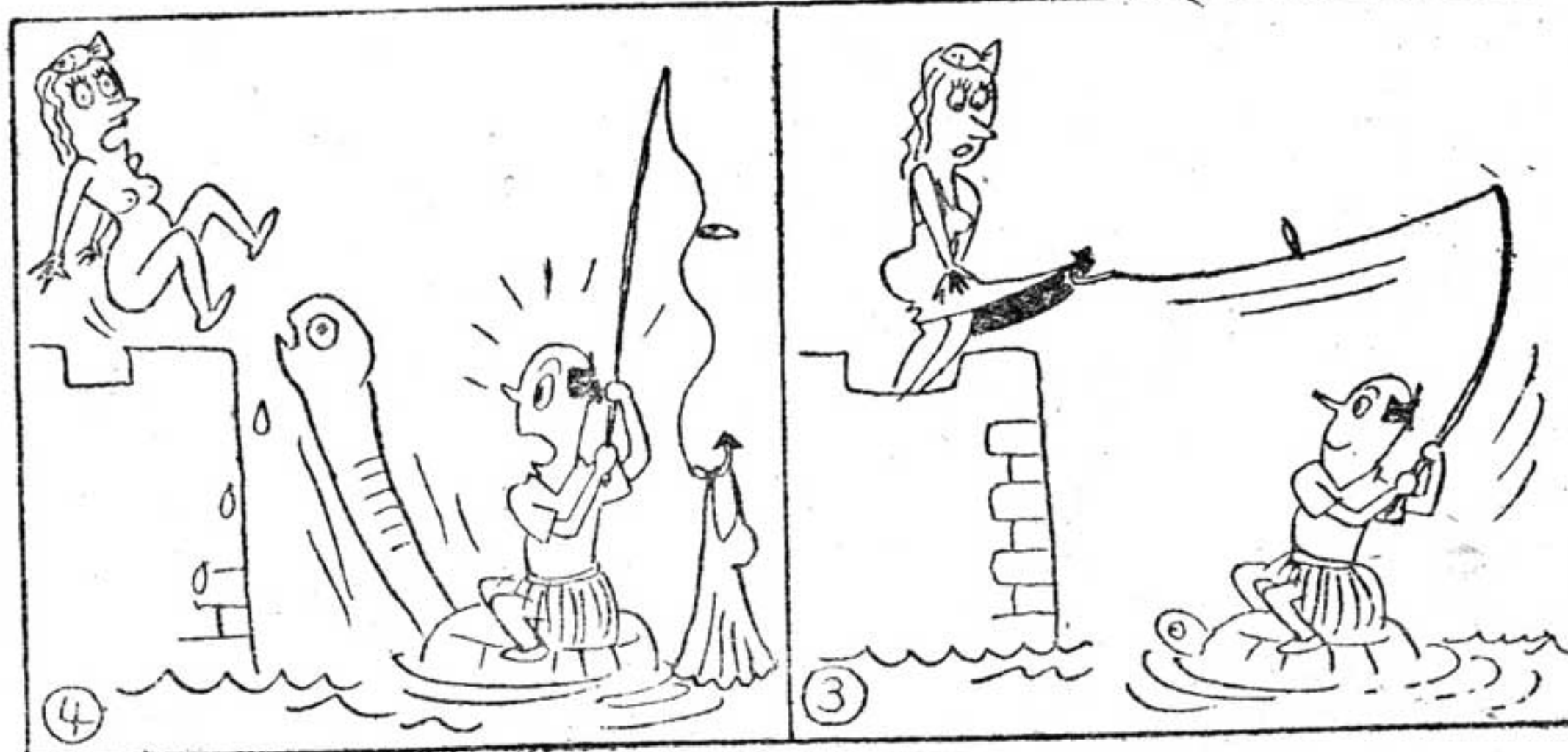
仲男はそう相槌を打つよりほかに手はなかつた。

『もうこの商売をはじめてから、かれこれ一年になりますかな。何軒かの旅館と特約してあるんですよ。この熱海は、何か面白い眼に逢いたいのものだという好気心で、女一人でフラリとやつて来る客が相当にあるんです。後家さんだけじゃありませんよ。歴とした人妻も案外いるんですよ。今も一仕事すませて、疲れやすめをしているところなんでして……。あと一時間もすればもう一人、こゝでお客様があるんですよ』

と男は云つて、流石に照れたような笑い方をするのであつた。

さあ、大変な人物が登場してきた。

果して、仲男はどんな活躍を演じるか、いよいよ波瀾を呼ぶ次号を御期待下さい。



讀者と編集者

★十月号を拜見、「ヌード風俗アルバム」以来の進境実に驚くべきものがあり、御努力には深く敬意を表します。

★かねがね期待していた表情（顔および姿勢）がようやく出はじめたことは「責めのヌード写真」の核心に迫った證據で感嘆に堪えません。モデルも大體美しく結構ですが、指導よろしきを得つゝある結果と大いに將來を期待しております。

★そこで、「責め場」写真について私の希望の一端を申し上げますと、

1 縄のかけ方は（特に背面で）ごたつかぬよう。

2 白い縄は感じが出ない。太さに関係なく褐色柔軟なものが適している。

3 手の指のかがめ方にいま一工夫ありたい。足は美しく撮れているが、足の裏を美麗にして欲しい。

4 縛つた手首の位置をもつと上に。前から見て、腕の屈折した先端の上部に他方の手の指が覗くように。

5 吊りあげた時、両腕が體から遊離せぬよう。（九月号）

9 長縄絆の着方もいま一息。亂れたものであるが、屈曲した腋から手首は必ず露出させて欲しい。

★十月号第六頁のように、背部にゴタゴタ縄絆のかたまらぬよう望む。

★それにしても、十月号は背景や小道具に全くとよらず、人物だけで見事に成功されたことは高い実力を示すものと、今後の活躍に期待するものがあります。御精進あらんことを祈りますと同時に、「ヌード風俗アルバム」第二集の刊行をお待ちします。（一愛讀者）

★編集部より いろいろ御助言を心から感謝いたしております。「ヌード風俗アルバム」第一集の後記でも申し上げました通り、諸條件に制約されて読者各位の御期待にそむき、まことに申譯なく存じております。

★右一愛讀者氏と同様の御希望や御叱正は、相變らず編集部宛たくさん頂いておりますが、今後共、なお一層の御

指導をお願いいたします。

★なお企画の都合で、今月号のように、オール「責め」の特集は暫く見合せ、できるだけバラエテに富んだ編集方針でゆきたいと思ひますので、あらかじめ御諒承下さい。そのうち、快心の作を一舉に発表する機会もあると思ひますが――。

☆半力年以上の直接購読を御希望の方は左記の如く特別割引を致します。本社宛振替又は爲替で御申込み下さい。

半力年 四五円 計 五五円
一力年 七五円 計 九四八円

讀切ロマンス 十月号

昭和二十七年十月二十五日印刷
昭和二十七年十一月一日發行

定 價 九十九円
地方定 價 九十五円

編集人 上田 青 柿 郎

發行人 小 林 光 雄

印刷人 田 代 伯 文

發行所 合資 睦 書 房

東京都千代田區神田駿河臺三ノ三

電話 神田 六〇 番
振替 東京 五七二八一番